ヒマラヤの桃源境

——ブータン・シッキム・アッサム——

日本ヒマラヤ山岳協会

ヒマラヤの桃源境

——ブータン・シッキム・アッサム——

日本ヒマラヤ山岳協会

ヒマラヤの桃源境

——ブータン・シッキム・アッサム——

沖　　允人　編著

日本ヒマラヤ山岳協会

はじめに

チベット高原に発し大ヒマラヤ山脈の北側を東へ流れるツァンポ川はアッサムの東北部で急激に流れの方向を変え，それまでと反対に西へ流れるようになる。この屈曲部は両岸が天に向ってそそり立つ大ゴルジュになっており，長い間“謎の河”として探検家の注目の的となっていた。ツァンポ川がアッサム平原に出て，ベンガル湾にそそぐブラマプトラ川と同一の川であることが分ったのはそう古いことではない。

このブラマプトラ川のU字を横にしたような流れの内懐の東部にシッキム，ブータン，アッサムがある。

これらの地域は政情不安やその国の民情，そして，モンスーンなど自然の条件などの困難な要素があって外国人の入域を制限していた。現在でもこれらの事情はあまり変っていない。しかし，少しづつではあるが入域を制限つきで認めるようになったことも事実である。

私たち日本ヒマラヤ山岳協会はヒマラヤ各地と合せてこれらの地域にも目をつけ，文献の調査をしたり，研究会をもったりしている。そして，1974年には数人の会員が幸運にもブータン，シッキム，アッサムの各地を訪れることができた。

ここにまとめたものはその見聞記である。おとぎの国のようなシッキムの主都ガントック，歴史の重みと伝統的なデザインのブータンのゾン，行けども行けども果しなく続くアッサムの茶園などの風景に悠々と流れるブラマプトラ川がオーバラップして，こうして記録をまとめている今でもあの風景が目に浮んでくる。今回，私たちが訪れたのはそのほんの一部であるが，それでもその印象は強烈であり，さらに次の計画が生れ，そして，まだ知られることの少ないヒマラヤの地に行ってみたいという憧景と熱情が沸きたつのである。

桃源境は人の知らないところにひっそりとあるものであろうし，知られてしまえば桃源境の価値は低くなるものであろう。しかし，シッキム，ブータン，アッサムは私たちにとって桃源境であったし，これからも，さらに桃源境としての魅力を保ち，加えて，未知と美しさとヒマラヤの謎をこの地域はもっていると思う。　〈沖允人〉

目　次

ブータン

ブータン日記 …… 矢野　郁雄 …… 9

松葉杖親善訪問 …… 新聞切抜より …… 20

写真 **ブータンの人・自然・生活** …… 沖　　允人 …… 23

ヒマラヤの桃源境 …… 沖　　允人 …… 39

遠い国ブータン / 39
いよいよブータンへ / 43
国情と地史 / 44
パロへ向う / 46
美しい緑の谷・パロ / 48
古寺と古城 / 49
ヒマラヤの見える峠へ / 51
〝虎の巣〟の僧院 / 51
ラ　マ　教 / 53
スポーツ / 54
首都ティンプー / 54
食　生　活 / 55
服　　装 / 57
動物や鳥 / 57
ブータンの特産品 / 58
ブータン小史 / 60
将来の展望 / 62

〝雷と竜〟の国 …… P. H. ママ …… 64

ブータン文献（抄） …… 68

シッキム・アッサム

シッキム王国の終焉 …… 沖　　允人 …… 77

シッキム―併合でなく連合― …… I. マラトラ …… 84

シッキム冬の旅 …… 沖　　允人 …… 89

写真 ダージリン
“平和と幸福の国”シッキム
“人種のルツボ”カリンポン
“野性の国”アッサム …… 沖　　允人 …… 97

カンチェンジュンガの見える旅 … 佐々木　正 …… 108

シッキムとアッサムの旅 …… 藤井　　毅 …… 109

アッサム・ガイド
―― 青い丘と緑の谷 ―― …… 藤井　　毅 …… 125

アッサム日記 …… 矢野　郁雄 …… 125

アッサムの奥地に入る …… 沖　　允人 …… 134

アッサムに関する文献（抄） …… 144

カンチェンジュンガ山麓トレッキング

文・菊地　薫，写真・佐々木正 …… 147

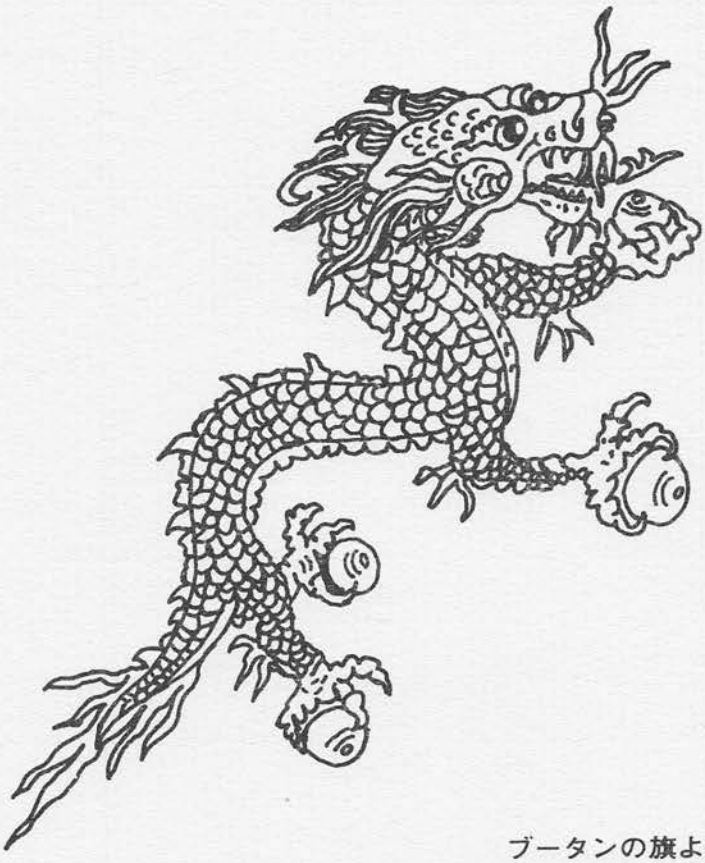
ヒマラヤの展望台へ / 147
いい町・いい人・ダージリン / 148
行くぞ！カンチめざして / 150
ネパールの国境 / 150
ポリスの村 / 151
カンチ山群が目の前に / 152
ロキシーでダンス / 152
ネパールへ越境 / 152
ファルット着 / 153
日程・許可・etc. / 155

概念図など

ブータン位置図 …… 9
ブータンの交通図 …… 15
ブータン概念図 …… 43
南部シッキム概念図 …… 79
ガントック …… 81
インド東北部概念図 …… 113
Eastern Region of India …… 138
North East of Assam …… 140
Darjeeling-Phalut …… 151

（カット・文中写真・地図　沖　允人）

ブータン
BHUTAN



ブータンの旗より

ブータン日記……矢野　郁雄……9
松葉杖親善訪問・新聞切抜より……20
写真 ブータンの人・自然・生活……沖　允人……23
ヒマラヤの桃源境……沖　允人……39
“雷と竜”の国……P.H. ママ……64
ブータン文献（抄）……68

ブータン日記

矢野郁雄

初めてあったブータン人

49年11月22日（金）

23日羽田出発なので近くの小方金弘さん宅に泊めて頂くべく京都駅を新幹線“ひかり号”で出発する。途中の名古屋駅から沖理事の奥さんが同行して下さるので同駅で“こだま号”に乗換える。座席が混んでいたが浜松の辺で同席になることができ夏休みに行かれたカシミールの写真集を見せてもらう。湖と森，花と高原，想ったより風光明眉で一度訪ねてみたい所の一つになった。一緒に行かれた子供さん達も異境でお父さんにも会えて本当に楽しそうであった。

横浜駅では恐縮だったが重い荷物全部奥さんに持って貰いホームを歩いていると見知らぬ人が同情し，出札口まで助けて下さり感謝に堪えない。小方さんからの迎えの自動車で奥さんと共に訪問。挨拶もほどほどに早速食堂に通された。丁度研修のため来日中だったブータン外務省カルマ氏，私が日本ネパール協会へ入会する時の紹介者だった高山龍三氏（現・東海大学助教授，1958年西北ネパール学術探険隊員。ちなみに小方さんは同隊副隊長またブータン滞在10年の西岡氏も当時の隊員），それにブータンの着物を研究中の立石さん達が既に来宅歓話中であった。研修中のもう一人のブータン人は広島へ旅行中で会えなかった。

カルマ氏は私が初めて出会ったブータン人で感激の握手も思わず力が入った。

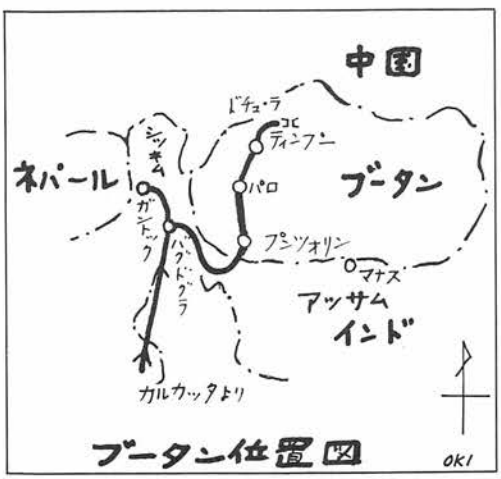
小方さんのユーモアたっぷりの話に笑いが止らず皆さんが帰られた後，布団に入ってからも朝の3時半過ぎまで小方さんと2人で話し合い，いろいろアドバイスを受けた。

11月23日（土）

この日の朝，羽田はフォード米大統領が訪ソのため韓国のソウルから羽田に寄港するので厳戒体制をしく噂があり，朝食を御馳走になり，直ちに小方さんの運転で空港まで送って貰ったがさすがものものしい警戒であった。空港にはHAAJの浜，水野両氏が私のため態々見送りに来て頂いており恐懼感激する。昨夜親戚に泊まられた沖理事の奥さんも間もなく来られ，訪欧中だった柴田会長が帰国される日でもあり空港で会えればとみんなで期待していたが時間のタイミングが悪く残念だった。

11時に皆さんと別れて通関，スカンジナビア航空の機上の人となる。国際線の一人旅は初めてであり些か心細くなった。

機は予定より1時間遅れて12時30分離陸。富士山を右に見て，薩南諸島，沖縄と南下。マニラで多くの客が降り空席がめだったままバンコクへ飛ぶ。外人スチュアデスが何回も反復して言うけれ



ど何の事か分らないので“英語はノー”を英語で喋ったつもりだが3回問い返され，もうこれまでと最も簡単な方法で顔と手を横に大きく振ったらスチュアデスも苦笑して立ち去った。想えばこの機に備える意味にと言っても過言ではないが，老軀？に鞭打って英語塾に3年半通ったものの，これで完全に自信ソーシツ。先行不安乍らも後は沖理事1人を頼るほかないとあっさり割り切った次第。バンコクでも乗客は入れ替った程度で殆んど増減なし。こんな事でスカンジナビア航空は採算が成りたつのだろうか？と退屈まぎれに自分の会社を他人にたのんできたのに他社のことまで心配する始末。予定より遅れて20時40分(インド時間)カルカッタ無事着陸。

ダムダム空港は先年ネパール旅行の時にきたことがあるので2回目だが，沖理事にすぐ会えるとばかり考えていたら税関でひっかかってしまった。

英語は機内でこりたので言わないつもりだったが通じないものとして“英語はノー”を言ったら今度は不幸？にも1回で通じたようで“英語OKだ”と言う訳でどんどん喋りまくられチンプンカンで1人で立ち往生。沖理事はガラス越しに見えてはいるが……。黙否権？ 行使して困り果てていたところをやがて税関のところまで入ってきて下さった沖理事に救出してもらった。「スペシャルの手を使ったんですよ。」と笑っておられた。普通なら旅行客しか税関のカウンターには入れないのである。沖理事には前後を問わずたいへんお世話になるのだが，この時は本当に救い神に想えてならなかった。

ラムジュンの菊地隊員も迎えてくれて3人で一緒にタクシーで宿泊するカルカッタ仏教寺に向う。ライトは暗くメーター類はすべて止ったまま，ドアーロックが効くのが不思議なほどのオンボロ車だったが数年前の経験もあるので余り驚かない。

さっそく，私のパスポートを見てもらうと通過ビザなので困ったということだった。すなわち，日本へも打電した「トリプル・ビザ」(3回出入国できるビザ)がとってないので，ブータン入国は難しいとのことで一大ショックだった。ブータン大使館からは何度もブータン入国を許可する電報が沖理事宛にとどいていたのに…。何ということか……。明日は日曜日で官庁は休日，カルカッタでは手の打ちようがないと沖理事もひどく心配され奈落の底へ突き落されたような感じがしたが要はバグドグラへ行ってから，天運を待つのみ，果して……。その夜はラムジュン隊のもう1人の佐々木隊員も交じえて深更まで話はつきなかった。

カルカッタからバグドグラへ

11月24日(日)

5年振りのカルカッタの朝を迎えたが朝だけはすがすがしい。朝食はラムジュン隊の佐々木チーフコック？ の昨夜のカレーライスの残りだが水道は断水，部屋の中でカレーを石油コンロで温める。男世帯の随分荒っぽいやり方だが自分も郷に入れば郷に従えで直ぐ順応する方だ。むしろ性分が野性的なのかも知れない。

食事中インド国内航空のチョーダリー氏が来られ紹介されたので英語で挨拶したら日本語で話されたのには些か面喰らう。勤務先のオフィスはこの近くで此の寺へもよく見えるとのこと。日本語が喋れるだけあって極めて親日的な人だ。なお，このお寺の住職,VEN DHARMAPAL BHIKKHUはインドでの仏教界の権威で京都は東本願寺の招待で来日されたこともあり日本人には好意的な方らしいが，仏教者会議でダージリンへ出張中とかで会えなかった(後日12月9日に幸い，会う機会を与えられた)。

今日は4人共バグドグラへ飛ぶので午前10時空港へ向う。空港へ着いてみるとボンベイからの回航機で約1時間余り遅れるらしい。インド時間のルーズさは予め知っていたので余り苦にはならない。

12時30分搭乗。直ぐ離陸。眼下のだだっぴろいベンガル平野に映る機影は北へ直線コースだ。遙か右前方の山並みはブータンの山々だ。私たちはあの山の中へ分け入るのだと思うと胸の躍動を制することができない。あれこれ考えているうちに機は高度を下げ所要時間1時間15分で着陸した。ローカル線用の可愛らしい空港だった。

バグドグラといっても地図の中で探すのに苦労するほど聞き馴れない地名だが空港はシリグリ市

郊外にあり観光地として世界的に名高い，ダージリンの観光基地でもあり多数の外人客も乗り込んでいた。所定の手続を難なく終えてダージリン方面トレッキングの佐々木，菊地の両氏とブータン出国日ダージリンでの再会を約し別れた。沖理事と２人だけになり今夜泊まるシリグリ市内のホテルをめざしてタクシーに乗る。カルカッタよりかなり北なので暑さも気分的にましのようだがやはり灼熱のインドには変らない。約30分走ると市内に入る。人口５万程度の日本の小都市ぐらいの街だ。

探すホテルはカルカッタのお寺の住職さん紹介のトランジット・ホテル。このホテルは都心に近い所にあった。本館裏の平屋建の部屋だが途中通路に黒い程の蠅の大群があり，一寸神経質症状になったが，インド大陸に来ているのだから自らも大陸的にならねばと思うと割合平気になった。夕食はおきまりのカレーライスと街で買った茹で卵。空腹でもあったので抵抗なくペロリと平げた。シリグリ第１のホテルだと紹介して下さった住職さんには悪いがお世辞にもよいホテルとはいえない。その上ボーイが無愛想この上なしだった。それも

電報その１（ブータン大使館よりルールキー市の沖宛）

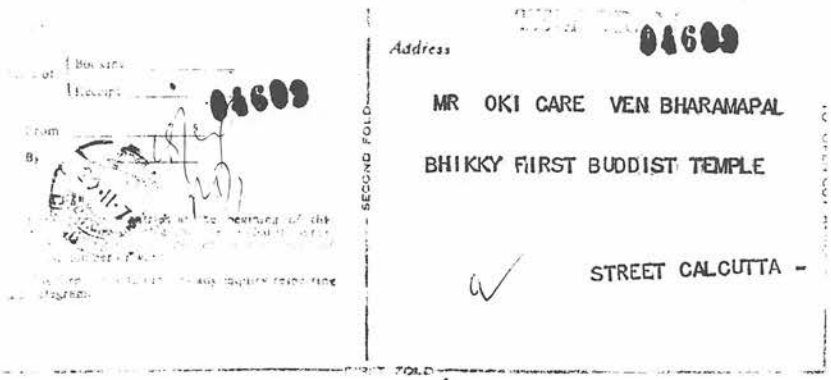
O 1310 N 18 NEW DELHI CHANKYAPURI 10 33

MR MASATO OKI C /O DR V NARASIMHAN CENTRAL BUILDING RESEARCH INSTITUTE ROORKEE UP -

REFER TO HAAJ BHUTAN TOUR FROM TENTH NOVEMBER TO SEVENTEENTH NOVEMBER STOP THE DATES CONFIRMED STOP REGARDS -BHUMISSION

LN 39 N 18 MR MASATO OKI V NARASIMHAN

電報その２（ブータン大使館よりカルカッタの沖，矢野宛）



X 1715 N 38 NEW DELHI Q 20 28 OKI VEN BHIKKY AS YANO AS OURSELF AND YANO PAN ENTER BHUTAN ON TWENTYFIIFTH STOP PLEASE CONFIRM -HLEKI DORJI BHUMISSION -

こちらの態度が悪かったのかも知れないが……。

ブータンへ入る日

11月25日（月）

いよいよ待望久しかったブータンへ入れる日だ。でもビザの1件があるので駄目かも分らない。興奮していたのか早く目がさめた。午前中はシリグリで用事を済ますため輪タクで市内を廻る。小生のような身障者にとって市内観光車として恰好の乗物で2人乗はちと狭いがよく見物できるので悦に入って走らせた。戦時中の海軍時代にシンガポール，ペナン，ジャカルタなどなど，入港地で人力車に乗った当時が想い起される。

先ずブータン運輸局営業所へ行って訪ねたが私たちのことは何も知らないとすげない返事。結局空港へ行くより方法がないが，まだ飛行機到着まで時間があるので電報局，郵便局またブータン旅行のあとに予定しているアッサム行の寝台車の予約をとるためシリグリ駅へ行く。分岐点でもあるので比較的大きい駅だった。

駅前からカンチェンジュンガが遠望でき，昨日別れた2人はもっと近くから眺めてさぞ感激しているのではなかろうかと想いを馳せることしばしであった。その広場で現地人同士の口論が始った。多数の第三者は見物人よろしく円陣を作る。私たち日本人と違ってゼスチャーが大きいので今にも殴り合いになるのではないかと息をのんで見守ったが自分の錯覚のようだった。負けた方がいくらかのルピーを渡してチョン。

11時も過ぎたのでホテルへ戻りスクーターの座席に荷物を積むときどういう訳か運転手と神理事が激しい口調でやりとりが始まった。内容は分らないけれど交渉が難航していることだけは容易に分る。料金のことでこんな光景は珍らしいことではない。特にインドでは日常茶飯事だろう。

後で分ったのだが，つまりカーストの問題だった。具体的に記すと神理事が部屋からポーターをたのまず自分で全部の荷物を運び出したことが，この人たちは低い階級の人間だと誤解された次第だった。日本人はこのあたりの低いカーストによく顔が似ているのだ。その人間に「荷物を車に積め」と命令されたので大学卒という運ちゃんの気嫌をそこねたということだった。所変われば考え方もかくも大きく変るものかとつくづく痛感させられた一幕だった。

空港へきて見るとカルカッタからの飛行機は既に到着しており，ブータンを示すBHTナンバーのマイクロバスとジープが直ぐ目につく。ブータン服の青年2人が現われ挨拶。やはりブータン政府から迎えに来てくれたのだ。小躍りしたい気持だがそれはまだ早い。でも正直言って嬉しかった。

ブータンの表玄関

待合室へ入ると外人4人がおり一緒にブータンへ入る連中だと紹介され空港食堂で昼食を共にする。同行の外人は米・英共男女2名で当初予定されていたドイツ人は不参加。結局日・米・英各2人で国別のバランスが偶然保たれる。食後少憩。1時30分プンツオリンに向けて出発。荷物は後続のジープに積みバスが先に走る。バスはトヨタの新車（コロネーションの時寄贈）でその上，座席もゆったりとして実に快適なドライヴだ。舗装された一本道でスピードメーターは80～90kmを指している。

やがてティスタ河の立派な橋を渡るがここはダージリン，カリンポンへの分岐点でもある。左に右に広大な茶畑を見て単調な道が続き，所々に町があるが地名を知る由もない。時間の経過から考えて間もなく国境だろうか，前方にブータンの山々が屏風のように立ちはだかっており，よく見ると山岳道路が延々と通じており明日はあの道を登ることができるかどうか，心配と期待で胸がたかなった。

インド側の町ジャイガオンのチェックポスト到着。思わず緊張するが思ったより簡単に通過できた。

あっ！国境だ。ブータン風の立派な門，頑丈そうな遮断機はなにものをも通さないぞと示さんばかりに下ろされていた。このゲートは戴冠式用に新装されたものと聞く。

ガイドが降りるが早いか，さも冷厳そのものに感じた遮断機がスルスルと上り車も前進を始め，

遂にブータン領域へ入った。時まさに午後4時42分（ブータン時間，インド時間と同じである）。

30余年の宿望いまやなるの感慨にふける間もなく直ぐ右側の入出国管理事務所の待合室へ招じられる。入ると周囲はブータン風の模様が描かれて独特の雰囲気をかもしだしている。室内装飾，テーブル，椅子，敷物も全くブータン調だ。なんだか落着かぬ。待つこと数分。「Mr. YANO」と呼ばれた。ある程度覚悟はしていたもののドキッと心臓も破裂せんばかりだった。沖理事がいろいろ説明されているが私はハラハラして見守るのみだったが，通じるなら土下座して哀願したい気持ちでいっぱいだった。沖理事の御奮闘によって「OK」になったが，次は中央政府はどうだろうと一抹の不安は残ったままプンツオリン市街を見下ろす丘に建てられているゲスト・ハウスへ案内される。

ここは戴冠式用に改装されたゲスト・ハウスで最高の建物だ。食事も数多くの御馳走があり量も自ずと多く入る。従業員も礼儀正しくまるで国賓にでもなったような感じだ。宿泊名簿から最近ブータンへ入った日本人を調べたら戴冠式当時の新関駐印大使の名前が見つかった。ロビーから眼下に数多くの電灯が輝いて見える。プンツオリンもティンプーハイウェイ開通によって大きく発展し一般外国人の入国はここプンツオリン経由のみ許されておりいうなればブータンの表玄関なのだ。

ブータン・ハイウェイを走る

11月26日（火）

ブータン第一夜は快よく眠れた。朝食後パロに向けて出発する予定が遅れるらしい。理由は同行の英国婦人の入国申請期日が問題になっているようで，ティンプーに連絡しその返事待ちのためでそれまで市内観光になった。私もひっかかるのではないかと不安になり落着かない。正直いうと早くブータンの中へ向けて出発して欲しかった。プンツオリンはブータン領には違いないがインド側のジャイガオンと町続きでもあり，私のイメージにあるブータンではなくインドの延長としか考えられない。

プンツオリン観光は帰路の予定だったが後先になった訳で先ず近くの王室離宮へ行く。この建物は昨日，ジャイガオンの手前で右手の丘の上に見えたもので，このときブータンは目前だと感じたことを想い出した。

昨日登って来た道を下り，市内に入ると新らしい官舎らしき建物が沿道に多く見られる。ブータン銀行の前にある郵便局へ行く。ブータンの切手は珍らしいので沖理事に頼んでいる間に米・英人が殆んど買占めてしまった。彼らの商魂？の逞しさもさすが先進的だと感心した。

11時頃ゲスト・ハウスへ戻ってみると，結局その英婦人は許可にならず止むなくジープでバグドグラまで送り帰されるようだった。ブータン入国は申請から許可まで3カ月ほどかかり，インドの出国手続もめんどうである。通過ビザでも何とか入国できるが，トリプル・ビザのある方が無難のようであった。「また来年やって来ます。」と涙を浮かべて別れの挨拶されたときは本当に気の毒でその顔は今もって忘れられない。その人はケサン前王妃と知り合いらしく他によい方法がなかったものかと同情の念を禁じ得なかった。

午前11時30分，全従業員に見送られ本当？のブータン目指して発車。エンジンの音も快調。ここで始めてブータンへ入ると言う実感がわいたが夢ではないかと右腿をつねってみたら痛かったので沖理事にも「これで本当に入れます。」とお礼を言って喜びをかみしめた。沖理事も私が入れなかったらどうしょうかと心配され通しのようであったが，やっと安心されたようであった。急坂S字カーブの連続で深山の中へ入ってしまう。約15分程走ると突然丸太棒が通路を遮ぎっており，最初のチェックポストがあった。こんな山中の一本道に何故必要なんだろうかと思ったが難なく通過できた。

道路の両側はびっしりと樹木が繁い茂っており樹名は不明だが照葉樹が多い。急峻な登り道は依然として続く。時々ネパール人労務者の住居というより仮小屋が散見でき崖崩れで壊れた道の復旧作業に従事していた。簡易舗装の路上に石が落下しており不気味だが運転手も馴れているのかその石を避けて上手に運転する。運転技術は抜群のよ

うだ。顔立ちがブータンと違うので訪ねたらネパール人だった。

遙かインドの平野を望見出来る。道はまだインド側の南斜面を登っている。この道路はインドの援助によって着工されティンプーまで開通したのが1962年，15年前にインドの当時のネール首相また中尾佐助先生が馬また徒歩で山ヒルに悩まされて8～10日間かかって通られた旧道に殆んど沿っているらしい。やがて道が平担になり左に大きくカーブを切る地点に達した。これでインド側に漸く“さようなら”のようだ。

「世界のあらゆる文明は私のうしろにある。私の前にひろがるのは謎の国だ。山，雲，雨……それから何があるのだろう。未知の偉大さにギュッと身がひきしまる感動であった。」中尾佐助，1958年毎日新聞連載“秘境ブータン”　の名文句を想起する。

午後1時も過ぎ一寸広い草原で昼食中1台の乗用車がプンツオリンの方へ走り去った。その自動車は西岡さんの車で,後で分ったのだが,ダージリンで留学中の子供さんが休暇に入ったので迎えに行かれる途中だったのだ。

道が下り坂になり谷底へ下りたら立派な鉄橋があり渡った所に検問所があり車は停った。地名はチュカという一小村だ。どこまで続くのだろうと思われる程，いつまでも山腹をからむようにして道路は走っている。所によっては断崖絶壁をえぐって造られたところもあり,下は目もくらむようだ。一昨日も収獲した野菜を積み運んでいた農民夫婦がトラックと共に転落死亡事故があった由。手の届くような谷の向う側にこれから走る道が通じており随分迂回しなければならない。私たちの感覚として不思議に思ったのはトンネル，谷を渡る吊橋が全くないことだ。

あの山を越せばパロ谷が見えるのではないかと期待しそこまで行くと山また山，なんとひどいところだと嘆息せざるを得ない。

時間的に考えてパロに近いと思ったらチェックポストの遮断機が前方に見え左の河に橋がかかっており直感的にコンフルエンスと分る。ティンプー方面は直進，左折して橋を渡った所をパロは右へ。またもう一度左折すればハへ行く交通の要衝であるが，検問所の建物と河の分岐点にチョルテンが建てられているのみで首都ティンプーと第2の都パロの分岐点にしては常識外れに淋しいところに思えた。

夕闇も迫まり河に沿って約40分登ると民家がポツポツ点在し谷が開けたようだ。電灯の明りも少いが遠く或いは近くに輝いている。急な坂を上りつめるとゲートがあり，パロのゲスト・ハウスに到着した。

ロビーに通されたが建物・装飾等プンツオリンより一層ブータン的だが，電気ストーブが使われていたのは，ちとチグハグな感じだ。パロは標高2.300mだけあってよく冷える。暑いインドからきたので僅か数時間で夏から冬になってしまったように感じた。

白亜のパロ・ゾン

11月27日（水）

パロの朝は静かに明けた。2ルーム1棟の別棟が広い芝生に建てられているので廊下を他の人が歩く音もせず全く静寂だ。庭へ出ると一面霜が降りており吐く息も白い。丘の上から初めて眺めるパロの中心地帯。日本の田舎の田園風景と差異はないが唯その中に巨大な白亜の城リンプンゾンがあるのが異色であり且つ魅力的である。またパロ否ブータンのシンボル的存在でもあるだけに周辺を圧している感じがする。

朝食後8時30分出発。パロはブータンの古都で経済文化の中心地，最も豊かなところとしての予備知識をもっていたがバザールも100m程で広い道の両側に僅かの商店が軒を並べているだけのちっぽけなもので都市としての形態は全くしておらず人影も数えられるほどだった。パ・チュウに沿って上流の方へ向けて走るのだが昨日の狭い谷間と違い，ここパロの谷は底は平で約1㎞程の幅があり，一面の水田地帯。両側の山地の付近に白壁作りの農家が散在している。

左側の田園の中に屋根の黄金の飾りが光るラマ寺院が見えた。最初の観光地，キチュラカンで国道から石段を上り少し歩いた所だ。ケサン前王妃が建てられたといわれ，西ブータンでは最も古い

7世紀時代の建物，大きな仏像等が保存され巡礼者の長年の礼拝により床に足跡が彫刻されたようについていたがブータン人が如何に信仰に厚いかが顕著に表われていた。

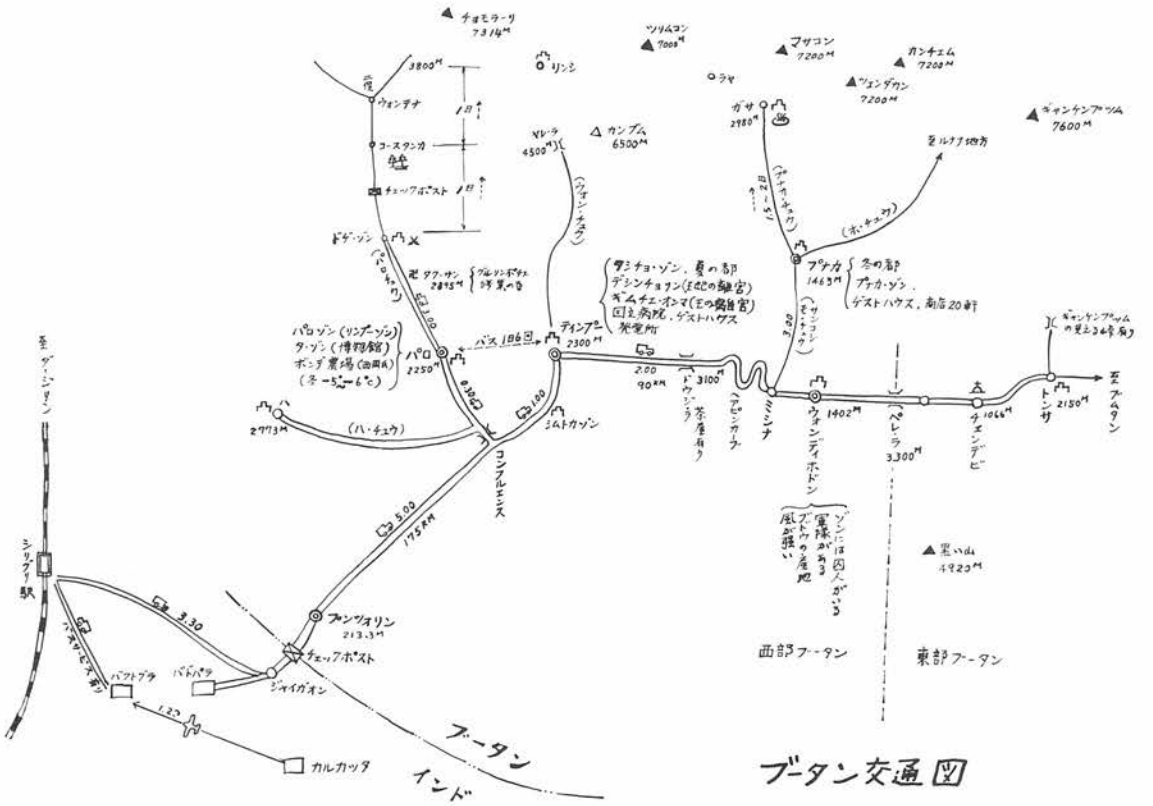
パロ谷の奥へ車は進み周囲は長閑な田園風景が続く。特に何もないと思われるところでバスが停りガイドが指さす右手山腹の断崖をよく見るとタクサン僧院だった。ここの写真も何回となく本で見て自分の脳裡に焼きつけられていたが実物はすごいものだった。全員矢鱈にシャッターを切りまくったり双眼鏡を覗いたり，少し騒ぎすぎのようだった。想像ではこんな見晴らしのいいところではなくて幽谷にあると思っていたので意外だったが，たいへんなところによく建てられたものだと感嘆せずにはおられない。この地点から馬に乗って僧院往復は約5時間かかり，明日スケジュール外だけれど観光するかも分らないと好意的なガイドの話で嬉しく思った。

なおも車を進めると谷はだんだん狭くなり始め遙か彼方前方に白い山が見えだした。チョモラーリ(7.314m)だ。ブータンで最もよく知られている山でインド，ブータン合同登山隊が登頂したと伝えられている。山に関心の薄い私がチョモラーリを眺めたことはＨＡＡＪの主力メンバーである山岳関係者，特にブータン入国を希望しており乍ら止むなくバグドグラで別れた佐々木，菊池の両氏に申し訳ないように思った。

水田地帯も終りかけた右手の丘の上に半壊した古城があり，自動車道は丘の下までだった。城の名はドゲ・ゾンという。昔ブータンの兵士がチベット侵入軍とこの城に立てこもって戦い，チベット軍を全滅させその血でパ・チュウが真紅に染まったとの話がある有名な城だそうだが私は急坂を歩かねばならないので内部は残念乍ら見ることはできなかった。

パロの博物館

同じ道を引き返して再び中心地帯へ戻り，パ・チュウを渡りパロ発電所の横を通ってパロ・ゾンの上方にある博物館を見学した。同館はその昔，望楼兼武器庫でタ・ゾンと称されていた。厚い壁



の円形構造でトーチカのように小さい穴がありブータンの数多いゾンの中でも特異な存在だと思われる。近年，博物館用に内部改造されたもので使ってある板も新しい。しかし，内部照明が暗い感じだった。展示品は仏像，仏具等，宗教関係品，民具，動物，昆虫，切手，コイン，織物，武器，などに分類されておりその武器の中に日本の三八銃が展示されていたのには恐れ入った。仲々意欲的に収集されていることは観光開発に力を入れようとする姿勢と無関係ではないと考えられる。

午後はブータンで2番目に古いリンプン・ゾンへ行く。ゾンはパ・チュウ沿いの小高いところにあり，まさに大きなビルのようで近よるにつれて窓の飾りの極彩色の彫刻，屋根の上に輝く金色の飾りがいろいろの色に光る。屋根のついた橋を渡り石畳の塀の並木道を登ってゾンの入口に達するのであるが身障者の自分にとってかなり厳しいが日本人の根性の見せどころでもあると若干無理した気がしないでもない。正門に着いた時はぶっ倒れそうだった。腰をおろし休んでいる私にさす暑い陽ざしを付添ってくれたガイドが前に立ちはだかって遮ぎってくれた。近年日本では失われつつあるその献身的な厚情に対し，たいへん嬉しく深々と頭が下った。

午後4時頃宿への帰り昨夜西岡さん宅へ電話をしておいたので沖理事と2人で参上した。官舎は高台にあり故ドルジ首相の所有地を借りて建てられたものでブータン様式だった。洋酒を御馳走になり乍ら約2時間歓談する。“桃源郷”といってもブータンは異境には変りなく，幾多の艱難辛苦を乗り超えてブータン発展のために家族ぐるみで献身されている姿に接し心からの敬意を表した次第。御主人と私たちはお互いの帰路山中でうまくいけば会えるかも分らない。そのことを念願し乍ら宿舎へ帰った。

主都ティンプーへ

11月28日（木）

予定を変更し，午前中はタク・サン僧院見学。山道の往復に時間がかかるので早朝6時30分朝食を終えて直ちに出発。私も同行したい気持だったが悪路でもあり私の体では危険を伴うということでいさぎよく断念し別行動でバザール及びその近くにあるマニラカンを廻りそのあとでジープに乗り換えて西岡さんのボンデ農場へ行く。奥さんは官舎におられるので再び訪れブータンの分らない点をいろいろ教えて頂き有意義な1時間を過した。昨夕は元気ではしゃいでいた哲夫君は昼寝中で写真が撮れなかったのが心残りだったが元気で成長されることを祈ってお別れした。

昼食は宿舎で1人で済ませ，13時タクサン見学の一行を迎えに行ったがまだ帰っておらず，約1時間ほど待った。皆んなグロッキー気味で米人の1人は落馬の際，背を打撲し痛そうだった。一般観光ルートに入れるのであれば道路の改善整備を急がねばと思う。

午後3時ティンプーへ出発。ゲスト・ハウスで“たいへんお世話になり有難う”と日本語で記帳サインし，美しいパロ谷を後にした。コンフルエンスで左折，ティンプー街道に入る。渓谷なので太陽が沈むのも早い。ティン・チュウに沿って北上すること約1時間。ブータン最古のゾンであるシムトカ・ゾンの下を通り大きく左へ曲ると三叉路で右ティンプー，左プナカとあり，これは地理的に変だと思ってよく見ると急勾配になるために陸橋で交差しており納得できた。前方の谷間に新しい家々が見えてきた。ティンプーへ来たのだ。16年前中尾佐助さんが入国されるまで首都はプナカと思いネパールのカトマンズとプナカの夢をよくみたものだったが……。

近づくにつれて家並，灯火も多く，秘境の街とは考えられないほどであった。メインストリートは街路灯が輝き，人通りも多く交差点では巡査が笛を吹いて整理しており日本の小都市と見違える程，近代化され所請“ブータンらしさ”は失われたといっても過言ではない。

最近までブータンは“町のない国”と知らされていただけに，このような早い変貌に驚かされた。ブータン人はブータンをいつまでも牧歌的な秘境にしておくのが本意ではなく，せめてティンプーだけでも一国の首都として恥ずかしくないようにしたい気持なのだろうか。その見方からすれば，首都としての景観を整えつつあるといってよいだ

ろう。

ティンプーでの宿舎はタシチョ・ゾンを右に見て左へ約15分程登りつめたところに建てられたモティタン・ホテルで前には国旗掲揚ポールが約20本立ち並ぶ，いわば各国代表クラスが宿泊するところのようだ。庭も周囲の自然を活かし，ちょっと風流に灯ろうも置いてある日本式庭園だった。話によれば西岡さんが造られたらしい。内に入れば室数も多くバーもあり，食堂も広く豪華だ。常に全館哀調帯びたブータンメロディーが流されており，ブータン最高級のホテルに違いない。ティンプーの夜はパロより標高が高いのでかなり冷えこむ。バスの湯はパロ，プンツオリンと同じく容量の小さい電気温水器なのでとても身体を全部つかるのには足りない。風呂はインドへ出るまで諦めることにしよう。

ブータン・ヒマラヤの雪峰

11月29日（金）

「キーキーコキー」"イカル"の囀りで目をさました。朝食7時30分，出発8時。朝もやに包まれたティンプーを出てシムトカからプナカ・トンサ街道へ入る。陸橋を渡ると直ちに急峻な登り坂となりヘアーピンカーブの連続だ。またたく間に深山の中へ入る。かなり登ったところに茶店があり山腹の急斜面の小さな畑の中に点在する民家，ひっそりと静まった村々，それは最もブータンらしい風景だった。途中道路が凍っているところもあり約1時間走っただろうか，視界が開け峠に到着。道沿いの小高い所に最近造られた展望台があった。実に簡単なもので椅子とても太い丸太のぶつ切りが10個ほど並べ立ててあるのみだった。遠くブータンヒマラヤの白い峰々が望見されたが山の名は分らない。この峠はドウジ・ラでラは峠の意。標高約3.000mだけあって本当に寒い。持参したコートを初めて着用した。プナカ，トンサ，ブムタン，タシガンはどの辺の谷なのか，自分なりに見当つけて双眼鏡で覗いてみる。

再び針葉樹林の中の道をシムトカまで引返し，シムトカ・ゾン見学。ブータン最古のゾンで現在はラマ僧，官吏の養成学校にもなっているそうだ。急坂なので車で待つことにしたが，その間ネパール人労務者が石を背負ってゾンまで運び上げていたが仲々重労働のようだった。

巨大なチョルテン

再びティンプーへ戻り，市内で最も高い塔，故ウオンチュック前国王記念碑へ礼拝。参拝する国民が後を断つことなく続き，塔内はいつも香の煙が漂っている。ブータンの近代化を英断をもって実行された故国王が如何に多数の人々から崇敬されているかを如実に物語っている。急な階段であったが塔の最上へ上ることができ，全市街眼望の恰好のところでもあった。

ブータンおどり

午後はホテルの庭でマスクダンス観賞。定刻2時，私たち5人がテーブルと椅子が並べられた観覧席に着席してからダンサーたちが到着，楽屋用の綺麗なテントが張られる。知らぬ間に多勢の見物人が何処からとなく集まってきた。ダンサーも私たち5人だけより熱演できると思う。鬼，悪魔等の面と柄模様のスカートのような物をつけて威勢よく踊るのだが伴奏は吹奏楽に使うシンバルを大きくしたような打楽器をカン高く叩くだけ。また身長ほどもある長い笛を吹くが「ブーブー」と一定低音のリズムだけでメロディーは全くなし。女の踊りは伴奏なしで民謡を斉唱しながら踊る単調なものだった。その間チャンに卵を混ぜたよう

西岡家で(左 沖，中央 矢野，右 西岡夫人)

なブータン酒がサービスされたが味はもうちょっとといったところ。しかし，私たちのために官民一体になって催してくれた厚意に感謝しなければならない。

ダンス終了後，マーケットの民芸品即売所へ行ったが生憎停電で，ローソクの明りでは品定めは難しいので明日来ることにしてホテルへ帰った。

巨城 タシチョ・ゾン

11月30日（土）

6時に起床の電話が鳴る。ティンプーも今日限り。7時15分タシチョ・ゾン見学に向う。近づけば近づくほど建築様式といい，色の調和といい，まことに見事な建物で何か圧倒されそうな感じがしたのも私一人ではあるまい。さすがブータン全土に君臨するだけの威容を誇っている。

丁度出勤時間なので多数の人々が白いショール（ブータンではカムネイという）を肩にかけて慌しく登庁しているところだった。高官は赤のカムネイで剣を吊っているので容易に判る。ゾンの中央入口は石段になっており，上ったところに歩哨が立っていた。内部はパロ・ゾンより一回り広い中庭があり，1962年に改築されただけあって新しく且つ壮厳的美しさが保たれている。政府各省と25の寺があるという。政庁の中で読経の声が聞かれるのもブータンならではだ。ゾンの前庭に掲揚されているブータン国旗が微風に乗って小さくはためいていた。

王宮はゾンの南約100 mにあり赤い帽子を冠った軍隊が銃に着剣して厳重に守備していた。次はゾンに隣接し緑屋根の平屋建が並んでおり，その一角にある観光局のオフィスへ立寄る。昨日ドルジ局長が宿舎へ挨拶にこられたので初対面ではなかったが再びお目にかかる。年は30才前後と思われる若い人だ。そのひきしまった顔には浅薄と虚飾をしりぞける威厳があり，誰もが尊敬できる近代的紳士である。別れるとき最近出版されたG，N. Mehraの"BHUTAN"に署名して私たちに下さった。その後，約5 km上流にあるデシン・チョリンの離宮の近くまで行った。昨夕，停電のため買物ができなかったのでマーケットでショッピング。まさかブータンはインフレでもあるまいが，どの土産物も思ったより高価だった。

乞食がいない

午後1時45分，首都ティンプーともおさらばの時間になった。ティンプーは近代化されたといっても諸外国の観光都市に比較すれば問題にならないほど長閑だ。そしてインドなら人の集まるところには必ずいる筈の物売りや旅芸人，また乞食に類する人々は探しても，ただの1人にも出会わなかった。実に羨ましいほどの平和街だ。今後急増すると推定される観光客が，必ず訪れるティンプーおよびパロの美しさを汚さないで欲しいと念じて，ホテルの従業員と別れた。市内のマーケットでプンツオリン・ゲスト・ハウス勤務の婦人に偶然出会い驚いたが，今日帰るというのでバスに同乗してもらう。

シムトカ，コンフルエンスと経てきた道を車は走る。途中幸運にも西岡さんがダージリンから帰ってこられるのとバッタリ出会い，ゆっくり話すことはできなかったが，顔もブータン焼けで極めてお元気そうな姿に接し挨拶ができたことを本当に嬉しく思った。チュカの検問所を過ぎ夕日は既に西の山に沈み，ヘッドライトのみを頼りに走り続けている。途中茶店で少憩。その後約1時間走っただろうか下り坂になり間もなく遙か下にプンツオリンらしい灯が見えてきた。高度が下るので暖かくなり服を脱ぐころにやっとゲスト・ハウスに横づけになった。暗い長いドライブを安全にしてくれたドライバーのMr. Kishenに感謝し宿舎へ入った。

さようなら美しきブータン

12月1日（日）

ブータン最後の夜は明けた。出国手続は昨夜完了している由。9時国境ゲート到着。

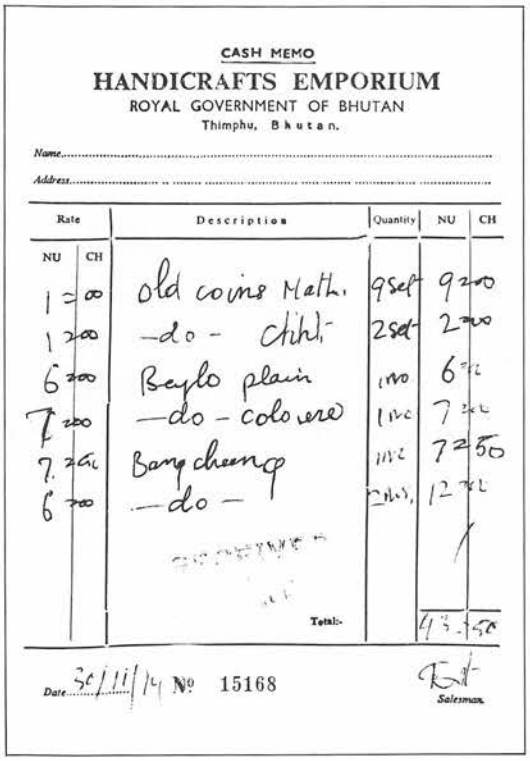
ブータンを去るについて夢のようだった1週間を回想する。誠実且つ謙虚で礼節を尊ぶ素朴なブータン住民。そしてぜいたくも知らず飢も知らずまた鳥獣は人間の迫害も知らない美しい自然の中

で静かに息づく平和なたたずまい。まさに人間が人間らしく生きることが出来る素晴らしい国として深く印象づけられた。私も憧れの国として今日までその心の灯を消すことなく燃やし続けてきたことを誇りに思い，今後も同じアジアの一国として両国の親善友好に微力にせよ役立つことができれば望外の幸いであり，一日も早い国交の樹立を望むや切である。ブータンにも将来近代化の波は今日以上に早いテンポで押し寄せてくるだろうがただ願わくば開発された新しいブータンも今の美しさと尊い人間性はいつまでも保っていてもらいたいものである。

私たちのためにゲートの遮断機は静かに上り始めた。私は心の中でつぶやいた。

"ああ，名残りおしいブータン王国さようなら，
さようならブータン"

流れ出そうな涙をじっと我まんしてゲートをくぐった。そしてここに30年来の執念ともいうべき宿願を先年のネパール同様，果し得た喜こびを深くかみしめると共に浅学非才の私に，本当に親切に献身的にお世話して頂いた関係者の皆様に対し深甚の謝意を表する次第。多謝。



CASH MEMO

HANDICRAFTS EMPORIUM

ROYAL GOVERNMENT OF BHUTAN

Thimphu, Bhutan.

Name.....

Address.....

Rate NU	Rate CH	Description	Quantity	NU	CH
1	00	old coins Math.	9 set	9	00
1	00	-do- Chitti	2 set	2	00
6	00	Beylo plain	1 no	6	00
7	00	-do- colorere	1 no	7	00
7	50	Bang cheung	1 no	7	50
6	00	-do-	2 nos.	12	00
		Total:-		43	50

Date 30/11/14 № 15168

Salesman.

ティンプーの土産物即売所の領収書

人力車に乗る筆者　うしろはブータン国営バスの事務所（シリグリの街で）

秘境ブータン王国訪問

松葉ヅエ親善使節

加悦町の矢野さん

30年来の夢実現

10日間滞在「一日も早く国交を」

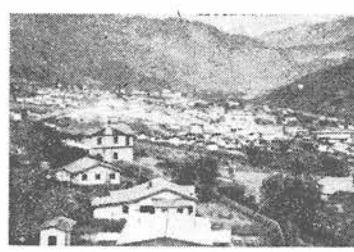
ブータン旅行の写真を整理する矢野さん

十一年前に片足をなくした身体を松葉ヅエに託しながら、ヒマラヤの秘境、ブータン王国を訪問、日本とブータンの親善を果たした人が与謝郡加悦町にいる。子供の時から三十数年間に及ぶ夢を見事なしとげたもので、その"根性"が町の話題となっている。

この人は与謝郡加悦町加悦、電気店経営矢野福雄さん(43)。矢野さんがブータンに興味を持ち始めたのは小学四年生のころ。中国とインドの両大国にはさまれている小さな国ブータンとネパールが、どうして独立を保ってきているのか不思議でならなかった。また両国とも永年、鎖国的政策をとっているので、内部事情もわからないとあってますますこのヒマラヤ山ろくの小国にひきつけられ、ぜひ足を踏み入れ、人々の生活をみてやろうと決心した。以来両国に関する資料を集め続け、ネパールとブータンに行く機会を狙った。

ところが、三十九年夏、血管の障害で京都市内の病院で検査を受けたところ、医師のミスで左足に血液が流れなくなり、左足をつけ根から切り取らなければならなくなった。「ブータン、ネパールに行けないかも知れない」と、一時はあきらめかけもした。しかし子供のころからふくらみ続けた夢は捨て切れず、片足をなくした矢野さんは、夢実現へさらに闘志を燃やした。

二十五年十一月のクーデター以来、鎖国的政策をといたネパールには、四十四年末から四十五年初めにかけて二十日間、松葉ヅエを友に旅行。夢の一つを実現したところが念願のブータンは簡単に入国できない。これまでルポライター、山岳関係者などいろんな人が入国しようとしたが、許可になった人はごくわずか。四十六年九月に百二十八番目の国として国連加盟したので、規制が緩くなるのではーと、期待したが、一年後に国王が死去したため国中が喪に服し入国の見通しがたたなくなった。昨年六月二日、弱冠十八歳という世界最年少のシグム・シン・ワンチュク国王が誕生したことで、再び入国許可の可能性がでてきたため、ニューデリーに滞在している友人の日本ヒマラヤ山岳協会員沖允人さん(33)=名城大学講師=にニューデリーのブータン大使館と交渉してもらい、その結果、昨年十一月十九日に念願の入国許可がおりた。またブータンに行くには陸路しかないため、立ち入り禁止になっているインドのアッサム北部の進入許可もインド政府からとりつけ、矢野さんは同月二十三日、松葉ヅエを手に羽田を出発した。



ブータンの首都・ティンプーの町並み

インドのカルカッタに着いた矢野さんは、シリグリ郊外のバグドグラ空港で沖さんと旅行業者のアメリカ人二人、イギリス人一人と合流、マイクロバスで迎えに来たブータンの政府職員とともにあこがれのブータンに向け出発。約四時間でブータンの国境の町プンツォーリンに到着。三十数年間の夢はここに実現した。ブータン第二の町パロ、海抜二千四百八十㍍の首都ティンプーへと政府職員つきっきりで見て回った。首都といっても都市の形態はしておらず、山々に囲まれた平地に、政庁が一堂に集まっているタシチョゾンを中心に、民家が散在しているのどかな田園風景そのものだったという。

待遇はよく、極めて親切心にあふれ、ホテルには政府高官がわざわざあいさつに来るほど。言葉は政府職員はみんな英語ができるので不自由はなかった。矢野さんは山に登ることはできなかったが、それ以外はみんなとともに行動。ブータン滞在十日間のうち、写真八百枚、八ミリ三分のを二十五巻と夢の国を撮りまくった。「国民は農牧を生活の糧に、ぜいたくもなく、飢えも知らず、美しい自然の中でひっそりと息づき、その光景は現代に甦る桃源郷のよう」と印象を語る。

矢野さんが政府の観光局で聴いた話によると、ことし三月二十日ごろから、入国制限を緩め、多くの人が入国できるようにしていく方針だという。昨年十二月十二日帰国した矢野さんは一日も早く日本との国交が樹立することを願いながら「身体障害者はとかく沈みがち、でも、根性をもってやろうと思えばやれるのだ」と、三十数年間に及ぶ夢を実現した喜びをかみしめ、強く訴えていた。

（京都新聞より）

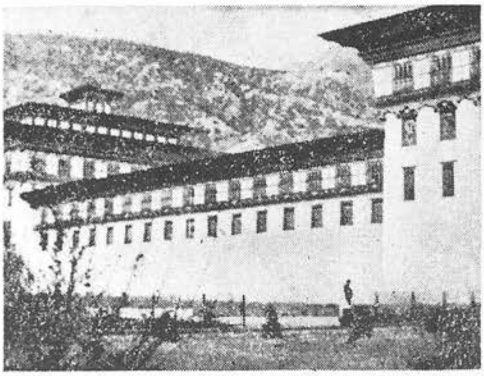
ブータン王国へ 民間人で初の訪問

農耕で自給自足

自然に囲まれ 素朴な住民ひっそり

加悦町の矢野さん

世界最後の秘境といわれるヒマラヤ山麓の「ブータン王国」へ、このほど京都・与謝郡加悦町加悦、織物商、矢野[illegible]さんらの一行が、わが国の民間人としてははじめて訪問。矢野さんは今春に予定されているブータン研究会で訪問記の発表にそなえ、[illegible]上で手記のまとめや映画、写真の整理に追われている。



政庁などのあるゾン

現代に残された〝秘境〟

ブータン王国は鎖国状態をつづけていたが、一昨年九月、国連に加盟、さらに昨年六月、新国王が誕生したことから開国に踏み切った。矢野さんは、鎖国状態をつづけている同国に学生時代から興味をもち、一度は訪ねたいと考えていた。

また去三年前、この秘境への入国めざして結成された〝日本ブータン研究会〟へ入会。昨年十一月二十三日、同会代表として登山家のアメリカ、イギリス人ら五人でチームを組み二十日間にわたって念願の民間一番乗りを果たした。

ブータン訪問の資料を整理する矢野さん

矢野さんの話によると、ブータン王国は面積約五万平方キロ。九州より少し大きく、人口は約百十万人。長い間、文明生活から遠ざかっていたため、住民は素朴で、ほとんどが農耕を営む自給自足の生活。美しい自然の中でひっそり暮らすという、日本では想像もつかない現代に残された〝秘境〟だったという。

風ぼうは日本人によく似ており、家並みは首都など二、三の都市だけで、あとはポツリ、ポツリといずれも木造トタンぶき二、三階建てで、トタンの上には小石が並べてある。首都・ティンプは人口約一万三千人。車は少なく信号もないのんびりムード。ことばは四つの方言があるが、公共語はチベット語にちかいゾンカ語。学校でもゾンカ語を教えている。英語は公的人物にしか通用しない。また国内七カ所に城のような〝ゾン〟という建物があり、政庁、国王庁、ラマ仏教寺院がはいっている。ゾンも木造トタンぶきで、白壁が周囲のみどりにとけ込んで印象的だという。

入国はインド・カルカッタ空港からローカル線に乗り、さらに車で三、四時間で国境入り口に到着する。これが唯一の入国経路。外人用のホテルは整備されているが、滞在費は一日約四万円もかかるという。

矢野さんは「観光入国は十人以上のグループでないと認められず、そのうえ自由行動もだめなのが難点。しかし、貧富の差が少なく、公害もゼロのすばらしい土地。ぜひ一度…」とべたほめしている。

▲サンケイ新聞より

11月19日付 ヒンディスタン・タイムスより▼

Wide-ranging talks with Bhutan King

Hindustan Times Correspondent

NEW DELHI, Dec 18—The development needs of Bhutan, its external relations and bilateral matters were discussed today by King Jigme Singhye Wangchuk and Prime Minister Indira Gandhi at a 30-minute meeting.

The King, who acknowledged India's unstinted cooperation in his country's modernisation programme "in the true spirit of a good neighbour", also had an exchange of views with Defence Minister Swaran Singh at which the kingdom's defence needs were reportedly discussed. India has been training Bhutanese defence personnel.

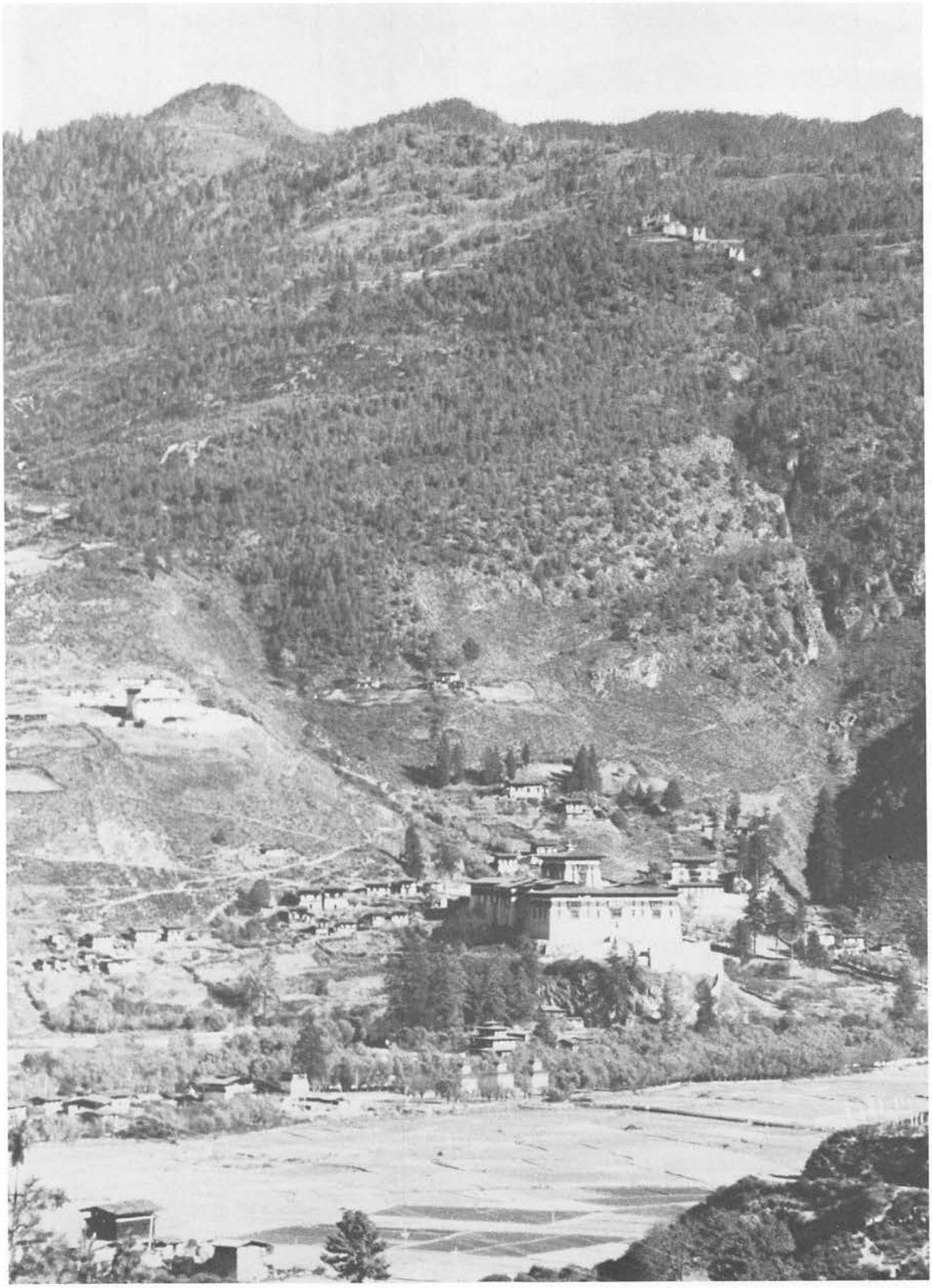
The King's meeting with Mrs Gandhi, who was assisted by Foreign Secretary Kewal Singh, was described as "frank and cordial." A wide ranging exchange of views will begin tomorrow when the King will have two rounds of talks with External Affairs Minister Y B. Chavan and other Government leaders.

In the speeches made on his arrival on a 10-day State visit to India, the King spoke of the "generous cooperation" extended by India to the kingdom and said it would be his constant endeavour to further strengthen the firm bonds of friendship between our two countries. Bhutan's Foreign Minister Dawa Tsering will join the talks tomorrow which will concern matters of mutual interest to the two countries.

The King today recalled the contribution made by his father and the late Jawaharlal Nehru in strengthening Indo-Bhutanese friend-hip and said that "with vision and perception they realised that it was essential, in the mutual interest of India and Bhutan, to forge the closest possible ties of understanding, cooperation and friendship between out two countries."

The King of Bhutan being received by President Fakhruddin Ali Ahmed at Palam airport on Wednesday morning. — HT photo by Rane Parkash

ブータンの人・生活・自然 BHUTAN

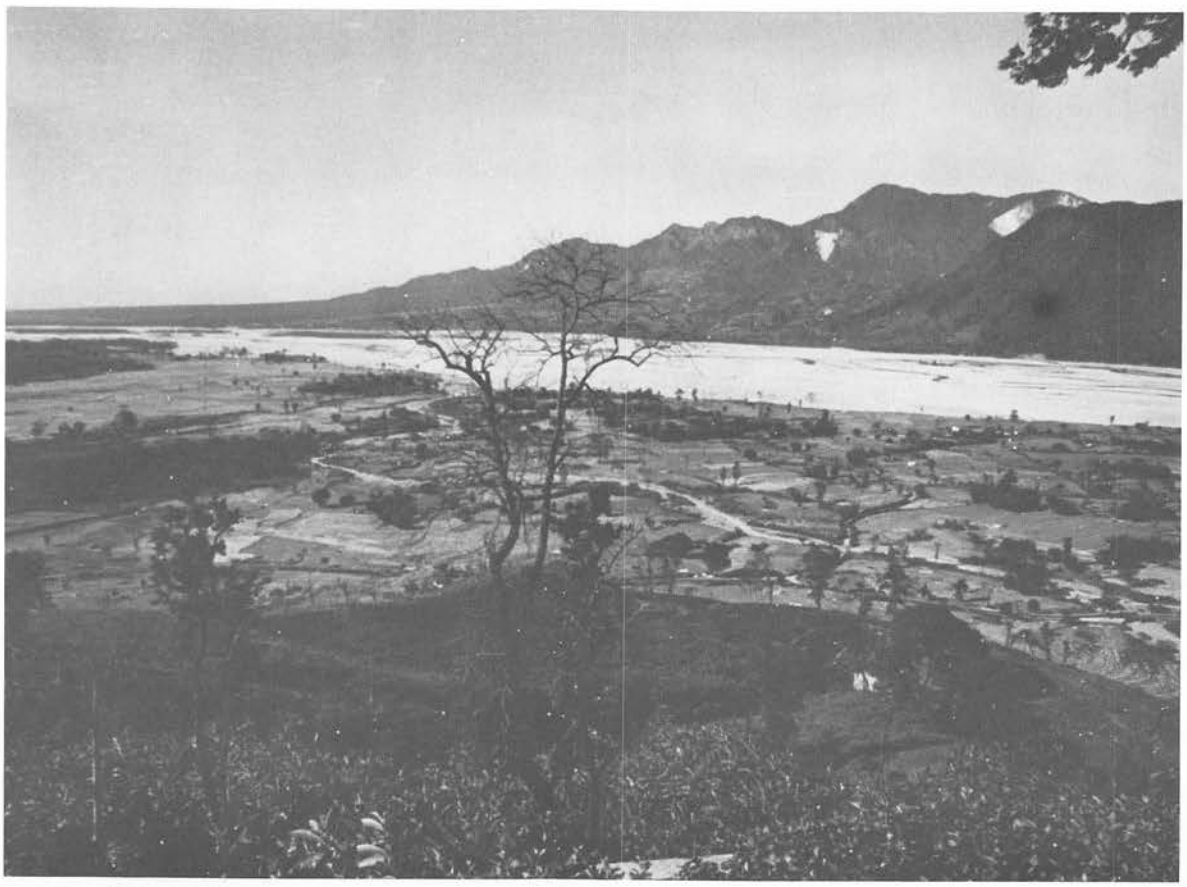


1. パロ・ゾン　Paro Dzong

2. プンツオリン離宮　Phuntsholing Palace

4. インドとブータンの国境の立札　At India-Bhutan border

5. ブータンの門（軍人と沖〈右〉）　The gate of Bhutan



3. プンツオリンの街とアモ・チュウ　Phuntsholing and Amo Chu

6. パロへ向かう山の中のハイウェイ　Phuntsholing - Paro High way

7. パロ谷全景　Paro valley

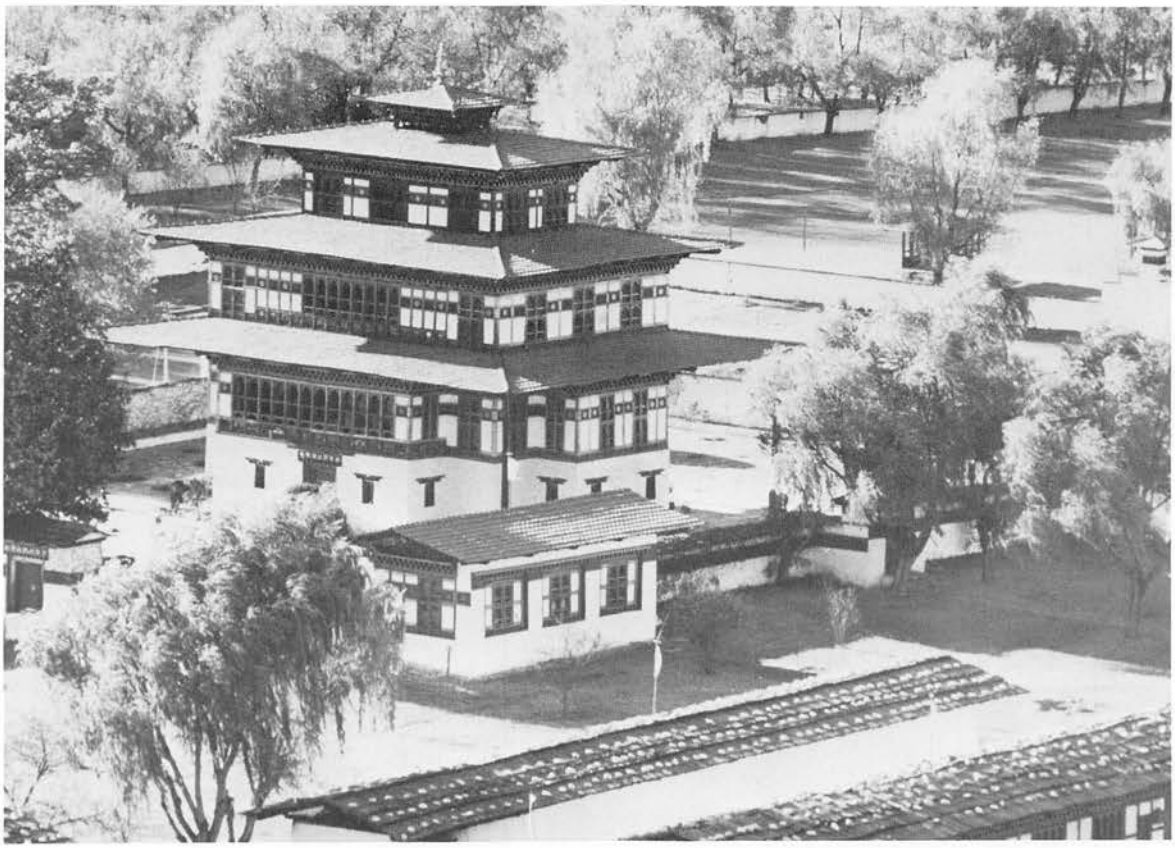
8. パロのゲスト・ハウスの門からパロ・ゾンを見る　Paro Dzong from the gate of Paro

9. パロ・ゾンとパロ谷の一部　Paro Dzong

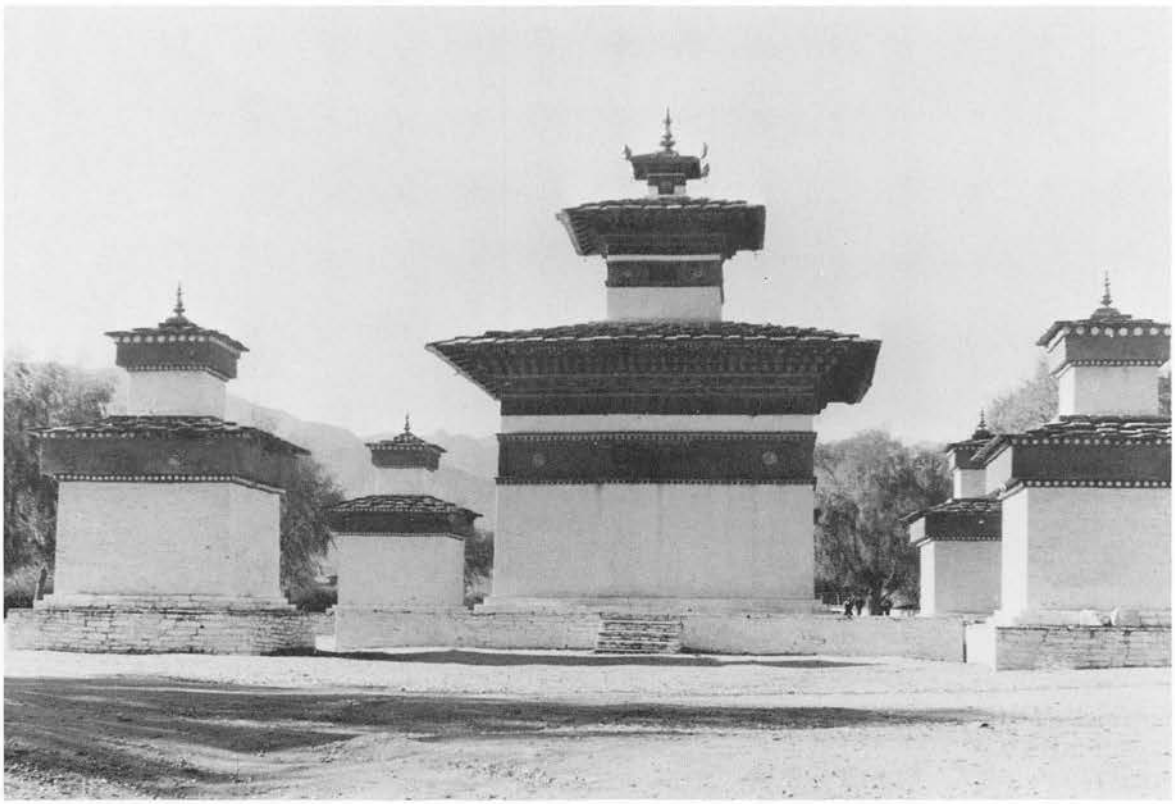
10. パロ・ゾンへ向かう屋根のある橋　Wooden bridge

11. 橋を渡る　Crossing the wooden bridge

12. パロの離宮（全景） The whole view of Paro Palace



13. パロの離宮　Paro Palace



14. パロ離宮の前のツァルカン(塔婆),前の広場は弓の競技場として使われる
Tsarkang (Stupa), a building where sacred relics are enshrined

①

15. ブータン北部国境の山々　①, ②, ③と続く（ドチュ・ラより）　Panoramic view of Bhutanese Himalaya

ブータンの山

16. ドゲ・ゾンを前景にしたチョモラーリ峰（7,315m）　Chomolhari from Drukgyel Dzong

②

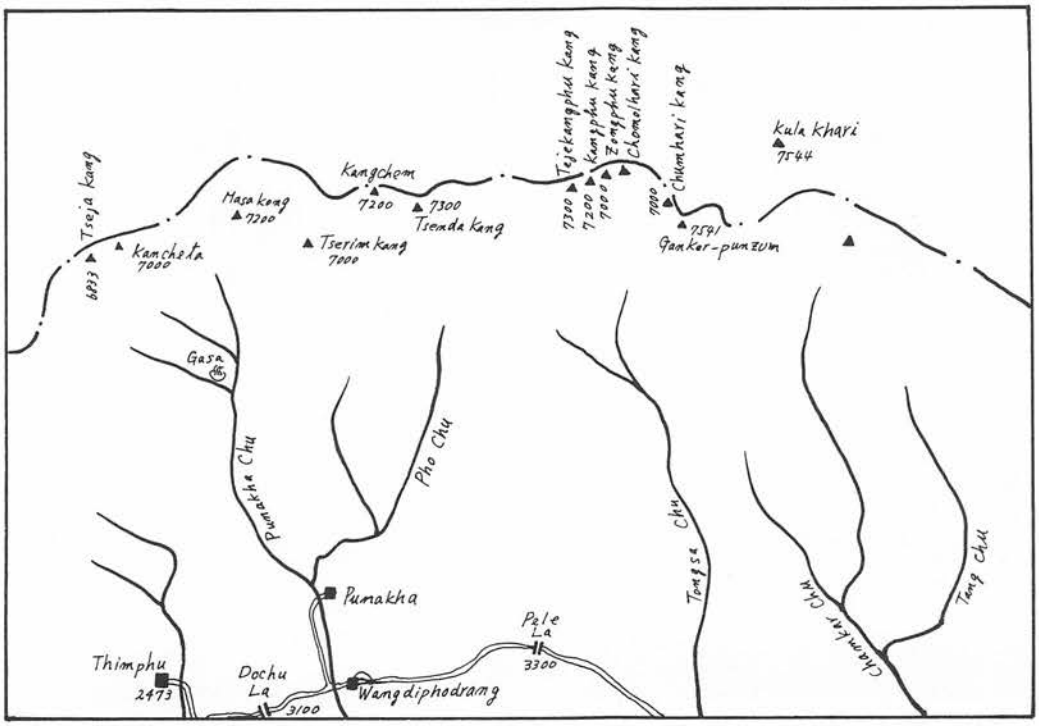
未知のブータンヒマラヤ

ブータンの山としてはチョモラーリ（七三一四メートル）が知られている。しかし、知られているのはこの山くらいで、他のブータンヒマラヤの山々は未知のベールに包まれている。

最高峰はチベット国境、ブータン北辺の中央部にあるギャンケプンツムという山であろうといわれている。標高も約七五五〇メートルということになっており、いかにも未知のブータンヒマラヤの最高峰らしい。これら知られざるブータンの山はパロやティンプーから意外と近いのである。未知の山というと、山を越え谷を渡って何カ月も奥地へ行かないと見ることができないというような感じがするが、ブータンの北辺の山々はかなり奥まで道ができていて、もし、外国人登山家の接近を許してくれれば、トレッキングや登山のパラダイスになるであろう。

十二月の初旬、ドチュ・ラの峠に立って見たブータンヒマラマの白く輝く峰々は実に美しかった。

③



日本人によく似たブータン人

ブータンの男性は日本の着物とそっくりの服をきている。すそはひざくらいまでしかない。顔つきは全く日本人そっくりである。精悍な顔の人の方が多い。

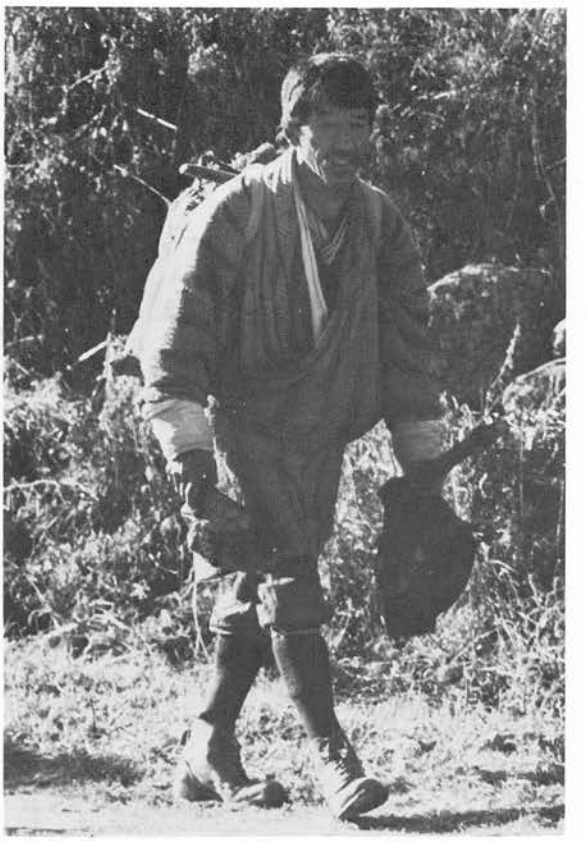
母と娘が商店で買物しているところなど、日本のどこの村でも見られる様子であった。着物の布地を選んでいるのか、いろいろと品定めをしていた。ブータンの娘さんのほとんどはブータン式の服を着ている。髪はおさげにしている。

17. 反物を選ぶ娘と母親　Buying daughter's cloth

18. 母と子　Mother and her children

19. 少女　A girl

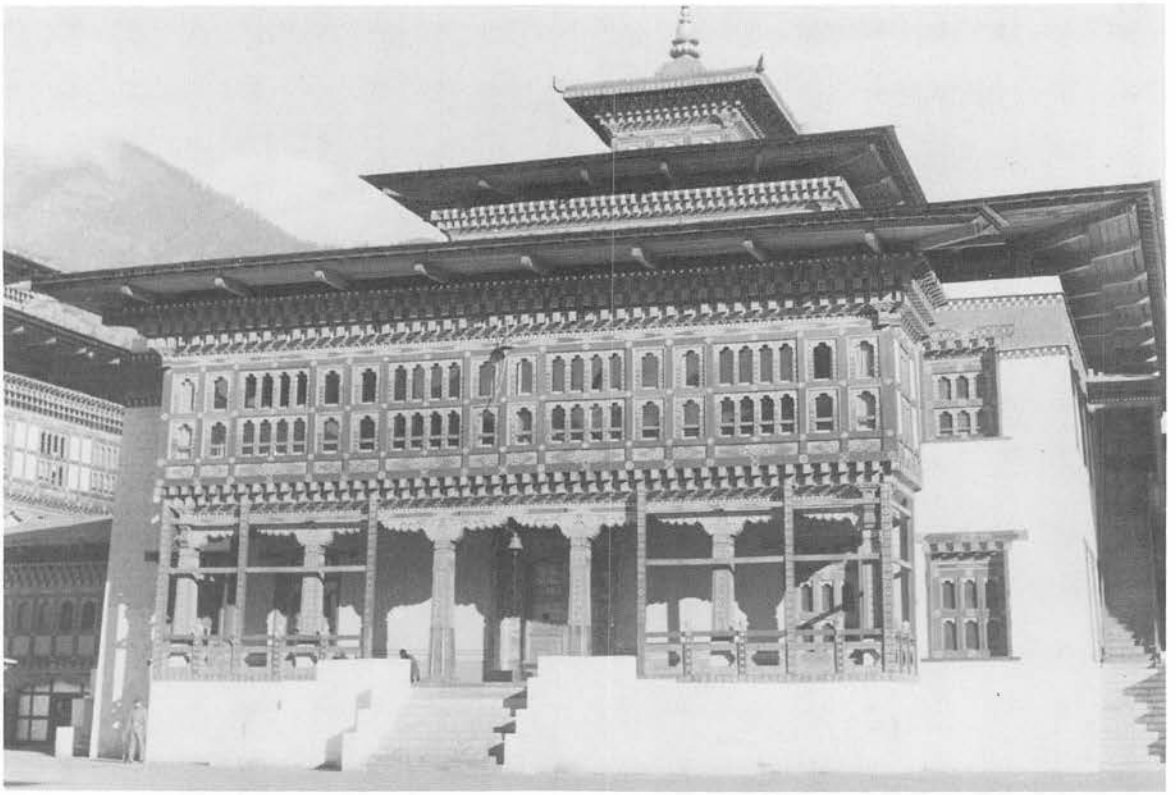
20. ダンディな人　A dandy



21. 旅をする人の姿　Bhutanese traveller

22. ネパール系人の子供　Nepalese children

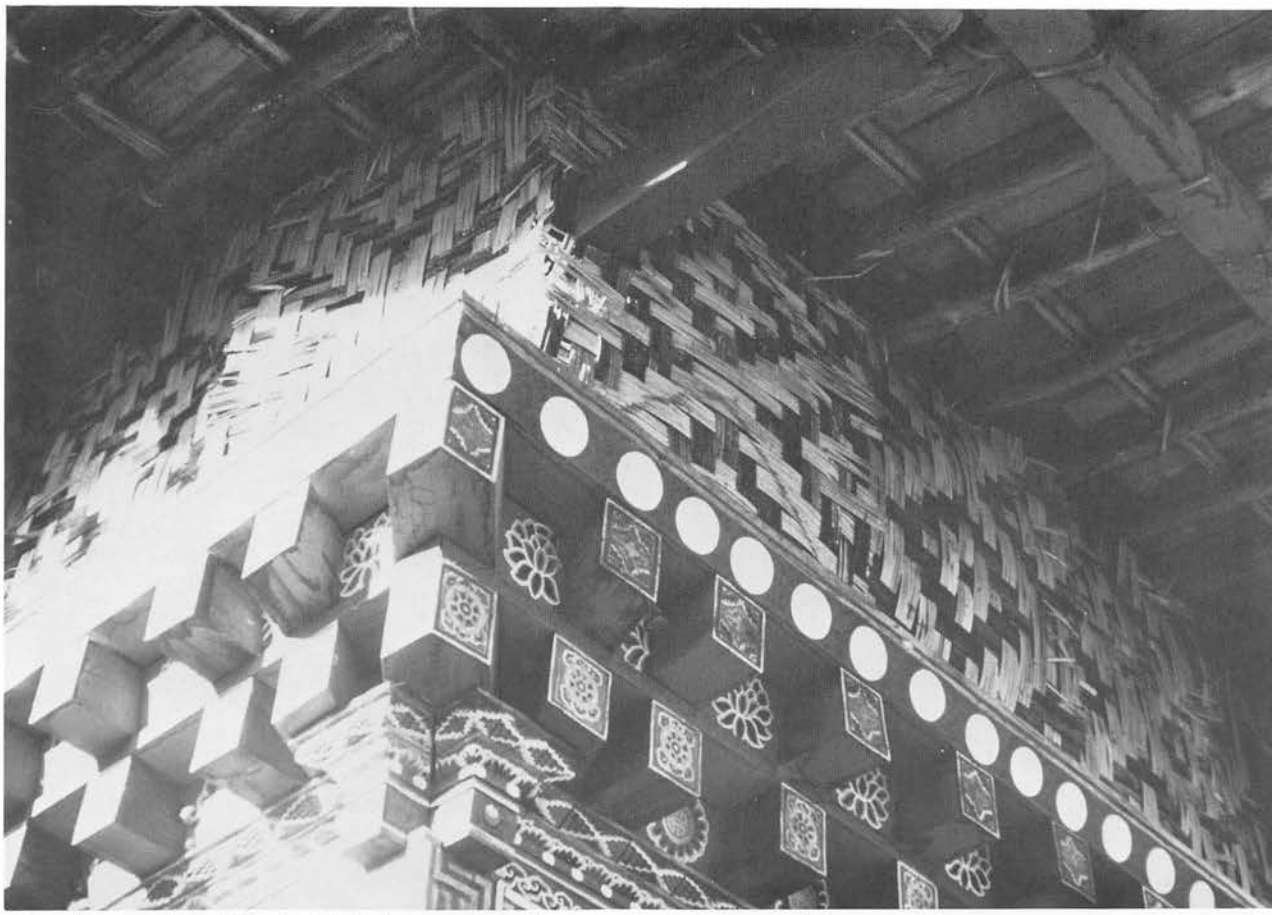
23. ブータン服の男性　Bhutanese male



24. タシチョー・ゾン（このゾンの半分は政庁として使われており，この写真はは残り半分の僧院として使われているところ） Tashichho Dzong

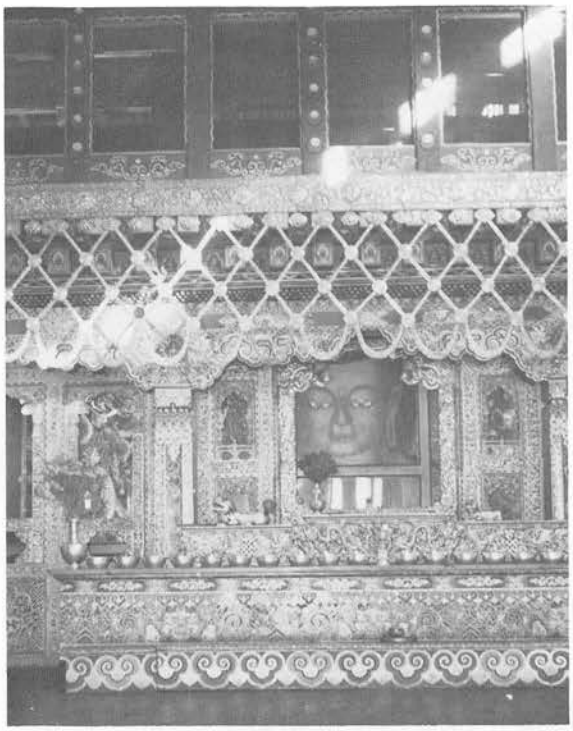
25. ゲロン（見習僧） A fully ordained monk (Gelong)

26. 学僧とラマ僧 Lama monk

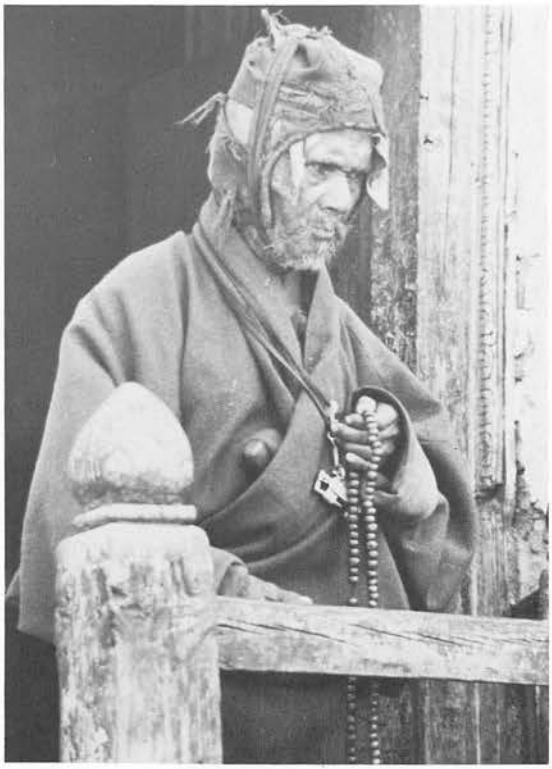


27. ゾンの軒の部分（花や雲の模様は赤や青で美しく彩色されている。ほとんど釘を使っていない）
Eaves of Dzong

28. ゾンを修理する人々（シムトカ・ゾン）
Being under repairs (Simtokha Dzong)



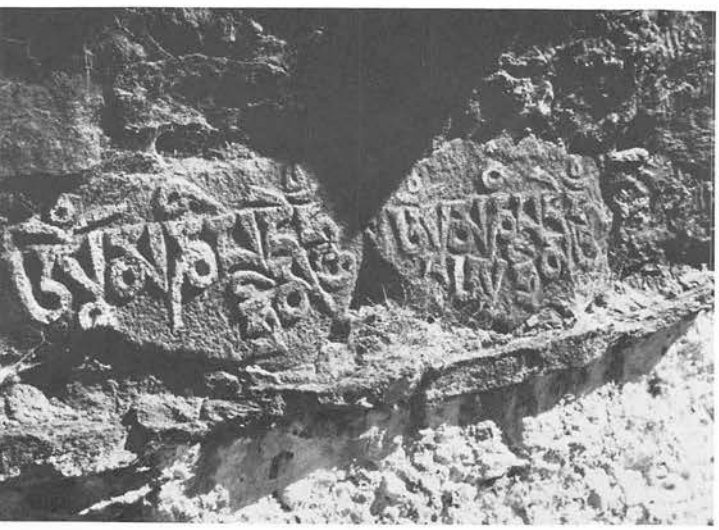
29. ゾンの内部。きらびやかな金色が多い。
Inside of Tashichho Dzong



30. (上) 祈祷師　パロのゾンの一室に住んでいた祈祷師は手にもった数珠をくりながら何事かを祈っていた　A Lama player

31. (下) マニ石に刻まれた教文　オンマニパドメフム（蓮の花に栄光あれの意）などラマ教の教文が刻んである。マニ石はチョルテン（塔婆）にそなえられる
Mani stones

32. 33. 34. (右の3枚)　ゾンの内部の壁画
Buddha and the dream of Lord Buddha's mother before she conceived Him, Tshogdu Hall, Thimphu



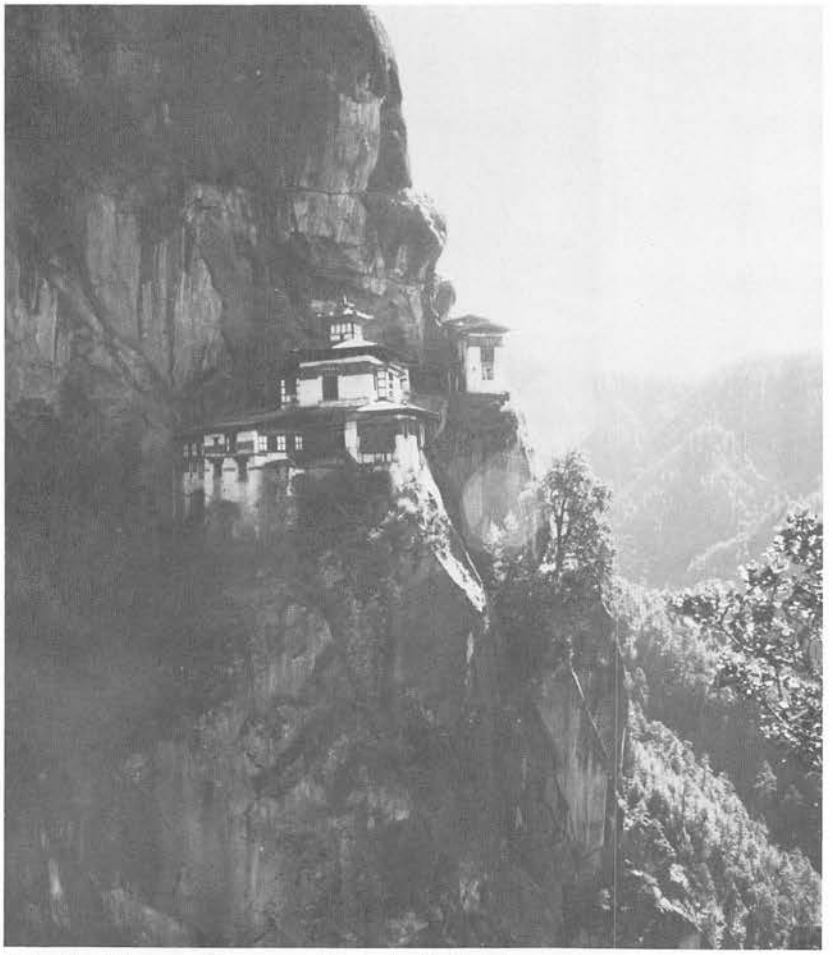
35. 村人と農家と馬
Villagers, Farmers house and horses

〔上から〕
37. 材木を運ぶ馬　Transporting woods by horses
38. 片持梁の橋　Bhutanese bridge
39. 麦を打つ人　Threshing barley

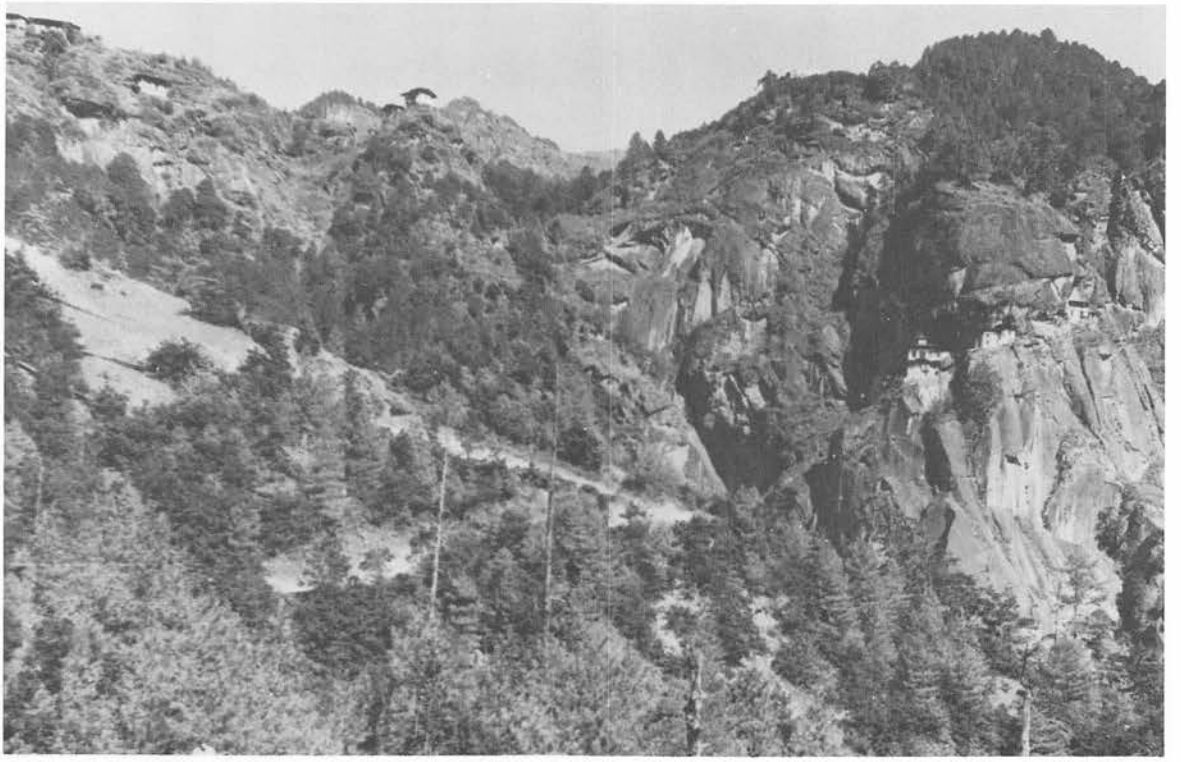
36. ブータンの民俗舞よう　Fork dancers
ブータンの少女がロングスカート風にはんてんのような上衣を着て民俗舞ようをおどる。曲は日本の追分けのようにもの悲しく単調であるが，それが静かなブータンの景色によくとけ込んでいた。おどっている少女たちはブータン国立の舞よう学校で専門家として訓練されている。

40・41　タクサンの僧院

パロからパチュウ河をさかのぼり、橋を渡って二時間ほど馬で登ると右手にそびえる山の中の断崖にはりついたように僧院が建っているのが見える。ラマ教の開祖パドマ・サンババ自身が開いたともいわれている。馬をおりて岩壁の間につくられた岩場の道を登っていくとだんだん僧院が近づいてくるが、見れば見るほどよくぞこんなところに造ったものと感嘆させられる。標高も三千メートルを越している。
タクサンとは「虎の巣」という意味である。



40. 41. Taktsang Monastery "The Tiger's Nest"



ヒマラヤの桃源境・ブータン

沖　　允人

遠い国ブータン

入国手続のこと

ブータンを紹介する本のタイトルに秘境という文字のついたものが多いが，ブータンはそれほど秘境であろうか。たしかに観光団体以外の，すなわち個人としての入国は現在ではかなりむつかしいが，それでも年間何10人という外国人が出入りしているし，ブータンを紹介する本の出版も相次いでいて，いまでは秘境ではなくなったと考えてよい。ただ，ネパールなどに比較して，個人で入る場合などの入国手続が定形化されておらず，ケース・バイ・ケースのことが多いので一見秘境らしく見えているのであろう。外国人の入域が不可能で，しかも面白そうなところはブータン以外にもたくさんある。ブータンは入域可能な，というより入域が比較的スムーズにできる秘境らしい面白さがあるといえよう。

以下に一般的なこととして主として入国手続について私の知っていることを記してご参考に供したいと思う。できるだけブータンに特別なコネクションがなくても行なえる方法について説明したい。

なお，観光団体の入国については1974年から特別扱いとなり，旅行社を通せば比較的簡単に入国許可がおりるようになった。ただし，日数，コースなどに制限があり，費用もかなり高い。これに関しては後述する。

パスポート

5年間使える「数次のパスポート」を取得するのが便利がよい。これはブータン入国への手続をできるだけ早くスタートさせるためである。パスポートNo.などが早く分っていることが望ましいからである。

47年6月頃まではブータン入国の許可はインド経由が原則となっていた。東京のインド大使館経由で特別許可の申請をおこなうのであり「Request of Special Permit」という3ページにわたる申請書を入国の8週間以前にNew Delhi－11にある「Ministry of Extrnal Affairs（Northren Division）」にインド大使館経由で送付するのが手続の第一歩であった。現在ではこれはブータンに入るまでのインド北部を通過するために必要なものではあるが，ブータン入国に直接必要ではなくなった。しかし，インド北部を経由して入国するのが通常ルートであるし，もし，そのルートをとらないとしてもこの許可があれば便利なことも多いと思われるので申請しておく方がよいであろう。用紙はインド大使館にある。

47年6月からはブータン政府に直接ビザの申請をするのが公式ルートとなった。「Royal Government of Bhutan，Tashichhozong，Thimphu」に出すもので，氏名，住所，職業，国籍，パスポートNo，発行場所，生年月日，旅行先，訪問の目的，期間，同伴者名，旅行を手配している者（あれば），ブータン国内の友人住所（あれば）を記入する用紙ができており，これにサインして直接ブータンの「Department of Foreign Affairs」に送ることになる。住所は前記のTashichhodzong Thimphuである。

ブータン入国の3カ月以前に送る必要がある。これが届くとブータン政府の中に47年6月より設

置された「Department of Tourism」で審議し，ブータン入国許可（ビザ）を発行してもらえる。「Department of Tourism」は今のところ「Ministry of Finance」の中にある。

ただし，この申請を出せば国内どこへでも何日でもというわけではなく，場所としてはPhuntsholing，Thimphu，Paroに限られ，期間も最大21日間である。

手続の開始日

申請の順序としては先ずこのブータンからの許可をもらい，その許可書をつけてインドに前記「Special permit」の申請をする方がよいようである。従って，ブータンに関して3カ月，インドに関して8週間が必要で計約5ケ月前に手続をスタートする必要があり，余裕をみれば半年前以前が望ましく，このことからパスポートは数次のものが有利である。1回限りのパスポートの場合は発行日後，6カ月以内に出国しなければ無効になるからである。

以上で公式的手続は完了である。あとは，各自のもっているルートか知人を頼って側面的に協力してもらうことであろう。ブータンに居住している有力者，インドの有力者からその筋に話してもらうことは最大の武器となろう。そのためには各申請書のCopyをこれら協力者に送っておくことも必要であり，かなりのCopyが入用になるので，各20部くらいは作成しておくと便利である。顔写真もそのくらいは必要である。

ブータンとの連絡

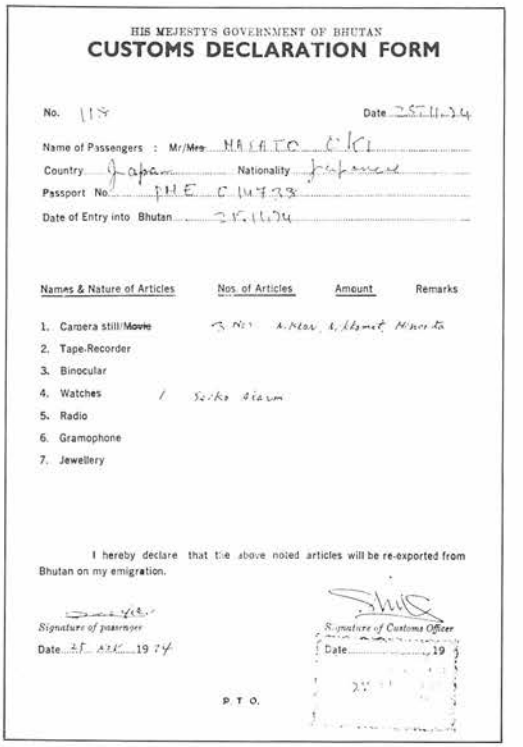
私の経験によるとブータンへの手紙は約2週間で届くようであり，政府からの返事は日本から発信して後，その返事をもらうのに2カ月くらいを要しているが，まず間違いなく届いている。以前のようにインドで開封されたり，なくなったりというケースはほとんどなくなった。インドへの手紙は1週間あれば充分届く。電報もブータン，インドともLT（Letter Telegramの略，翌日配達であるが料金が安い）の場合，2日ほどで着信している。電話はニューデリーとの通話状態はきわめて良好である。しかし，日本とインドの回線が混んでいたりすると2～3日かかることがある。ボンベイの方が早くかかる。カルカッタからは通話状態が非常に悪い。ブータンには掛けたことがないので事情はよく分らないが，聞くところによるとあまりよくないということである。

困難な個人での入国

以上が手続方法である。しかし，これまでのところ上記の手続で個人で入国できた人はいないようである。何度もブータンを訪れられたO氏でさえ，どうしたらブータン入国の許可がとれるのかよく分らないといっておられる。ケース・バイ・ケースのことが多く，ロイヤル・ゲストとして入国するような場合にはまた別の意味でむつかしくなるようである。

ブータンに長く滞在されているN氏は「一般観光客を団体で入国させるようになったのは喜ぶべきことであるが，それだけに別な目的での入国は以前より一層難しくなると思います。」といっておられる。この見方は多分間違いないと思う。

ともかく観光客にほんの少しではあるが，ブー



HIS MEJESTY'S GOVERNMENT OF BHUTAN

CUSTOMS DECLARATION FORM

No. 118 Date 25.11.74

Name of Passengers : Mr/~~Mrs~~ NASATO OKI

Country Japan Nationality Japanese

Passport No. PME C 14733

Date of Entry into Bhutan 25.11.74

Names & Nature of Articles	Nos. of Articles	Amount	Remarks
1. Camera still/~~Movie~~	3 Nos	Nikon, Nikomet, Minolta	
2. Tape-Recorder			
3. Binocular			
4. Watches	1	Seiko Alarm	
5. Radio			
6. Gramophone			
7. Jewellery			

I hereby declare that the above noted articles will be re-exported from Bhutan on my emigration.

Signature of passenger

Date 25 Nov 1974

Signature of Customs Officer

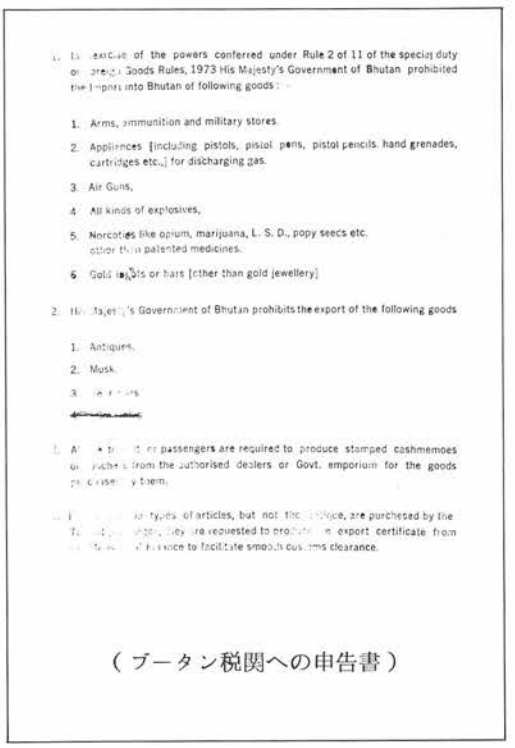
Date 19

P.T.O.

タンはその扉を開いてくれたことは朗報であった。私たち山好きな者にとってはティンプーやパロで満足するわけはないが，一歩でもブータン北辺の山々に近づけるという楽しみと，近い将来にブータンの山々へ登るための下準備とし活動できる望みが出てきてうれしいことである。一日も早くそういう日が来ることを望んでいるこのごろである。

ブータン公館

昭和49年6月にはブータン新国王の戴冠式が盛大に行なわれた。日本の新聞にも報ぜられたのでご承知の方も多いと思う。これを機会としてブータンのインドの出先機関の一つ，ブータン公館は以前の場所から新しく，各国大使館の集っているニューデリー市のチャナクプリの町に移転した。新しい所は Chandra, Gupta, Marg, Chankya-puri で，堂々とした赤レンガ色のお城のような建物である。左は事務官の宿舎，右が大使などの宿舎になっており，ブータン公館は中央の大きな建物である。入口の門のところの受付で記帳し，広い庭を通って建物へむかう。階段を上って行くと右に受付があり，すべての来客はここを通すことになる。



1. In exercise of the powers conferred under Rule 2 of 11 of the special duty on foreign Goods Rules, 1973 His Majesty's Government of Bhutan prohibited the import into Bhutan of following goods :-

   1. Arms, ammunition and military stores.
   2. Appliances [including pistols, pistol pens, pistol pencils, hand grenades, cartridges etc.,] for discharging gas.
   3. Air Guns,
   4. All kinds of explosives,
   5. Norcotics like opium, marijuana, L. S. D., popy seecs etc. other than patented medicines.
   6. Gold in bits or bars [other than gold jewellery]

2. His Majesty's Government of Bhutan prohibits the export of the following goods

   1. Antiques,
   2. Musk.
   3. [illegible]

3. All [illegible] passengers are required to produce stamped cashmemoes on purchase from the authorised dealers or Govt. emporium for the goods purchased by them.

4. In case of articles, but not the antique, are purchased by the Tourist [illegible], they are requested to produce an export certificate from [illegible] office to facilitate smooth customs clearance.

（ブータン税関への申告書）

（ブータン税関への申告書）

以前と違って何か固苦しい雰囲気である。ビザの係の人は50年1月頃は Leki:Dorji 氏，一等書記官の Kunlay Wangali 氏であった。建物の中にもう一つの受付があり，ここで用件をいうと取りついでくれる。中はなかなかブータン風のいいデザインである。

ブータン公館は原則として土・日曜日は休み，ウィークデーは8時～14時頃まで受付けている。

観光入国の条件

1974年9月1日からブータンは一般観光客にオープンされた。ブータン観光局（Department of Tourism）の公式文書，No, TSM／6－74／13によるものである。

しかし，その条件はなかなかきびしく，下記のようなものである。

1. 選ばれた10人～20人のパッケージツアーに限る。しかも，ブータン内は12日以内でコースもNo.1～No.3まで指定されている。
2. 登山，出版，研究調査を目的とした者は許されない。
3. 個人としての観光客は入れない。
4. VISAとPEPMITは2カ月以前に定められたフォームで申請すること（1ページの簡単なもの）。
5. 金はUSドル，円，ポンド，マルク，スイスフラン，フランスフラン，オーストリアドル，ホンコンドル，シンガポールドルをブータン国内の銀行で交換することが原則。
6. パッケージツアーの費用は1日当り1人130ドルである（40ドルという噂だったが，ばかに高い）。これは宿泊，食事，交通費を含んでいる。飲物，洗濯代などは含まない。1人で車を利用したり，シングル・ルームに泊りたい人は1人180ドルになる。これは直接ブータン政府観光局へ納入してもらう金である。旅行社へのコミッション等は含まれていない。旅行者は前金又はプンツオリン（Phuntsholing）へ入った時，上記金額を払うものとする。
7. インドのTransit Permit to enter Bhut-

anは，New Delhiのブータン公館，Mission of the Royal Goverment of Bhutanで取ってもらえる。

8. 注射は種痘，コレラが必要である。

9. 通貨申告が入国の時必要である。

10. 仏像の写真など撮れないこともある。ガイドに聞くこと。

観光ツアーの日程

パッケージツアーのNO. 1プログラム

第1日　カルカッタから飛行機でバグドグラ（約1時間），バグドグラより自動車でプンツオリン（3～4時間）。

第2日　プンツオリンから自動車でパロへ（5時間）。

第3日　パロの観光とKyichu Lakhang, Druk-gel Dzongの見学。

第4日　自動車とポニーでTaktsang僧院の見学。

第5日　パロ博物館の見学後ショッピング。

第6日　パロから自動車でティンプーへ（2時間）ティンプーで大きなChorten（Late King Jigme Dorji Wangchuckの記念物）を見学。その後，伝統的な民族，マスクダンスを見学。

第7～9日　ポニーでパジョディング（泊）→ドンテチョラ（泊）→ティンプーを一周するコース。

第10日　午前中はDochu・La，Simtokha僧院の見学。午後，ティンプーでの買物。

第11日　ティンプーからプンツオリンへ。

第12日　プンツオリンからバグドグラ，カルカッタへ。

パッケージツアーのNO. 2プログラム

第1日～第4日まではNo. 1と同様。

第5日は，No. 1の第6日と同様。

第6日　Simtokha僧院見学。午後，ティンプーで買物。

第7日　ティンプーから自動車でプンツオリンへ。

第8日　プンツオリンからバグドグラ，カルカッタへ。

パッケージツアーのNO. 3プログラム

第1日～3日まではNo. 1と同様。

第4日は，No. 1の第6日と同様。

第5日は，No. 2の第6日と同様。

第6日　ティンプーから自動車でプンツオリンへ。

第7日　プンツオリンからバグドグラ，カルカッタへ。

以上の日程は多少変更されることがある。また，団体で行動することを原則として入国許可を発行しているので，入国後は自由行動はほとんどないといってよい。

日本の旅行社でブータンツアーを扱っているところは㈱フロンティア，㈱西遊企画，㈱トラベル日本，㈱トラベルセンター・オブ・ジャパン，㈱ヴァリューツアー，㈱日本交通公社などである。いずれも上記のNo. 2かNo. 3の日程によっている。料金は63万～68万円と高くなっているが，これはブータン内の滞在費が高い（1日4万円位）ためである。

旅行シーズン・その他

緯度も日本の九州南部に近く，標高も高いので，インドの北辺にあるからといって，ブータンはインドのように暑くはない。

ただし，モンスーンはある。モンスーン期にはかなりの雨が降り，特に南ブータンは激しい雨が続くので旅行は無理である。12月から3月初めまでは冬期で，かなり寒く，池には氷もはり，山には雪が降る。

従ってブータンの旅行シーズンは6月初旬から9月中旬までを除くモンスーン中の3月中旬から12月中旬の短い間ということになる。前記の観光ツアーもたいていこの期間に企画されている。寒さささえいとわなければ登山の経験のある人は，インドがしのぎよい気候だし，空も澄んでいてブータンの山々の遠望がきくので，冬の旅も悪くないと思う。

これまでの団体ツアーは一番早いのが3月15日頃の入国，一番おそいのは12月27日入国であった。ブータンで初日の出を見るのも想い出が増えてよいであろう。服装などは日本の同時期より少し薄着という感じでよい。

いよいよブータンへ

ブータンの山が見えた

インドの西部，ベンガル地方は11月の終りでも日本の初夏の気候であり，半袖でも汗ばむほどである。カルカッタ空港から1時間ほど北へ飛んだバグドグラの街でもその暑さは変らない。ここもカルカッタとあまり差がない熱帯だからである。

バグドグラの空港ではアッサムやダージリン地区へ入域する外国人は外国人登録をしなければならない。パスポートをもって空港の事務室に行くと入域したという印を押してくれる。一応15日間となっているが，行った先で適当な理由があれば延長がきくことになっている。

バグドグラから椰子の木と茶畑の中をブータン観光局のガイドの案内する車に乗り，かなりのスピードでプンツオリンの街へむかって走る。20分ほどでシリグリの街に入る。かなり大きい街である。ここからブータン行のバス（1日2便）が発車している。裏通りに小さいバスの事務所がある。

シリグリの街を抜け平原の道を時速80kmほどのスピードでとばす。車はトヨタハイエースの11人乗ミニバスである。そのあとを荷物を積んだジープがついてくる。2時間ほど走りシッキムから流れ出るティスタ川を渡り，いったん南へ出て，ハシマラという紅茶を運搬するための小さい空港のある街あたりで急に大きく進路を北にむける。するとこれまでのインド平原の景色に変って，車窓からはブータンとインド国境の山々が見えはじめる。やっとブータンへ入れるという実感がわいてくる。やがて夕暮れ近くなり熱帯樹林の中の道に変ると，インドとブータンの国境の街プンツオリンはもう近い。

国境の街

ブータンは長い間鎖国に近い状態であった。1974年までは，ごく少数の外国人が国王のお客として入国していたにすぎなかった。しかし，新国王の戴冠式が1974年6月に終り，しばらくたった1974年9月から一般観光客を一定の条件のもとにほんの少し受け入れることを決めた。

1974年11月25日～12月1日の7日間，私は日本人一般観光客として初めてブータンに入ったのである。過去，何年もブータンへの入国を夢みてきた私にとってその喜びは大きかった。同行は日本ヒマラヤ山岳協会のブータン研究会・矢野郁雄，それにアメリカ人2名，イギリス人2名の計6名であった。

車はプンツオリンの街の手前にあるインドの出入国事務所に立寄る。ここでインドを出国し，ブータンに入るチェックを受ける訳である。インドはインナー・ラインという国境線の手前に，もう1本，国境線のようなラインを引いており，外国人は通常，ビザ（滞在査証）の他に特別許可を申請しないとインナー・ラインのむこうへ旅行することはできない。ブータンとインドの国境線はこのインナー・ラインでもあり，従ってここを通過するのにはインナー・ライン通過許可書がないと不可能である。正式には Indian Transit Permit to enter Bhutan といい，ニューデリーのインド中央政府で発行してくれるが，その取得はなかなか容易なことではない。ブータン国王の招待状をもらっていながら，このインナー・ライン通過許可がとれなかったために，ここから引き返したという人も少なくない。

日本人そっくりの顔

100メートルほど走るとブータンの国境である。

日光の東照宮の門を大きくし，赤と黄の色彩を明るくした感じのブータン風の門が立っている。門を抜けると出入国管理事務所や税関があり，これらの手続をすませる。日本人にそっくりの顔をしたブータンの役人が愛想よく応対し，てきぱきと事務を進める。手続をすませると車でブータンのゲスト・ハウスへ向う。

人口１万人弱のプンツオリンの街は外国人のブータンへ入る唯一の入口となっており，またインドとブータンの交易の地としても栄えている。街の中央に大通りがあり，その両側に商店や事務所が並んでいる。左はアモ・チュウの川に続いており，右手は山になっている。ゲスト・ハウスやゴンパ（ラマ教のお寺）はこの山の中腹に立っている。

プンツオリンでの宿舎カルバンディ。ゲスト・ハウスに着くと小柄なブータン女性が腰をかがめ頭を下げる，日本と同じ態度で迎えてくれる。このゲスト・ハウスは国のゲストを泊めるところなのでなかなかよい造りになっている。木造風の外観で，花も多く，あたりは木立に囲まれており，日本の豪華な別荘といった建物である。調度品も立派で従業員の応対もていねいである。

19時に，いためごはん，マトンのから揚げなどの夕食をすませ外に出てみる。ベランダから見おろすとアモ・チュウの川が広く白く光っており，プンツオリンの街の灯もきらきらと美しい。アモ・チュウの川のむこうはインドである。

夜になるとさすがに涼しく，日本の初秋の感じで，頬をなでるブータンの風が心地よい。同行の人たちとブータンへ入るまでのお互いの苦労を話しあう。みんなそれぞれに不安と期待の数カ月を過したようである。インドの許可取得の困難に加えてブータンとの連絡がとりにくいことが主な原因である。まさに，やっと来たという感じである。こうしてプンツオリンの夜景を眺めていると明日からのブータンの旅への期待よりも，あたりの日本的な景色のせいもあって何となくホッとする気持になるのだった。

国情と地史

中印国境紛争のマト

ブータンの大きさは約45600平方㎞,スイスより僅か大きく，九州の約1.1倍である。北は氷雪をいだく東部ヒマラヤ山脈でチベットと境をなしており，東はインドの東北辺境地域アルナチャル州，西はシッキム，南はインドのアッサム州といずれも複雑な政情の地域で囲まれている。すなわちインドと中国の国境紛争の的になっている，いわゆるマクマホン・ラインの近くにあり，過去においても現在でも微妙にこの両大国の影響を受けている。1974年10月，シッキム王国がインドの22番目の州になってしまったし，ブータンも1949年のインド・ブータン条約によりインドとブータンは恒久的平和と友好関係を保つことを決め，さらに国内行政には何らの干渉もしないが対外関係についてはインド政府の助言によって指導を受けることに同意しているので，独立国ではあるが外交的にはインドに密接した動きをしている訳である。

アルナチャルやアッサムは独立運動の活発なところではあるがインドの領内であり，当然インド政府の支配下にある。中印東部国境紛争は1967年のシッキム・中国国境のナツ・ラの峠での激戦以来，小康を保っているが中国とインドの関係はうまくはいっていないようである。従ってブータンやシッキムをめぐる国際情勢は決して安定しているとはいえないのである。

素朴で親切な人たち

しかし，ブータンを旅し，国内を見ている限りでは大変平和な国であり，このインド東北部をめぐる国際的な波風は全く感じられない。緑が多く回りを山で囲まれた自然がそう感じさせるのか，ブータンの人の素朴で親切な人柄から受ける印象

なのか，とにかく静かで平和である。私たちの公式ガイドも大変親切でていねいであった。「ブータンではお客さんは最高のもてなしでむかえることが習慣なのです。日本やヨーロッパのように進んでいないですが，でも私たちはせいいっぱいやります。何でもおっしゃって下さい」とお世辞や外交辞令でなく，心からいっていることがブータン人特有のはにかみを含んだ笑顔から理解できるのである。

複雑な国際情勢の中にあって美しい風土と，礼儀正しい人がひっそりと生きているという感じである。これがヒマラヤの桃源境といわれるゆえんであろう。

人口はおよそ104万人

ブータンの人口は1969年の国勢調査によると約104万人でそのうちの60％がドルクパ（竜の民の意）と呼ばれる日本人そっくりのチベット系人種であり，ブータン人といえばこの人種を指している。この他にレプチャ人，ネパール人もいる。特に西南部山麓に住む人口の25％をしめるネパール人はブータンの建設事業に下級労働者として働いている人が多い。この他にごく少数の人種としてアッサム系の原住民ケン族，クルティ族，メンパ族が東部に住んでいる。そして，ここに1959年頃から亡命してブータンに入った約5000人のチベット人がいる。

ブータンは地勢的には3つの部分に分れる。すなわち北部はチョモラーリ（7314m）をはじめとし，多くのヒマラヤの峻嶮な山々からなり，山間では山羊やヤク（高地牛）の牧畜がおこなわれているが人口は少ない。中間地帯は海抜1200mから3000mの丘または高原状のところで降雨量も日本と同じくらいの年間1500ミリくらいで気候も温暖であり，従って農業が盛んである。首都ティンプーをはじめとしてパロやハなどの大きい町は，この中間地帯にある。ブータンの農業は少なくとも，150万人を養えるほどの規模であるといわれており，この点バングラディシュなどと比較して非常に豊かである。南部丘陵地帯はベンガル湾から吹いてくる多湿の風を受け降雨量は多く年間7000ミリほどであり，世界でも最多雨地帯となっている。世界の最多雨地はブータンの南のアッサムのチェラプンジで年間平均11630ミリの雨が降る。

人口は主として，中間地帯の西部に大多数が住んでいる。人口密度は一平方kmあたり約23人でインドの約8分の1，スイスの約7分の1，日本の約11分の1とかなり少ない。北部の高山地帯や南部の熱帯地方を除けば気候は，日本の静岡市あたりに似ており，大変住み易いところといえよう。

プンツォリンでは目の大きい，彫りの深い顔立ちのインド系の人を多く見かけるが，少し奥へ入ると日本人そっくりの人が多く，親しみ深い顔立である。ブータン人にいわせれば，日本人はブータン人とそっくりだそうで，ブータンの服を着てだまっていればブータン人と区別はつかなく，私も何回かブータン語で話しかけられたこともあったくらいである。

プンツォリンで　税関などへの案内板　ブータン出入国事務所

パロへ向う

建設される自動車道路

この山岳国ブータンにも着々と自動車道路が建設され，約1500㎞はアスファルト舗装され，ブータンの発展に大きな力となっている。プンツオリンからパロへの道も1962年に開通し，それまで馬やヤクあるいは徒歩で7日ほどかかっていたところが約8時間で行けることになった。

お昼近くなって私の乗った車はパロへむかって出発し，すぐにジグザグ道を登りはじめた。

国をあげての大事業

私の乗ったブータン観光局の車は11人乗りの日本製マイクロバスで運転手はネパール人である。ブータン観光局のガイドが2人乗っている。すぐうしろをジープが私たちの荷物を積んで追ってくる。これにもガイドが1人乗っている。私たちのグループはイギリス女性1人がブータンのビザ発行が間に合わずプンツオリンで1泊したのみで残念そうにまたインドに帰っていったので，結局6名が5名になってしまった。ガイドの話によると1974年に入った8つの観光パーティのうち，全員入国できたのは最初のスペインのグループだけであり，他は誰れかが何かのトラブルで入国できなかったといっていた。

道は二車線でよく手入れされている。インドの技術者の協力を得，ネパール人の労働力の助けを借りて1962年に完成したものであるという。建設当時は周辺の部落のブータン人が6人組や12人組を作り，年間1カ月～2カ月間無料奉仕で建設にあたったという。文字通り国をあげての大事業だったのである。

緑の木立の中の離宮

プンツオリンを出て小高い尾根に登るとすぐ下にはアモ・チュウの川，そしてその手前に皇太后の建てられたカルバンディ・ゴンパとプンツオリン離宮が緑の木立の中に赤と黄色を主体とした美しいデザインで造られている。

やがて，ゲートがある。ここからパロまでの約175㎞は有料道路になっている。このゲートは料金所と入国チェックをかねている。また，ブータンは酒類が高価であり，これらの持込のチェックもこのチェックポストでおこなわれる。日本に昔あった関所といった感じのところである。

プンツオリンから1時間ほど走ると道は尾根を越える。曲り角にコンクリートで造った高さ1mほどの変った道路標識がある。ラッキーサインと呼ばれている，幸福を呼ぶシンボルマークでこの他に7つの標識がデザインされていて，ブータン国内の道路標識，垣根などに使われている。コインのマークにもなっている。

よく整備された道路

尾根をまわり込むと右手は深い谷になっている。ウォン・チュウの谷である。チュウとは川の意味である。道はこの川に沿って北上する。完全舗装されたいい道であり，時速40～50㎞で走っていく。

ウォン・チュウは上流で3つの大きい川を合している。西のハの町のところを流れるハ・チュウ，チョモラーリの雪山に源をもつパ・チュウ，そして，ティンプーのそばを流れるティン・チュウである。いずれもかなり深い谷である。北部を西から東へ走るヒマラヤ山脈から南へインナー・ヒマラヤといわれる何本もの支脈を派生して，それら支脈の間が深い谷になっているのである。このウォン・チュウの東にモ・チュウがあり，さらに東にトンサ・チュウがある。モ・チュウとトンサ・チュウの間に典型的なインナー・ヒマラヤであるブラック・マウンティンが横たわっている。トンサ，プムタン，クル，ダンメの4つのチュウは下流で1つになりマナス川となってドワールと呼ばれる亜熱帯性ジャングルを抜けアッサム平原へ流れ出している。すべての川はブラマプトラ川に合流しベンガル湾にそそぐ。

毎年夏に氾濫する川

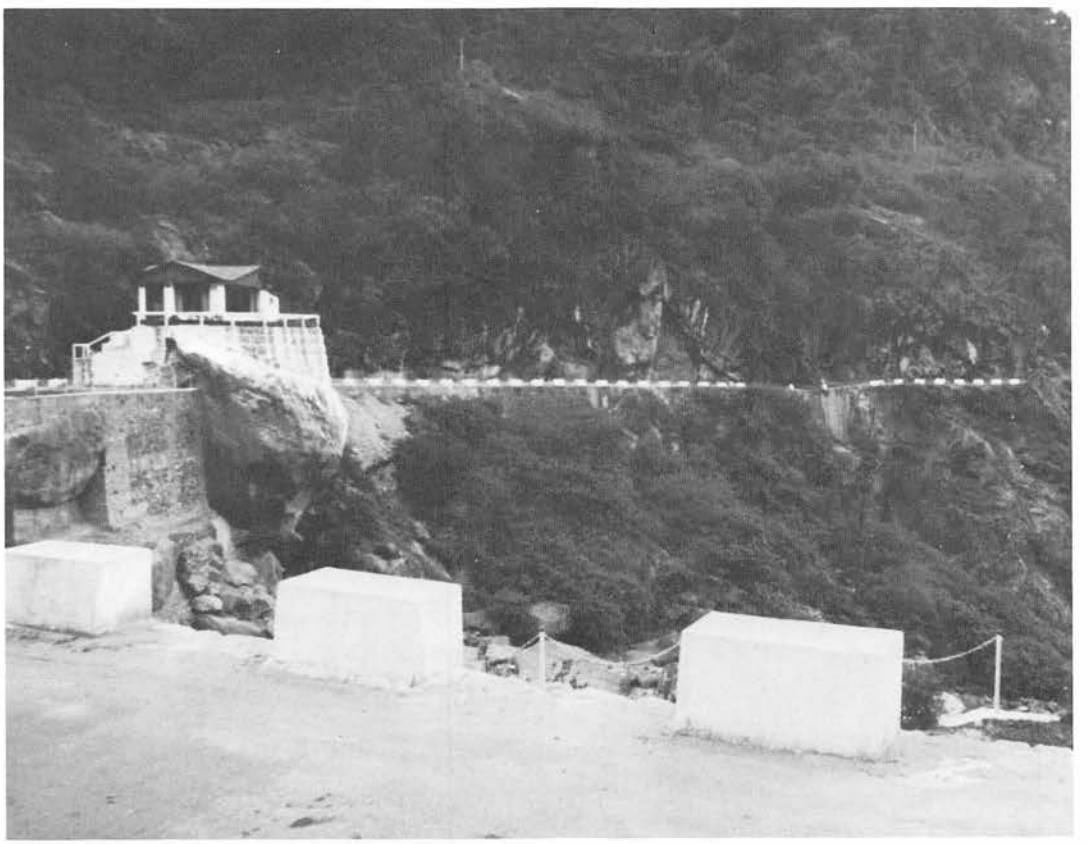
パロへの道はこのウォン・チュウの川に沿って北上している。標高1000m近くなると照葉樹林を吹きぬけてくる風は涼しく，天気もよいので気持がよい。

ソナム・ドンという小さい村を通過し，対岸に大きい滝がかかっているところで中食にした。「お気にめしますかどうか……。中食はプンツオリンで作らせたものです。唐辛子は少なくしてあります。」とガイドが出してくれたのはチキンフライとコロッケであった。サンドイッチもある。テルモスから紅茶が出され，バナナやみかんも用意された。料理はなかなかよい味つけである。ブータンではインドのように料理にスパイスをきかせないそうである。

すすきや菊科の草が茂っている。5月～7月ならランの花も沢山見受けられるそうである。ヒマラヤ山麓はアマゾン川付近とともにランの原種の宝庫といわれている。

中食をすませて出発する。すぐにトクトカ・チュウという小さい沢を渡る。対岸に大きい滝が見える。ここに休憩所が作ってあるが，このあたりは道がけわしく，ときどき自動車が谷へ落ちたりする由，「先日もブレーキ不良のトラックが転落し乗っていたブータン女性が2人死亡したんですよ。」とガイドが話していた。この川は毎年，夏期に氾濫し，1973年にも人間と家が一緒に流されたという。

チュカ・ブリッジを渡るところにもう1箇所チェックポストがあり，ここから1時間半ほどでパロに着く。広い畑の多い盆地状のパロは中央にゾン（お城）があり，あたりを山に囲まれていた。17時をまわったばかりなのにもう夕闇がせまっていた。



パロへむかう道路（ソナム・ドン近く），左の建物は休憩所

美しい緑の谷・パロ

ゾンカ語が公用語に

ブータンの公用語はパロを中心とする西部で使用されているチベット語系のゾンカ語である。ブータン文字はなくチベット文字を使っている。高等教育を受けた人たちは英語を理解できるが，インドほど英語が一般大衆には普及していないようである。私たちのガイドのチーフ格の1人は格調高い英語を話し，同行のイギリス人も「あなたの英語は一級品ですね。どこで習ったのですか。」と聞いていた。彼はダージリンのミッション系の学校でイギリス人に教わったといっていた。また，中央ブータンで使われているブムタンカ語とケンカ語，東ブータンのシャーチョッカ語，約25%をしめるネパール人の使っているネパール語はそれぞれに全くといっていいほど違っている言葉である。だからブータン人であっても東部の人はゾンカ語がよく分らないということがおこる。これは交通と教育が発達していなかった時代の名残りであり，やがて近い将来解消することであろう。

パロの言葉が公用語として採用されていることからも分るようにパロは古くからブータンの文化の中心の一つであった。ブータン内で最も豊かな広い谷間であり，多くの水田がある。

パロ谷のほぼ中央にパロのゾン，リンプン・ゾンがある。ゾンはお城または要塞の意で昔は王侯の住居であり戦のためのものであった。現在ではゾンといえば政治の中心をも意味するようになった。ゾンに官庁関係が集っているところが多いからである。ブータンには多くのゾンがあるが，中でもこのゾンは山すそにあり，入口は東にだけあり，堀割を木の橋で渡って入れるようになっている。

政治の中心地・ゾン

パロに着いた次の日，早速にこのゾンをたずねた。屋根のついた木の橋を渡り，幅広い石段の道を登って行くと白い堂々としたゾンの右手に出る。ぐるっと山側にまわったところに数段の急な石段があり，ゾンへの入口になっている。入口のところでガイドはブータン服の上にカムネイという白いタスキのようなものを肩からかけて居ずまいを正して入って行く。ブータン人はゾンに入るときは必ずカムネイをつけなければならないそうである。日が暮れてからは女性はゾンの中に入れないことになっている。多くのゾンは昔はラマ僧院であり，ブータンのラマ教は黄帽派という戒律のきびしいセクトに属しており，妻帯，飲酒，殺生などを固く禁止していた。このなごりであるといえよう。

豊かな文化の中心地

ゾンの入口の扉は立派なラマ教の彫刻がほどこされており，壁には宗教的な壁画が描かれている。暗い廊下をすぎると大きな中庭があり，それを囲んでいる大きな長方形の建物がある。外側の建物は5階で，そのうちの3階まではラマ僧とゲロンと呼ばれる子供の修行僧が住んでいる。高い塔は丸い屋根をしており7階になっている。全体の高さは基部から40mほどもある堂々たるものである。どの部屋も天井が高く時代がかっているが，2階の大広間は特に立派で，ここでラマ僧の会合やお祈りが開かれる。かつてはここで国民会議が開催されていた。ずっと昔には，ゾンは戦争のときのパロの谷の人たちの避難所でもあったという。そのためゾンの一部は穀物の倉庫にもなっている。また，川や泉の水が容易にくみとれるようになっており，避難したときの水源となっていた。壁は非常に厚く下部で3m，上部で1mほどあり，チベット風に内側に傾いて建てられている。また，政治，宗教，教育，経済の中心であった訳である。

平和表わすパロの離宮

中庭から山の方を見あげると，円形の建物が見える。タ・ゾンと呼ばれている昔の武器庫兼物見の塔だった建物で，現在はパロの博物館になって

いる。ゾンの左手を大きくまわって車道が博物館まで続いている。

インドで歴史を研究していたというブータンの中年女性が博物館の解説をしてくれた。博物館は3階になっており，1階は主としてブータンの織物や刀剣などであった。ブータンの織物は西陣織に似た細かい柄を織り込んだ，しぶい模様のものが多く，日本人の趣味にあう。絹のものが上等であるが，木綿のしっかりした布も悪くない。染料はブータンの山野に咲く草花からとるそうである。

2階は仏具，民具が多くあった。民具の中では竹細工が有名で，少し平たい丸いかごや，酒を入れる竹づつ，大きなかごなど，ブータンの風土にあったものが多い。

博物館の入口には大きいマニ車がある。マニ車とはラマ教特有の円筒型の筒で，その中には経文を書いた紙片がつまっている。上下を支え，ぐるぐるまわるようになっていて，ラマ教の信者は，「オンマニパドメフム」というラマ教の呪文をとなえながら，このマニ車をまわすのである。「オンマニパドメフム」とは"蓮の花に栄光あれ"という意味である。1回まわすとラマ教の経文1巻を読んだことに相当するという。中には水車でまわすようになっているものもあるし，下から火をたいてその煙の上昇気流でまわるようになったものもある。小さいのは，タバコのピースのカンくらいのものから，大きいものは長さ3mもあるものまでいろいろある。

博物館のある丘のあたりには，ブータン官史の邸宅が並んでおり，パロ谷を一望に見渡せる。

川の対岸にひときわ美しい建物がある。それは現国王のパロの離宮である。木立に囲まれて静かに立つ姿はブータンの美しさと平和を象徴するようであった。

壁にあるのがマニ車，右奥白いのがチョルテン
キチュ・ラカンの寺にて

古寺と古城

長い歴史を刻む壁の色

ブータンには沢山のゴンパがあるが，古くから一番ブータン人に親しまれているのはこのキチュ・ラカンの寺であろう。パロのゾンから7kmほど北に行った畑の真中にあるお寺である。

7世紀に建てられたといわれるこの寺は小ぢんまりしているが，古い時代を感じさせるあせた壁の色をしている。すぐ隣には少し新しいのも建てられている。入口に白い大きいチョルテン(仏塔)が立っており，老ラマ僧がそうじをしていた。

白い壁に沿って奥へ進むと扉があり，中に入れるようになっている。入口にも老ラマ僧がおり，マニ車をまわすための火をたいていた。前述の，煙をマニ車の中へ導き入れ，その上昇気流でマニ車が回転するようになっているものである。

壁画には釈尊の像

本堂は10m四方の小さいもので，中には釈尊の像がまつられてある。その像の前の床上の丁度巡礼者や僧呂がお祈りする場所に2つの深いくぼみができていた。いつも同じところでひざまずいて祈るので，そのときの足の指のあとが残ったものであるという。

新しい鐘があり，澄んだ音をたてているが，これは王妃のお母さん，すなわち皇太后がブータンを古い昔に訪れ，仏教を広めたパドマサンパヴァに捧げられたものである。パドマサンパヴァはブータン人の人にはグル・リンポチェという名で知られている仏教研究の中心地インドのナーランダから来た聖者である。ゴンパの中あるいはゾンの中の壁画には釈尊の像がかかげられている。

ドゲ・ゾンの古城

キチュ・ラカンの寺よりさらに北へ進み，パロ谷の端に近いところまで行くとドルックギャル・ゾン（またはドゲ・ゾンと呼ぶ）の廃虚がある。その昔，17世紀頃チベット人がブータンに侵略してきたとき，ブータン人はこのお城を最後の根拠地として戦い，死守したという。そのとき多くの死傷者が出て，その血でパロの川が赤く染ったといわれている。

26年ほど前に火事があり，ゾンの大半は焼けてしまったが，それでも当時をしのばせる城壁が残っており，背の高い草が茂っていた。当時の亡霊がさまよっているというブータン人の話も本当のような気がしてくる。このあたりはブータン人のピクニック地として利用されている。

シムトカ・ゾン

ブータンで一番古いゾンはティンプーにあるシムトカ・ゾンで，シャプドゥン王の時代1617年に建てられた。その直後少し破壊され1619年に再建された。現在は僧呂の学校として使われている。他のゾンもこの時代に建てられたものが多いが，再建されたり増築されたりしてしまい，建てられたときのまま残っている古いゾンは，このシムトカ・ゾンのみである。

“神が住む”三角の雪山

ドゲ・ゾンの裏手にまわってみるとパロの谷の奥に三角形の雪山が見える。チョモラーリ（7314m）である。ブータンの最高峰は今のところ中央部北にある約7550mのギャンケプンツムである。今のところというのはブータンヒマラヤは未知のところが多く，さらに高い山がありそうだからである。しかし，それよりもブータンの山としてはこのチョモラーリがよく知られている。パロやインド・チベット間の主要道路から見えるので，古くから住民に知られていたのである。

チョモラーリはChomolhariと綴るが，その意味はChoは“神”，moは女性を示す接尾語，lhariは“神聖な山”であり，「女神の神聖な山」という名前である。

このチョモラーリはブータン・ヒマラヤの中で数少ない既登峰の一つであり，1937年にイギリス人，F・スペンサー・チャップマンが5月30日にパサンというシェルパとともに登頂し，その後，1970年4月23日，インド・ブータン合同隊によって第二登された。ブータン人登頂者はチャツエという軍人であるが，チョモラーリに神が住んでいるという言い伝えを信じ，頂上のすぐ下で登頂をやめたという。

しかし，インド人隊員は彼のとめるのもきかず頂上を踏んでしまった。そのせいかどうか第二次登頂をしようと最終キャンプを出発したインド隊員2名とシェルパ1名は行方不明になってしまったのである。

ブータンの山で登られたものは，1971年にインド・ブータン合同隊が登頂した中部ブータン北辺のカングリⅠ峰（6919m），同Ⅱ峰（5898m）である。リーダーはC・ヌギャルという軍人で隊員は合計12名であった。1975年7月までに登頂されたブータンの山は，これら3つの山だけであり，7000m級の峰々がそそり立つブータン・ヒマラヤはまさに登山家の宝庫といえよう。

日本からもブータンの山へ遠征隊を出そうという計画はいくつかあるようで，私も12年ほど前から夢としてあたため続けているのであるが，今のところ，ブータンの山々はインド軍人，ブータン人などにしか許可は出ないようである。いつか，あのブータンの山へ足跡を残すことができるだろうか……。あのチョモラーリの三角な峰の雪をこの手でさわってみたいものである。

そんなことを考えながら草原にねそべって，青い抜けるようなブータンの空を見ていると，日本の雑踏と喧噪は別世界の出来ごとのように思えてくる。

ヒマラヤの見える峠へ

ドチュ・ラ

ティンプーからドチュ・ラ（ラは峠の意）へむかう。谷をつめ，松の中のジグザグ道を車で登って行く。1時間位すると尾根の北へまわり込み，さらに進むと視界が開けてくる。

開花期には黄色，白，ピンクのしゃくなげの林になるそうである。私のいったときは冬だったので，それらしゃくなげの花はなかったが，多くの緑の木があった。

ドチュ・ラは標高約3000mある。マサカンより東のいわゆる中部ブータン・ヒマラヤの展望台である。

ちょっとした休憩所が作られている。早速にカメラを持ち出して山を撮る。

左の屋根型のどっしりしたのが，チェンダカン（Tsendekhang），中央のとんがったのがテリカン（Terikhang），右のエベレストに似た形の山がジェイカンプフ（Jeikhangphu），その右がカンプーカン（Kangphukhang）山群であろう。

かなりの数のフィルムを使って山を撮りまくったが，残念ながら雲が多く満足な出来にはならなかった。

「あなたはどうしてそんなに沢山写真をとるのですか。すごい数ですね。」とアメリカ女性のエラインさんはびっくりしてみとれていた。

「僕の趣味は登山ですからね……」「これを撮りにブータンに来たようなものですよ。ああ，あの山へ登らせてくれたらなあ……。1日200$でもいいんだが……。」

とブータン人ガイドに聞こえよがしにいったら苦笑していた。

他の人はあまり山に興味がないようで，それに寒かったので30分ほどで帰ることになった。

車の窓からこれらの山々をあかずに眺めていた。

ドンチョー峠

観光局にオープンされている地区にもう一つの峠，ドンチョー・ラが入っている。私たちは日程の関係でここへは行けなかったが，ガイドの話によると，その峠へのコースは下記のように面白そうであった。

峠はティンプーの西にあり，古いお寺のあるファジョディンに着く。ここには尼僧院がある。ファジョディンからヤクの背に乗り，2日がかりでドンチョー・ラ（約3300m）に着く。ここには美しい水晶のような湖があり，鹿などの動物もいる。もちろん，多くのブータン・ヒマラヤの雪山が見える。ティンプーからドンチョー・ラまで3～4日はかかるそうである。

〝虎の巣〟の僧院

馬もあえぐ急な坂道

パロ滞在3日目の今日はタクサン寺へ行くことになった。「タクサン」とは「虎の巣」という意味で，この寺は山の崖のふちに建っていて格式も高いラマ僧院として知られている。

7時にゲスト・ハウスを出発する。30分ほどかかって車で8㎞上流へむかうと川原に着く。ここで車をおりて馬に乗りかえる。私たちのために昨日ティンプーからつれてきたのだという。この乗馬用の馬は王家のもので大蔵大臣の管理下にある立派な馬であった。なかなか強そうだ。

私たち一行のうちのスペイン系のアメリカ人大男は，早速に一番大きい馬に乗った。昨夜ガイドに「オレにはブータンで一番大きい馬をさがしてきてくれよ。何なら象でもいいんだが……」とた

のんでいた人である。

馬方も二人ついて来た。木の橋を渡り，山へむかう。やがて松林の中に入る。入口に小さいゴンパがあり，小川の水でマニ車が自動的にまわるようになっており，そのたびにマニ車の上についたノップが天井から下げてある鐘にあたってチン，チンと鳴っていた。

林の中に入ってから道は急になる。ヒイラギや松の木が多く日本の低山と同じようである。

30分ほどで尾根の上に出て大岩のところで休む。正面のはるか上部に大きな岩壁をもった山がある。よく見るとその中腹にお寺がある。タクサン僧院である。岩壁にひっかかるように建っている。道はさらに急になり馬もあえぎあえぎ登って行く。鞍の下に汗をびっしょりかいている。やや平担になったところが馬の道の終点であり，ここから歩くことになる。標高は1500mほどであり，川原から約600m登ったことになる。馬は背中から腹のあたりまで汗でぬれている。

けわしい岩壁に建つ

少し休んで山腹をまくように下りはじめる。深い枝谷を渡った対岸にお寺はあるので一たん枝谷の下まで下らなければならない。急な石段が続いている。足元からはすっぱりと切れて落ちており，下を見ると目がくらみそうである。一歩一歩ふみしめて下って行く。

下りきったところは小さい滝の下になっており，小さい橋の上にはしぶきが凍りついていた。滑らないように渡って，その滝を左に見て再び対岸の道を登る。50mほど登りかえすと，お寺の入口の階段に着く。ここに聖水といわれる泉があった。この水を飲むと100年は長生きできるといわれている。私もいっぱい飲んだので寿命がのびたかも知れない。御利益はともかくとして，ここまで登ってきて飲む冷たい水の味は格別であった。最後の20段ほどの急な階段を登りきると門がある。

扉を押して中へ入る。一息ついてそばを見ると木製パイプの水道がある。一口すするとこれも冷たくてうまい。

しばらく待っていたら他の人もふうふういって登って来た。山登りは初めてというアメリカの女性は青い顔をしている。標高2895mもあるのだから無理もない。それに馬は乗りなれないと不安定で疲れるものである。

ラマ教の壁画も保存

ラマ僧に案内してもらって中を見学する。導師リンポチェが空を飛ぶ虎に乗ってやってきて建てたというこの寺は，現在12人のラマ僧と1人の尼僧が守っている。ここの堂守になるのはラマ僧でも選ばれた人しかなれないそうである。1本の木をくりぬいた梯子で本堂に登ってみる。中はなかなか広い。ラマ教の壁画も美しく保存されている。本堂の外の廊下の上に大きな鐘が3つほどぶら下っていた。鳴らしてみるとリーンというような長い余韻のある美しい音がした。

お寺の先のもう一つのお堂のところまで行ってみた。その先はもう何もなかった。端から下を見てみると垂直に300mほど切れ落ちていた。眼前にはパロの谷上部が広がっている。農家が小さく点在して箱庭のように見える。ここから見るとお寺全体が岩壁にひっかかるように建ててあることがよく分る。よくもこんなところに建てたものである。ブータンには他にも山の上に建てられた僧院は沢山あるが，このタクサン僧院ほど急峻なところに建てられたものはない。

先代の王がなくなられたとき皇太后はこの近くにしばらくの間，住まわれ裏にふされたといわれる。タクサン僧院の左手上部のさらに高いところに数軒の小さいお寺があった。

アメリカ人　落馬

一休みして下りはじめる。下りといっても途中少し登りもあるし道も悪いので楽ではない。私はずっと先に歩いて下ったが，アメリカ人2人は馬で下った。岩のところで間食を食べながら待っていたら上の方でドサッという音がした。アメリカの大男が落馬したのである。すりむいた腕をさすりながら下りてきた。「鞍のひもがきれたとき，ちょうど曲り角だったし，馬がひざを曲げたので落馬してしまったんだ。」と苦笑いしていた。

「象に乗っていたら下敷になってつぶれるところだったね。」といって笑った。

ラ　マ　教

ラマ僧は約5000人

ブータンの国教は仏教であり国民の75％が仏教徒，残りはヒンドウー教徒である。ブータンに仏教（ラマ教）をもたらしたのはインドの導師グル・リンポチェである。8世紀中頃のことである。彼はドルクパ派といわれる大乗仏教の一派の高僧であったが，現在のブータン仏教は大乗仏教と小乗仏教の混合したものであるといわれている。

ブータンの各地にあるゴンパや家庭の仏壇には釈尊の像と並んでこの導師リンポチェの像が安置され，尊ばれている。ラマ教を深く信仰するブータン人の儀式や習慣はラマ教に関わるものが多い。民家の2階にも「チョカン」と呼ばれる祈りの場があることも多い。

これらラマ教の僧はブータン内に約5000人位いるといわれ下級の僧から博学な高僧まで様々であるが，住民はこれら聖職者を一様に尊敬していて，彼らのために寄進は惜しみなく与えられる。

ラマ僧は結婚式や葬式の運営をするだけでなく病気の治療や星占いもおこない，民衆の生活と密着している。

ゴンパにはアニ・ゴンパと呼ばれる尼僧のためのものもある。尼僧は自らも禁欲生活をしているが「チュジャ」と呼ばれる草の汁で顔を黒くし，男性の関心を遠ざけている。

ラマ僧が多いのは一種の家族計画の名残りだともいわれている。ブータンはかつては，チベットやラダック地方と同じように一妻多夫制であったが1人の妻に3人までしか夫はもてず，そのため4人目以上の男の子は，ラマ僧にされたというのである。

ブータンには数多くのゴンパとともに数多い「チョルテン」「ツアルカン」と呼ばれる仏塔，そして「マニ・カラン」という，やや大きい塔があり，これらの多くは「タルチョー」という祈禱旗をそのまわりや上に立てている。この旗に書かれた祈りの文句「オンマニパドメフム」が風にあおられて遠く空の彼方へとんで行き悪魔を追い払い，幸せをむかえると信じられている。

興味深いマスクダンス

宗教舞踊や宗教音楽もラマ教の祈りからきたものが多く，トランペット，シンバル，角笛，横笛などに加えて力強い太鼓の音が単調であるが，重厚な響きを加えている。中でも興味深いのはマスクダンスといわれるお面をかむった群舞である。動物や鳥の面をかむった舞いや悪魔の面をかむった激しい踊りなどカンカンとひびくシンバルの音に合わせ，人形のように，くるくるとまわりながら踊る。

ブータンの新年は「ロサール」といわれ西洋暦の2月頃にあるが，このような新年のお祝いや，秋の豊年祭りを初めとし多くの祭りでこれらマスクダンスがおどられ，奉納される。

民俗舞踊もある。このために特別に学校に入って訓練された若い女性もいる。舞踊を生活の糧としている，いわゆるプロのダンサーではなく，仕事は別にもっていて，何かの機会のときにダンスを見せてくれるのである。ダンスチームの責任者は“赤いショールの役人”又は“ダンスのマスター”「チャマイ・チィチャップ」と呼ばれている。8人から10人くらいが日本の着物のようなブータン服を着て，日本の民謡のような節まわしの歌をボーイソプラノのような声で合唱しながら，足を単調に出したり引いたりしておどる。動作はひかえ目であるがブータンの生活と民俗によく合った踊りである。

1959年頃にチベットから難民としてブータンに来た人たちによってヤク・ダンスなどチベットのダンスも伝えられ，よくおどられるようになった。

これらブータン民族舞踊のステップは，オリジナルはチベットにあるせいか，ネパールのシェルパ族など山地民族のダンスによく似ている。ブータンの民族舞踊を見ながら，かつて歩いたネパール奥地での生活を想い出したりしたのだった。

スポーツ

弓　技

ブータンの国技としては弓技がある。90mほどはなれて立ててある的にむかって弓ははなたれるが，そのくらいの距離だと直線にはとばないので空にむかってはなたれる。的にあたると見物人から拍手がわき，女性などは黄色い声で歓声をあげる。弓技は庶民だけでなく国王も参加されるし，政府の高官も出場する。1974年の国が主催した弓技トーナメントは10月20日ティンプーの警察広場で決勝戦がおこなわれたが，このときは大蔵大臣レヨンポ・チョギャルのチームがチャンピオンとなったと官報「クエンセル」にでていた。

弓技の他にスポーツで盛んなのは卓球，馬術，サッカーなどである。新国王もサッカーや馬術の選手である。1974年秋，横浜でおこなわれたアジア卓球大会にはブータンからも選手が来日した。

ゴルフ・コース

本当に近代スポーツが大衆のものになるのは，まだまだであろうが友好的で忍耐強く朗らかなブータン人ならその技術を向上させるのにそう長い年月はかからないであろう。

ティンプーのゾンの裏に9ホールのゴルフコースがあるが，ゴルフ人口は非常に少なく王家の人たちを中心に高級官史や上流社会の人たち，それにインド政府から派遣されている人たちなど，ごく少数の人たちだけのものである。ブータンの人たちが日本のゴルフ熱を知ったら，何というであろうか。

首都ティンプー

以前はパロが中心

つい先年まではプナカがブータンの首都だと思われていた。今でもまだプナカを首都として表わしている地図もあるくらいで，それほどブータンのことはわかっていないともいえる。古い時代のブータンの中心はパロであったが，1832年の大火で全焼してしまい，その後一時プナカに移ったことがあるが，現在のプナカには古城が残っているだけである。

自然と調和した市街

現在のブータンの首都はウォン・チュウの上流にあるティンプーである。パロから車で2時間ほどのところにある。ブータンの国の中では西の方に位置している。海抜約2400mのティンプーはタシチョー・ゾンと呼ばれる政府総合庁舎，王宮，宮殿，兵舎，ホテル，中央郵便局，裁判所などのある文字どおりブータンの中心地である。「ラム」というのがブータン語で道を意味するが，大通りの「ラム」の両側にマーケット，映画館，銀行などがあり，いうなればブータン銀座である。タシチョー・ゾンは少し街をはなれたところにある。

ティンプーに首都が移されたのは数年前のことであるが，タシチョー・ゾン自体は約400年前の建物である。ここを首都と決めたのはブータン近代化の父ともいえるアフリカのナイロビで客死した故ジグミ・ドルジ・ワンチュック王であった。このタシチョー・ゾンはラマ教の僧院が半分ほどをしめており，現在でもラマ僧が沢山住んでいてお祈りや儀式をおこなっている。このゾンは東京の丸ビルの2倍ほどの面積があり，中央の大きい階段を登って中へ入ると右側が政庁で左側が僧院である。このゾンの中にほとんどの官庁が集まっているが，最近は部局が増えたのでゾンの近くに平家建のオフィスが沢山できている。観光局もそ

の平家のオフィスの一角にあった。

ブータン風デザイン

これらブータンの建物のほとんどは官庁だけでなく商店も，ホテルもガソリンスタンドまでブータン風にデザインされていて，あたりの風景と感じのよい調和を保っている。このデザインをするのはブータンのトップ・デザイナーのサング・テンジンである。建物だけでなく着物から「タンカ」という仏画のデザインまで彼の手になるものだという。

議会は年に２回開催

タシチョー・ゾンと国王のお住いであるデチェンチョリン王宮の間には，直通電話があり，毎日何度も連絡がとれるとのことであった。1974年６月に戴冠式を終えられた20歳という若いジグミ・シンゲェ・ワンチュック新国王は５代目の王として前国王のあとを継ぎ，1971年に始まった第３次５カ年計画を着々と実現しておられる。フットボールや馬術の選手でもあり，魚釣りも楽しまれる新国王は，ブータン内を広く見て歩かれるそうである。私も短い滞在期間中一度は魚釣りをされているとき，もう一度は王宮内を散歩されている姿を見かけたことがあるほど，気軽に歩かれるようである。新国王は「私が外国で学んだことはブータンにとってよい結果をもたらすと思っています。ブータンの習慣と伝統には強い誇りを持っていますが，ブータンが進歩しようと思うなら近代化をはからねばならないことも知っています。」と語っておられ，観光客にブータンを開放されたのもその一つであると思われる。1974年12月18日からインドへの公式訪問でもインド首脳部と精力的に会談され，これまでと同様インドの協力を要請された。

ブータンは君主制国家であり，1953年議会「ツォングド」がおかれ，議員数は国王によって指名される40名ほどの政府代表，100名位の民間代表，約10名の僧侶代表からなっている。議員の任期は３年であり議会は少なくとも年２回春と秋に開催される。内閣には大蔵，内務，通商，産業，通信，開発の５閣僚があり，観光局は現在，大蔵省の中にある。

警察や軍隊もあり，それぞれインド警察訓練団（IPTT）と，インド軍事顧問団（IMTRAT），工業関係の指導団（DANTAK）がティンプーに常駐して協力している。

国際的には1962年コロンボプラン，1967年万国郵便連合，1971年国連に正式加盟している。1971年にはニューデリーに在外交使節団を設置している。インドとの貿易はカルカッタにあるブータン貿易公団がおこなっており，インド以外の国とはカルカッタのブータン通商代表部を通しておこなわれる。

食　生　活

パラパラしたごはん

ゲスト・ハウスは日本流にいえば迎賓館であり，国のお客さんが泊るところである。ブータンにはティンプーにあるホテル・ブータンを除いてはホテルらしいホテルはなく，私のような観光客も各地でゲスト・ハウスに泊めてもらうことになる。もっともプンツオリンにはインド式の安宿があるが，南京虫におそわれることなしに眠るのは不可能であろう。

このゲスト・ハウスには専用のコックがいて西洋料理，中国料理，ブータン料理をサービスしてくれる。アメリカ人などと同行していたこともあって，ほとんど西洋料理で通したが，一度だけティンプーのゲスト・ハウスで，ブータン料理を食べてみた。次のようなメニューであった。（）内はブータン名である。

白いごはん（トッカルポ），赤いいためごはん（トマルポ），シチュー（パクシャ），マトン肉の煮つけ（ロングシャ），じゃがいものスープ

（ケワタチー），青菜と玉子の煮つけ（ゴンディチョル）。

ポテトのスープがひどく辛いのを除けば味はまあまあであり，とくに青菜と玉子を煮たものが日本のおしたしに似てうまかった。ごはんは日本のようにねばっこいものではなく，インドと同じようにパラパラした感じのものである。これは米自身の性質にもよるが炊き方にもある。ブータンでは米が煮えてくると上にたまったおも湯をすててしまい，ねばり気をなくするからである。ブータン人はチキンの肉を入れたおかゆも食べる。米も日本と同じように何種類もあるが，ブータンの安い米が日本の味に似ており，最上級の「ボンレ」というブータン中央高地でとれる米は，ブータン人にとっては美味らしいが，日本人にはそれほどでもない。1㎏200円くらいである。

肉はヤクやマトンの乾肉が使われることが多い。保存がきくからであろう。保存食としては天井裏などを利用し野菜も乾燥させていたし，「シプ」とよぶアルファー化した乾燥米も作られている。チーズをキャラメルくらいに切って乾燥した「チュゴー」または「チュプリ」も売っていた。乾燥したヤクやマトンの肉も売っていた。

ブータン人の家にいくと「ドマ」または「ベテル・ナット」と呼ばれる噛みタバコの一種を伝統的なあいさつとしてお客にすすめる。お茶もすすめられるが1杯目を飲み欲すと，必ず2杯目をすすめるのがブータンでの習慣である。2杯目は友情を受け入れるしるしのために飲みほすのが礼にかなっている。とにかく訪ねた人には，それがたとえ敵であっても一杯のお茶や「ドマ」をすすめるのである。

ブータンの川には鱒が沢山いるが，ブータン人はあまり魚は食べないようである。殺生をきらうせいかも知れない。

常食は米

ブータン人は1日3食が普通であるが，昼食はツアンパという大麦を煎って粉にした，日本の麦こがしのようなものにチベット茶をかけ，練って手で食べる。チベット茶は紅茶のようなものを固めてある磚茶にバターと少量の塩を入れ，大きい水鉄砲のようなものの中に入れてかきまわして作るものである。チベット茶のことをブータンでは「スウヂャ」と呼んでいる。

安くてうまい地酒

お祭りやピクニックのときに酒を飲む人も多くきびに似た雑穀を醗酵させて作った「チャン」という日本のどぶろくのような地酒が安くてうまい。もう少し強い「アラ」という酒もある。こちらの方はチャンのように白く濁っていないし清んでいる。大きい竹の筒に入れて持ち歩いたり保存したりしている。

玉子をチャンに入れてカンをつけたチャン・キュキュ（キュキュとは煮たという意味）も悪くない。しょうがとニンニクを酢で味つけしたものをつまみにしたりする。また，ブータンのラムはシッキムのラムとともに有名である。ＸＸＸラム（スリー・エックス）などがうまい。ブータン製のブランディ，ウィスキー，ドライジンなどもある。ゲスト・ハウスで飲むとダブルで200円位である。ダブルで80円ほどの安いウィスキーもある。こんなに種類があるのだからブータン人は酒は好きだと思うが，あまり飲んで騒いでいる様子はなかった。バザールの中に一ぱい飲屋も何軒かあり，明るいうちから一ぱいひっかけている人もあったがみんな静かに飲んでいた。もっとも暗くなるとほとんど店は閉めてしまう。

カーストのないブータン

インドのように何人もの召使いを使っている家はかなり上流家庭でも少ないようで，食事の支度は家事一般とともに奥さんの仕事であるが，一般のブータン人は2～3種類のおかずとごはんですますので準備も割合簡単である。

ブータンには，インドのようないわゆるカースト制度はなく，貧富の差はあるが，下層階級というほどの人はなく，みんな一応の暮しをしているようであった。しかし，ほとんどの文化的なものをインドを通して輸入しているので物価は高く，ガソリンも1ℓ200円近くしていた。インドで1ℓ約130円するのにくらべてひどく高かった。

服　　装

ブータンの着物

ブータンの女性は長い着物のような服をきている。これは「キラ」と呼ばれ，肩からひざくらいの長さまである。そして肩のあたりで「コマ」と呼ばれる銀製のブローチでとめている。そして，腰のところを「ケラ」という帯で結んでいる。女性用の帯は男性用のものより幅が広い。

キラの上には羽織を着るように，カーディガンやガウンを着ている。

首にはトルコ石や，さんごで作られた首かざりをつけている。たいていは「ドルジ」と呼ばれる金で飾られたトルコ石が2個入っている。高価なものは何十万円もするそうである。

着物などにする布は手でつむいだ糸を原始的な織機で30cmほどの幅の反物に仕上げたもので，いずれもなかなか色彩豊かである。従って一般の人の着ている着物も比較的高価で15,000円から 2 万円くらいする。いいものになると30万円くらいするものもめずらしくない。

ふところは物入れ

ブータンの男性は「コー」または「ボク」と呼ばれる着物を着て，腰のところに帯をしている。金持から貧乏人までほとんど同じ着物をきているのが特徴的である。ふところにはかぎタバコの「ドマ」，ナイフなどを入れて歩いている。そでを大きく折りかえし，そこのところは中のシャツを出しているので，白い布になっている。そして，底に皮をはった伝統的スタイルの皮靴をはいている。しかし，若い人はナイロンのストッキングに普通の靴をはいている人の方が多い。

動　物　や　鳥

ヤクは高所牛というべき4000m近い標高に住んでいる野性味の強い動物である。ブータン北方山岳地帯にはこのヤクが多く，運搬用として使役されている。ふさふさした毛の長いヤクはいかにもヒマラヤ的である。

山岳地帯には香料の原料として知られているじゃこう鹿がいる。ブータンでもこの鹿の絶滅をおそれて捕獲と輸出を禁止している。

鳥も多くいて，村を歩いているといたるところで鳥の声が聞こえていた。同行のイギリス人は野鳥にくわしく，いつも望遠鏡で鳥を追っていた。彼の話だと，ブータン特有なものはいないそうである。

南の方はアッサムに接しているので，野性動物も大型になる。マナスというインド側の野性動物園があり，私も訪れたことがあるが，その北辺の川，マナス川がインドとブータンの国境になっていて，ブータン側には“金の猿”と呼ばれる黄金色の毛のサルがいるので有名である。一角さい（ライノー）やバイソン，象も，夏にはインド側からブータン側へ移動するので，これらの動物が川を渡るシーンが見られるそうである。動物には国境がないという訳である。

ブータンの犬もその道の愛好家にはチンの原種として知られている。犬を飼っている家も多い。ゾンにも犬がいたりする。

ダムシ，アプソ，ドチという3つの種類が多く，ダムシは秋田犬に似ていて，村人が，山羊の番や狩に使っている。ドチはチンににている。アプソはスピッツのように毛が長い犬である。

ブータンの特産品

土産物に喜ばれる切手

帰国の日も近づいたので土産物を買うことにした。軽くて日本の友人たちに喜ばれるのはブータンの切手であろう。ブータンの切手は種類の多いのと変ったデザインのものがあるので，切手を集める人たちから貴重品扱いをされている。立体的に見える切手，小さいレコードになって音の出る切手，油絵の感じの切手，金属の円い切手，花の匂いのする切手まである。中にはあまりいただけないデザインのものもあるが，大体において美しい色合いである。高価なものでは錦の切手があり，大きさは7*cm*四角もあり，どうやって使うのかと思うくらいである。

プンツオリンの郵便局で古いものから新しいものまで沢山の種類の切手を特別の窓口で売っている。ティンプーの郵便局にはあまり種類はなかった。もちろん定価通りで売っているが，日本のデパートなどでは5倍から10倍くらいの値段がついていた。ブータンは切手で年間12万ドル（1,200万円）ほどの外貨を稼いでいる（1970年）。他に外貨を稼ぐものはないので切手によるドル収入はブータンにとってウェイトが大きい。しかし，これだけのドルでは王室の外交に使うためのドルがやっとだということである。

ブータンとしても何か他に外貨を稼ぐものをいろいろと考えてはいるようであるが，今のところ土産物程度以外には多くを期待できないというところであろう。

1974年にオープンした観光で稼ぐドルは，年間約30万ドルくらいしか期待できないが，それでも当分の間，ブータンの「ドル箱」になるかも知れない。

土産物即売所

ティンプーに政府の土産物即売所があり，いろんなものを売っていた。銀のタバコ入れ28,000円，ブータンの絹の布20,000円～160,000円，タンカ（仏画）28,000円～60,000円，マスクダンスの面6,000円，竹のカゴ280円～600円，ブータンコイン2コで40円などなどである。これらはインドにくらべて比較的高い。物価が高いせいであろう。着物にする木綿の布も800円～1,500円くらいであり，ブータン人親子も買っていたので，ここだけ高いということでもなさそうであった。

ティンプーのマーケットでも布地は売っていたが同じ位の値段であった。マーケットはインド製の日用品がほとんどで土産になるものはほとんどなかった。5mもある長い長もちを売っていたのにはおどろいた。じゅうたんか何かを入れるのであろう。

ブータンのコイン

ブータンではインド・ルピーも自由に使えるがブータン独自の貨幣制度をもっている。1ヌグルトルム（Ngultrum）が100チェトルム（Chetrums）であり，1ヌグルトルム，50，25，10，5，1チェトルムのコインがある。

1インド・ルピーが1ヌグルトルムである。ブータン銀行やゲスト・ハウスでドルやルピーからヌグルトルムに交換できる。

最初に鋳造されたチェトルムは銅であり，チェトルム・ガティハパア（Chetrum・Ghatikhagpa）として知られている。1681年にその頃の隣国，コーチビハールのガティルガ州の王，パダマ・ナラヤンの協力で造られた。当時ブータンの第4代目のデブラジャ（王侯）の王座への就任を祝って鋳造されたものである。この2人の王は大変に親密であったそうである。

このコインは一度しか鋳造されなかったので20世紀の始めにはもうほとんどなくなってしまった。

マトラム・コイン

もっと古いブータンのコインはマトラム（Mattrum）という名のもので，1907年に初代の世襲の国王となったウゲン・ワンチュックの即位を記念

して鋳造された古いコインである。

現行コイン

前記の現在使用されている1ヌグルトルム，50チェトルムなどのコインがあるが，その他に記念貨，いわゆるプルーフとして1966年に3ルピー銀貨が発行されている。このときに同時に1，2，5チェトルムの金貨，1，2，5チェトルムのプラチナ貨が発行されたようであるが，ヨーマン著の「世界の現行コイン」でも問題のあるプルーフとなっていて，コインと認められるかどうか疑問がある。

また，1966年はジグミ・ワンチュックの即位40周年なので上記の他に一般用として白銅の1ヌグルトルム，25，50チェトルムが発行されている。

ブータンのコインはインドのコイン研究の一部として研究されていて，コイン通の間でも，インド，ブータン，チベットのコインは大変難しいものとされている。私もコインには少し興味をもちはじめた程度であってよく分らないが，若干の資料でしらべてみただけでもインドを中心とするコインは，その歴史の複雑さとあいまって奥が深いといえよう。

なお，ブータンのコインには西暦の他に，ブータン暦，地竜の年号(1928年)，鉄虚の年号(1950年)というように，チベット文字で十二支暦で示されている。

〈上〉　ブータンの切手

左　ブータン国王載冠式記念切手
中　金属の切手
右　花の香のする切手

〈左〉　ブータンの現行コイン

左　　1ヌグルトルム
中上　25チェトルム
中下　10チェトルム
右　　5チェトルム
（1ヌグルトルムは約40円）

ブータン小史

不明部分の多い歴史

古い時代の中心はプナカであったが，プナカのゾンは1832年の大火で焼けてしまった。現在のプナカのゾンはその後，建てなおしたものである。この大火のためブータンの歴史を知る貴重な記録は大半なくなってしまったという。

さらにその後，1887年そして1897年には大きな地震があり，若干残っていた記録もほとんどなくなってしまったといわれている。パロの博物館にも，ブータンの歴史を語る古文書の類はほとんどない。

そのためブータンの歴史は不明なところが多く，研究者としては，かえって興味深いところとなっている。

古い時代

8世紀頃のブータンは沢山の独立国から成り立っていた。一番力のあったのがシンドウ・ラジャで仏教を背景に活躍した。また，インドの高僧，パドマ・サンバヴァがブータンにやってきて布教をしたのもこの頃であった。パドマ・サンバヴァとは“蓮の花の生れ”という意味であり，ブータン人は聖人として尊敬していた。

800年代はチベットとブータンは再三争ってチベットに占領されたり，またとりかえしたりした。そして1200年頃まではブータンをまとめる者のいない，いわゆる分裂状態が続いた。しかし，ラマ教の勢力は強く，この頃に多くの僧院が建立された。

1557年には赤帽派の強力なラマ僧，ドゥジョン・ドルジがチベットからやってきて，ダルマラジャを名乗り，彼の系列の僧は，その後の4世紀の間，ラマ教界に君臨した。大きな寺院も建てられた。3代目のダルマ・ラジャのとき，政権をデブ・ラジャという僧侶にゆずった。デブ・ラジャは当時8つの郡の「ペンロップ」と呼ばれた郡長からなる評議会で選出することになった。

ブータン戦争

一方，1772年には英国は東インド会社による勢力をベンガル地方にもっていた。たまたま，この地方の王国であったクーチ・ビハール王国がブータンからの攻撃を受け，そのときイギリスは助けを求められ，一軍をこの地方へ送り込んだ。

1774年にはジョージ・ボーグルが使節団をひきいてブータンに行き，条約が成立した。1775年からはハミルトンが，ボーグルの後任としてブータンとの渉外をおこなった。

1783年にはサミュエル・ターナ大尉のひきいる商業使節団が行ったりして，イギリスはブータンとあたらずさわらずの外交をおこなっていた。

1972年頃にはネパールとチベットとの戦争があったりしたので，その頃ブータンは約50年間鎖国していた。

しかし，1837年にR・B・ペンバートン大尉の大型使節団がブータンを訪問し，英国側から一方的に年貢を要求したりした。

これをきっかけとしてイギリスはアッサム方面からブータンへ手をのばそうとしたのである。その結果，1864年11月～1865年11月のブータン戦争が始まったのであった。

このときの指揮官が後にエベレストに遠征したことのあるブルース将軍であった。戦争は講和条約を結ぶということでキリがついたのだが，その頃からブータンは鎖国をしてしまった。

1885年以降はトンサ郡のウゲン・ワンチュックがブータンの実力者となり，もう一つの大きな郡，パロ郡のペンロップをおさえて国政を牛耳っていた。

1900年頃にはデブ・ラジャは僧侶としての仕事に力を入れはじめ，政治から興味を失ってしまった。1907年にはウゲン・ワンチュックが最初の世襲の王侯となった。

1904年のヤングハズバンド大佐の英国軍がチベットを侵略したが，このことがブータンとイギリ

スの間を好転させるきっかけとなった。

この頃，1905年，ジョン・クラウド・ホワイトはエドワードⅡ世の命令を受けブータンを旅した。1907年にも彼はブータンに多くの土産物をもって入国した。ウゲン・ワンチュックに近づくためであった。

そして，1920年にはイギリスはついにブータンとの国交に調印した。翌年にはブータン王はニューデリーに出てイギリスのジョージⅤ世に逢い友好を深めた。

このことはブータンをチベットから守り，ブータン人の独立をすすめるための英断であったと思われる。この英知の王，ウゲン・ワンチュックは1926年に惜しまれながら世を去った。

そのあとジグミ・ワンチュックが後を継いだ。24才のときであった。彼はアシ・チョデンとアシ・ペマ・デッチェンの２人の姉妹を妻にもったが，アシ・チョデンに１人の息子ができ，ジグミ・ドルジ・ワンチュックと名付けられた。1972年アフリカのナイロビで客死した先代の王である。

再三の鎖国

1926年ころからブータンはまた鎖国し，ほんの僅かの外国人しか入国できなかった。そのうちの１人は1921年のロナルドシェイ卿で，彼は当時，ベンガルの知事であった。

1913年には日本人多田等観師がブータン西部を通ってラサへむかった。

1924年には西部と中部ブータンに植物学者ベイリーが入り，青いケシの花を発見している。シェリフとルッドロウという植物学者も入国した。1933年，1934年，1936年と彼らはブータンを広く歩いた。彼は1938年にはチベットのツァンポー川を探険したティラーと一緒に東部ブータンに入っている。

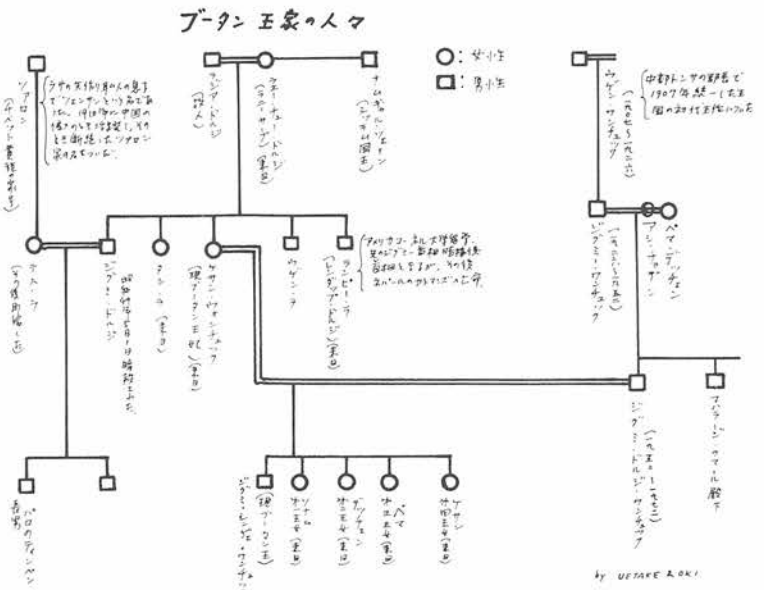
1937年にはF・スペンサー・チャップマンがカルカッタのC・E・クロフォードと３人のシェルパとともに，パロ・チュウの源流に入りチョモラーリに登頂した。

インド独立のあと

1947年インドは独立し，イギリスがインドを去っていった。このとき，インドとブータンは条約を新しく作り，1949年８月８日，ダージリンで調印した。現在もこの条約が生きており，外交に関してインドの勧告，指導を受けること，インドが助成金をブータンへ渡すことなどが明記されている。

ジグミ・ドルジ・ワンチュック王は1951年にアシ・ケサン・ラと結婚し1952年10月に正式に王位を継承した。ケサン王妃はシッキム王の兄弟のソナム・トブギェ・ドルジというマハラジャの娘であり，当時のカリンポンのブータン代表であったジグミ・パルデン・ドルジの妹でもあった。

ジグミ・ドルジはシッキムの英国政治代表の補佐という職もおこなっていた。非常に人望があつく，ブータンの首相と呼ばれていた。しかし，1964年５月１日，彼はプンツオリンで暗殺されたのである。



国連へ加盟

この頃はブータンは政情不安であった。1965年にはパロのキチュ・ラカン寺でジグミ・ドルジ・ワンチュック王暗殺未遂事件がおこったりした。しかし，国王はこのような危機を乗り越え着々とブータンを立派にしていった。1962年コロンボ・プラン，1967年万国郵便連合正式加盟国，1969年に議会を開催，1971年5月にはニューデリーに在外交使節団を設置，1971年9月には国連へ加盟と国内，国外ともに目ざましい進展ぶりを示した。パロからティンプーへのハイウェーを完成させたのも彼であった。

ジグミ・ドルジ・ワンチュック王がその在位20年間でブータンをたてなおしたといわれるゆえんである。

この秀いでた王は1972年に死去した。

世界で一番若い国王

ジグミ・ドルジ・ワンチュック王の死去のあとは，18才の新国王ジグミ・シンゲェ・ワンチュックがあとをついだ。1974年6月2日新国王の戴冠式も盛大におこなわれた。

世界で一番若い国王はフットボールや馬術の選手でもあり，少年時代をダージリンとブータンで過し，イギリスにも留学していた近代青年である。この新国王は第5代目の王であるが，約1000万人のブータン人の期待と尊敬に充分にこたえられる人であろう。

ブータンはどのヒマラヤの王国もたどった，戦いと侵略と崩壊，そして，再建と創造の厳しい道を歩んできた。これからも大国インドと中国にはさまれて，ヒマラヤの桃源境をこのまま守り続けることは安易なこととはいえまい。

将来の展望

ボンデ農場

ブータンの経済は農業と牧畜に基礎をおいている。コロンボ・プランで日本から派遣され，ブータンの農業近代化に10年あまりも協力しておられた西岡夫妻の努力の結果が，パロの近くのボンデ実験農場を中心に成果をあげつつある。農地約10ヘクタール，自動耕うん機十数台があり，20人近くのブータン人実習生もいる。ブータン政府も農業予算の5％近くをこの農場に組み入れている。この農場への期待が大きいことが分る。それにしても山国であり，耕地面積は小さいので限度がある。

近代化への道歩む

ブータンの開発計画は1961年から始まった。これまでに第1次，第2次の5カ年計画を終了し，1971年から第3次の5カ年計画に入っている。毎計画ごとに規模は大きくなり，第1次・1億ルピー（約40億円），第2次・2億ルピー（約80億円）第3次は3億ルピー（約120億円）を越している。

これらの予算のうち約1/3弱はインドの援助によるものである。1958年に故ネール・インド首相がブータンを訪問し，ブータンへの援助を申し入れたときは「ヒモがつく恐れがある」として断わったのであるが，1961年には上記のように多大な援助をインドからあおぐことになった。

ブータンのこのような親インドの態度は，急変ともいわれるものであるが，このきっかけは1959年の中国のチベット併合によると見られている。中国からの脅威がブータンをして親インド路線をとらしめたのであろう。インドとしてもネパールが中国へ近づいていく傾向などもあってブータンとのつなぎをしっかりしておきたかったのであろう。

新国王も「インド，バングラディシュ以外の国と外交関係を持つ考えはない」といってる。1974年12月17日から1週間ほどの新国王のインド公式訪問も，インド，ブータン間の友好と協力を目的としたもので，「インドとブータンは手をとりあ

って一緒にゴールへ」などとインドの各紙が報道していた。

とにかく各分野でインドが協力をしている。例えば森林事業に関してはインドのウッター・プラディシュ州にあるデラドンの森林研究所で研修をしたブータン人が活動している。しかしこれとても，ヒマラヤのジャイアンツにはばまれる。鉱物もいろいろと埋蔵していると報告されているが，輸送に金がかかりそうである。

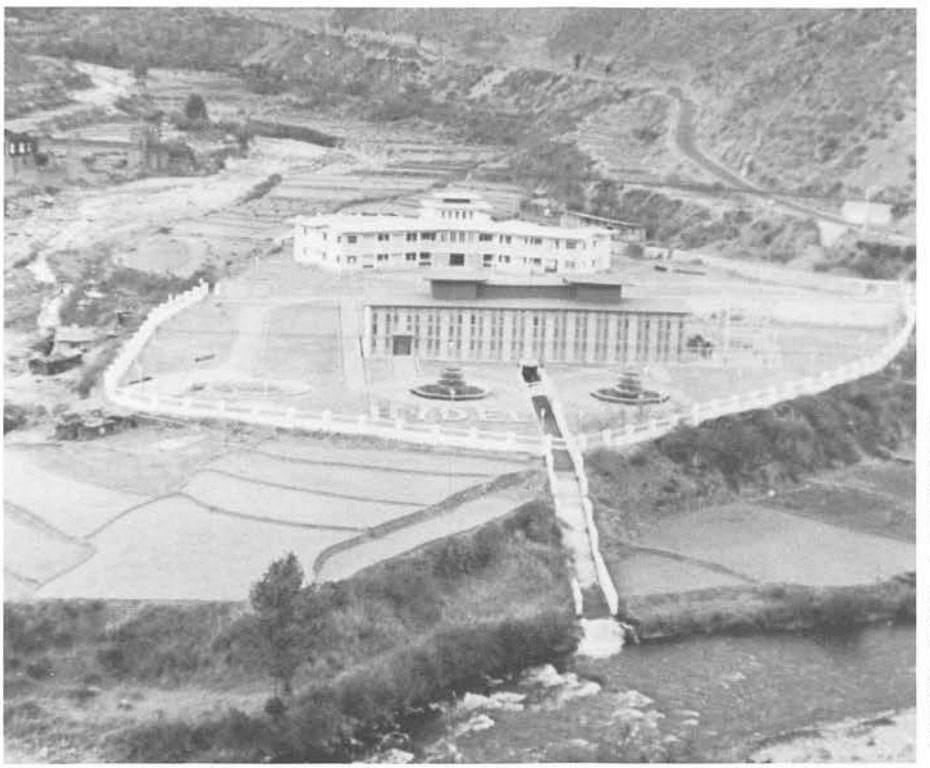
期待される電力資源

希望のもてるのは水力の利用であろう。現在はティンプーに 300 KW，パロに 400KW，ウオンディホドンに 500KW の小規模の水力発電所があるが，すでに次の計画としてティンプーのギドコムにさらに大きい発電所を建設中であり，チュカにはインドの援助でさらに大規模なダムができる計画である。1974年 3 月23日，現王妃の妹 D・W・ワンチュックとインドの灌漑・電力大臣 K・C・パントの間で正式に調印されたものでティ・チュウとウォン・チュウの両河の合流点の 1.6 km下流に建設され，完成後は 336 メガワットの発電量になり，一挙にブータンの電力資源が増えることになる。

ブータンには現在これらの電力を消費するだけの工場はなく，ごく小さいカンヅメ工場や，マッチ軸工場があるくらいなので，余剰電力はバングラディシュやインドへ売る計画だそうである。

ブータンの近代化と発展をささえるのには教育は不可欠であるが，現在，ティンプーにカレッジがあり，その他プンツオリンとティンプーに技術学校がある。先生のための学校も1968年に開かれているし，ティンプーとカングルンにあるパブリック・スクールと呼ばれる全寮制の高等学校は，全国から優秀な生徒を集め，ブータンの将来を背負う人材を養成している。小学校以上は全国に，120 校（1971年）ほどある。ブータンの近代化には困難なことが多いが，現にゾンと政庁が調和して存在しているように，何世紀にもわたって形成された複雑なブータンはその独特な個性を失わないで新しいブータンに変身していくであろう。

（「公明新聞」昭和50年5月2日より10回連載したものに補筆したものである。）



パロに新しくできた水力発電所

“雷と竜”の国

H.P. マ マ

はじめに

サンダー・ドラゴンの国，ブータンは数百年の間，文明社会から隔絶されていた。いまではこの山岳王国への接近は容易になり，この国を訪れた人たちは，昔そのままの伝統的な活動をし，宗教がまだ多くのことを支配しているブータン人の生活をかいま見ることができる。以下にH・P・Mamaにいかにブータンがゆっくりと20世紀を自分のものにしたか，そして，卓越した支配をおこなった故ジグミ・ドルジ・ワンチュックにどれだけ感謝しているかを述べてもらうことにしよう。

インドの協力

東ヒマラヤ山脈の麓でこじんまりとたたずんでいるのがドルック・ユル王国，サンダー・ドラゴン（雷と竜）の国であり，外の世界の動きに関係なく時間が数千年もそのままであったようなおとぎの国でもある。ドラゴンはついに目覚め，ブータンとして知られるドルック・ユルはやっと20世紀を味わおうとしているのである。

ブータンの開発のおくれは第1に一世紀にもわたる外部世界からの隔絶であり，それは体験的，感覚的にだけでなく技術的にも隔絶されていたのであった。

インドの援助を受けるようになった1961年までは，ブータンには外交機関や電気がなかった。近代的な薬，舗装された道路，郵便制度，新聞そして工場もなく，通貨制度はあったが，商売の多くは物々交換によっていた。教育は寺小屋式のものに限られていた。しかし，教育の必要を感じていた人は少なくなかった。1958年のパンジット・ネールの訪問は，このようなインドの高官の訪問は初めてであったが……，遠歩，ミュール（小馬）やヤクの背で5日間おこなわれた。最初のジープは花環牧草を荷物として運ぶ新しいものと思われていた。国内では何千人ものブータン人はまだ外の世界につながってはいなかったのである。

このことがあってから突然にブータンとインドは“他のものに対して両国の自由を安全に守り，したがって外部からは何人も害をあたえない”という相互保障条約に調印したのだった。それは明らかにブータンがチベットのような結末になるのを助けるためだけでなくインドのふところに中国の“竜”が入ってくるのを防ぐためでもあった。インドと中国の軍隊は長い間無駄な対立を4,000mの高原に横たわっている国境に沿って続けているからである。相互協力はこの亜大陸にあるインドとブータンの2つの国に対して都合のよいことであった。

ブータンの歴史は，主に初期の外国人訪問者によって知られていた。1752年ワーレン・ヘスティングはブータン王国への使節として，サミュエル・ターナ将軍のお伴として，サミュエル・ダビスを選んだ。彼の6カ月の滞在中にブータンが当時どのようになっていたかをよく表わす水彩のスケッチを画いた。

外界との早くからの接触はかなりあり，1959年以前にはチベットとも全面的に貿易をし，その後は長い間はっきりしない戦争が続いていた。このような初期の外界との接触はブータンの文化，伝統，生活，ときどきこの国を破壊した自然の災厄の結果，取り返しのつかないくらい失なった多くの歴史書物などのうちほんの僅かのものを知らせることになった。昔の記録によるとブータンは強い中央集権化に欠け，いつも内乱で引き裂かれていた。ブータンは，お互の国内部族との戦いよりももっとどう猛な侵入者といたるところで戦わねばならないということで国家の独立はそのままにされていたのだった。

ゾ ン

ゾンと呼ばれる，いまでも残っているお城のうちでもっとも印象深いものは，今はパロの博物館

となっているタ・ゾンである。それは石と粘土と木の円形構造になっており，１ｍほどの厚さの壁からなっている９階建の巨大な建物である。敵を見つけ，狙撃するための小さい穴，入口のところで油断した攻撃者をするどくつっ立っている刃のある台の上に投げつけるようにした特殊仕掛の戸扉，最初の妨害物で生き残った者を防ぐためにゲリラ風に設計された曲った廊下がついている。

この建物は今は新しく装いをこらしブータンの芸術，宗教，文化，生活などの保存所となっている。そばには武器庫が見られる。弓と毒矢，長い銃身のライフル（長いものは５ｍもある）。円錘形で上部が平なワラの帽子，戦争のとき軍隊がもち歩いた旗竿，古い大砲（これらのうちにはイギリスが贈ったものもある），沢山の刀，あいくち，その他，殺りくに使われたナイフなどが並べられている。

王　制

この暗黒の危機のときにブータンはチベットの僧，シャブドルン・ナガワン・ナムギャルを救世主としてむかえた。彼は1616年にチベットからブータンへやってきたのだったが，当時，若冠23才であった。この聡明で力強い男は容赦のない戦を，それからの35年もの間続け，ブータンの歴史始まって初めて国を統一したのである。巨大なバイタリティの持主であった彼は，また有能な行政者であり，宗教家であり，生産のすすめ役でもあった。今も残っている寺院のほとんどは，彼の時代に建てられたものである。

彼の行政者としての立場を整理したのち，ナムギャルは精神的なことに心を集中し，すべての僧呂に対する現世の力をおよぼし，後には最初のデブ・ジンポンまたはデブ・ラジャといわれる支配者になるブータンのダルマ・ラジャまたはシャブドルンとなった。彼の時代に，この調整がうまくいったのですべての権力はまもなくデブ・ラジャに集中されることになった。ラマの生まれ変りとして出現したダルマ・ラジャは，だんだんに形だけの長の座に落ちていった。デブ・ラジャの地位は世襲ではなかったので空位になるときまって血の争の末にその席はうめられたのであった。命名はもっとも力のあるペンロープ（知事）によってなされるが，彼が事務所にとどまっていようと考える限り，デブ・ラジャは無能なあやつり人形としてペンロープの手の中にあったのである。

無政府状態にあともどりするのをさけるために，二重の君主制を廃し，トンサのペンロープ，サーウゲェン・ワンチュックがドルック・ギャルポというタイトルで国王となった。その結果，この古い王国は世界中でもっとも新しい君主国となった。当然王のライバルであるパロのペンロープは彼の王様の対抗者としてたてることを考え，決して和解しなかった。主都が後にはプナカから王の昔からの要塞の地であるティンプーに移っていったというようなことは単に偶然ではなかったのである。それによって主都からパロへの距離を二等分することになったのである。

ペンロープの制度が廃止されるようになるまでは生れ変ったラマであるシャブトルンを無視することは容易ではなかった。偶然の一致ではあっただろうが，彼らの誰れも事務を充分にとるほど長くは生きなかったのである。

この二代の為政者は，絶対君主であり，すべての権力を自分の手ににぎり，高官には信頼できる自分の親族の者のみを指名したのである。故ジグミ・ドルジ・ワンチュックは，もっともすばらしい視点に立って世を治めた。貧乏人をもっとも冷酷に自分の食い物にしている農奴制の開放，司法と行政の分離，そして，ブータンに最初の議会政治のきざしをもたらしたのである。そのころの時代の情況のもとではこれらのことを実行するのは非常に勇気のいることであった。

彼はそのようにして選んだ絶対君主制として，無期限に政治を続けることができた。新しい組織のもとで，彼はお膳立したツオンドウと呼ばれる国の議会の意志で君主制度の生き残っている人たちとをからみ合せた。議会はその⅔の投票や王族の他の一員を任命することによって，王を退去させることができるだけでなく，３年毎の信任投票を得なければならない。議会の決定には批判をすることもできないし，異議を申し立てることもできない。ジグミ・ドルジ・ワンチュックは長い間このようなことで地位を得ていた。もっとも重要

な国会は1953年におこなわれたもので，そのときは民衆によって，間接に選挙された約100人の代表者と寺院から指命された10人の僧呂，小数の国王の指名した人が出席した。

ブータンの宗教

政府への宗教の侵入は国の必然的な宗教上の背景を注意深く保つことをよりよく認めることができる。宗教はブータンの進んでいく方向に対して別に考えることはできないことである。

パロで私は小鬼のようで不敬でほとんど住む家をもたない，貧しい子供を見た。尼さんのための寺も別にあり，他のものとは離れて立っている。

国の宗教である仏教は8世紀にインドの僧，グル・パドマ・サンバワによってブータンに導入された。ほとんどの人はマハヤナ徒と呼ばれる赤帽派またはドルック・カルグ派に属している。宗教の寛容は仏教徒にとって個人に属する信仰の問題であり，規制すべきものではない。南ブータンに移り住んでいるネパール人は，自由にヒンズー教を実践している。

寺院は広くブータン国内に分布しており，それらのうちのいくつかは1000年も前に建てられたものである。パロのキルチュ・ラ・カンやブムタンのシャンペル・ラカンは640年に建てられたものである。パロ・タクサン（トラのすみか）の原型は大分前になくなったが，今あるものは古いランペル。シンギァ寺を1684年に修繕して建てたものである。どのゾン（ゾンはお城を意味する言葉だが，今は政府の出先機関を指す）にも沢山の礼拝堂がある。またゾンには，昔のブータンの文化や宗教を保存する古い教文などのある図書館がある。

ブータンのネパール人

約1,100万人のブータンの人口は.主としてシャチョップと呼ばれるこの国の土着人，一世紀の間ブータン全域に入り込んできたチベット人，今世紀になって移住してきて，今では人口の40％にもなっているネパール人からなり立っている。政府は開拓者の権利を平等になるように調和をとってきたので，それ以後，国内移住者は増えていない。ネパール人の速い増加は，シッキム全域や隣接したインドの一部に広がり，ブータン人ものみつくしてしまった。

外国からの労働者は，すべて当時の欠乏という観点から働くことを許可されていたが，必要がなくなれば離れて行くことになるであろう。そのときまでに彼らは自分の故郷では考えられないほどの多くの収入を得，ブータン国民としての権利を行使したのであった。ブータンの非常に少ない人口から考えると，これらネパール人が彼らの母国の小数派となることの心配は少なからぬものがあった。

非常に限られた資源なので，ブータンは現在のインドからの14億4千万ルピーの援助なしでは，とうてい開発はおぼつかないのである。その援助は道路の建設，輸送と通信システムの開発，水力発電所の建設，農業の立てなおし，健康管理と教育，インドの行政官の派遣とブータン人の研修におよんでいる。

学校はインドの活動的な協力のもとにブータン各地に設立されている。英語が研修の中だちとなっており，英語の普及は外部の者にとってはまさに驚きである。ブータン学生の教育は教科書から歯みがきまで全く無料である。それにもかかわらず教育よりは家庭的な農業を好む傾向があるので，学校への入学希望者はそんなに殺到しない。ほとんどの役所ではブータン人を雇っているが，前に述べたように彼らのうちには，充分な教育も経験もない者がいる。この状態はより多くの学生を育て，経験を積ませることで改良されるであろう。すべてのことは一夜ではできないものである。

1971年9月21日，ブータンは国連に加盟したが，それは援助を受けるためであって，政治的野心のためではなかった。しかし，ブータンは国際的事件に充分かかわりあう意志をもっているのである。国連はブータンの最近の5カ年計画に対して500万ドルの融資を決めた。ブータンの援助への要望はどの分野においても強かったので，インドは，その希望に対して一際目立った役目をするように強いられたのだった。インドの官吏たちはブータンの人たちの義務の遂行と感受性をあまり刺激しないように微妙なバランスを考えながら非常にい

い仕事をしてきている。しかし，一方では13の方言があるために，多言語国家のもついろんな問題に直面している。

ブータンの建物

ブータンの家は普通何階建かになっていて一番上の階に人が住み，下の方の階には家畜がいたり，家財をしまってあったりする。大きな窓が両側にあって換気は良好になるように造られている。貧乏な人たちは小さいドアのない石とドロでできた箱のような家に住んでいる。屋根は板でふいてあり大きい石がのせてある。ガラス窓はごく最近になって使われるようになった。多くの近代的な建物は木のハリや床そして，きれいに飾られた窓や扉がついている。伝統的な建物には一本もクギを使わないでハリとハリを組合せている。いろんな魅力的なブータンの建物の中で特にいいものはティンプーのタシチョー・ゾン（幸運のゾン）である。この伝統的ブータンの傑作は1961年に企画されてその次の年に完成された。2,500万ルピー（約10億円）かかりブータン国自身の手でその金が集められた。人々はそれを“白い象の人気者”と呼んでいて，国家の支出に対しては不釣合ではあるが人々のほこりになっている。

官庁としてタシチョー・ゾンには王様といろいろな大臣が住んでいる。その広大な庭園は，よく育ったバラの木でいっぱいであり，今では造ることのできないような沢山の鐘が吊り下げられている。ここには精巧を極めた絵や彫刻が共にすっきりした木の床や家具と一緒に飾ってある。飾りつけられた祭壇の上には仏像が夜も昼もバター・ランプのほのかなあかりで照らされている。聖なる水やいろいろな供物が小さい金属製の皿にのせてそなえてある。面白い習慣として，日没以後は女性はゾンの中にいてはいけないことになっている。この唯一の例外はインドラ・ガンジー女史であった。

落着いた自然

訪れた人は誰れでも今日まで永く残されてきたブータンの遺産の壮厳な美しさに打たれるにはおれない。文明開化のひびきはきざしを見せたばかりであり国土の¾はまだ森林におおわれている。ブータン王国は海抜０mから雪に覆われたヒマラヤまでの地域をもち，その各々の地域では特長のある花や植物が見られる。

しかし，パロでは自然がそのままで保たれているような破壊されない土地の落着いた美しさが感じられるのである。大きな谷で気持よく休息できるように，そこはどちら側も松の木が青々と生えている丘で囲まれている。みどりの草原にはそよ風が吹き抜けている。蝶々はひかひかと華麗なふるまいでとびかい，赤いくちばしのカラスやカッコーが上手な永遠に続くようなシンホニーをかなでている。さらさらと流れている小川はパロ川にそそぎ込み，澄み切った青空は自然のもっともゴージャスなおとぎの国にぴったりな天蓋を形づくっている。私たちが長い間求めていたヒマラヤの桃源境がそこにあったのだった。

ほんの数軒の家や農家が滑らかに波うっている丘や谷をさえぎっているだけである。この谷の約5,000人の住人たちが安らかな田園生活を彼らの先祖が，そして数えきれないほどのそれ以前からの人たちが過してきたと同じように続けているのであった。しかし，変革の風はパロを容赦なしにおそい，やがてある日，自然のトリデの一つがわがままな技術の猛襲にやむを得ずおとされることになるのであろう。そうなったとき人間は人間の最後の避難所の一つを失なうことになるのである。

〈「インド英字新聞，Times of India」
1972年９月10日号より。　沖　允人訳〉

ブータン関係文献（抄）

〈和　文〉

	著者・編者	文献名	発行所	発行年
1	入江啓四郎	支那辺疆と英露の角逐	ナウカ社	1935
2	F・ヤングハズバンド，村上公三訳	西蔵 ―英帝国の侵略過程	小島書店	1943
3	中尾佐助	秘境ブータン	朝日新聞社	1959
4	外務省アジア局南西アジア課	ブータン事情（非売品）	外務省	1961
5	鈴木中正	チベットをめぐる中印関係史	一橋書房	1962
6	東郷文彦	小さな王国ブータン（写真集）	鹿島出版会	1965
7	東京大学インド植物調査隊編	東部ヒマラヤの植物，写真集	井上書店	1968
8	小方全弘	ブータン素描……美しきヒマラヤの王国	芙蓉書房	1969
9	小方全弘	ブータン感傷旅行	茗渓堂	1970
10	F・M・ベイリー，諏訪多他訳	ヒマラヤ謎の河	あかね書房	1968
11	外務省アジア局南西アジア課	ブータン事情（非売品）	外務省	1972
12	中尾佐助	秘境ブータン　（①の文庫版）	社会思想社	1971
13	日本ヒマラヤ山岳協会・ブータン研究会	ブータン研究（ヒマラヤ研究Ⅴ）（非売品）	日本ヒマラヤ山岳協会	1972
14	V・H・コエロ，三田他訳	シッキムとブータン	集英社	1973
15	早大アジア学会・ブータン研究会	BHUTAN　No.1　（非売品）	早大アジア学会	1974

〈外 国 文〉

1. Turner, Samuel	Account of an Interview Teeshoo Lama and Captain S.Turner--- at the Monastry of Terpaling	Oxford:1789
2. Turner, Samuel	An Account of an Embassy to the Court of the Teshoo Lama in Tibet; Containing a Narrative of a Journey through Bootan and Part of Tibet	Oxford:1800
3. Griffith, William	Journal of Travels in Assam, Burma, Bootan, Afganistan and the Neighbouring Countries	Calcutta: 1847
4. Eden, Ashley	Political Missions to Bootan (1864 Eden, 1837, 1838 Pemberton Reports を含む.)	? :1865
5. Gov. of the U.K. House of Commons	Paper Relating to Bootan; Accounts and Papers 1865, vol.29	London:1865
6. Gov. of the U.K. House of Commons	Further Papers Relating to Bootan; Accounts and Papers 1866, vol.52	London:1866
7. Surgeon, Rennie & David, F.	Bhotan and the Story of the Door War	London:1866
8. Wheeler, J.T.	Summer of the Affairs of Government of India in the Foreign Depatment from 1864 to 1869	Calcutta: 1868
9. Markhan, R.Celements	Narratives of the Mission of Gorge Bogle to Tibet and of the Journey of Thomas Manning to Lhasa (1744 東インド会社の使節としてブータンに入ったときのもの)	London:1879
10.Smith,R.Bosworth	Life of Lord Lawrence, 2 vols.	London:1883
11.Mackenzie, A.	North-East Frontier of Bengal	Calcutta: 1884
12.Mackenzie, A.	A Histry of the Relation of the Govern-ment with Hill Tribes on the North-East Frontier of Bengal	Calcutta: 1884
13.Louis, J.A.H.	The Gates of Thibet	Calcutta: 1884

14.Survey of India	Report on the Exploration in Sikkim, Bhutan and Tibet	Dhera Dun: 1889
15.Penberton, Robert Boileau	Report on Bhutan with an appendix and Maps (Reprint; Indian Studies Past & Present., K.L.Mukhopadya,Calcutta:1961)	Calcutta: 1893
16.Gait, E.A.	A Histry of Assam	Calcutta: 1906
17.White,Jhon Claude	Trough Bhutan with the Mission (スクラップ・ブックから Paul, A.W がまとめたものである)	? :1905
18.White,Jhon Claude	Sikkim and Bhutan, Twenty One Years on the North-East Frontier (1887-1908) (Reprint, シッキムの政務官時代1905,06,07の3回入国)	London:1909
19.Younghusband, Francis	India and Tibet; A Histry of Relations Which Have Subsisted between the two Countries the Time of Warren Hastings to 1910	London:1910
20.Bell, C.A.	Tibet; Past and Present	Oxford:1924
21.Attchson, C.U. ed.	A Collection of Treaties, Engagements and Sanads Relataing to India and Neighbouring Countries, vol.14	Calcutta :1929
22.Ronaldshay, Earlot	Land of the Thanderbolt, Sikkim Chumbi and Bhutan (1921 のブータン行のときの Report)	London:1931
23.Ray, H.C.	The Dynastic Histry of Northern India, 2 vols.	Calcutta: 1931
24.Barura,K.L.	Eary Histry of Kamarupa	Shillong: 1933
25.Banerjee, Anil Chandra	The Eastern Frontier of British India (Reprint, The Eastern Frontier of British India. 1724-1826)	Calcutta: 1934
26.Gansser,A	Thron der Götter (英訳; Thrones of the Gods; First Swiss Expedition 1938)	? :1938

27.Chapman,F.Spencer	Lhasa; The Holy City	London:1938
28.Chapman,F.Spencer	Helveuyn to Himalaya(1937 チョモラーリ登攀記念)	:1940
29.Gleig, G.R	Memories of the Life of the Right Hon'ble Waren Hastings, 3 vols.	London:1941
30.Ghoshal, Sarat Chandra	A Histry of Cooch Behar(Translate from, Kochbiharer Itihas (Cooch Beher:1930)	Cooch Beher :1942
31.Sen,S.N. ed.	Prachin Bangla Patra Sankalan,(Hindi)	Calcutta: 1942
32.Baily, F.M	China-Tibet-Assam; A Journey, 1911	:1945
33.Petech,L	China and Tibet in the Early 18th Century	London:1950
34.Nebesky & Wojkowitz	Wo Berge Götter sind. Drei Jhare bei unerforschten (英訳; Where the Gods are Mountains. Müchen 1955)	Stuttgart: 1955
35.Evans-Wentz, W.Y	Das tibelisch Buch der großen Befreiung	München: 1956
36.Hoffman, Helmut	Die Religionen Tibets; Bon und Lamaismus in Ihrer Geschichtlichen	München: 1956
37.Gould,B.J.	The Jewel in the Lotus; Recollections of an India Political	London:1957
38.Bailey, F.M.	No Passport to Tibet	London:1957
39.Gov. of India, Lok Sabha Secteriat	Foregn Policy of India: Texts and Documents (第2版)	New Delhi: 1959
40.Elwin,V.	The North-East Frontier in the Nineteenth Century	Bombay:1959
41.Legal Inquiry Committee on Tibet	Tibet and the Chinese People's Republic: A Report to the International Commission of Jurist	Geneva:1960
42.Prakash,Ram	The Foreign Ploicy of Waren Hastings	Hoshiarpur: 1960

43.Haab,Armin	Bhutan-Fürstestaat am Götterthron (カラー写真が美しい)	Gütersloh: 1961
44.Alder,G.J.	British India's Northern Frontier 1865-1895; A Study in Imperial Policy	London:1963
45.Karan,P.P.	The Himalayan Kingdoms; Bhutan Sikkim and Nepal	Kentaky: 1963
46.Gov. of Sikkim	Concise Chronicle	Gangtok: 1963
47.Gansser, Augusto	Geology of the Himalaya	London:1964
48.Johri, S.R.	Our Borderlands (Bhutan p.59-64)	? :1964
49.Gerge,L.Harris et al.	U.S. Army Area Handbook for Nepal with Sikkim and Bhutan	Washington: 1964
50.Kakodhar,A	Bhutan and Sikkim	? :1965
51.Blanche,C.Olschck	Sikkim: Himalayastaat zwischen Gletschern und Dschungen (英訳: Sikkim; Himalayan State between Glaciers and Jungles)	Zurich:1965
52.Goyal,N	Political History of the Himalaya States; Tibet, Nepal, Bhutan, Sikkim and Nagaland since 1947	? :1966
53.Blance,C.Olschck	Perlen Alttibetischer Literatur (英訳: Basel Jewels of Tibetan Literature. ポケット版: Stufenwege der Erleuchtung,	:1967 Munchen:1970)
54.Karan,P.Prasymna	Bhutan; A Physical and Caltural Geography	Lexington: 1967
55.Shakabpa	Tibet; A Political History	New Haven Con :1967
56.Rahul, Ram	The Government and Political of Tibet	New Delhi: 1969
57.Blanchem,C.Olschck & Ganser,Augusto	Bhutan; Land of Hidden Treasures	? :1969
58.Rahul,Ram	The Himalayan Border Land	Delhi :1969

59.Steel,Peter	Two and Two Halves to Bhutan (東部国境までの夫婦と子供二人のブータン旅行)	New Delhi:1970
60.Michel,Peissel	Lord and Lamas; A Solitary Expedition Across the Secret Himalaya	London :1970
61.Hellmuth,Hecker	Sikkim and Bhutan (政治自ら子研究が中心)	? :1970
62.Labh,K	India and Bhutan 1858-1910	? :1970
63.Prajauskas,A	Bhutan-Sikkim	Moscow:1970
64.Rahul,Ram	Modern Bhutan	Delhi :1971
65.Rustomji,K.Nari	Enchanted Frontiers; Sikkim, Bhutan and India's North Eastern Borderlands	Bombay:1971
66.Olschck,C.Blanch	Bilder Alttibetischer Kunst (英訳: Pictures of Old-Tibetan Art)	Bern :1971
67.Coelho,V.H.	Sikkim and Bhutan (一般的な外国情の解説)	New Delhi: 1971
68.Olshck,C.Blanch	Bhutan: Early History	Zürich & Basel :1971
69.Woodcock,George	Indo-Tibet, The Early British Explores	London:1971
70.Singh,Nagendra	Bhutan A Kingdom in the Himalayas	New Delhi: 1972
71.Nirmala,Das	The Dragon Country	New Delhi: 1974
72.Shibankinkar,Chaube	Hill Politics in North-East India	:1974
73.Mehra,G.N.	Bhutan, Land of the Peaceful Dragon	Delhi :1974
74.Labh,Kapileshwar	India and Bhutan	New Delhi: 1974

ブータン政府のマーク

シッキム・アッサム
SIKKIM & ASSAM

シッキム王国の終焉……沖　允人…… 77
シッキム　併合でなく連合 ……I・マラトラ…… 84
シッキム冬の旅……沖　允人…… 89
写真 ダージリン・シッキム
カリンポン・アッサム……沖　允人…… 97
カンチェンジュンガの見える旅…佐々木　正…… 108
シッキムとアッサムの旅……藤井　毅…… 109
アッサム・ガイド　青い丘と緑の谷 ……藤井　毅…… 125
アッサム日記……矢野　郁雄…… 130
アッサムの奥地に入る……沖　允人…… 134
アッサムに関する文献（抄）……144
カンチェンジュンガ山麓トレッキング……文　菊地　薫 写真 佐々木正 …. 147

シッキム王国の終焉

沖　　允人

ヒマラヤ山地の住民たち

ヒマラヤの小さな王国，シッキムがなくなった。去る50年4月14日に行われたシッキムの国民投票で「王制の廃止ならびにインドとの併合」の是非を問い，その結果59,631票対1496票という圧倒的多数で王制の廃止とインドの22番目の州として併合されることが決まったという。昨年の9月4日にシッキムをインドの準州とすることを，シッキムのドルジ首相はかなりの反対を押しきって決めたばかりであった。準州が決まったあとも実権を剝奪（はくだつ）されたナムギャル・シッキム王は，この決定に再三反対の意を強く表明した。そして，ネパールなど隣接国もインドのやり方を内政干渉だと激しく抗議した。ネパールではインド大使館の経営する図書館の一部をこわしたり，トリスル発電所建設の指導にきていたインド人技師をつるし上げるというような不穏な動きもあった。中国も「インドの領土拡張主義のあらわれだ」と非難している。そのようなごたごたがあってまだ半年しかたっていない，4月17日にはガンジー・インド首相は，シッキムを正式にインドの州とするための憲法改正案を出す話し合いを野党と始め，その5日あとの4月23日には，この改正案を圧倒的多数で決定した。おどろくほどのスピードぶりである。

揺れ動くヒマラヤの国

1974年，私はインドに滞在中，機会を見てシッキムを訪れた。あの緑におおわれたおとぎの国のような景色，人なつこい素朴な人々の住む150年あまりも続いたヒマラヤの王国が消え去ってしまった。いったい何がそうさせたのであろうか。

ネパールとブータンにはさまれて横たわる人口25万人ほど，面積2,800km^2の小さなシッキムの首都はガントックである。カルカッタからバグドグラというインド北部の小さい飛行場に飛び，そこから車にゆられて山道を登り，やっとの思いでダージリンに着く。そこでさらに車を乗りついでヒマラヤ支脈の一つを越え，いったんティスタ川まで下り，もう一度登りかえしてガントックに着く。ダージリンから98kmほどの道のりがある。カルカッタからどんなに急いでも3日はかかる辺境である。また，シッキムに入国するには物理的な距離だけでなく，政治的な距離ともいえる，入域許可取得までの煩雑（はんざつ）な手続き，それに要所要所にあるチェック・ポストと呼ばれる検問所での厳重な検査がある。ダージリンのような観光地でさえもインドのビザだけでは不十分で，期限を限られた入域許可が必要となる。いわんやシッキムはさらにその奥である。

昔からスパイの街

ガントック とダージリンの中間にあるカリンポンは昔からスパイの町として知られている。中国やブータンなどから陸路でやってくるのに都合がよく，気候も温和，地形も複雑で，いろんな秘密の会合をするのに好都合だったのであろう。あるいは他国人をうさんくさそうに見ないカリンポンの人たちの気風に加えて，古くからイギリス人などの入り込んでいた国際的ともいえるふん囲気のせいかも知れない。今でもカリンポンにはそのころ

の教会や学校が残っている。シッキムとチベットの国境にはいくつもの，比較的容易に越えられる峠がある。今でもこれらの峠は軍事的に重要で，東部中印国境の紛争がおこるたびにシッキム・チベットの国境は火を噴くのである。1967年に中国とインドが戦ったガントックの東方にあるナツ・ラ（ラは峠の意）も，昔からの隊商路の一つであった。

カリンポンの街

カリンポンは標高1250mにある絵のような街でインド平原に比較して夏でも平均20℃位と涼しく，冬も零下に下ることはない。

人口は1961年当時25,000人であったので，現在は30,000人たらずであろうか。

ダージリンの方からむかうとティスタ川を渡り，じぐざぐに登っていき，やっとの思いでカリンポンの街が見え出す。ダージリンとカリンポンの間にはバスが走っていて3時間ほどかかる。距離は40kmほどである。ダージリンを経ないでシリグリに直接出るコースもあり，道は悪いが距離は67kmと近い。しかし，3時間はかかる。合乗りジープが走っている。

カリンポンの観光地としては次のようなところがある。自動車（タクシーがある）をチャーターすれば半日ほどでまわれる。

• Dr．グラハムの家

Dr．ジョーン・アンダーソン・グラハムが1900年に6人の弧児のために創立した学校がグラハムの家と呼ばれ，今でも残っている。現在は約700人の生徒が学んでいる。学校はカリンポンの一番高い「デロ」という丘の広大な敷地に建っており，あたりは緑の木と花でうまっている。

ここでは生徒たちはいくつかの寄宿舎にハウス・マザーと呼ばれるおばさんや先生と一緒に住んでいる。学校は自分のところで牧場，パン屋などをもっている。毎年5月には5月祭を開き，5月の女王を選んだりしてカリンポンの名物祭りになっている。

Dr．グラハムは彼の一生をこの学校の建設にささげ1942年に死んだ。

• タルパ・チョアリン寺

グラハムの学校へ行く途中の右手，1937年頃に開けたトリパイの丘の斜面にあり，現在のダライラマの指揮下にある寺で，ラマ教の黄帽派に属する。古ぼけた門を入るとマニ車の並ぶ本堂，その左手に僧房がある。大きいタルチョーの旗が風にたなびいている。1692年頃に建てられた古いものである。

内部はそんなに広くないが，仏像や壁画が沢山ある。すぐそばには中国風のリング寺がある。

• カリンポン手工業品製作所

タクシーやバス・スタンドの近くにあるこの建物の中には10人ほどの女性が，チベット風の織物か壁掛けなどを製作して売っている。デザインのオリジナルはブータンやチベットのものである。

• スイス酪農場

カリンポンの街からティスタ川の方へ4kmもどったペドンというところにあるこの酪農場は，「Swiss Welfare Dairy」と呼ばれている。ずっと以前にスイス人の宣教師，アンドリュース・ブッティが最初にチーズ作りを指導したのが，ここの始まりだという。

中に入ってみるとスイス風の服を着た女性が，チーズと砂糖で固めたあめ「ロリィポップ」を作っていた。甘くてちょっとミルクの味がしてうまかった。

ヨーグルトもあり，一杯30円ほどで，砂糖をかけて食べたが，これも美味であった。

ここのチーズはインド内だけでなく外国へも輸出されている。

• ドルピン・ダラ

軍隊の基地の中の道を通って山へ登って行くとちょっとしたピークに出る。コンクリートで作られたラマ寺，ザン・ドグ・パルリ・フオブラン（Zang Dog Palri Fo Brang）という長い名前の寺がある。寺はまだ完成しておらず，内部にはほとんど何もないが，この寺の屋上に上ることができ，そこからの眺めがよい。

カリンポン全市を眼下に，ティスタ川，リーン川が眺められ，晴れた日ならカンチェンジュンガ山群，シッキムの一部，そして，タクダーやタイガーなどの丘も見える。

寺のまわりは軍隊が沢山駐留しているので写真撮影は厳禁となっている。

この寺の屋上でのんびりと風景を眺めているとインド北辺部の国境争いのことなど別の世界のような気がする。若いインド人の奥さんが子供を2人つれてきて，お堂のまわりをぐるぐるまわっては祈りをささげていた。小さい裸足の足がチョコチョコと動いて可愛かった。

• ガウリプール・ハウス

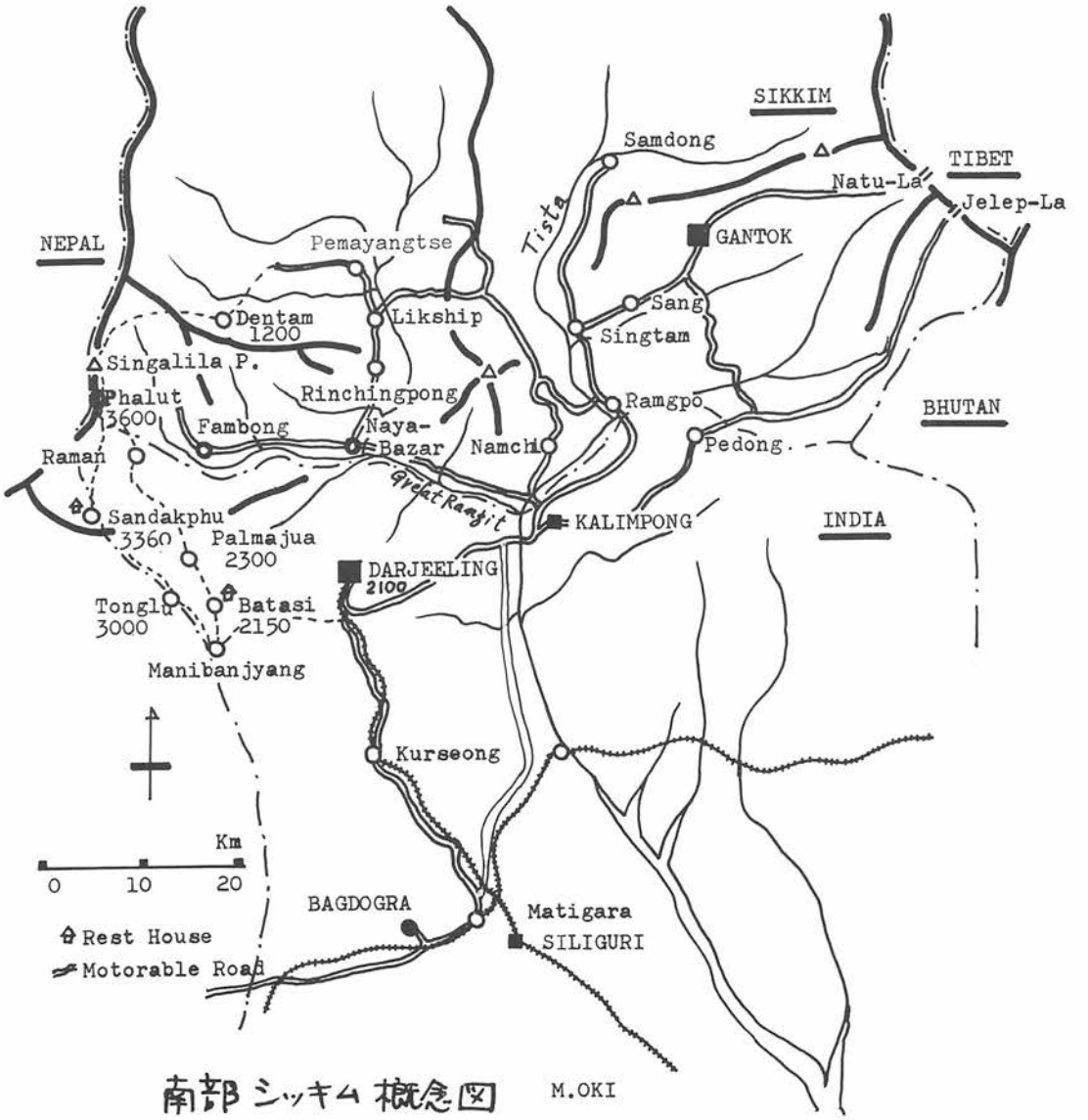
ノーベル賞文学者，タゴールもカリンポンを愛し，数度ここに滞在したことがある。そのときの家がこのガウリプール・ハウスで，ドルピン・ダラへの途中にある。

彼はここで有名なジャンマディンという詩をつくった。1940年9月28日がこのハウスに泊った最後の日であった。

今はこのハウスは技術学校になっている。

• カリンポン・マーケット

「ハット」とも呼ばれるマーケットはチベット人難民も店を出していて，野菜屋，土産物屋とい



南部シッキム概念図　M.OKI

ろんな店があって歩くだけでも楽しい。そして，この店にやってくる人々は「グンニュウ」を着たネパール人，「バクー」を着たチベット人，シッキム人，「ケーラ」を着たブータン人，「ガダ」を着たレプチャ人，ミニスカートのベンガル女性といろとりどりで，まさに人種のルツボといってよい。(Gunew, Bakhu, Gada, Keera)

毎週水曜日と土曜日に開かれるオールドバザールでは10㎞，20㎞も遠くの村から野菜，卵，魚などをかついで売りに来る農家か山村の人の市が立ち，まるでお祭りのように賑やかである。

• 近くのピクニック地

ブータン寺のあるリシイスムの森（Rissisum）がカリンポンから20㎞，標高2100mほどのところにある。32㎞行ったところにはラバの森(Lava)があり，近くにはジェレパラやリチェラ(Jelepla, Richela)の峠があって，ハイキングによい。標高は2300m位である。また，50㎞ほどのところにあるロライ・ゴーンの森（Lolay Gaom）は標高は1500mほどと低いが，ここからの日の出はダージリンのタイガー・ヒルにおとらないといわれている。

これらピクニック地にはダック・バンガローがあり，宿泊ができる。

• カリンポンの宿泊

Luxury Tourist Lodge

山の手にあるデラックスな宿で1人2食つきで50RPほどで高いが，なかなか立派な造りである。

町の中にも Shangrila Tourist Lodge というのがあって一泊8RPほど（宿泊のみ）である。シャングリ・ラ（桃源境）とまではいかないが，きれいな宿である。

ホテルはいいものはないが，Himalayan Hotel，Gomphu Hotelなどカリンポンらしい名前の安ホテルがある。Gomphuには中華料理のレストランもあってなかなかいい味である。いずれも市の中心に近いところにある。

Dharmasalas という無料の巡礼宿もある。不潔であるが，それを気にしなければインドの木賃宿を経験するのに一泊するのも悪くない。ダルマサラとはヒンズー教の信者のための宿であり，インド各地にあるが，信者以外でも泊めてくれる。電気代など1人1RPくらいとられることもある。

レプチャの国であったカリンポン

レプチャ人は自分たちのことをロン(Rong)と呼んでいる。カリンポンは昔はシッキムの一部であった。しかし，ガントックあたりとは密林で隔絶されていたので独立するようになった。そして，レプチャ人独特の言葉も持つようになった。レプチャはモンゴロイド系の民族であり，日本人に非常に似ている。

カリンポンもいくつかの戦の波に洗われている。1706年にはティスタ川の東から入って来たブータン人との戦があり，その結果ブータンの統治が，1865年まで続いた。1865年にイギリスがこの地区を治めるようになり，カリンポンはイギリスの支配下となった。この頃に建てられたベドン寺などはブータン風の造りになっている。

1970年代から50年ほどは，カリンポンはインドとチベットの通商の地として栄えた。毎日毎日，チベットから荷を運ぶミュールの音が聞こえていたという。

今世紀の始めにはネパールからダージリンを通ってネパール人が移住してきて，カリンポンの丘を畠にしはじめ農業を盛んにした。現在ではネパール人も多く住んでいてかなりの勢力をもっている。レプチャ人はだんだんその後進性の故にすみの方へ追いやられつつある。

このようにカリンポンは色々な人々のフロンティアとして求められ，変化し，発達してきたといえよう。その故にカリンポンはニックネームとして“最後のフロンティア”(Last Frontier)と呼ばれている。

チベット文字で“シッキム王国”と書いてある

ガントック

ダージリンとガントック（20RP），カリンポンとガントック（12RP），シリグリとガントック（14RP）の間にはそれぞれ定期バスが走っている。ダージリンからガントックまで98kmであるが登り下りが多いので4～5時間かかる。

ガントックではジープやランドローバーをハイヤーして観光することができる。

宿泊のできるところは，Norkhil Hotel，Green Hotel，Paradise Hotel，Denjong Hotel，Kanchen View Hotel などがある。Norkhilを除いては，あまりよいホテルではないが，一応ベットはある。

観光地としてはPciden Thondup手工業所，王宮の近くの仏教の寺（Tsukla—Khang），鹿のいる公園，チベット学研究所などである。

少しガントックから出たところでは，6kmほど行ったところにあるTashi View Pointというカンチェンジュンガの展望台，16kmほど遠くにあるRock Garden，さらに9kmほど遠くのRuntek Monasteryがある。

また，シッキムはシャクナゲやヒマラヤ五葉松，ミカンなど花と植物の宝庫でもある。

ガントックは山の斜面にできた，ほとんど平たんなところのない標高1768mの町である。どこへ行くのにも急な坂道を登り下りしなければならない。家の裏々を抜ける近道は迷路のように通じ，カスバを思わせる。そんな道を市の中心から1時間も行くとチベット学研究所がある。多くのチベット学者のメッカともいえるところで，数万冊の蔵書があり，何十人もの学僧がいて，なかには外国人の長期留学者もいる。

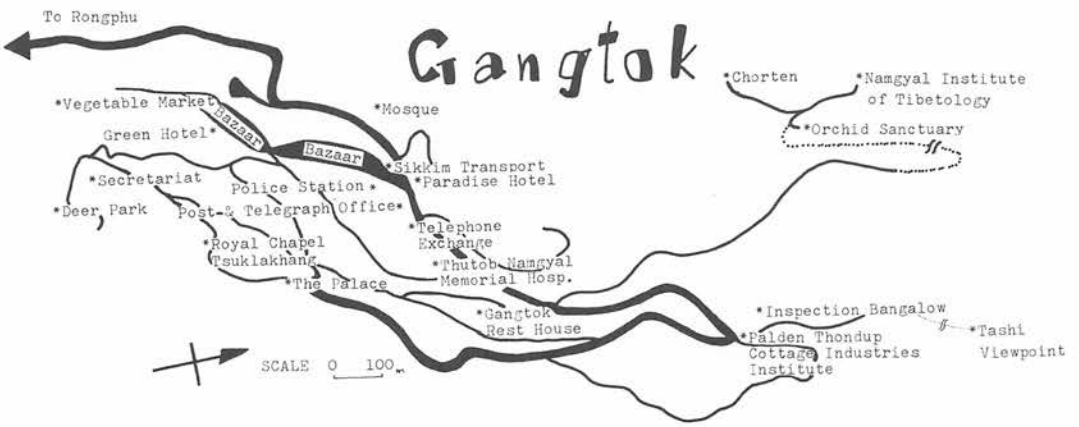
レプチャ人の結婚式

昔からのシッキム人はレプチャ族で，顔つきはもちろん，いくつかの単語も日本語とよく似たものもあり，シッキムの人たちと話しているとレプチャ族は“日本人の起源”だという説もうなづける。例えば1，2，3はチク，ニー，サン……といったりする。シッキムの人たちは信心深く，ラマ教を信仰している。

ガントックの町を歩いていると，にぎやかな音楽が聞こえている家があった。何事だろうと立ち止まってのぞいていると，その家の主人に招じられた。中に入ってみると，家の中はきれいに飾られており，ごちそうが並んでいる。結婚式だという。「遠来の人，ようこそ」というわけでお客さんにされてしまった。カレーライスなどのほかにカリントウ，野菜いためなどが山のように盛られ，別室にはシッキム製のラム酒が用意してある。なかなか味もかおりもよい。インドでもシッキム・ラムは高級品扱いである。

シッキムのおどり

結婚式やお祭りにはダンスがつきものである。



ダンスはおどりそのものの楽しみの他に，民族の伝統も感じさせてくれる。

動物や悪魔の面，絹のきらびやかな衣裳，チベット風な靴などをつけるのは祭のときのマスク・ダンスと呼ばれるものである。これらはラマ教のゴンパに奉納されるものが多く，宗教儀式の一つともなっている。かなり重い衣裳や面をつけ，激しくおどるので，シッキムのダンスはすべて男性によっている。

ダンスのうち年間で大きなものは2つある。

一つは“戦士のおどり”と呼ばれるもので，カンチェンジュンガの雪の峰々に捧げられる。シッキムの人にとって雪をいだいたカンチェンジュンガは神様なのである。シッキムの第3代の王，チョダール・ナムギャル時代に始まり250年以上も続いている。戦争を表わすしぐさ，ひらひらするコートは戦いの激しさを示し，雪ひょうの面をかむったおどり手もおどる。

もう一つの機会はシッキムの新年である。シッキムの新年はロソーング（Lossoong）と呼ばれ，西洋暦の2月ごろである。有名な“黒い帽子のおどり”が悪魔と善人の争いを示し，善人が悪魔を倒しておどりが終る。“骸骨のおどり”“鹿のおどり”も興味深い。

リンブー・チュヤブルン（Limboo Chyabrung）という民族ダンスは，穀物の収獲を祝うものである。開いた掌にローソクをもっておどるタマン・ナッチ（Tamang Natch）やマルニ（Maruni）のおどりも面白い。

レプチャ族のおどりはにぎやかで楽しい。歌を歌いながらステップを踏み，夕方から朝までおどることもある。私たちが訪れた結婚式のときもそうであった。

シッキムのおどりは伝統的な美しさとともに，めぐりくるシーズンを教えてくれるものとしてなくてはならない風物詩となっている。

この家の主人はレプチャ族でシッキムの国会議員をしているという。それとなくシッキムの政情を聞いてみた。

不満もらす少数派

「最近はネパール系人の動きが強く，工作員がもぐり込み，学生をあおっているようで，何かおこりそうです。」という。「シッキムは，もともとレプチャの国なんですよ。伝統的様式を守り，みんなと仲よく楽しくくらすのがレプチャの流儀なんです。インドやネパールとはちょっと違うんです。」と，酒のせいもあってか少数派といわれるレプチャ族の不満をもらしていた。シッキム国民の25％ほどのレプチャ族の人たちは，レプチャ族出身であるナムギャル王をいただきながらも，交易を通じて経済力にすぐれた親インド的ネパール系人に押され気味であったのだろう。今回のシッキムのインドへの併合は，中印国境の要ともいえるシッキムを，どうしても自分のものとしておきたいインドが，ネパール系とレプチャ系の対立をうまく利用したという見方もできる。

〈左〉 現シッキム国王
正式の名はチョギャル・パルデン・トンダップ・ナムギャルという。1923年5月22日ガントックに生れた。

〈右〉 現シッキム王妃
アメリカ生れで旧姓はホープ・クーキという。

（シッキム発行のパンフレットより転載）

西シッキムへ

通常，外国人は3日間，ガントックだけしか滞在が許可されないのだが，私は山が見たいからと頼んで特別にもう2日延長してもらい，さらにガントックから西の方への旅行許可も得た。

シッキムは山好きにとってはまさに桃源境である。かつてカンチェンジュンガを一周したヒマラヤニストのフレッシュフィルドが「これ以上高貴な山は想像することができない」といったというシニオルチュをはじめ，未踏の鋭峰の連なるネパールとシッキム国境の山々への接近路として知られているからである。インドがシッキムの外交権をにぎり，外国登山家や旅行者をしめ出してから30年あまりがすぎている。西部のペマヤンツェの丘に登れば，これらの山を見ることができるのである。トラックの荷台に乗り，山を越え，谷を渡って移動した西シッキムへの旅はつらいものであったが，途中の茶屋で一ぱいのお茶を飲みながら村人たちとの心あたたまる交流，そして山また山と続く奥深い風景は，シッキムミカンの糖分の多い味とともに，忘れられない思い出となっている。

昨年6月に新国王の戴冠（たいかん）式をあげたブータン，この2月に同じく戴冠式を盛大におこなって新しい国づくりを始めたネパール。この2つのヒマラヤの王国にはさまれたシッキムが，時を経ずして王制に終わりをつげるということは何と皮肉なことであろうか。

ゴ ン パ

シッキムには67のゴンパがある。あの小さい国に67もあるのだから，いたるところにゴンパがあるといった感じである。

一番有名なのがシッキム国王に直結している西シッキムのペマヤンツェのゴンパである。

ガントックの近くのナッラの峠へ行く途中にあるエンチェン寺，18㎞ほどへだたったルムテックの農村の中にある古いルムテック寺や，新しいキャラワ・カルマパの寺も大きい。

V・H・コエロ（三田幸夫・内山正熊訳）の，「シッキムとブータン」によると，有名なシッキムのゴンパは次のようなものである。

シッキムの僧院

所在地	シッキム語による語意	建設年代
サンガ・チョリン	奥義を伝授する地	1697
ドゥブディ	隠遁・隠れ家	1701
ペミオンチ	崇高な蓮	1705
タシディン	縁起の良い地	1716
ジルノン	熱烈な信仰に燃る隠遁者	1716
リンチェンポン	宝石の丘	1730
ララン	山羊の遊ぶ所	1730
メーリ	レプチャ人の村	1740
ルムテク	神は立去りぬ	1740
ポドン	マナルの雉	1740
ツン・タン	宝石の女王の牧場	1788
カ・コッド・パーリ	神々の住み賜う場所	
タン・モチェン	大平原	1788
トゥルン	山芋の谷間	1789
ナム・ツェ	天　界	1836
エンチェイ	高く静かな所	1840
ペンゾン	ある蘭の名称	1840
カトック	兆　し	1840
ドリン	落　雷	1840
ヤンガン	幸せの峰	1841
ラブラン	ラマの家	1844
ポンポ・スガン	ボンの丘	1850
ルン・ツェ	自らを創造した峰	1850
セネク	峰の上のくぼみ	1850
リンゴン	僧院の丘	1852
リンテム	レプチャの村	1855
ツァ・ンゲ	草が刈られた場所	
ラチェン	大きな峠	1858
ギャタン	荘大なる平原	1860
パギャル	崇高でぬきん出ている事	1862
ノブリン	西方の地	1875
パビュク	野生の竹の茂る	1875
シンタム	預けられた木	1884

（朝日新聞　昭和50年4月23日夕刊　文化欄に発表したものに補筆したものである。）

シッキム ——併合でなく連合——

I. マラトラ

シッキムは独立していたか

シッキムはその歴史において，今だかつて独立国であった事実はない。

インドとは分れた存在であっても，決して独立した存在ではなかった。そのシッキムの地位は，ヒマラヤ山脈に沿った力の平均しだいで，時々うつり変ってきた。その移り変わりのなかで最近のインドの保護国から共和国の準州への変化は，中国のチベット占領と，その後の情勢の進展によって動かされた社会的権力の究極のものである。

シッキムの地位の変化については，2つの重要な事実がある。ひとつは，インドとの連合はシッキム議会の圧倒的多数の承認を得て決定されたということである。もうひとつは，シッキムとの連合により，インドはこのうえなく重要な戦略上の利益を守ることができるということである。

合併を主張

インド独立初期の頃，大多数のインド人にとって，いうまでもなく外国人も，地図の上でシッキムを指し示すことはむずかしかったにちがいない。たとえ，インド亜大陸東北部のちっぽけな地域（112 km × 65 km ）に気づいていたとしてもそこがどのような所であるかまでを知っている人はほとんどいなかった。人々はシッキムを，当時インド国内に点在していた560余の藩王国のひとつぐらいに思っていた。

当時のシッキム国王（現在の国王の父）を彼の思うままにさせておいたなら，手におえない程の反対を唱える少数の土侯国王を除いて，他の大多数の国王のように，シッキムをインドと合併させていただろう。シッキムの人々はといえば，合併は彼らの望んでいたものであることには何の疑いもなかった。

シッキムの人々は，彼らの主張を訴えるため，デリーに幾たびか代表団を派遣し，精力的にインドとの合併を主張しつづけた。そして，それは，1973年4月にガントックでのデモという形であらわれてきた。

筆者は，デリー中央駅からそう遠くない，今にも倒れそうなオールド・デリー・ホテルを，当時シッキム国民会議派の尊敬すべき政治家だったタシ・ツェリンに会うために訪れたことを思いだした。

そのホテルを訪れた筆者は，インド政府が，かくも無気力で不公平なのかと悲しい思いにかられたものだった。

「なぜ，シッキム国民は他のすべてのインド人が享受している独立のよろこびと思想の享受を否定されなければならないのだろう。」タシ・ツェリンはこう語ったのだった。

未来への構想の欠如

インドとシッキム双方にとっての悲劇とは，インドを独立に導き，ニューデリーの中央政府を指導している人々が，ツェリンの「シッキム国民とインド国民を同等に扱えという要求に答えるのをおこたることは，インドにとって将来高価な代償を支払わなければならなくなるだろう。」という警告的な言葉に耳をかさなかったことである。

もちろん，ジャワハルラール・ネルーと，彼にシッキムを他の藩王国と幾分異なった扱いにすることをすすめた人たちには，それなりの考えがあったことは言うまでもない。

ネルーとシッキム国王は，最初にシッキムと英領インドの間に存在していた関係を継続させるための，即ち，インドが英のシッキムに対する宗主権を受けつぐという内容の，現状維持協定を調印した。そのあとに，新しい条約の交渉にはいり，それは1950年12月5日に調印された。その1950年の条約によってシッキムはインドの保護国となっ

たわけだ。

決して独立していなかった

われわれが，シッキム問題についてのどのような議論をするにしても，まず認識しておかなければならないことがある。それは，シッキムはその歴史において，国際関係においてなんらかの働きをしたことが全くなかったという基本的な事実である。

確かに，シッキムはインドとは境界線を隔てて，別な“領土”を持ってはいる。しかし，その“領土”も，単にナガ族やミゾ族がそれぞれの住む土地を持っているのと同じ意味あいにおいてでしかない。

分離地域というものは，決して独立国といっしょにできないし，すべきでもない。

シッキムの地位は，ネパールやブータンとは決して同じものではなかった。シッキムの地位はヒマラヤ山脈をめぐる力関係次第で移り変ってきた。

シッキムをめぐる基本的事実は，北京で最近のシッキムでの情勢の進展に反対し，1968年のソビエトによるチェコスロバキア侵入にたとえようとしている毛沢東主義者たちにあてはめてもよい。

しかし，他の人々，とりわけ殊勝ぶったたわごとを並べたて，シッキムは併合されたと声高にさけびたてているインドの批評家たちは，その愚かさを知るべきである。

歴史は語る

シッキムが，今だかつて独立していなかったことを説明するのに，この地域がネパールに支配されていたときや，ブータンとシッキムが浅瀬だった数十億年もの昔までさかのぼる必要はない。

現在に至るまでの歴史を語るのは，13世紀にアッサムからのレプチャ族の移住者が，シッキムにたどりついた頃からで十分である。ブーティアとチベットの一部族がシッキムに住みつくようになったのは，それよりも後のことになる。

いずれにしても，シッキムは1641年にギャルポと呼ばれる仏教徒の王に統治される政治的存在として認められるまで，歴史にはあらわれてこなかった。

チベットは，18世紀初期にブータンがシッキムに侵入するときまで，シッキムをチベットの一属国として扱いつづけた。シッキムに侵入したブータン人の大軍はシッキムの人々の国土を奪い，町や村を襲ったばかりでなく，人々を奴隷として連れ去った。

その後，ネパールがブータン人を駆逐し，シッキムの土地を支配するようになった。

もし，インドにおいて英国勢力の抬頭がなかったら，シッキムがネパールとブータンに分割されていたかもしれないということは，実際にありえたことだったのだ。

歴史的事実として，シッキムを独立国として，国連の一加盟国にしようなどという妄想を抱く人々は，このことをよく考えてみたほうがよい。

英国の“援助”

おもしろいことに，ワーテルローの戦いでウェリントン将軍がナポレオンに打ち勝った年である1815年は，シッキムとその近隣の諸国にとっても重大な意味合いを持った年になった。

その年，英国の軍隊がシッキムに，援助を目的とし介入し，グルカ族を駆逐したのだった。

その2年後，ネパールとシッキム国境に関する条約が締結された。

ネパール勢力を駆逐してくれたことに対する返礼の意味やら，増々強大化していく英勢力への敏感な認識もあってか，シッキム王室は1835年に，ウィリアム・ベンティンク卿にダージリン丘陵を割譲した。

このことを知ったチベットの支配者たちは，大変怒り，シッキムのギャルポに，神聖な都，ラサへの立ち入りを8年ものあいだ禁じたのだった。

シッキム王室と，英国勢力とのいさかいや，シッキム官吏が，著名な英国人旅行者を不当に扱ったことなどがあいまって，シッキムは英国に，その当時の首都であったタムランを含めた大幅な介入を認めることを余儀無くされた。

そして，ついに1861年の条約により，シッキム

における英国勢力の優越は完全に承認されることとなった。

1889年，ジャワハルラール・ネルーの誕生したこの年，最初のインド帝国の派遣政治代表である，ジョン・クロード・ホワイトがガントックに着任した。彼は効果的に行政を担当し，シッキムの支配者に統治権を再委託した。このシッキムの英国支配は，インドの独立する時までつづくことになる。

英国の支配におかれた50年以上の間に，２つのたいへん重要な出来事がおこった。

最初のものは，シッキムとチベットとの国境線が，議論の余地もなく，ガントックとラサの合意ではなしに，中国とインド帝国の両政府の合意の結果として確定されてしまったことである。これは1890年のことだが，どんなに詭弁をろうそうとも，中国がインドにおける英国の優越を認めた事実は変え難い。

このことは，1960年４月29日の夜のこと，周恩来が中印国境をめぐるネルーとの交渉に完全に失敗したとき，「中国は，インドのシッキムとの特別な関係を十分理解する。」と話しあったことで説明できるかもしれない。

もうひとつの決定的な出来事は，ヒンズー教を信仰するネパール人のシッキムへの大規模な移民である。この移民は，人口統計学上の不同と人種上の不均衡状態をまねき，それにより生じた事態は，この国のむずかしさにより一層の輪をかけることとなった。

シッキムにいるネパール系住民は，シッキム総人口の多くて４分の３で，約25万人になる。この数は，ボンベイ市におけるユダヤ人の数，デリーの労働者，シュードラの数とだいたい同じになる。

こうしてみると，シッキムの現在の支配者が属しているチベット系のレプチャ・ブーティア族は少数派なわけだが，いまだにシッキムを支配しているのだ。

振り返ってみると，ネルーと彼の軍隊がインド独立後３年のあいだに，シッキムで犯した誤ちは実にＮＥＦＡからラダックにいたる中印国境の北東辺境区全体で犯した誤ちの中で最大のものである。

いみじくも，サーヴェパリ・ラダクリシュナン博士が“軽信と怠慢”と呼んだ，ネルーの一連の政策の輪郭はすでに衆知の通りである。

インド外務省の目というものは，中国がインドの抗議にもかかわらず1950年にチベットを占領したあとでさえ，開かれてはいなかった。

皮肉にも，インド国内でシッキムの準州化に反対し，耳ざわりな叫び声をあげている人々や，チベットをめぐって中国と開戦することを主張する人々も含めて，ニューデリーは中国のチベット占領を受け入れざるを得なかった。

しかし，中印境界問題を解決するのに絶好の機会は，1954年にチベットをめぐる中印条約が，まさに持ちあがってきたばかりの境界問題を抜きにして結ばれたことにより失なわれてしまった。

中国が，インド領土であるラダックとＮＥＦＡとバラホティを侵略し，チベットの習慣を軽視し，ダライラマの脱出をみたあとでさえ，インド戦略と防衛についての中国の政策の重要さは理解されなかった。

もしネルーが，シッキムを他の地方と併合するよりは，保護国として維持し，中国宗主権のもとでチベット自治の継続と中国政府の好意を買おうと思っていたのなら，彼のその幻想はとうの昔に打ち砕かれていただろう。

しかしながら，ネルーと彼の顧問たちは，当時のマハラジクマール，現在のチョギャルの国際舞台に登場したいという野望に手をかすことによって，インドの重要な利益を犠牲にし，同時に，彼に抑圧されているシッキムの多くの人々と敵対するような愚かな政策に固執した。

失なわれた希望

このような，近視眼的な行動は，中国の脅威の真の大きさが理解されていなかった時だったからこそ，認められたのかもしれない。

ミス・ホープ・クーキとの結婚があったのは，1963年のことだった。彼女がその後，シッキムをアジアのスイスとして演出しようとした動きは……そのような試みは，以前カシミールにおいて失敗に帰している欺瞞なのだが……その結婚のもつ

意味合いを証明することとなった。1973年4月，シッキムでの事態が抜き差しならなくなったとき彼女が突如として，ニューヨークへ向けて出発したのはまさにそれを表わしている。

1965年に，シッキムのマハラジャは，王の意味であるチョギャルを名乗ることを許され，同時に彼の妻であるアメリカ人はギャルモとなった。

チョギャルとギャルモ，それにチョギャルの魅力的な姉妹たちは，シッキムの国歌と国旗の制定，国連への加盟という望みを全面に押しだしてくるようになった。

これらの途方もない，危険な要求の数々が，なぜ公式に受けいれられなかったのか，ということは，ちょっとしたミステリーである。

当時，チョギャルは，ネルーとつかのまのシャストリ首相時代の過渡期の間に，ニューデリーから彼の望んでいるものを得ることができるも同然だったのである。

外見から判断すれば，チョギャルを甘やかすような政策は ── それは同時にシッキム国民にとっては，非常な苦しみとなるわけだが ── 中国の脅威に対抗するため，チョギャルの好意を得ておくことが必要であるという口実のもと正当化されてしまった。

しかしながら，ニューデリーにおいて，チョギャルと彼の姉妹たちによって行なわれた数々の交渉は，結局は明らかにされるであろう。

自由な選挙，しかし……

シッキムの抑圧された人々が立ち上り，まさにチョギャルに死刑執行前の懺悔のときを与えようとしていたとき，インド軍が彼の生命と，王の座を守ったということは，1973年4月，彼自らのインド軍招請によるものだということは忘れてはならない。

チョギャルが，1人1票の原則に基づく選挙の実施に合意したのはそのときのことである。

この国の，最大の敵でさえ，その選挙が自由に公正に行なわれたことは否定しはしなかった。その選挙は，その時点までは，シッキムにおいて行なわれた唯一の擬装を解いた選挙だったのだ。

チョギャルは，彼の属する少数派民族のために，その領土において自由選挙を許さなかった。

正当に選挙されたシッキム議会の議員32人中31人の賛成を得られたシッキムの地位の変更に反対を唱える評論家というものは，いったいどれほどの人なのだろう。

シッキム国民に望まれ，インドの議会で可決された，シッキムの地位の変更に反対してなされた議論の中で，最も空虚なものは，シッキムの独立した存在というものは，ニューデリーの議会に2人のシッキム選出の下院議員を送り出し，インド人官吏がシッキムに割り当てられた開発計画資金が，実際開発のために使われているかどうかを確かめることによって，終わりを告げてしまうというものである。

この意見に対しては，ナガランドはインド連邦の1つの州であるからといって，その個有の実体というものは消滅しているわけではない，ということをあげておこう。

インドの様々な隣国について，スリ・ランカやビルマも，シッキムにおいてなされたことに対して，批判の声をあげていなかった。

シッキム問題について，インドを批判する声明を出したネパールの場合は，彼らの初期の行動をあまりにも償いすぎたとはいえ，特別な場合である。

パキスタンですら，シッキムをアメリカから武器を求める論拠に利用したにすぎない。

実に，インドとパキスタンは，シッキム問題が一段落したあとに，旅行と電気通信に関する協定に調印している。

インドの安全の危機

今まで述べてきた事実は，シッキム問題に関して最も重要な，核心をもたらしてくれた。

シッキムは，インドの安全と生存にとって，最も重要な存在なのである。

チベットのラサをとりまく核心部とインド平野を結ぶ最短距離上に位置し，中国に対する防衛の実に喉くびの大動脈にあたるわけだ。そのなかでチュンビ渓谷が，意味ありげに，短剣の形でシリ

グリののどもとにつき立てられている。

ナツ・ラの見晴らしの良い高みの管理権の掌握というものは，ベンガルの北部と同様，インド北東部全体の安全にとって実に，心臓部にもあたいするものだ。

なるほど，1950年条約のもとに，インドはナツ・ラはじめシッキムの他の地域に軍隊を駐留させる権利を持ってはいる。だが，もしこの軍隊が，シッキム内の民族双方の衝突による内部騒擾とか，独裁的な支配者による多数への抑圧や，その野望のため，本来の力を発揮できなくなったら，その軍隊の駐留権というもののよいところとは，いったいどのようなものなのだろう。

これらすべての，インドの最高の国益に反対する勢力は，ニューデリー中央の好意ある援助のもとで1973年におこなわれた。チョギャルとシッキムの人々との交渉の結果，結ばれた協定のあともその反対の力を弱めようともしないし，大きくさえなっている。

正当に選ばれた議員によって，満場一致で採択された憲法への，サインの拒絶は，非常にくだらないことである。

〈「The Illustrated Weekly of India」1974年10月13日号　藤井　毅　訳〉

シッキムの花

シッキム冬の旅

沖　　允人

はじめに

「平和と幸福の国」という意味の名，シッキム王国はその名前とはうらはらに中国とインドの国境戦争の大きな拠点の一つである。1965年9月の印パ戦争のとき，インド軍が国境線を越えて中国地内に陣地をつくったということがきっかけで，かなりの衝突があったし，そのすぐあとの1967年9月には，シッキムとチベットの国境ナツ・ラの峠で激しい砲撃戦をおこない，日本の新聞にも，1㎞も離れていない距離に中国軍とインド軍がにらみ合っている写真などが載ったりして，あわや大戦争に発展するかと思わせたりした。

その後，大きな動きはないが，それは決してシッキム・チベット間の平和状態を物語るものではなく，他の地区，インドとバングラディシュやパキスタンとの争い，中国の国際的な動きというようなことがあってシッキム・チベット間まで手がまわらないということであるようだ。

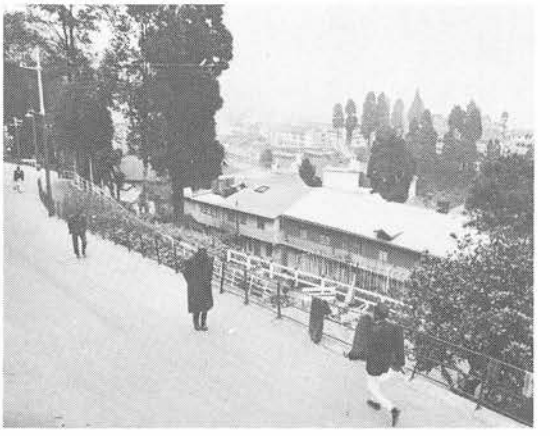
このような状態にあるシッキムへの入域は前々からむつかしく，1970年まではほとんど旅行者は入域が認められていなかった。しかし，その後，ときどき許可を出すようになり，かと思うとまた禁止したりという状態が続いている。1974年も4月頃は禁止になっていたが，9月にはごく少数が許可になったようで，その後少しずつ入域する人が出ているようである。

日本人の場合は，日本にあるインド大使館がその窓口であるが，ここを通していてはなかなか許可が出ないのが普通のようで，一番早い方法はニューデリーの外務省北方局（North Division）に直接申請することのようである。8週間以前に申請することとなっているが，4～6カ月位はかかるようである。

私もその方法で1973年12月22日，待望のシッキム入域の許可を入手した。ただし，「1974年1月中に滞在を終えること，ガントックに3日間のみ」というきびしい条件であった。その後，シッキムがインドの準州になったため申請方法は変らないが，許可を発行するところがニューデリーでなく，ダージリンの地方事務所のようなDupty Comiss-ionのシッキム許可局に変った。従ってシッキムに入る前にダージリンに行かねばならない。シッキムが75年4月末にインドの州に正式になってからは，入域がかえってむつかしくなったようである。

ルート

シッキムへ入るには2つのルートがある。1つはカルカッタからインド国内航空（IAC）でバグドグラ空港に飛び，そこからダージリンを経てガントックへむかうものと，バグドグラからシリグリという大きい駅のある街へ出て，そこから直接ガントックへ行くルートである。前者の場合，バグドグラ空港から一気にガントックへ行くのは1日では無理でダージリンで1泊してからということになる。その場合ダージリンに滞在するのにはシッキム入域許可証とは別のダージリン地区滞在許可証を入手する必要がある。これは空港の政府



坂の多いダージリンの街

の出先機関で2週間の滞在期間のものならすぐ発行してもらえる。また，各国のインド大使館や，インド国内の公安局（Security Control）（ニューデリーやカルカッタにある）で発行してもらえる。シリグリの駅にも出先機関があるが係員のいないことが多い。

ダージリンまでは90km，車なら3時間30分，汽車ならのんびりと走るので6時間かかる。山腹をじぐざぐに登り，あるときはヘアピンカーブ，あるときは1回転して登っていくという実に変化のある山道である。

ダージリンから少しあとにもどって東へ折れ，かなりの急勾配の道を下りティスタ川に着く。ここにインドのチェック・ポストがある。許可証を見せ，台帳に記名する。ティスタ川にかかる橋を渡る。1965年頃あったコンクリートの橋は大洪水で流され，その少し上流に大きい吊橋が新しく掛けられている。このあたりから軍隊が沢山見られるようになる。

ティスタ川の左岸についた，ところどころ崩れた道を車がうなり声をあげながら登って行くとランプー（RONGPHU）の橋に着く。橋の手前にシッキムの出入域管理事務所があり，ここで入域カードに記入し，入域手続をする。外国に入るのと同じである。ここから橋を渡ると「シッキムへようこそ」の大きい看板がでている。やっとシッキムに入ったという気持でいっぱいになるところだ。

シリグリから直接に入るルートとしてはカルカッタからシリグリ駅へ汽車でくるなり，またバグドグラから車でシリグリ駅に来るなりしてそこが出発点となる。シリグリからティスタ川に沿って北上すると約3時間でティスタ川の橋に着き，前記のコースに合流することになる。シッキムの入域路としてインド政府はこのコースをすすめているようである。

カリンポン

また，途中からカリンポンに行ってみようという人はカリンポン滞在の許可が別に必要である。これはダージリンの外国人登録事務所（Foreigner Registration Office）で発行してもらえる。とにかくどこへ行くのにも「Special Permit」が必要でめんどうなことである。この地区がRestricted Area（制限地区）また，Protected Area（保護地区）になっているのだから無理もない。しかし，めんどうな手続をしても行ってみる価値のあるところばかりである。カリンポンにもダライラマに属するタルパ・チョリン寺，カンチェンジュンガやティスタ川の絶好の展望台であるドウルピン・ダラ，またチベット人のマーケットなど興味深い。宿泊はヒマラヤン・ホテルやツーリスト・バンガロー（3食つきで1,500円位）があり快適に過せる。

シッキムへ入る

ランプーの街で警察に出頭して入域報告をし，ガントックへむかう。アンナプルナ・ホテルというようなホテル（といっても木賃宿だが……）やバザールのあるかなり大きなシンタムの街をすぎ，ティスタ川の支流ロロ・チュウに沿って北東へすすむ。やがて川を離れジグザグに登りはじめる。かなり大きく山腹をまわりながら登りつづける。やがて街の灯が見えはじめる。ガントックである。

ダージリンから約90km，ランポーから約50km，National Highwayを走った訳である。私はバスでダージリンからカリンポン，そしてガントックへと乗りついだので大変安く行くことができた。

カリンポンのラマ寺

例えばカリンポン・ガントック間は1人15RPほどである。ジープをチャーターすると最近はガソリンの値上りが激しいので余計高く，ダージリンからティスタ川まで80RPもとる。ただ，長距離バスは早朝に出発する便しかないので前日に席を予約する必要がある。バスといっても15人くらいしか乗れないマイクロバスなのですぐ満員になる。屋根の上か荷物台に乗るつもりなら席がなくても何とかなる。警察は何ともいわないし，バスの運ちゃんも気前よく乗せてくれる。ただし，運賃は座席の場合とほとんど同じで，しかもジグザグの山道なので命がけである。タクシーやジープもそう台数がある訳ではないので早目に予約しておく必要がある。

シッキムの首都ガントックは丘稜地帯に段々畠のように広がった街で，人口は約25,000人でシッキムのあらゆるものの中心である。商業，政治，教育，交通などなど何でもガントックが起点になっている。そのガントックの中心部はバザールのあるちょっとした台地であり，そこにホテルも3軒ほどあり，いろんな店もある。私はそのうちの一つ，チベット風レストランを兼ねるグリーン・ホテルに泊った。1ベット5RP(約170円)という安さである。トイレは共同，バスはなし，シャワーはバケツの水をかぶるものが共同で一つあるといったところである。他のホテルも大同小異である。日本のドヤ街そっくりである。

チベット・レストランでラーメン風のヌードルや，やきめしのようなフライド・ライスなる何とかのどを通るものを，何とか水でながし込んで腹の虫をおさえる。なにしろ朝，カリンポンを出てから途中ビスケットとみかんを少し食っただけなのでひどく空腹であった。しかし，とても満腹するまで食える味ではない。インド製の匂いのきついビールで何とかごまかし，ベットにもぐり込む。シラミのいそうなフトンは気になったが，疲れですぐに寝込んでしまった。

人種のルツボ

朝はホテルのすぐ前の大通りが5時頃から賑やかになるので早く目がさめる。窓からまだ暗い外を見るともう店が開いている。外気は5℃位で街を行く人の吐く息が白い。見ていると荷物を積んだトラックがかなり到着し，そのトラックからおろした荷をポーターが運んでいる。開いている店はこれらの人の朝食用の食い物やタバコなどを売っているようである。

もやは少しづつなくなり，朝の明るさがだんだんひろがってくるにつれて街はにぎやかになる。やがて大通りは人でうまってしまう。

シッキム人といってもレプチャ族，チベット族，またインド人，ネパール人，ブータン人といろとりどりで，それらは民族衣裳など着ていてなかなか楽しい。ラマ僧もいれば着かざったサリーの女性も歩いているといった具合である。だんだん山腹の上のほうまで，もやがあがっていくと，まるでオトギの国のように次々と王宮や民族が現われてくる。緑の木が多く，お寺もカラフルで，くねくねとした登り坂など実に牧歌的なたたずまいである。

チベット学研究所

ガントックでの一番の見どころはチベット学研究所である。正式の名をNAMGYAL INSTITUTE OF TIBETOLOGYという。シッキムで一番外交的手腕をもって活躍したといわれる，Chogyal Palden Thondup Namgyol(1923～)が1958年に建てたもので，世界のチベット学者が

丘の上のチベット学研究所

一度は訪れるところである。大きなチベット風のお寺の1階と2階にギッシリと本が積まれており，きれいに整理された書庫の間でチベット僧が勉強している。1人の僧はチベット文字で書かれた詩を筆写していた。マイクロフィルムにとる装置なども完備している。

また，チベット人子女にチベット特有の芸術的かおり高いじゅうたんや竹細工を指導しているセンターもある。生徒たちが作ったものの即売所もある。

その他の観光的興味のあるところでは，王宮や王宮の近くのラマ寺，鹿のいる公園といった緑の木々と美しい芝生の中のシッキムの美しさをたたえる数々の名所がある。ゆっくり見物すればたっぷり3日はかかるであろう。そう考えたので早速滞在期間の延長を申請することにした。

丘の中腹にあるPolitical officeをたずねた。チベット服を着た事務官が応待してくれる。「理由は何ですか。」とていねいに聞かれる。とにかくシッキムをもう少しよく見たい，とくにここからのカンチェンジュンガが見たいなどといろいろ話をして2日間の延長を認めてもらった。旅行者としては最大2日間しか認められないとのことであった。ついでに旅行してよい範囲を聞いてみたところ「ガントック以北，北東は全然駄目。しかし西シッキムから南シッキムにかけてはよろしい。」という返事だった。2日間の延長も含めてあと3日間しかないのだからあまり遠くへは行けない。Dentamもよいとのことであった。

早速ホテルへ帰って車の便などをしらべることにした。ホテルの息子に聞いてみるとギャルジン（GYALZING）までバスがあるという。この息子はシッキムの卓球のチャンピオンであり，また絵もうまい。絵はデリーの国際少年絵画コンクールに入賞しているくらいである。夜はいろいろとシッキムの話を聞く。今，ネパール人の動きが活発で，デモがあるなどという。1月から3月まで学校は冬休みとのことであった。

シッキム人の結婚式

町をブラついているときれいに花を家中にかざった家があった。のぞいてみると庭にテントがはってありご馳走が並べてある。聞いてみると結婚式だという。外から写真をとっていたら「どうぞ中へ入って下さい。」とさそわれた。遠慮していると「これはシッキムのしきたりなのです。私たちはレプチャ族で仏教徒です。日本人も同じ仏教徒ですから遠慮はいりません。どうぞどうぞ。」としきりにすすめられた。ついに断わり切れなくて入って行くと座らされたところが仏間であった。見ると花嫁・花婿が右側に，その反対側に2人のラマ僧がすわり，正面には両家の親戚の人が5～6人座っている。すごく沢山のおくり物が仏前にそなえてある。

ときどきラマ僧は鈴やカネをならしお経を読む。すべてこの僧の合図で式が運ぶのだそうだ。次から次へと近所の人がきて，おくり物やお祝の金をおいて行く。そのたびに白いガータという布をもってきて花嫁，花婿の首にかける。

花婿さんはペンパ・ダドルさん，花嫁はザグマ・ツェリンさんというなかなかのシッキム美人である。2人とも25～27才位。平均22才で結婚するシッキム人にしてはおそいほうである。この家は国会議員さんの家で相当な金持である。

応接間に移動し，シッキム・ラムやシッキム果酒をたっぷりといただく。なかなかいける味である。

やがて会食が終了しダンスが始まった。シッキ

ペマヤンツェの町角

ムダンスで，皆んなが輪になって歌いながらおどる。ネパールのシェルパダンスそっくりのステップもある。お祝の白い粉をふりかけられて皆んなはキャーキャーいってさわいでいる。小さい子供もおどっている。朝の3時頃まで続くそうである。

私も2人の前途を祝ってささやかなおくり物をし，夜ふけて,もうまっ暗のガントックの街をふらふらとホテルへ帰って行った。

ギャルジンへ

8時にバスが出るという。シッキム国営バスの事務所へ行く。今日は直通はでないという。ジョルタン（Jyorthan）でのりかえることになる。9人乗りのマイクロバスである。一度シンタム（Singtam）まで下り,そこからティスタ川を渡って右岸に移る。すごい山道である。タルク（Tarku）からさらにジグザグに登り，1,000mほど登るとダムタン（Damthang）である。ダムタンからギャルジンへの道はまだ完成していなく，ここからまたグレイト・ランギット川まで大下りである。

ナムチ（Namchi）の街で警察に届け出をすませ，どんどん下ってナヤバザール（Nayabazar）近くジョルタンへ着いたのは15時をまわっていた。茶店もあり，かなりの町である。

ここでさらに小さいバスを捕まえランギット川右岸の道をさかのぼって行く。はるか下に川が見え，転落したらひとたまりもない。しかし，幸に夕ぐれがせまってきて川はだんだん見えなくなり,ついには真暗となってしまった。こうなれば運ちゃんまかせでゆられて行くより仕方がない。途中はほとんど村はない。山間部へ入って行くようだ。

ちょっとした茶店のあるリクシップ（Likship）で一休みしてから，またまたすごい登りになり，大きくジグザグを切りながら1時間も登るとギャルジンの街があった。街といっても30軒ほどの集まりである。

ギャルジン周辺

ここにはもちろんホテルはない。茶店のオヤジに交渉して3つベットらしい台のある物置を3RP（約100円）で貸りることにした。一応ベットがある。しかし，いかにもシラミなどがいそうである。店の人は親切で何かと世話をやいてくれる。写真をとってやると大喜びである。子供が可愛い。

ギャルジンからもう少し奥へ行くとペマヤンツェというところがあってラマ寺があるという。シッキムで一番古いお寺だという。約8kmほどあり,しかも登りである。滞在期間のことを考えると車でないと行ってこられそうにない。バスは13時に出るという。

四方八方さがしまわってやっと道路の舗装用のコールタールを運んでお寺の方へ行くトラックがあったのでそれに乗せてもらうことにした。ギャルジンからすぐ上部には軍の宿舎が点々とあって緊張させられた。

ペマヤンツェのゴンパ

ペマヤンツェのお寺はガントックのお寺より立派であった。最上階の3階には5mもある五重塔が部屋の中にあり，極彩色にぬられている。地獄極楽を表わす人形や仏や動物が実に細かく作ってある。室内の壁画もすばらしい。しかし，残念なことに兵隊がついてまわって写真をとらせないようにする。お寺の庭に兵隊が5～6人テントを張って泊っているのだからしかたがない。外側からも内側も撮影禁止ということであった。

ギャルジンからの道はさらに20kmほどラトン川へむかってのび近い将来はカンチェンジュンガの山麓までのびるという。また，デンタムへ通じる道もあり，こちらは車が通れる。

トラックに乗って

12時前にギャルジンへ帰ったが驚いたことには今日のバスは出発しないという。訳を聞くと簡単で，11時までに上り便が上ってこないからだという。あきれた話だ。もっとも電話1本ある訳ではないから仕方がない。便乗できるトラックを捜すことにした。運よく，ジョルタンへ下る米を積んだトラックがすぐに出るという。あわてて荷物をまとめて荷台にとび乗る。運転席にはすでに3人

も乗り込んでいた。

なにしろ，米が満載してあるその上に座っているのだから不安定この上ない。ひどくゆれる。しかも道におおいかぶさっている木の葉でときどきパシッとやられる。必死でひもにつかまっていく。これで3時間の旅はまことにつらい。

しばらくゆられていくうちに要領がわかりさほど不安定ではなくなった。ゆれるのに抵抗しなければ余分な力もいらない訳である。荷物になったつもりでいればいいのだ。みかんを食ったりしながらシッキムの空や林をながめる。実に美しい空とみどりの多い林だ。その林の中腹のおどろくべき高いところに道が走っており家がたっている。

下って行くにつれて，乗せてくれという人がふえてくる。定員はもちろんオーバーだが，荷台のはしにつかまって乗るのだからオドロキである。温泉が川原にわいているところがあり，そこでさらに数人が乗り込んで来た。一番おどろいたのは運転席に乗っている小ブトリの悪人風の男はポリスだという。ジョルタンまで仕事に行くという。ポリスが乗っていてこの有様だから仕方がない。もっともそのポリスが一番悪人のような顔をしていた。

Reshiの村で5分休んだ。荷台から見ていると運転手がおりて行ってシッキム・ラムをストレートのダブルでグイと飲んでいた。いったいどうなっているんだろうか。気のせいか，それからはスピードを増したようだった。ともかく何とかジョルタンへ着いた。トラック代は9RPだった。バスと同じ位だ。

インドへ帰るにはティスタのチェックポストを通らなければいけない。それには，メリ行のバスを捕まえることだ。方々で聞いてやっとのこと満員のバスに乗り込む。グレート・ランギット川を下って行く。道幅は広いがひどく悪い道で，石がゴロゴロし，土砂崩れが激しい。モンスーンのときは多分通れないだろう。運転手も石にハンドルをとられるので必死で頑張っている。なかなか苦み走ったいい顔をしていた。

このあたりは舗装してないので，すごい砂ぼこりである。すぐそばにグレート・ランギット川の濁った水が流れている。

再びダージリンへ

川に沿ってジグザグに走る。わずか20kmくらいなのに2時間もかかってメリの手前の橋のところに着く。この橋のむこうがインドであり，そこで入域手続をすませなければならないという。その前にシッキム出国のスタンプをもらわなければならない。ひょっとするともう一度ランプーまで行かねばならないのではないだろうか……と不安になる。そんなことをしていたら滞在期間が切れてしまう。何とか今日中にティスタ川を渡ってしまいたい。

バスの車掌にたのんでさがしてもらう。メリの街の外れにシッキムの出国事務所があった。農家の1階をかりていた。一応カンバンは小さいのがあったが，とても外国人にはわからない。

係員はいたが，何しろ外国人がこのオフィスへきたのは初めてだという。台帳がないのだ。私も手伝って新しい台帳に線をひいてもらい，外国人第1号の記帳をすませた。

さて，もう一つの不安がある。インドのチェックポストでここでの出国，入国は駄目だといったら，シッキムとインドの中間で立往生ということになってしまう。まあ，どうにかなるさ，とたかをくくってグレイトランギット川へかかったつり橋を渡る。橋を渡ったところはインドである。早速チェックポストをたずねる。茶店の2階に先程のシッキムよりは少しましなのがあった。正式の入域手続はティスタのチェックポストでやってくれという。今夜中に行ってくれないと困るという。でもバスもタクシーもないじゃないかというとトラックに便乗しろという。

シッキムのバス運転手がついてきてくれていたので「ここでトラックが捕まるか」と聞くと何とかしてやるという。とにかく腹が空いたのでお茶とプリというセンベイのあげたようなものを食う。

しばらくするとトラックが店の前にとまった。すぐに掛合ったところ乗せてやるという。有難い。5RPでいいという。お金はいくらでも払う気持だ。

真暗な中を30分も走るとティスタの橋に着き，ティスタ川を渡るとチェックポストがあった。ここは24時間あいている。早速手続をすませる。

「お前のダージリン滞在期間の期限が明日だからそれまでにダージリンを出てくれ。」という。そういわれればそうだ。1週間のダージリン滞在許可だから明日がその最終日だ。だからシッキムやカリンポンに行く場合，ダージリン地区の滞在期間内に行ってこないといけないしくみになっている。

まあ，今日中にダージリンに着けば明日中にはシリグリかバグドグラへ出られるのは確実だ。

折よく1台駐車していたジープと交渉が成立し80RPでダージリンへむかって出発した。3時間近く走り10時近くになってやっとダージリンの灯が見えた。なつかしい想いがした。

宿泊したホテルは湯が5分ほど出てすぐとまってしまったがそれでも満足してぐっすり寝た。6時頃寒くて目が覚めて外に出てみたらカンチェンジュンガが見えた。いつかあの山へ接近してみたいものだと思いながらガスが上ってきて見えなくなるまで見ていた。シッキムの旅の幕切れであった。

第1日目（1月8日）
カルカッタ→ヒコーキ→バグドグラ→ワゴン→ダージリン泊

第2日目（1月9日）
ダージリン見物

第3日目（1月10日）
ダージリン→バス→カリンポン泊

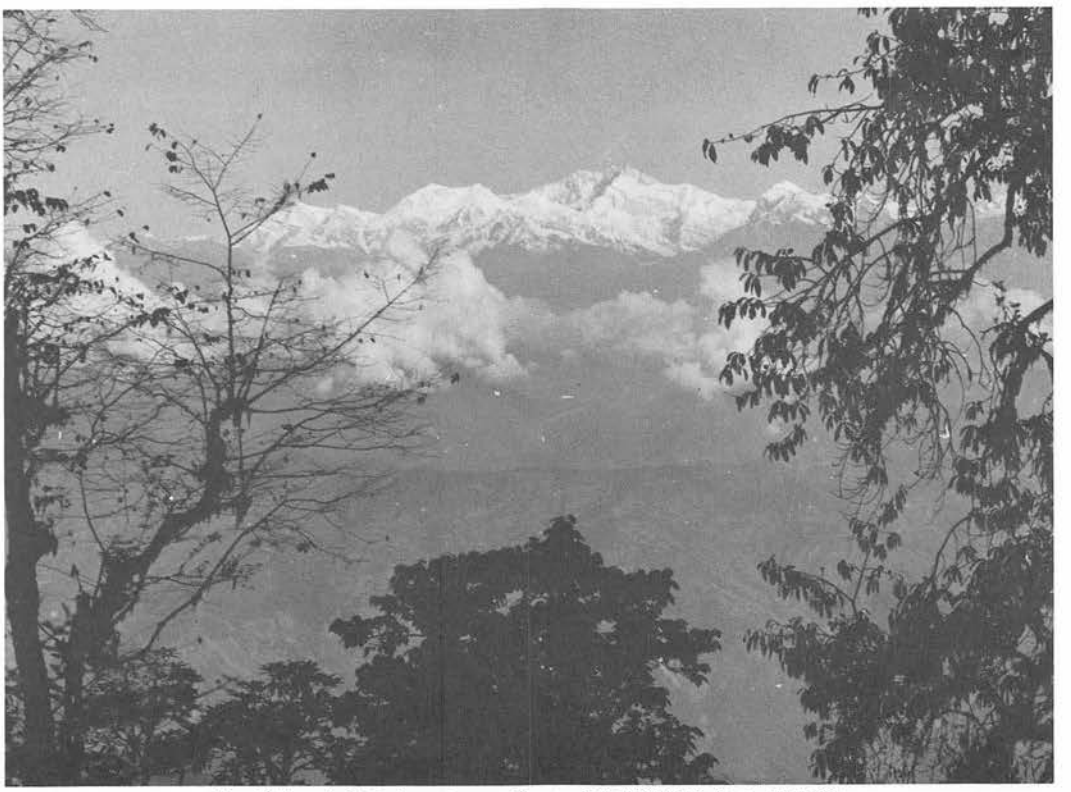
第4日目（1月11日）
カリンポン市内見学後→バス→ガントック泊

第5日目（1月12日）
ガントック見物

第6日目（1月13日）
ガントック→バス→ギャルジン泊

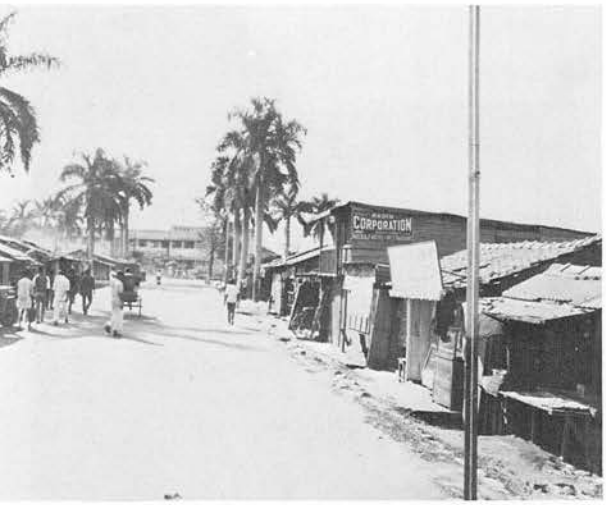
第7日目（1月14日）
ギャルジン→トラック→メリ→トラック→ティスタ→タクシー→ダージリン泊

第8日目（1月15日）
ダージリン→バス→シリグリ着→アッサムへ



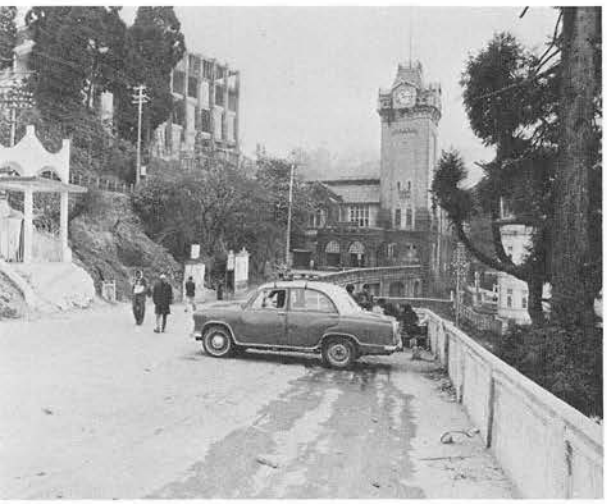
ダージリンからのカンチェンジュンガ山群遠望（佐々木撮影）

ダージリン DARJEELING



42. シリグリ駅前　Siliguri

43. ダージリン行SL　Toy train



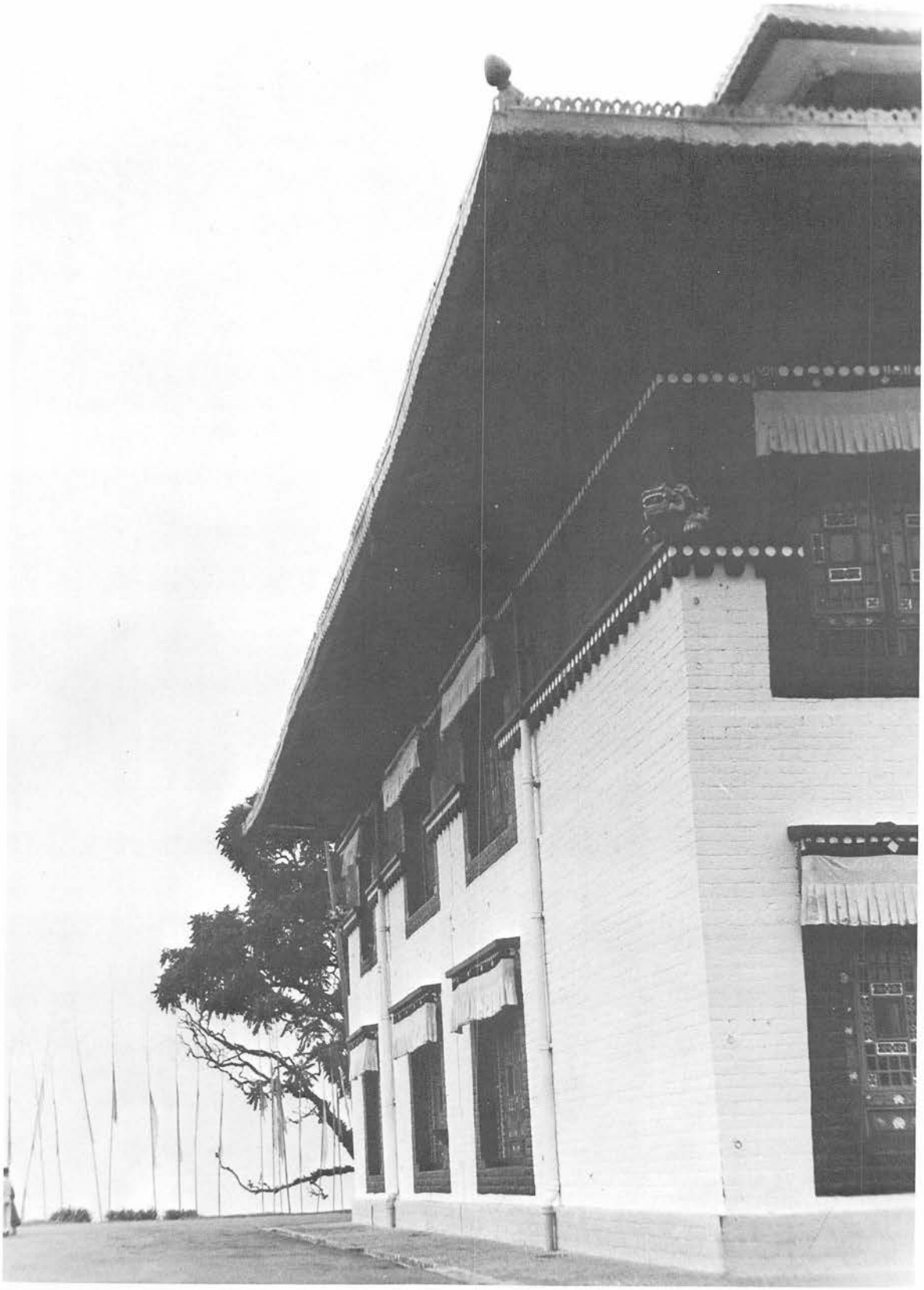
44. ダージリンの街　Darjeeling

45. 一回転する鉄道　Loop

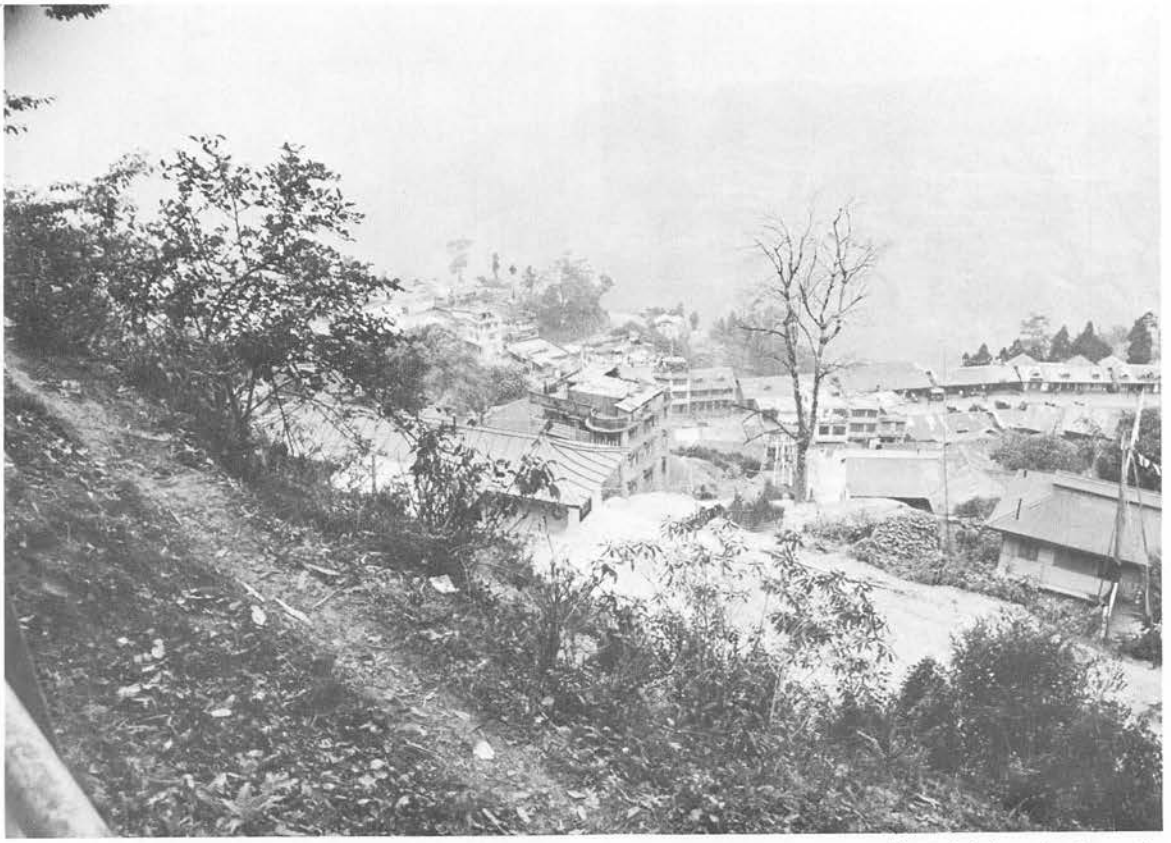
46. ヒマラヤ登山学校　Himalayan Mountaineering Institute

47. HMIのグレワル校長と沖　Oki and HMI Principle, Mr. Grewal

“平和と幸福の国”シッキム SIKKIM



49. ガントックにあるシッキム王宮の一部　Sikkim Palace



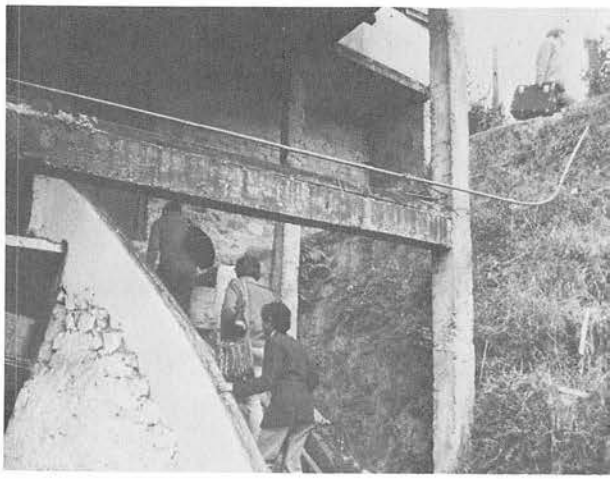
50. ガントックの街（右下がバザール） Gangtok

51. 手工業研究所 Palden Thondup Cottage Industries Institute

52. バザールとジープのタクシー　Gangtok Bazar

53. 鹿の公園　Deer Park

54. 地方路線のバス　Local Bus



55. 入り組んだ近道　A short cut in Gangtok

56. インド系の少女　A Indian-Sikkimese

57. アッサム系の少女　A Assamese-Sikkimese

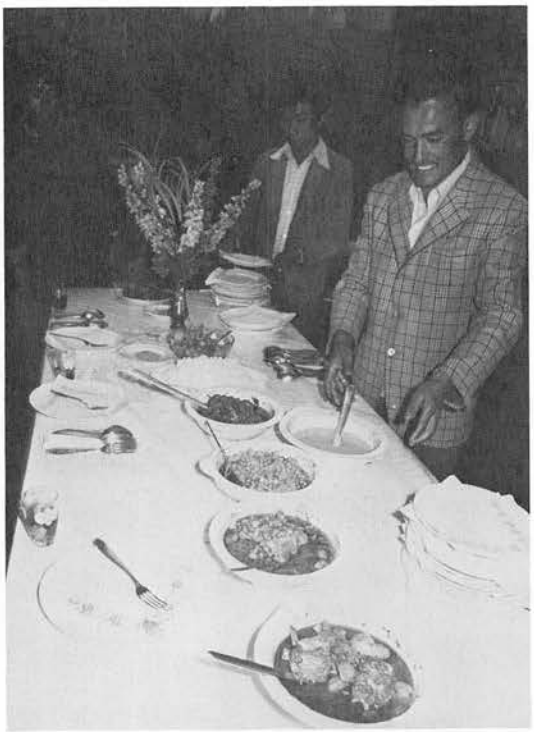
シッキム人の結婚式

58. 結婚式のパーティ　Marriage party

59. 花嫁・花婿　A bride and a bridegroom

60. 結婚式のお客さん　Guests of Wedding

61. シッキム・ラム　Sikkim Ram
しょうぶの葉で粟をくるみ，ラムを入れ，その上からお湯をそそいで飲む。



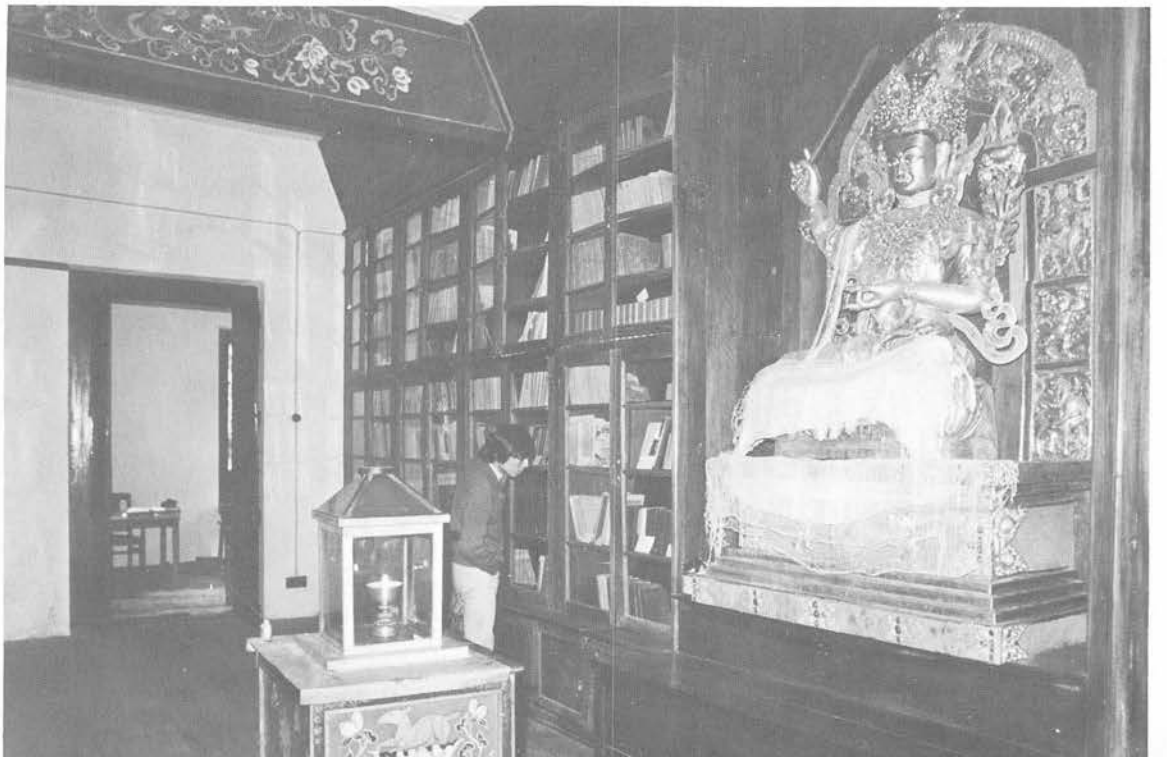
62. パーティのごちそう　Dinner party

63. チベット学研究所　Namgyal Institute of Tibetology

64. 灯明とマニ車　A light offered and Mani wheel

65. 写教するラマ僧　Copying the Buddhist scriptures

66. チベット学研究所図書の一部（奥はマイクロ・コピー室）　Tibetan literatures



“人種のルツボ”カリンポン KALIMPONG

カリンポン

坂の中腹と丘の上にできたカリンポンの街は西洋風な建物、チベット的なバザール、ラマ教の寺など何となくエキゾチックである。ダージリンのようなハイカラなエキゾティズムではなく、もっと土着的である。そしてまた、うねうねと続く裏通りは、ふと不気味な感じがしたりする。

67. グラハムの学校 Dr. Graham's School

70. 古い教会 Old church

68. カリンポンの街 Whole view of Kalimpong

69. 人種のルツボ（バザールにて） Kalimpong Bazar

71. ラマ寺 Zang Dog Palri Fo-Bang Monastery

72. NEFAの山とブラマプトラ川（舟の人は魚をとっている） Brahmaputra River and NEFA's Mountains

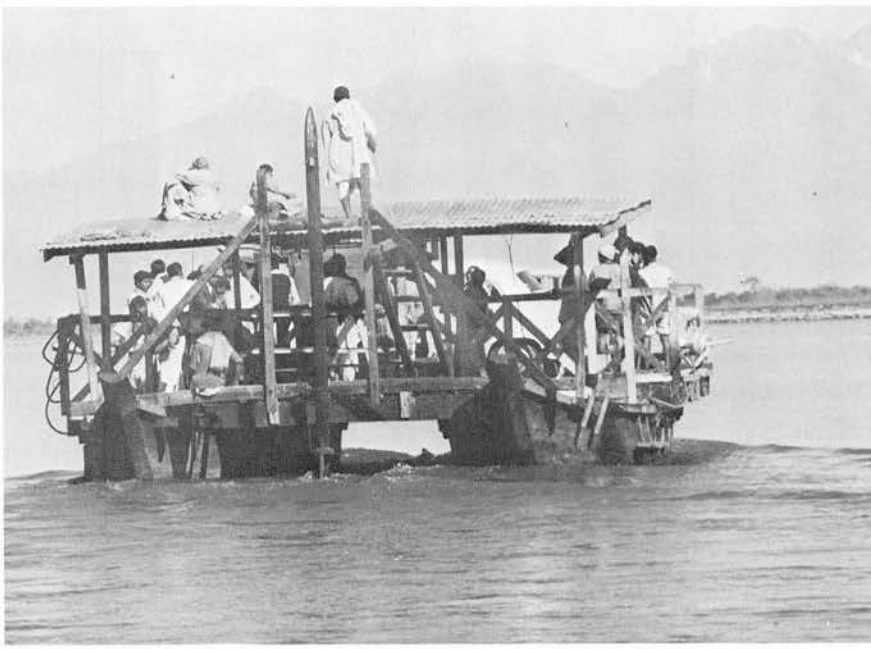
73. 果しなく広がるブラマプトラ川（サディヤ近くで） The boundless Brahmaputra River

ブラマプトラ川

カルカッタを離れると、ブラマプトラ川にはガウハティの近くに一つだけ橋がかかっているだけである。この橋にも、噂によると爆薬が仕掛けてあり、何かの場合は一瞬に吹き飛ぶようになっているという。橋がないのは国防上・財政上の理由だけではなく、あまりにも川幅が広いことや、モンスーン期の水量が莫大なためなどである。八月頃のモンスーンの最中は、アッサムは〝海〟に変わってしまう。チベットから、ヒマラヤ東部から、ものすごい水をインド平原に運んでくるからである。

乾期になるとブラマプトラ川もおだやかになり、うねうねと流れる何本もの流れを縫うようにしてフェリーボートが運航している。

74. 渡し場　A ferry terminal
舟は1日1便出るが時間ははっきりしない　ただ待つより仕方がない



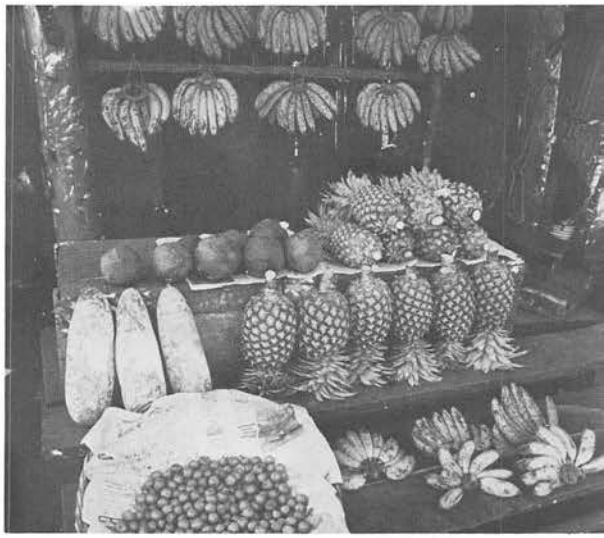
75. これぞインドのフェリーボート
This is a real ferryboat !
人も自転車もタクシーも乗る物売りもいる

76. アッサム人の一家　Assamese family
親子でダル・スープ（豆の汁），ジャガイモ，カレーを食べていた。
この一家もブラマプトラ川を渡るフェリーボートで対岸のサディヤの村へ帰っていった。インド人ではあるが，アッサムの人たちはどことなく日本人に似ている。
このあたりには第二次大戦中にビルマ方面で日本軍と戦ったり，日本軍を助けたりした人もいる。ブラマプトラ川はあの頃と少しも変わらぬ流れであろうが，住む人たちは少しづつ文明の毒でおかされているようである。

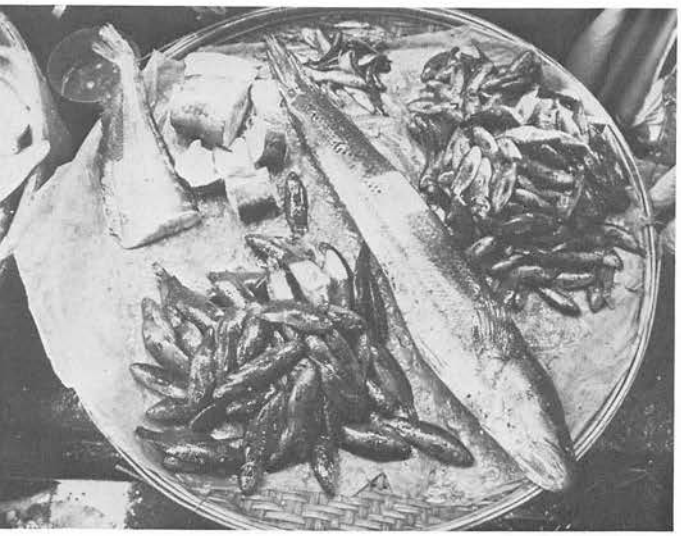
77. アッサムの民家　Assamese house

78. 象に乗って野性動物園へ　Elephant tour

79. 一角さいの親子　Rhinos at Kaziranga

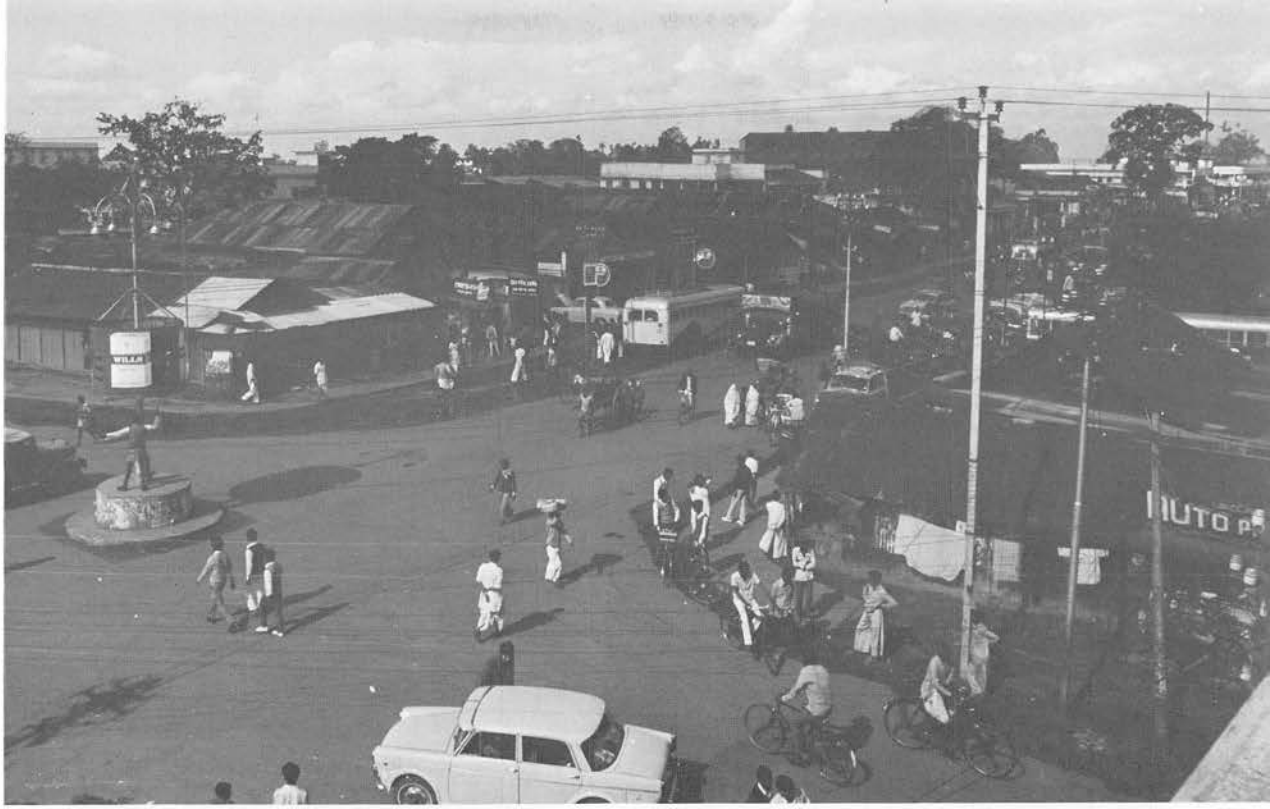


80. 果物　Tropical fruits



81. ブラマプトラ川の魚　Fishes in Brahmaputra R.

82. 竹細工　Bamboo ware



83. ディブルガール中心部　Dibrugarh town

84. シーロンの丘からアツムの大平原を見る（ブータンやNEFAの山々も遠くにかすんで見えている）Top of the Sillong hill

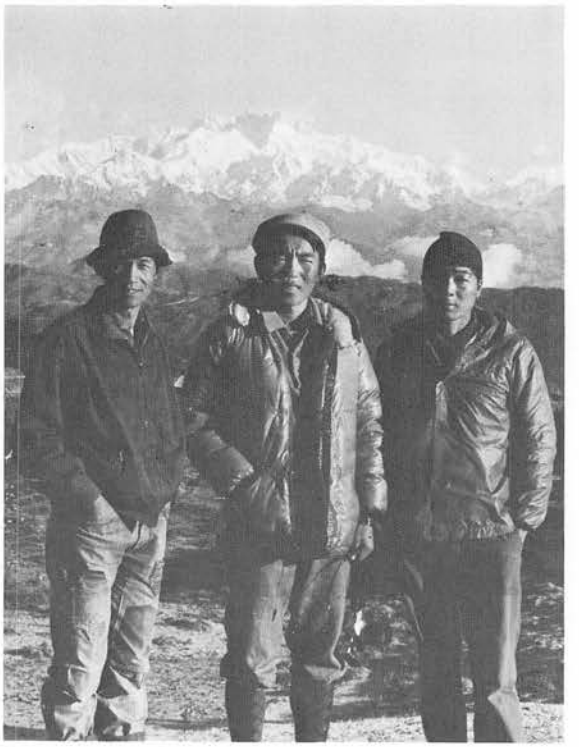
アッサム東部

アッサムの東で飛行場のある大きな街はディブルガールである。飛行場の名はモハンバリというが、この街はいろんな意味でアッサムの東だけでなく、NEFAなどを含む、インド東北部の重要なポイントとなっている。行政や文化の中心地という意味ではシーロンが第一であろうが、アッサムの街らしい明るさと広がりと気だるさをもっているのは、何といってもディブルガールであろう。

85. シーロンのホテル
Pine Wood Hotel in Sillong
市内の小高い丘の上にあるこのホテルはイギリス時代の名残りのある感じのいいホテルである（左 永田，右 藤井）

カンチェンジュンガの見える旅

86. チョルテン（サンダクプー近くにて）



87. ポーター，菊地，佐々木

88. ファルート近くよりのカンチェンジュンガ山群（左 ジャヌー，中央 カンチ，右 シニオルチュー）

シッキム・アッサムの旅

藤井　毅

はじめに

1973年の暮から1974年の１月末にかけて，ごく短い期間でしたが，シッキムとインドのアッサム方面を旅することができました。なにしろ，限られた日数の内にかなりの距離を移動しなければならない旅でしたので，ひとところに２日も滞在すればいい方でした。毎日，車で移動していたといった感じです。

そのため，目にとまった限られた現象の中からごく表面的にシッキムやアッサムを語ることしかできませんが，今まで他の人の手を経て，言いかえてみれば，一度他の人によって選択された情報でしか知ることのできなかった，シッキム，アッサムに自分で触れることができたのは大きな収穫だと思っています。

短い旅の経験から一つだけ言えることは，ともかく実際出かけて行ってその土地の空気を吸わなければだめだ，ということです。いくら多くの本を読んだとしても，結局それは頭の中の想像の産物にしかならないということです。私自身の反省の意味も込めて，そう思います。

〈表Ⅰ〉　行動の概略

年月日	曜日	天気	移動経路	
73.12.28 ↓ 31	金 月		大阪～デリー～カトマンズ	
74. 1. 1 ↓ 1. 5	火 土		ＩＡＣの長期間のストライキにより，カルカッタまでの飛行機の席がとれなかったため，カトマンズ市内滞在。	
6	日	○	カトマンズ～カルカッタ	
7	月	○	カルカッタ市内滞在。アッサム・パーミット取得など。	
8	火	○	カルカッタ～バグドグラ～ダージリン	
9	水	◎	午前中ダージリン市内～午後カリンポンへ	
10	木	◎	午前中カリンポン市内～午後シッキムのガントックへ	シッキム
11	金	◎のち●	終日ガントック市内滞在	シッキム
12	土	●のち◎	ガントック～ジョルタン～ギャジン（西シッキムへ移動）	シッキム
13	日	◎	ギャジン～ペマヤンツェ～ギャジン～ジョルタン～メリ～ティスタ～ダージリン	シッキム
14	月	◎のち○	午前中ダージリン～午後シリグリ	
15	火	●のち○	シリグリ～ゴウハティ～シロン	
16	水	◎	シロン市内滞在	アッサム
17	木	○	シロン～カジランガ	アッサム
18	金	○	カジランガ～ジョルハット	アッサム
19	土	●のち○	ジョルハット～ディブルガール	アッサム
20	日	○	ディブルガール～サイコワガット～サディヤ～ディブルガール	アッサム
21	月	○	ディブルガール～ティンスキア～マルゲリータ方面～ディブルガール	アッサム
22	火	◎	ディブルガール～チャブア～カルカッタ	アッサム
23	水	○	カルカッタ市内滞在	
24	木	○	カルカッタ～大阪・帰国	

旅のアウトライン

表Ⅰなど合わせて見ていただければわかると思うが，ほんとうに駆け足の旅だった。また運悪く日本出発の前からIAC（Indian Airlines）がロックアウトされてしまっていてインド国内便IACの飛行機が全く飛んでいない状態だった。

この事態が予定を狂わすのに大きく影響したのは言うまでもない。そのため，カトマンズにはいったのはよかったけれど，今度はそこから出られなくなってしまって往生した。幸い，このロックアウトもアッサムにまわる頃には，部分的に解除されていたので，後半は割と順調に予定を消化することができた。しかし，最初の予定からいくと，かなり慌しいものになってしまった。

カルカッタで準備を整え，飛行機でバグドグラへと飛び，ダージリン，カリンポンを訪ね，そのあと，シッキムのガントック，ギャジンをまわり鉄道，車を乗り次ぎシロン，カジランガ，ジョルハット，ディブルガールとアッサムを訪れた。

最初，シッキムを訪れることができるかどうか危ぶまれていたのだが，幸いデリーで許可証を取得することができた。ガントックには何人もの旅行者がいて，――主に欧米からの人だが――これが今まで入国至難といわれたシッキムかと，少々驚いた。また，まったく予想外に西シッキムのギャジンという町を訪れることを許されて，ダージリンを基点として，ガントック，ギャジンと，ちょうどシッキムの南部をひとまわりすることができた。

アッサムに関しては，できるだけ東に行こうじゃないか，少なくとも私はそう思っていた。

これも，帰りの飛行機しだいで，せいぜいジョルハットぐらいまでかなと思われたのだが，運良く，ディブルガールよりの飛行機の席を確保できたので，サディヤまで訪れることができた。できるだけ東に行くという目的は，これに限れば一応果されたようだ。サディヤ周辺からは，チベット，ビルマ国境ぞいの雪をいだいた山々が実によくのぞまれた。

しかし，何しろ連日，車で，100キロ，200キロと移動ばかりしていたので，一カ所に落ち着いてじっくりと味わうということができなかったのは残念だった。車で幹線道路を走るだけで，周辺の土地を訪れることさえできなかったのだから……。

総じて，アッサムという所はその周辺の土地とあわせて，非常に興味深い地域のように感じられた。今はシッキムよりもアッサムを含むインドの北東部によりひかれるものを感じる。

インド北東部事情

NEFAからアルナチャル・プラディシュへ。

今まで，NEFA（North East Frontier Agency）と呼ばれていた地域（図参照）の公式名称が変り，アルナチャル・プラデッシュ（Arunachal Pradesh）となった。1972年の夏頃からそうなったらしい。

このArunachalというのは「太陽の昇る土地」を意味するそうである。

NEFA時代には，シロンにそのヘッドオフィスがおかれていたようだが，それは変らないようだ。また，依然として中央政府の直轄地域とのことだ。

名前がNEFAからアルナチャル・プラデッシュに変って，実際，その行政形態がどこまで，どのように変ったか，中国との関係はどうなったか，残念ながら，そこまでは情報を集められなかった。

ただ，アルナチャル・プラデッシュについて書かれた本などの資料を手に入れることができたしIdu Mishmi（イドウ・ミシュミ族）の人と，ほんとうに片言ながら話すことができたので，後ほど，それらについてまとめてふれてみたい。

なお，バーソロミューのワールド・トラベル・マップの「INDIAN SUBCONTINENT」（1973年版）には，すでにArunachal Pradeshの名称が用いられている。

以下，この記録では，NEFAという呼称を用いずに，アルナチャル・プラデッシュとすることにする。

インドのツーリスト・マップというものをみてみると，シッキム，アッサムにそれぞれ“Protected Area”，“Restricted Area”と書き込まれているのに気が付く。

実際，入域の際，発行してもらった許可証を見ると，シッキムが「Under Paragraph 3 of the

Foreigners (Protected Areas) Order, 1958」アッサム，ダージリンのが「Under Paragraphs 3 & 4 of the Foreigners (Restricted Areas) Order, 1963」となっている。

"Restricted Area"が「制限区域」，"Protected"が「保護区域」とでも訳されるのだろうが，ちなみにその地図でRestricted Areaとして指定されているのを列挙してみるとアッサム，トリプラ，西ベンガル州北部，アンダマン・ニコバル諸島，ウッタル・プラデッシュの一部といったぐあいである。

一方，Protected Areaとしては，シッキム，ブータン，メガラヤ，ナガランド，マニプール，UPの一部，ヒマチャル・プラデッシュの国境ぞいがそれぞれ指定されている。

この両者の指定はいったいどのような内容を持ち，どのように違い，私たちが行こうとする際どのような手続きをすればよいのか，はっきりとはわからない。ただ，Restricted Areaよりは，Protected Areaと指定された方が確実に行きにくいようだ。行ってみたい所はみんな"Protected Area"となっているみたいだが……。

ただ，RestrictedとかProtectedといったものがついているからといって，決して「秘境」だとか「未開」だということにはならないと思う。

各種許可証の取得方法と関連事情

今回訪れたダージリンにしろカリンポン，シッキム，アッサムなど，すべて許可証なしには入れない地域ばかりである。

チェックポストがあったり，軍隊が駐留していたりして，いやがうえにも"国境"というものを感じさせる。

カメラの扱いなど，充分気をつけたいと思う。自分ではそんなつもりがなくてやった事が，意外な問題へと発展することがある。

所詮，通りすぎて行くものでしかないわれわれ旅行者が，現地で政治，宗教の問題などを軽々しく口にすべきではないが，これから自分の訪れようとする地域が，いったい今，どんな政治情勢下にあり，どのような問題をかかえているかということぐらいは，事前に調べて頭の中に入れておくべきだと思う。

たとえば，シッキムからアッサムにかけては中印国境紛争の問題等。

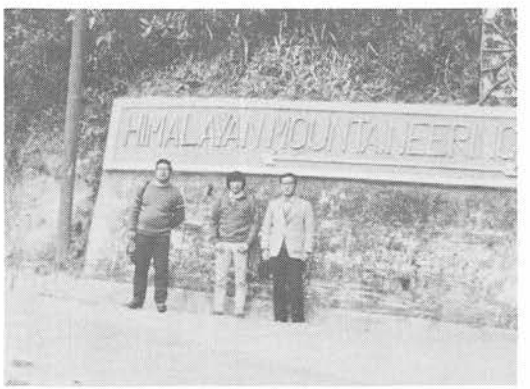
たとえ，シッキムやアルナチャル・プラディシュの山を登ることが究極的な目的だとしても，トラブルをおこさないためにも，この地区の人間により近くせまるためにも。

アッサム入域許可証

東京のインド大使館を通じても取得できる。大使館では，日数を1週間に限り入域許可証を発行できるそうで，延長はカルカッタのアッサムハウス，またはシロンのアッサム州政府の担当機関でできるようだ。ただ，これはあくまでも建て前であって，なかなかこの通りにはうまくいかないそうである。インドに着いてから，申請した方が手っとりばやいのではないかと思う。

私たちの場合，日本でも申請する一方，インドに着いてから，カルカッタにあるアッサム州の出先機関である「アッサム・ハウス」8. Russel street, 16, Calcutta, INDIA で実際の許可証を取得した。特に，その日のうちに発行してくれた。

このアッサム・ハウスというのは，アッサム州の観光案内所を兼ねていて，いろいろな資料をくれるのでもらっておくといいと思う。同じ構内にはアッサム州の産物を売っている店もある。



ダージリン登山学校の入口で
永田（左），藤井（中），沖（右）

「一応，アッサム州の場合，旅行者に開放されているのは，シロン，カジランガ，マナスの3箇所のみで合計21日間以内の滞在が許されている。しかし，事情は流動的である。これらの地域に行くためにジョルハットの空港に下りることもできるが，ここの滞在はトランジットとしてのみで1，2日間しか許されない。上記の3つの地域へ行くのも許可証が必要だが，それはアッサム・ハウスで1，2日で作製できる。その他の地域へ行くのには，インド政府の許可が必要。」

以上が，平均的なアッサム入域事情だが，東に行けてもせいぜいカジランガのみというかなりきびしいものだ。それに，最近インドからとどいた手紙によると，アッサム奥地は近々入域禁止になるそうである。

何しろ，いったいどのような手続きで，どこまではいることができるかというのは，アッサムに限らず入域制限区域では常に変っているので，はっきり，こうだとは言い切れないが，以上のようなものを平均的なものと見ていただければいいと思う。

私たちの場合，ディブルガールまで行けたというのは，本当に幸運だったと思う。

ただ，アッサムはそんなこととは関係なく，ブラマプトラ河をはじめとして，果てしなく，大きく開けていた。

シッキム入国について

シッキムへの入国許可の取得に関しては，沖がすべてをアレンジしたので，その間のくわしい事情がわからないので，私の知り得た範囲で書くことにする。

申請先は，デリーにあるMinistry of External Affairs（Northern Division）で，許可証も同じくここで発行してくれる。申請は正式にはインド大使館を通して行なう。

私たちの得た許可証は，ガントックのみ3日間の滞在を許可する，というものだった。

しかし，たった3日間じゃ何も見れないし，どこにも行けないと思い，あるいは，という気持ちで，ガントックのOffice of the Political Officer in SIKKIM という所を訪れてみた。「2日間程延長してほしい」と申し出ると，まったく簡単に，許可証の裏面にタイプを打って延長を認めてくれた。おまけに，ギャジンを訪れてもいいと言われるし，まったく予想外のことだった。

なお，シッキムに入ると最初の町がRomgphuという所だが，ここでは警察所に出向いて，Arrival Checkをうけて，許可証の裏面と，パスポートのビザ欄にスタンプをもらう。

シッキムからインドへ出る時も同様に，チェックポストに出向いて，Out Check を受けスタンプをもらう。

シッキムは73年の4月に，ガントックで民主化要求のデモがあったとかでインド軍が介入してから政情不安が伝えられて，一時外国人には閉されていた。それが，私たちが訪れる頃，再びオープンされたらしい。最近，東京のある旅行代理店からもらってきたパッケージ・ツアーのパンフレットにはガントックを訪れるのを日程に組み込んだものもあった。

シッキムは── ブータンだって，世界中どこでもそうだろうが── 秘境だとか，閉された国だとか，そう思い込まない方がいいと思う。もちろん事情はその時に変化するだろうが……。

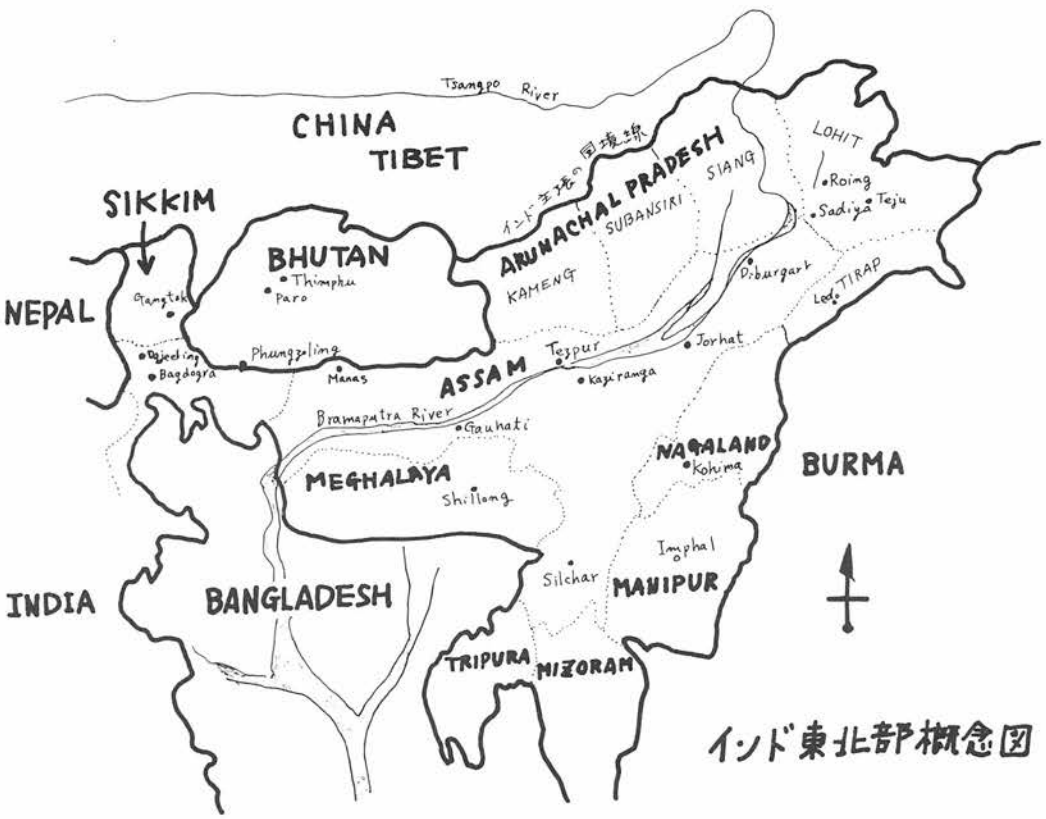
ダージリンの許可証のとり方

私たちの場合，カルカッタからバグドグラへ飛行機で飛んで，バグドグラ空港の建物の中にある，Sub Divisional Office の出張所みたいな所（Bagdogra Check Post）で許可証を発行してもらった。

その場で申請証，パスポートを提出するとすぐ作ってくれる。何やらいろいろ台帳みたいのに書き込んだり，ハンコを押したりで20分程かかったが，そんなにめんどうなものではない。

カルカッタやデリーの公安局や在日インド大使館でも，この許可証は取得できるそうだが，バグドグラで直接取得した方がいいみたいだった。

ただ，事情が変っていることもありうるので，事前にインド観光局あたりで確認された方がいいと思う。



なお，ダージリンのホテルに宿泊する際，許可証の提示を求められることがある。

カリンポンの入域許可について

はっきり言って，カリンポンのみを訪れるというのは，旅行者にとってあまりにも単調でおもしろくないと思う。少なくとも，ダージリンと合わせて訪れることになると思う。

私たちの場合，まずダージリンの許可証を取得して，ダージリンを訪れてから，ダージリンの町の中にある外国人登録事務所みたいなところで，“Permitted to visit Kalimpong”と上書きをしてもらった。ただそれだけで，別の許可証を発行してもらうというような事はなかった。

ティスタ・チェック・ポスト

ダージリンからカリンポンを訪れるとき，ティスタ川の橋の所にあるチェック・ポストを通るがここで通過とともに入域のチェックをうける。許可証の裏にチェック済のサインをくれる。と同時に台帳に記入される。カリンポンから帰るときも同じようにチェックをうける。

また，シッキムのガントックを訪れるにしろ，このティスタのチェック・ポストというのは要みたいな存在で，必ずここを通らなければならない。入るにしろ出るにしろ，ここでバスや車を降りてオフィスに出向いた方がいいと思う。

外国人登録について

何でもないようで，意外と複雑な感じのするの

がこのシステムだと思う。日本にいる外国人も，実際これと似たような，あるいはもっとめんどうな目にあっているのだろうが……。

ホテルに宿泊した際は，ホテルのフロントが代行してくれるそうだが，ホテル以外の個人の家，あるいはテントをはって泊ったりした場合は，自分から警察等に出向いた方がよいようだ。

私たちも，アッサムで少々手間どったのだが，車で移動ばかりしていると，特にわけがわからなくなっている。

ある日突然，「お前の許可証には，登録済のハンコがない」などと言われるとびっくりしてしまう。実際，それで登録に行ってみると，きたない色の変った紙に，パスポートの詳細と，許可証の記載事項を写して，ハンコをポンと押しておしまいといったぐあいだ。

このシステムは，正式にどうなっているのか，どのような注意をして，どうすればよいのか，はっきりしたことを大使館にでも聞いてみようかと思っている。

とにかく，アッサムなどの許可証を必要とする地域にはいって，ホテル以外の所に泊ったら，人にたずねたりして，ぬかりのないようにしたいと思う。

〈表Ⅱ〉　**利用した交通機関**

年月日	移動地点名	距離	移動方法	種別	所要時間	費用(RP)
74.1.8	バグドグラ空港～ダージリン	約 93km	車	定期バス・小型	約 3.時間	1人 18
9	ダージリン～カリンポン	〃 50	〃	定期バス・ジープ	3.	〃 11
10	カリンポン～ガントック	〃 80	〃	定期バス・中型	4.	〃 9
12	ガントック～ジョルタン		〃	〃	6.	〃 16.2
	ジョルタン～ギャジン		〃	〃	3.	〃 8.95
13	ギャジン～ペマヤンツェ～ギャジン		〃	トラック便乗	2.	1台 10
	ギャジン～ジョルタン	35?	〃	〃	3.	1人 9
	ジョルタン～メリ	25?	〃	定期バス・中型	2.	〃 2.8
	メリ～ティスタ	5	〃	トラック便乗	0.20	1台 5
	ティスタ～ダージリン	〃 35	〃	ジープチャーター	2.	〃 80
14	ダージリン～シリグリ駅	〃 80	〃	定期バス・中型	3.	1人 6
15	シリグリ駅～ゴウハティ駅	〃 450	鉄道	一等・寝・急行	14.	〃 55.5
	ゴウハティ～シロン	〃 100	車	州営バス・一等	3.	〃 19.8
17	シロン～カジランガ	〃 330	〃	ツーリスト・タクシーチャーター	8.	1台 350
18	カジランガ～ジョルハット	90	〃	タクシーチャーター	2.5	〃 120
19	ジョルハット～ディブルガール	150	〃	〃	3.	〃 125
20	ディブルガール～サイコウガット	〃 90	〃	〃	2.5	〃 120
	サイコウガット～ディブルガール				2.	
	サイコウガット～サディヤ		船	定期フェリーボート	0.45	1人 0.45
	サディヤ～サイコワガット				0.25	
21	ディブルガール周辺		車	タクシーチャーター		1台 140
22	ディブルガール～チャイブ	〃 30	〃	ＩＡＣのバス		1人 5

シッキムへ

カリンポン

1月10日（木）

午前中，タクシーを借りきって市内を廻ってみた。まったく，静かで落ち着いた感じのする町だ。あいにく，空は曇っていて，展望には恵まれなかったが，カルカッタの雑踏から飛んできた身にはまるで別世界のような印象を与える。

朝のうち，町全体が雲におおわれて，そのあいまから，はるか下の方にティスタ川の流れが望まれたりして，何ともいえない。

町の中心部にはバス・スタンドがあり，シッキム国営交通（Sikkim Nationalized Transport）の事務所もこの近くにある。ガントック行のバスに乗るためには，ここにある事務所に出向いて，料金を払い席をとってもらう。引き替えにメモ用紙みたいなものに，座席番号と「代済」のスタンプを押したものをくれる。それをもって発車時刻までにバスの方にいけばいいわけだ。

ランプー

カリンポンの町を2時すぎに出たシッキム国営交通のバスは，ティスタ川ぞいの道を，ガントックへと向っている。

この渓谷ぞいの道はまったく舗装されていない。石がごろごろしていて，いたるところ崩壊している。そんな所を走るのだから，あまり乗り心地が良いとは言えない。雨が降っていないのだろうが，土が乾ききっていて土煙がもうもうとあがる。バスの中も，ホコリの侵入を防ぎきれず，まっ白である。

カリンポンを出てから2時間程たったところに遮断機があって，机が持ち出されていて，たくさ

年月日	所在地	宿泊所名	種別	費用	食事	判定	備考
74.1.6	カルカッタ	Buddhist Temple					仏教のお寺の宿泊所
8	ダージリン	ウインダメィア・ホテル	高級	1人 50	T, D, L, B	◎◎◎	料金冬期割引
9	カリンポン	シャングリラ・ツーリスト・ホテル	西ベンガル州営	上ベッド8.4 下ベッド6.4	別	○－○	食事もとれる
10	ガントック	グリーン・ホテル	一般	1室 15	別	○－○	食事もとれるレストラン付ホテルの類はない。
12	ギャジン	茶店の裏部屋		1人 3	別		
13	ダージリン	ニュー・エルジン・ホテル	中級	1人 35	D，B	△○△	
15	シロン	パインウッド・ホテル	高級	1人 70	D，B	◎◎◎	アッサム州営
17	カジランガ	ツーリスト・バンガロー	洋式	1人 19	B，T	○○○	インド式もありアッサム州営
18	ジョルハット	アッサム農業大学ゲストハウス	洋式	1人 6	B，T	○○－	大学構内にある
19	ディブルガール	インド紅茶協会アッサム支部，チャウルコワ・クラブ	洋式	1人 25	B,D,T	○◎◎	

〈表Ⅲ〉 宿泊所など

註 「費用」に示された金額は一泊のもの。単位はルピー。

「食事」の欄 T = Tea B = Breaktast L = Lunch D = Dinner

「判定」の欄は施設・食事・サービスの順で受けた感じを◎○△で示す。

アッサム農業大学とチャウルコワ・クラブ及びBuddhist Templeは営業体ではない。

んの警官が集まっている。バスの助手が1人降りて，机の方に行っただけで，バスは止ることなく進んでいってしまう。急造の小屋の並びをくぐりぬけて，まわりとは，今まで走ってきた道とはまったくかけはなれた感じのする，りっぱな作りの橋を渡っていく。そして，バスは，ちょっと開けた所に出て，ガソリンスタンドの前に止った。

ふと，そばにある看板に目をやると，ランプー(Romgphu)，シッキムという文字が目に入る。そのとなりには"ウェルカム・シッキム"などというのもある。どうやら，もうここはシッキムらしい。

ランプー・ポリス・ステーションで，許可証を提示して，パスポートともどもチェックをうける。

ここで，どうやらさっきの橋の手前にあったのが，インド側のチェック・ポストらしいということがわかる。知らないうちに，国境を越えてしまったらしい。いわば，インドを密出国(？)してしまったわけだ。たいへんだとばかり，再び橋をとことこ渡ってインドへもどっていく。

さき程バスに乗ったまま通り過ぎてしまったチェック・ポストに着き，そこで，インドの出国カードを書かされる。それに，もう1枚別のカードを渡され，シッキムを出るときにチェック・ポストに提出するように言われる。

保護国とかいっても，やはり外国扱いなのかもしれない。

突然，シッキムへ入ったという感じで，ランプーに着いたわけだが，ウイスキーやラムやジンの宣伝看板がやたら目につく。あとでわかったことだが，このランプーというのはシッキムの酒蔵といった感じのところで，シッキムウイスキー，シッキムラム等を生産しているそうだ。ガントックで，その酒を買い求めてみたが，最高級のウイスキーが1本16.5Rs，ラム酒が確か16Rsだった。

インドからシッキムにかけて，建て物などに判然とした違いがあるわけでもない。

別に，「とうとう，シッキムに来た」といったような，大袈裟な感激はなかった。

「そうか……，ここがシッキムか」そんな感じだった。

ランプーのバザールで小休止した。

ガントックでの第1夜

ランプーからナショナル・ハイウェイで，また2時間ほど走ってガントックに着く。

もうすっかり日が暮れてしまって，そんな中でガントックの街の明りが，ものすごくあたたかいものに感じられる。

カリンポンからガントック。ちょうど隣町のようなものだろう。まったくうらやましい。そんな所へ，私たち日本人が，秘境だとかなんとか言って，出かけていくのだから，いい気なものだ。

なる程，「近くて便利」という。オフィサーの言葉通りに，めざす"グリーン・ホテル"は，バススタンドから30秒ぐらいの所にあった。1階はレストランとちょっとした店で，2階が客室になっている。1室に3つベットがあって，15Rs なにがしだそうだ。

ホテルの前の通りは，2～30m幅の広い通りで，きれいに舗装されている。

幅の広い通り，しっとりとした空気，上の方でポツン，ポツンと光っている家の明り，閉められた店の戸に，何というのだろうか，チベット風の模様が描かれたりしていて，一種独特の雰囲気を醸しだしている。

日本を出る前，ガントックは寒いぞ，寒いぞ，雪があるぞ，と聞いていたが，思った程ではなくよっぽどダージリンの方が寒かった。まだ雪には出合っていない。聞いたところによると，2月頃になると，このガントックにも雪が降るそうである。

ガントック滞在

1月11日（金）

ホテルの男の子にいろいろと話を聞いてみたのだが，弟の方は，児童絵画の国際コンクールに入賞したことがあるといって，絵や賞状を見せてくれた。兄の方は卓球のシッキム・チャンピオンシップを持っているそうだ。

町にヤマハのギターがあったり，ナショナルの製品があったりして，日本もこんな形でシッキムに影を落としているようだ。

シッキム内では，インドルピーが流通していて，切手もインドのものが使える。言葉の面では，ネパール語が最も話されている。

まず，チベット学研究所を訪れてみた。ここの正式名は，Namgal Institute of Tibetologyである。赤い扉で，柱や壁はあの例の模様と彩色で形どられていて，その方面の知識がなく"例の"とか"チベット風の"とかいう言葉でごまかしてしまって申し訳ないが，まさしくチベット学研究所にふさわしいという感じだ。

1階には，いろいろな展示物がある。古い仏像や，経文を刻んだもの，仏具など，まったくチベットや仏教に関する知識がないのがくやまれる。素人目にみても，すばらしいという感じのするものがたくさんあるのに……。

中では，仏画を印刷した絵葉書や，本などを売っているコーナーもある。

入口の正面，中央に1体の仏像があり，その両側には各国から贈られた書籍が棚いっぱいにつまっている。中に，ブータン国王や，日本から贈られた本も何冊か見うけられた。

2階には，チベット仏教の経文がいっぱいつまった棚があり，1人のお坊さんが経文を写していた。

いまさらながら，チベットの歴史の重さを感じた。

その研究所の近くにチョルテンがある。ちょうど坂の上にあって，木立の中に経文を書いた旗とともに，白いチョルテンが望まれて，雰囲気のいい所だ。

ラマ教，チベット仏教の文化というものは，やはり何となく親しみが持てて，別段，抵抗もなく受け入れられるような気がする。

さて，そのあとポリティカル・オフィスという所を訪れてみた。このオフィスもやはり木立の中にあってさほど大きくない建物で，この事務所があいているのは，平日9時～1時，1時30分～4時15分，土曜日が9時～12時45分までだという看板がかかっていた。

チベット風の服を着た人が応対してくれた。

「山を見にダージリン，カリンポン，ガントックとやってきたのだが，ここのところ曇ってばかりいて，ぜんぜん山が見えない。」

「うんうん……。」

「もう2日程，滞在許可を延長してもらえないだろうか。」

「なるほど。」

「ついでに，どこか山の見える所に行きたいのだが……。」

「そうか。」

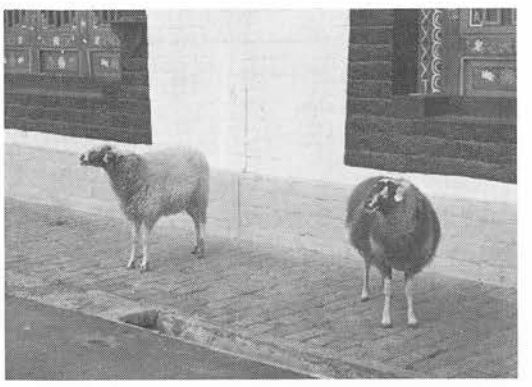
確か，こんな会話があったと思うが，ともかく，そのオフィサーは話がわかったのかどうか，私たちの許可証を持って奥へはいっていってしまった。しばらくして，その許可証をもって帰ってきて，渡された許可証の裏には，"滞在期間を2日延長する"とタイプで打ってあった。ついでに，西シッキムのギャジンに行ってもいいと言う。まったく簡単に許してくれた。その間，「何しにきた」とか「パスポートを見せろ」なんていわれることもなく少々あっけにとられた。

まあ，とにかく，2日間延長してくれたのだから，その西シッキムのギャジンとかいう所へでかけてみようじゃないかということになった。

ガントックでの買い物

ポリティカル・オフィスからの帰り，Cottage Industries Instituteという所を訪れてみた。ここは，女の子を集めてチベット風の，あるいはシッキム独得の手工芸品を作っている。

いろいろな織り物，彫刻などの木工品，紙製品などを扱っていて，小売りもしてくれる。



羊，ガントック王宮で

いくつかの部屋に分れていて，実にいろいろな物がある。とくに，絨毯とか帯，壁掛けなどの織物にすばらしいものがある。めずらしいものではシッキムの国旗，帽子，シッキムテントと呼ばれるものなどがあった。どれも手が込んでいて，丁寧な作りだ。紙製品でも，和紙みたいな丈夫な紙でできたカードなどがあった。

値段は少々はるが，まあ物は確かだろう。私もいくつか買い求めてみた。女の子がたくさんいるのもなかなかいいものだ。

シッキムでのおみやげとなると，この学校みたいのを除くと，他にはおみやげ専門店らしいのはないみたいだ。

なお，ガントックの写真屋（なぜか本屋ではない）で，シッキムの地図を売っていた。ただし，アメリカのA・A・G製のもので，「The Kingdom of Sikkim」というもの。1枚25Rs25pだった。

結　婚　式

まったく偶然のことだったが，ガントックで結婚式によばれた。これは，今回の旅でもっとも思い出に残っていることだ。実に，ガントックを去り難くするのに十分すぎるほど，すばらしいものだった。

昼食をとったあとで，ぶらぶら歩いていたら，何やらにぎやかで明るい雰囲気の家があるのに気づいた。

庭には，さきほど見てきたばかりの，シッキムテントが張られている。そして，その中では会食の用意がいっしょうけんめいなされていて，たくさんの人がいそがしそうに立ち働いている。家の中からは，音楽が聞こえてくる。いったい何なのだろう。

その家の入口は，きれいに飾りつけられて，“Welcome”という文字が書かれていた。

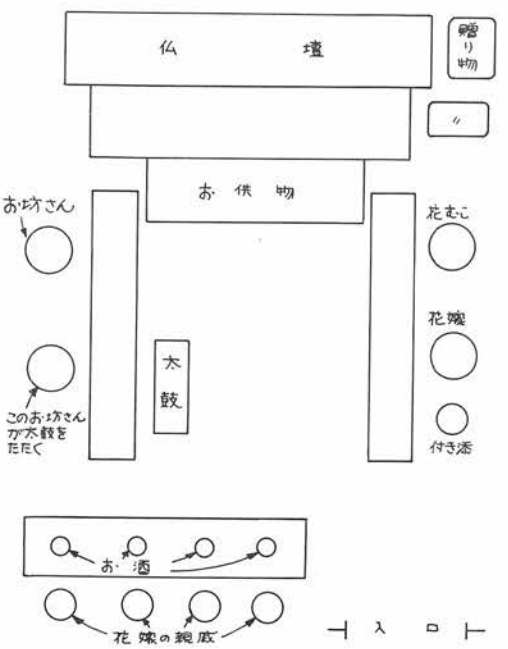
何だ何だと，物めずらしげにのぞいていると，中の人が気付いて出てきた。

結婚式のお祝いをやっているのだそうだ。「なるほど，結婚式か」と思っていると，「どうぞ，寄っていってください」「どうぞいっしょに祝ってやってください」「日本よりの客人よ」，まあ多分そんなことをいっているのだろうが，本当に心から，という感じでさそってくれる。最初は断わっていたが，シッキムでの結婚式というものにもひかれるものがあったので少しだけ．おじゃまさせてもらうことにした。

最初，お坊さんがお経をあげている部屋に通される。2人のお坊さんがいて，1人がたいこをドンドンたたいて，お経をあげている。しばらくすわり込んで見学させてもらう。

部屋の中は，だいたい図のようになっている。立派な仏壇があって，日本でいえばちょうど仏間といったところなのかもしれない。6畳ほどの広さの部屋だったと思う。

2人いるお坊さんのうち，位が下らしいのが，もっぱらたいこをたたいて，ときどきバチの下についているシンバルみたいのをバシャーンと鳴らす。この間，おもしろいことにお経がひとくぎりすると，このたいこを叩いているお坊さんが，どっこいしょと立ち上ってお供物の小皿を取るや，出口の方にのこのこ歩いていって，庭にパーッとまき散らして捨ててしまう。そして，また何事もなかったようにお経をあげはじめる。そして，ま

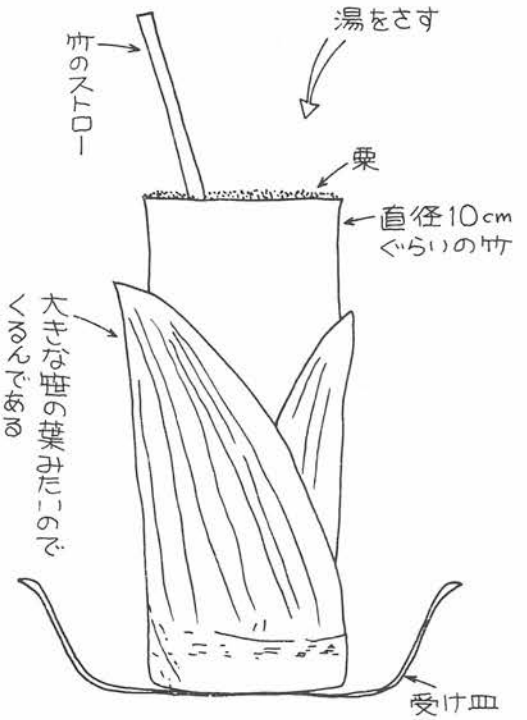


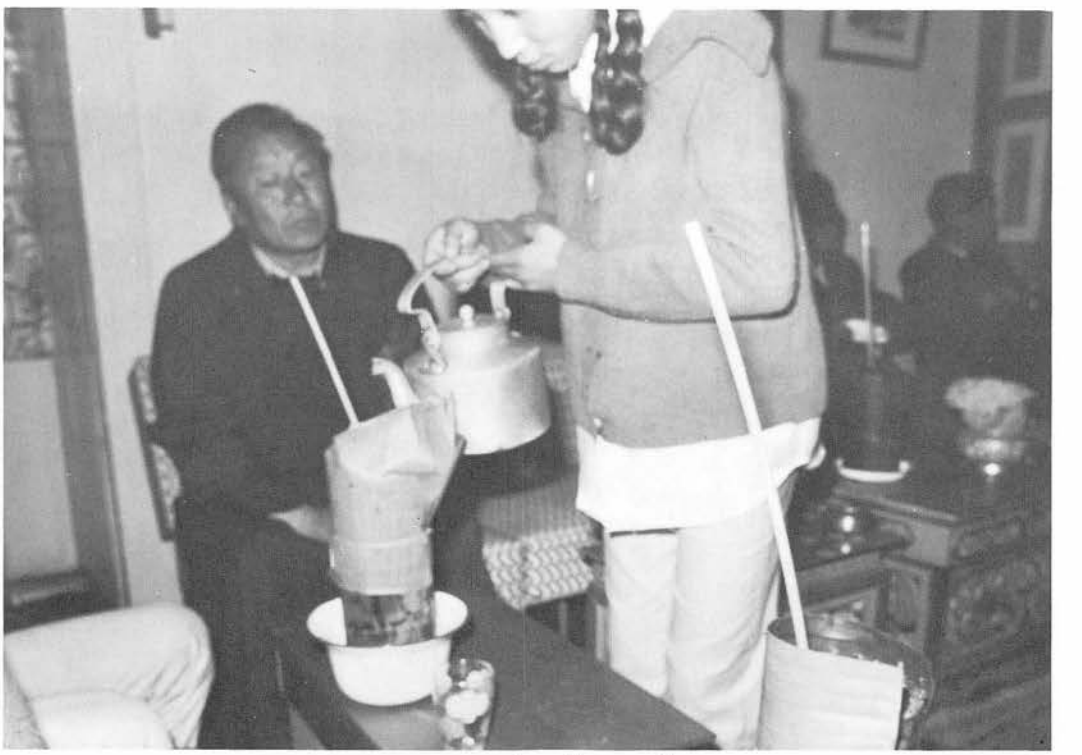
たひと区切りすると捨てにいく。いったい何をしているのだろう。

花婿，花嫁は入口近くに座っていて，花嫁には少し年下ぐらいの女の子の付き添いがついていて横に座っている。

贈り物を持って訪れる人が相い次ぎ，みんな手に手に，カタという白い編んだスカーフみたいな物を持ち，それを花婿，花嫁の首にかけて，ちょっとお祝いの言葉を言って贈物を手渡している。仏壇に向い合うようにして，花嫁の親戚の人が座っていて，その前にはお酒が置いてある。このとき，私たちもウィスキーをごちそうになった。このウィスキーがかのランプー産シッキム・ウィスキーだった。

奥の応接間みたいな所に通される。町の名士みたいな人がたくさん集まっていて談笑していた。ここで，改めて，日本よりの客人として紹介される。よく見ると，私たちの泊っているホテルの主人も来ているではないか。





シッキム・ビール“トンバ”

今度は，シッキム・ウィスキーではなく，一種の地酒みたいなものを出された。
「これは何ですか」と聞いたら，「シッキム・ビヤーだ」という返事が返ってきた。「ふーんシッキム・ビヤーね」おもしろいものだ。——日本に帰ってきてから調べてみたら，トンバとかいうものらしい——。

太さ10cm以上もある竹の筒に，粟がつまっていて，竹のストローがついている。それにお湯をさして，5分～10分位して飲むわけだ。——もちろん，粟の他にアルコール分を出す何かが入っているのだろうが——非常においしい。だまっていると，ヤカンを持った女の子がまわってきて，何回も何回もお湯をつぎ足してしまう。

このときいっしょに，おつまみみたいな物を出された。米か何かわからないが，粉を練って焼いたみたいなもので，網の目の板みたいなものだ。これが，やたら固くて噛むのに一苦労する。

このあと，またウィスキーやらラムを出される。祝い事に酒がつきものなのは，どこでも同じなのかもしれない。

一晩中踊りあかす

さて，あまりいては迷惑だろうと，帰ろうとすると，ぜひ食事をしていってくれという。酒をよばれたら，食事をごちそうになるのは習慣だといわれ，断わりきれず，庭の方に出てみる。すでに会食の用意ができていて，ごちそうになる。

鶏の煮たもの，カレー，野菜のゆでたもの，マトンやら，もうありとあらゆるごちそうで大変だ。これも食べてください，あれも食べてくださいと大変だ。うれしい悲鳴が出そうだ。正直言って，今回の旅であのときほど，おいしいと思いきり食べたことはない。ガントックの人の好意とともに胃袋の中にはいっていった。

この会食のあとは，踊りである。シッキムダンスと言っていた。

右～左～右と足を大きく振り出して，右足で足踏みをする。このとき手で振りをつけて，同時に体を動かす。——何だかわからないが——これを歌を歌いながら踊る。

このダンスには，特別な意味はなく，おめでたい事があった時に踊るのだそうだ。

この他，数種類の踊りがあって，みんないっしょに踊ってみたが，楽しいの一語につきる。まわりを見渡してみても，もうまったく日本人と同じ顔をした人ばかりで，どこか日本の田舎で踊っているんじゃないかという気さえしてきた。

踊りが熱をおびてくるにつけ，何か麦の粉みたいのをまきちらしたりしている。一晩中踊りあかすのだそうだ。

この結婚式には，500人位の人が入れ替り立ち替りお祝いに訪れるのだそうだ。

祝い事のふるまいというのも，さぞかし大変なのだろう。

この時，「モンゴリアン・プラザー」という言葉を聞いた。この言葉は，のちにアッサムのディブルガールでも聞いた言葉である。

顔の色や体つきが同じということは，思想や習慣をこえて親しさを感じるもののようである。よく知っているアメリカ人やイギリス人と話をしても，どことなく異和感があるものである。このひとつを考えてみても“世界は一つ”とは言い得てなり難いことである。

あまり遅くなっては明日にさしさわるので，本当に後ろ髪を引かれる思いで，踊りの輪を離れた。

結婚式のパーティでシッキムの青年と一緒に

西シッキムのバスの旅

ジョルタン，ギャジンへ

1月12日（日）

昨晩，ガントックの町にも雨が降った。今朝もまだ少しばかり雨が残っていて，時たまパラついたりしている。

これから，10時間以上の西シッキムへのバスの旅が始まる。

運賃は1人16.2Rsだった。9時前，運転席にまで人を詰め込んでバスは出発した。

1時間程走って，シンタムという所に着き，しばらく休憩する。鳥の声がよく聞こえる。

このシンタムから少し行くと，大きなつり橋を渡る。ティスタ川の流れだと思うが，濁ったとび色をしていた。その橋を渡ってから川とは離れて山間の道を進んでいく。

ガントックを出てから4時間程たってから，ナムチという所に着く。かなり大きな町で，中心に大きな木が植っている広場が2つ程で，町の中心部を形づくっているらしい。

コンクリートでおおわれた広場のまわりには町があって，広場のすみには，木製の回転ブランコがあったりする。

このころになると，もうすっかり雨はあがってしまっていて，気持ち良い明るさになっている。

役人らしい人が出てきて，紙に名前，国籍，行先を書いてくれという。人の良さそうな田舎の人といった感じで，チェック・ポストなどで，鉄砲を持った警官に聞かれるのとは，まったくちがった感じをうける。

30分程の休憩ののちここを出発する。しばらく走って，また川ぞいの道に出る。同じシッキムの町といっても，その印象というのは本当に様々なもので，途中のうつりゆく風景とともに，バスの旅を楽しいものにさせる。

ジョルタンの町に入り，シッキムの国営交通（SNT）のオフィスの横に止る。ガントックを出てから6時間目，3時前だった。

ギャジン（Gayshing or Gyalzing）行のバスは，4時頃に出るそうだ。このジョルタンの町は道の両側に店が並ぶといったかんじのもので，かなりの人でにぎわっている。しかし，ガントックやランプーの町とはまた違った感じをうける。何か埃っぽい町だ。

ギャジン行のバスは今まで乗ってきたのをもうひとまわり小さくしたようなバスだ。

運転席の横のながめの良い席に陣どって出発である。もう，この調子だとギャジンへ着くころは真暗になっているだろう。

ランジット川（Rangit River）に沿って，ナムギャル・ハイウェイ（Namgyal Highway）を進んでいく。この道は，舗装こそされていないが，立派な道だ。途中，何人もの人をひろっていくので，いつのまにかバスの中は超満員である。

1日の仕事を終えて，話しに花を咲かせているのか，にぎやかなものだ。ちょうど隣に同じくガントックから来たシャンカーという人が座っていたので，いろいろ話しながらいくことにする。

もうすっかり暗くなってしまって，川沿いの道は両側を木立ちに囲まれて，ちょうど木のトンネルを走っている感じだ。明りもなにも見えない中を進んでいくので，少し無気味な感じもしないでもない。

木立ちの中の真暗闇の道を進んでいくと，闇の中から頭の上に荷物をのせた女の人が，ヘッドライトの中に，フワッと浮びあがってきたりして，ドキリとさせられる。こんな人気のない所を今頃歩いて，どこへ帰るのだろうと，人事ながら心配になる。しかし，今思ってみれば，バスに乗ることもできず，歩いていたのではないだろうか。

5時すぎにリクシップ（Likshin）という所で休憩する。

この休憩のあと，しばらく走ってから，川とは離れ，山道をジグザグに登っていく。1日中バスに乗っていたため，いいかげん腰が痛くなってきた頃，ようやく山の斜面にポツンポツンと螢光燈

の明りが見えてくる。ギャジンの町らしい。意外とまだ人出がある。

さて，今日の泊り場を探さねばならない。聞くところによると，ホテルみたいなのはないということだし，どうしたものだろう。幸い，神が茶店と交渉して，店の奥の部屋を貸してもらえることになった。

ギャジンの朝

1月13日（月）

茶店の裏部屋だが，電気もつくし，炊事にも便利だし，こりゃいいと思ったがひとつだけ難点があった。"鶏"である。

鶏小屋か何か知らないが，頭上か奥の方にあって朝っぱらからコケコッコー，コケコッコーと鳴くのにはまいった。1羽だけならまだしも，5～6羽いっしょにやられたのではたまったものではない。

さて，昨日バスの中から見たギャジンに至る自然というもの，植物が似ているせいか，あるいは山あり谷ありで，インドみたいにまっ平らではないせいか，実に親しみをもてる。ここギャジンの町のまわりの自然というのも申し分ない。

午前中は，ダージリンに着いて以来ひさしぶりに青空がひろがるし，聞こえる音といえば鳥の声だけである。

立派な僧院

このペマヤンツェ僧院（Pemayangtse Monastery），外観はたいしたことのないすすけた僧院である。驚いたことに，聖域であるはずの所に，鉄砲をもった兵隊みたいなのがいて番をしている。おまけに，そばの宿舎からはラジオ音楽か何かが大きく流れてきて，実に似つかわしくない。

僧院の内外とも写真撮影禁止だそうだ。これはお坊さんではなく，その鉄砲を持った兵隊が言ったのだが……。靴をぬいで中に入ってみる。ついでだが，その鉄砲持ったのは土足のままである。

まず，最初の部屋にはいって驚いた。外観からは想像もつかない立派な，すばらしいものである。あの，ひとりでくるくる回っている経文をかいたドラムや，高さ3m以上もある仏像，鉦や太鼓，あるいはラッパ等の楽器，仏具など，実に時の重みというか，にぶい光りを発している。ダージリンのグーム・モナストリー（Ghoom Monastery）やカリンポンで見たそれの比ではない。

次の部屋に通されて，また驚いた。壁一面に仏画が描かれているのである。それも20cm四方ぐらいのがびっしりと。

仏像がまた五体ぐらいある。トラックの運転手をはじめ3人とも，仏像にむかってひざまづき，お祈りしている。もう一つの部屋にも仏像があり，また違った仏画が描かれている。仏像は，大きいもので10体以上あったと思う。それぞれの仏像，あるいは仏画は何を意味し，どのような関係があるのだろう。

その後，お坊さんが太鼓をドンドンたたいて，朝の勤行らしきものをしている小部屋に通される。ここでお礼を2ルピーばかり渡す。そうしたら，鐘を渡してくれて，もう一つ別の部屋に通される。

ここで，また一つ驚くべきものに出合った，今まで見たことも聞いたこともないものである。何かというと，正確な名前も何もわからないが，要するに地獄，極楽の模型といったらいいだろう。底面の一辺が1.5mぐらい，高さが3mぐらいで五重の塔みたいになっているもので，実に細かい細工である。塔の上の方は極楽なのだろう。花が咲き乱れ，鳥が歌い，みるからに楽土といった感

ギャジンの茶店・私たちはこの店の裏部屋へ泊めてもらった。

じだ。それよりも，おもしろいのは塔の下の方，すなわち地獄の様である。鬼が剣を持って飛び出ていたり，赤い大きな口を開けていたり，あるいは人を釜茹でにしていたり，罪人らしい人の首を切っていたり，閻魔大王みたいのがデンとかまえていたりもする。

僧院の中で，このようなおもしろいといってはなんだが，模型に出合うとは思ってもいなかった。木やブリキあるいは紙など様々なものを利用して作ったものを見ていると，宗教の中でこのような模型というのは，いったいどのような意味あいを持ってくるのだろうと考えてしまう。およそ想像がつかない。日本のお寺の奥にも，あんなのがあるのかなあ……。

ギャジンからジョルタンへトラックの旅

明日中にはシッキムの外に出なければならないのが気になる。

すると，さっきのトラックが荷物を積んでジョルタンまで行くという。乗っていかないかと声がかかる。それじゃあと，また荷台にお世話になることにする。

茶店のおじさんに部屋代10ルピーを払って，早速，荷物を荷台に積みこんで，こちらも荷台に腰をおろして出発だ。

町を出て，山の斜面をジグザグに下っていく。目の前には木々におおわれた山が，下の方には川の流れがキラキラ光っている。

川沿いの道は快適だ。まばらに木が植っている山の斜面を見ながら進んでいく。下の方には透き通った川の流れがのぞまれる。透き通った川の流れを見れるのも，シッキムならではのことかもしれない。途中，段々畑があったりして，実に「いいなあ」といった感じだ。

走りながら，何人もの人をひろっていくので，いつのまにか荷台の上は人でいっぱいだ。みんな土地の人らしくて，話に花が咲いて実ににぎやかだ。途中，人とすれちがったりすると，またあいさつが大変だ。「ヤア，元気かね」などといって（多分），手を上げたり，笑ったり，女の人が4人ぐらい乗ってきてからは，また一段とにぎやかになる。まさしく，彼らの生活そのままなのだろう。隣りの人と話をしてみても，実に穏やかで，好意あふれんばかりといった感じだ。

こうして，シッキムの印象は段々と深められていく。

昨日のバスの旅にくらべると，何とこのトラックの荷台の旅のすばらしいことか。シッキムのにおいと，風を身にうけて進む。固い座席にすわり，箱に詰められて移動するバスより，実に人間的じゃないだろうか。

メリそしてダージリンへ

メリ（Melli）行のバスの雰囲気は，あきらかにガントック行のそれとも，ギャジン行のそれとも違っていた。

まず，やたらに，もうめちゃくちゃに混んでいた。それに，乗っている人の感じが違う。みんな裸足で，すすけた服を着てドロにまみれている。顔立ちも，あきらかに今までの人と違ってきている。再びインドへと近づいていくらしい。

川沿いの道だが，土煙をもうもうとあげて。デコボコの道をスピードを出して走るのだからたまらない。ゆれる，ゆれる。

石がゴロゴロしているところも，水の中もなんのそのである。バスの屋根に積んだ荷物がふり落されるのではないかと心配で仕方なかった。何しろ，中にはガントックから大事にかかえてきたシッキム・ウィスキーとラムがはいっているのだから…。

メリに着く前にまた日が暮れてしまった。ジョルタンを出てから2時間程で，メリの手前にあるつり橋に着く。ここが，シッキムとインド側との連絡路にあたるわけだ。やはり，鉄砲を持った兵隊さんが3人いて番をしている。

沖と永田が，メリの方へシッキム側のチェックをうけにいく。その間，私はその橋の所に荷物とともに残ることにする。

しばらくして，沖と永田がもどってきて，橋を渡ってインドへともどっていく。さて，ここからティスタまでまた移動しなければならない。

また，トラックに便乗である。さっきのバスの

運転手が親切にいろいろとめんどうを見てくれるので大いに助かった。

どうにか1台のトラックをつかまえて，ティスタへと向った。

20分程のドライブでティスタのチェック・ポストに到着である。なつかしい所だ。トラックには5ルピー払ったと思う。

ここのチェック・ポストだけは厳重で，明りがこうこうとともって，何人もの歩哨が立っている。ここのチェック・ポストは24時間開かれているそうだ。

許可証にチェックをうける。時刻はすでに夜の7時をまわっている。

さあ，これからダージリンまでもどらなければならない。

すでにバスもなく，トラックも通る気配もない。仕方なくジープをチャーターすることになる。3人で借り切って80ルピーだ。

突然の収入に，ジープの運転手は大喜びで，こちらはといえば，夜の寒さに鼻水を出しながら車に乗り込んだ。

ダージリンに着くのは9時すぎだろう。

こうして，シッキム駆け足自動車の旅は終った。

シッキム王宮のそばにあるラマ教寺（ゴンパ）

アッサム・ガイド—青い丘とみどりの谷—

「A Trip to Assam」より

アッサムの現在

アッサムはインドの他の地域とともに，経済的発展への道をすすんでいる。

新しい油田がアッサムの奥地でどんどんと開かれている。また油床の探鉱も続けられている。

ゴウハティの近くのムーンマティの公営石油精製所ではいろいろな石油製品が作り出されている。

紡績絹糸工業，火力発電所，化学肥料工場などが，この辺境の州の発展に貢献する力となっている。

アッサムには豊かな鉱物と森林，そして農業資源がある。その中で水資源，石炭天然ガス資源等に基礎をおく豊かな機械力が，経済発展への一つの原動力となっている。

各地に散存する原料は，鉄道，道路などで集積されている。

◎アッサムの石油

インド石油，天然ガス委員会がムーンマティの国営石油精製所で原油を採探，精製する一方，インド政府と民間の半分づつの出資によるインディア・バラウン石油とビルマ石油が，ジブサガールラクワ，ナホーコティアで原油を採掘している。

モーラン油田からはゴウルティへ向けて400㎞のパイプラインと，1,200㎞のパイプラインがバラウン原油精製所の間に敷設されている。

ディグボイにある最も古い私営の石油会社であるアッサム石油会社石油精製所も生産を続けている。

インド石油企業体の石油精製部門がインドの国営石油精製所を経営し，同じくパイプライン部門が，ゴウハティからシリグリ間の能率的かつ迅速な石油輸送にあたっている。

アッサムの油田地帯で確認された石油埋蔵量は約2100万トンに達している。

現在のところ，原油と天然ガスはナホカチャ油田から石油精製所にむけてくみ出されている。

ナホカチャ～ゴウハティ間には14インチ径のパイプラインが，ゴウハティ～バラウン間には12インチ径のパイプラインが敷設され，それぞれ原油を運んでいる。

アッサムの主要な油田としては，ディグボイ，ナホカチャ，デゥリアヤン，モラン，ルドラサガールがあげられる。

◎アッサムの天然ガス

アッサムは天然ガス資源に富み，11,400兆立方フィートの埋蔵が確認されている。

現在のところは，ナムラプの化学肥料工場で利用されているほか，ほんの少ししかガス製品は作られていない。

アッサムでは現在，液化天然ガスを生産する計画が，国内消費のためにすすめられている。

◎アミアン・アムトリュウ水力発電所

ゴウハティからのシロン・ゴウハティ・ロードの途中24㎞のところにアムトリュウ川を利用したアムトリュウ水力発電所がアッサムに作られた。その後，27,000KWの発電能力をもつアミアン水力発電所がアッサム州電気局によって作られた。

新しく生まれた人造湖のある発電所周辺はすべての点で申し分なく，美しい観光行楽地として開発されていっている。

国際ホテル建設を含めるたくさんの開発計画が第4次5カ年計画に伴ない着手されている。その場所は，すでに週末の休日行楽客の集まる場所となっている。

一方，他の火力発電計画が，ガロ丘陵のナンガルビブラで進行中である。

◎ナムラプ化学肥料工場

ナムラプ化学肥料工場は，インドで天然ガスを総合的なガス製品の原料として利用した最初の工場である。

長さ約13㎞のパイプラインがガス採掘場から

工場へガスを運んでいる。

この肥料工場は，1年間に尿素と硫安の形で45000トンもの窒素肥料を生産することができるといわれている。ここにはまた，硫酸工場も併設されている。

インド政府の拡張計画によると，窒素肥料の生産能力を，アンモニア日産500トン，尿素日産1000トンの1.518.000トンまでに引き上げることになっている。

◎アッサムのセメント工場

アッサムで莫大な石灰岩の埋蔵が，丘陵部で発見された。

チェラプンジにある州営セメント工場が生産に従事している。

その生産能力は日産250トンで，将来850トンに拡大されることになっている。

アッサム州政府は近い将来，ボカジャンに2番目のセメント工場を作ることを計画している。

◎紙パルプ工場

アッサムの松の1年の成長は120万トンにも達し，そのうち100万トンはカチャールミゾ丘陵地区で育っている。そのため，アッサム州に紙パルプ工場を作ろうとする計画がある。

◎合板工業

アッサムには茶園の紅茶用の箱の需要に応じたものと，営利目的の合板工場が20カ所ある。

◎農薬工業

アッサムの農業企業体では，農薬工場を州に作ろうとしている。

◎砂糖工業

アッサムの砂糖キビの産出は30万トンに達し，砂糖協同組合工場が，ジョルハットの近くで生産をしている。

◎紡績絹糸工場

ジャギロードに75,000ポンドの紡績絹糸，50,000トンのノイルの生産能力をもつ工場が日本の提携によって建てられた。

アッサムの町々

◎テヅプール

テヅプールは，古代ソニトプールとして知られ魔神バナの都であったといわれている。

彼の娘ウシャはクリシュナ神の孫アニルッダと駆け落ちしたのである。

テヅプール近くのダ・パーバティアの旧跡は非常に歴史的価値のあるもので，アッサムの古代の建築様式の最もすばらしい実例のうちのいくつかを見ることができる。

アグニガー，ナグ・サンカール，バルクプン等の旧跡，そしてソナイ・ルパの寺院などが旅行者の興味をひくところである。

テヅプールはゴウハティからの道路によって訪れることができる。

宿泊施設としては，ダークバンガローや，数軒のホテルが利用できる。

◎ジブサガール

ここは19世紀までにアッサムを支配したアホン王の都であったところである。

シヴァ派，ヴィシュタ派，デビ派のそれぞれの寺院が，ジブサガールの貯水池の池畔に建っている。ここは，たくさんの聖地巡礼の人々が訪れるところである。特にその人出は，シヴァラトゥリ祭の時，最高となる。

この町はジョルハット空港より自動車によって簡単に達することができ，国道によって結ばれている。

ここには鉄道の駅もおかれている。

宿泊施設としては，ツーリスト，バンガロー，サーキット・ハウス，ダークバンガロー等が利用できる。ジブサガール付近にはたくさんのアホン朝の遺跡がある。

ランガールはアホン王が，象の戦いや，レスリングを見るために作らせた観覧席である。

タラタルガールは地下要塞である。

ジブサガールから約13kmのところにカレンガールがある。これは7階建のレンガ作りの王宮で，かつてのアホン王の都の遺跡である。

ジブサガールの新しい油田であるルドラサガールは現在，州の所有する石油精製所のために原油を採掘している。

◎マジュリ

世界中で最も大きい河島のマジュリは，ジョルハット近くのミアマティ上陸場より，舟で簡単に

行くことができる。

1,256平方kmのこの島は，シュリーサンカラデバによって設立された神学校がある。そしてここはヴィシュヌ派の人々にとっては，聖地巡礼の場でもある。

◎バッタドゥラバ

ナウゴンから18kmのところにあり，ヴィシュヌ派の人々にとっては聖地巡礼の中心地である。また，ここはシュリシュリサンカラデバの生誕地でもある。

◎ディブルガー

ディブルガーは，ディブル川とブラマプトラ河の合流するところに位置し，アッサム州の北東部では最も重要な町である。

ここは，テヅプール同様NEFA地区への入口でもある。

堤防がブラマプトラ河の氾濫から町を守るために作られている。

この町は，他の町と道路，鉄道，航空路によって結ばれている。

宿泊施設としては，サーキット・ハウスや数軒のホテルが利用できる。

ここには，アッサム薬科大学がおかれている。

◎ディグボイ

アッサムの最も古い石油の町，ディグボイは鉄道と車によって行くことができる。ここはディブルガーより97kmのところにある。

ここには，アッサム石油会社に所有される私営の精製所がある。現在，デュリアヤンでは新しい石油の町が成長していっている。

シ ロ ン

アッサムで最も美しい町シロンはまた，州の首都でもある。

シロンは海抜1496mのところに位置し，その気候は涼しく身をひきしめるようなものである。また，その美しい山の風景はシロンをして，東洋のスコットランドといわしめている。

幅の広い，美しい，舗装道路がゴウハティとシロンの間，103kmの距離を結んでいる。この路線には，たくさんの州営交通のバスと車の便がある。この道路にはたくさんのカーブがあり，高いガケと深い峡谷とをこえて松の森林を迂回していっている。

シロンへ行く途中，ゴウハティから26kmのところで，アムドリュウ水力発電事業の近代的な設計の産物を見ることができる。

発電所付近には，ダムや他の施設を見おろすことのできるインスペクション，バンガローがある。

また，ゴウハティからシロンへ着く手前，約16kmのところで，一般にはバラパニ水力発電事業として知られているアシアン水力発電事業のすばらしい眺めを得ることができるだろう。

ここには，美しい貯水池があり，丘を貫ぬいて作られたトンネルによって，発電所と結ばれている。また，アムトリュウ水力発電所と同様に湖を見おろす位置に，美しいインスペクション，バンガローがおかれている。

将来，この地区を旅行者のための行楽地に変えていこうという計画が進行している。

シロンにはたくさんの風光明媚なところがある。Ward Lakeもその一つである。ここでは，ポロの競技場や駐屯軍のグランドが，たくさんのスポーツ競技会の会場として使われている。

シロンにあるゴルフ場は，国中で最もすばらしいものの一つであると考えられている。このゴルフ場のコースを見おろす位置に，ゴルフクラブがおかれている。シロン競馬場もまた，このゴルフクラブ附近にある。

一方，Ward Lake舟遊びの場を提供してくれている。このように，シロン一帯は，旅行者にとっては楽しい場所となっている。

また，シロンから自動車で行ける距離内にたくさんの滝を見ることができる。それらのうちいくつかは，かっこうのピクニックの場を提供してくれ，シロンピークと，ハッピーバリーはすばらしいシロンの町のパノラマを与えてくれる。

シロンクラブは町の中心部に位置している。

アーチェリーがカシ族の部族特有の競技で，KhillやJhillなどで練習されている。

シロンで最も店が集まっているところは，バーラバザールである。ここでは1週間の市が8の日毎にもうけられている。

シロンを訪れた観光客はもっとすばらしい部族の踊りや，祭のうちのいくつかを見ることができるだろう。陽気で，はつらつとしたカシの人々は1年に1回羊をいけにえにする儀式を，シロンから11kmのSnit村で，ナンクレムダンスを毎年10月と11月の間中行なう。

ジャイナ教徒は，BEHDEINKHLAM祭として知られる独特の祭を7月にJomai地方で行なう。このJomaiはシロンから63kmのところにあり，すばらしい舗装道路によって結ばれている。

◎宿泊施設と交通機関

シロンでの宿泊には，シロンクラブの競馬場を見おろす位置にある，ツーリスト，バンガローやたくさんのホテル，もしくは軍隊職員のためのホリディ・ホームが利用できる。アッサム州政府の経営するPinewood HotelがWard Lake付近では，一流の宿泊施設であり，バーを備えている。シロンや，アッサムの他の大きな町では，観光タクシーが経済的な交通機関である。

◎チェラプンジ

世界で最も降雨量の多いチェラプンジは，平均して年間，1,163cmもの降雨量をほこり，シロンから約58kmのところに位置している。今までの記録によるとチェラでは，1,861cm（905インチ）の降雨量を記録したこともある。ここは，カシ丘陵の南の端にあたり，立派な道路によって結ばれている。

また，ここには州政府の経営するアッサムセメントの工場がおかれている。近くではMaws maiの滝が旅行者を楽しませてくれるであろう。

ゴウハティ　—アッサムの玄関—

現在のゴウハティの町は，過去のたくさんの王たちの都であり，「東方の光」を意味する，PRAGJYOTISHPURと呼ばれていた。

そのブラマプトラ河のほとりの見晴しのよい位置とアッサム地方の他の町々との直接のつながりから，ゴウハティはアッサムの玄関ということができる。

ゴウハティのすばらしい河港と，とりわけ日没時の河の景色は忘れることのできないものとなるだろう。

ゴウハティは現在，産業の中心地としてだけでなく，学問と文化の中心地としてもますますその重要性を増していっている。

ここには，ゴウハティ大学がおかれ，他のたくさんの教育訓練施設がそれに付属している。

Historical and Antiguarian Researchとアッサム博物館もまたここにおかれている。

このゴウハティの町は，北ゴウハティと他のインドの地方との陸上交通路として役立つ立派な橋によって結ばれている。

◎宿泊施設

ゴウハティの一流の宿泊所としては，サーキット・ハウス，スタジアム・ゲストハウスが利用できる。その近代的な快適さを除けば，町中にたくさんあるダークバンガロー，ホテル等が利用できる。もっとくわしい情報は，PANBAZAR，GAUHATI－IのTourist Information Officeから得ることができる。

◎カメカ寺院（KAMAKSHYA temple）

ゴウハティからそう遠くないところに，たくさんの聖地や寺院がある。それらのうちいくつかは聖地巡礼の場としても有名である。

カメカ寺院はブラマプトラ河の南岸近くのゴウハティから5kmの神聖なるニラチャラの丘の上に位置している。ここはシバア神の妻，カリーと関係のあるヒンズー教の5大聖地の一つである。

モンスーンの間に行なわれるアンブーバチ祭の間，このカメカ寺院の周辺は非常にたくさんの聖地巡礼の人々でにぎわう。

このカメカ寺院は最初にマハーバーラタ時代のナラカスラ王によって建立されたと信じられている。そしてその後，1565年にクッチ王ナラ・ナラーヤナによって再建されたものである。

この寺はインドにおけるシャクティ崇拝の最も有名な中心地の一つである。寺院へは屈曲の多い1本の自動車道が通じている。

ゴウハティからのバスの便が寺院と町とを結ぶ定期交通機関として利用されている。

寺院のあるニラチャラの丘の上からは，ゴウハティの町とブラマプトラ河のパノラマを眺めることができる。

他の聖地巡礼者の訪れる寺院としては，ブラマプトラ河の中央にある Peacock 島におかれた，UMANANDAがあげられる。

ゴウハティの東，その昔，天文学と占星術の研究の中心地といわれていたチトラサラの丘にナヴァグラハ寺院がある。

これは，ゴウハティがPRAGJYOTISHPUR即ち，東洋占星術の町として引き合いに出される一つの理由でもある。

スクレスワの丘にあるジャナーダン寺院は，町の中心部の東側に位置している。

ゴウハティから車で6㎞程行ったところに，偉大なVedic Rishi Bashistaにちなんで BASHISTASHAAMと呼ばれるピクニックの場としてよく知られた所がある。

ゴウハティ近辺の興味深い所

◎ハジョ

ゴウハティから20㎞のブラマプトラ河の北側の岸のほとりに，その寺院のグループで知られているハジョがある。

それらの中ではHayagriba Madhab が一番よく知られている。

仏教徒の一部の宗派では，仏陀がこの地で「ニルバーナ」即ち涅槃に入ったと信じられているのである。

一方，ハジョは又，回教徒の巡礼地でもある，ここには，POA-MECCAとして知られ Pir Ghyasuddrn Auliaによって建立されたモスクがある。

このモスクは，メッカの4分の1の神聖さを持つということになっている。

◎スアルクチ

ゴウハティからブラマプトラ河を横断して24㎞のところに，絹を産出する村として有名なスアルクチがある。

ここのほとんどのすべての家庭では，織物の技術の伝統を受け継いでいる。

家内工業とはいえ，すばらしいデザインのMuga EndiそしてPatの特徴をあらわしているとして，よく知られたアッサムシルクはここで生産されているのである。

1日に数便の定期バスがガウハティとスアルクチの間を往復している。

◎チャンドゥビ湖

ゴウハティから約64㎞のゴアルパーラへの国道の近く，カシ，ガロ両丘陵の間の奥まったところに，美しいチャンドゥビ湖がある。

その周辺は，崖と森林によってかこまれ，申し分のない休日の行楽地となっている。

この湖とその周辺の森は，かっこうの釣り場と狩猟の場を提供してくれている。

◎バーペタ

ゴウハティの北西にヴィシュヌの僧院と，ヴィシュヌの改革者スリ・スリSANKARADEVA のスリMadharderа寺院がある。

ここはゴウハティから145㎞で，定期バスによって結ばれている。

↓ ブラマプトラ川の渡船場

アッサム日記

矢野郁雄

インドの汽車

昭和49年12月4日，ブータンを旅行したあとダージリンへ行き，かねての約束通り，再び佐々木，菊地と合流し，市内観光や日の出のカンチェンジュンガを見たりしてカリンポンへ行った。そこでダージリンと同じようにシッキム入域の交渉をしたが，ニューデリーから書類が届いてないのが致命的で諦めなければならなかった。ブータン入国の折，ブンツオリンで別れた英国婦人にダージリンの役所で偶然再会したが，あれから1週間シッキム入域を折衝したが，ブータンと同じく駄目なので残念だが本国へ帰ると淋しそうに語っていたが，厳しい規制もさることながら本当についていないという感じのようだった。

私たちも予定を早めてアッサム行の汽車に乗るべくシリグリ駅に午後5時15分到着。先日とっておいた寝台車の予約を今夜に変更するように交渉したが，空席があればと条件づきなので列車が着くまで乗れるかどうか分らない。やがて5番線に列車がインドでは不思議なくらい定刻に滑りこんできた。横内は分岐点の駅だけに広く，降りる人乗り換える人，乗る人とで混雑している中をいろいろの露店，弁当屋，お茶，物売り等が大きな声で叫び乍ら走り廻っており，また喧嘩もつきもので，その騒々しいホームを白い牛が悠然と漫歩している光景は，まさにインドの中のインドだ。

結局，空席がなくて発車となったが窓から乗る者，ぶら下っている者，走る汽車に追いつき危く最後部に飛び乗る者，たいへんな混乱で丁度終戦当時の日本の再現だった。次の汽車は23時30分頃だが約3時間遅れているらしいので騒ぎが一応治まったホームから，再び待合室へ戻り仮眠することにした。どうしても眠れないので外へ出てみたら通路，ホームに家の無い人達だろうか，歩くに邪魔になる程毛布にくるまってのゴロ寝族が多いのには驚いた。

12月5日

早朝2時30分，待ちわびた列車が到着。駅員に席の確保を交渉しても，始めは「栄あるインド鉄道員は収賄しない」と毅然たる態度だったがチップを若干増額したら，すずしい顔で受取る姿は愛嬌的で憎む事はできない。贈賄の効あって寝台1等2人用と現地人と相部屋の4人用に乗ることができたが，寝具は何も無く板の上に横になるだけでその上，窓は，外から入れないように鉄格子になっており，まるで檻のような，囚人用の護送列車のようだ。これでは万一事故があっても逃げる所がなくて，インドの汽車と心中？しなければならない。しかし，インドの汽車に一度は乗ってみたいと希っていたのだから文句は言うまい。走る速度は日本の普通列車と変らないが，駅での停車時間が長い。

アッサムの大茶園

東へ東へと進み，夜が明けてから10時00分頃までは広大な茶畑ばかりであって，茶摘風景も所々で見られた。アッサム茶はインドでの60%の生産量を誇るだけあって，その広さも日本では想像も出来ない程で茶畑で茶園だけで1つの町村が形成され，学校，病院等もその茶園の中にあるそうだ。郷里・丹後で最も大きい共同茶園の一角で茶の栽培をしている私の父にも見せてやりたい気になる。

茶畑が過ぎると一面黄金の海のように変った。刈取の所もあり直ぐに田植をするらしい。平均して稲の成長は悪く，日本の秋のように稲穂が垂れ下っていなかった。田圃が広いのでその必要はないのだろう。

食事は朝食もそうであったが，注文すれば次の停車駅から次の停車駅へと連絡して作らせ，その駅へ着いたら各室へ運んでくれる。午後1時も過

ぎ，昼食が運ばれたが長方形の大きなブリキの入れ物に，飯と6種類の副食がついていたがインド料理なのでとても辛い。佐々木カナ・サーブが汗を拭き拭き全部平げたのはあっぱれだった。

日本人の演説

14時45分，パラペタ・ロード駅着。荷物を駅前広場へ運び出してマナス自然動物保護地域へ行くタクシーをチャーター。その間多数の老若男女の現地民が珍らしそうな眼差しで私たちを円陣で取囲んだが，遠来の日本人を歓迎してくれたのだと解釈する。佐々木カナ・サーブは一段高い所へ上って「エー諸君，出迎えご苦労さん……」と日本語で声高らかに演説？を始めた。私たちはゲラゲラ笑ったが，インドの人たちは不思議な顔をして首をかしげている。演説の練習には格好のようだが，反応が無いのが残念。さてチャーターできた助手づきのタクシーに乗り，マナスをめざして郊外へ出ると舗装は切れ，煙幕のように埃をたてて走る。

マナス野性動物園

前方にはブータンの山々が見え，何んとなく懐しい。ブータン国境に近いせいかこんな田舎にもチェック・ポストがありパスポート，アッサム入域許可書等の提示を求められた。オフィスも小さい小屋だ。約1時間足止めされたが，その間他の通行人は全く無かった。ここの勤務員もさぞ時間をもて余していることだろう。そのためかどうかは知らないが，特に念を入れているようで，先を急ぐ私たちにとって甚だ迷惑だ。

漸くOKになり，近くのマーケットへ今夜の食糧の買出しに行った。米，野菜等を買ったが仕事帰りらしい婦人連中で賑わっていた。

再び検門所へ戻り通過する。平坦な1本道を真直ぐ走り30分も過ぎた頃，運転手と助手が大きく叫んだが現地語なので意味が分らない。前方を見ると虎だった。虎も驚いたのか逃げるように左の草むらに姿を消した。運転手は急いで窓を閉めたが，私の方は故障で閉らない。物騒だが仕方がない。チェック・ポストを通ってから人影が全く無かったが，このように野性動物が多いのだから当然のことだと思う。

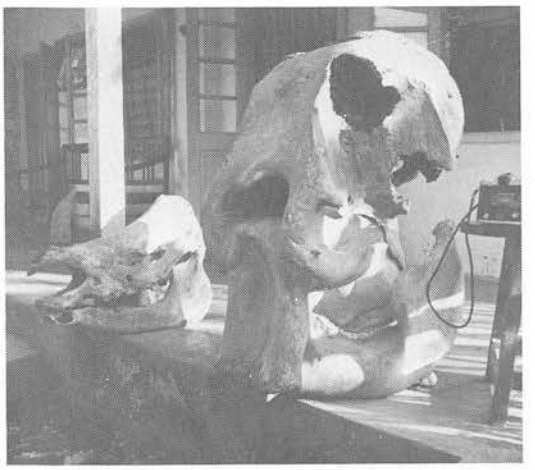
野性のゾウだ!!

陽も落ちた夕闇をライトを照らして走ると，前方に大きな影が動いている。近づいてよく見ると野性の巨象だ。瞬間緊張する。双方近づいて約5mの間隔で停まった。象は鼻を上げて襲いかかりそうだ。今更，車を後進しても遅いし窓から鼻を入れられたら最後だ。固睡をのみ対峙すること約5秒間。象は左の雑木林へ入ったので車は前進したが，手の届くようなところに象の大きな尻がまだあった。スリル満点だ。

ブータンの黒い山も目前にあり，ロッヂの手前で子馬程の鹿が2頭，ライトで目が眩んだろうか立止ったままだったが3m近くで草原に逃げた。やはり自然動物保護地域だけあり明朝が楽しみだ。レスト・ハウスに無事（敢えて強調したい）到着。灯りはランプだが部屋，寝具も清潔で仲々立派だ。ただ夜中に虎や象が侵入しないかといささか心配になった。

夕食は2階の食堂だったが，下にブータンからのマナス川が流れ対岸はブータンの山林で，明ければ眺めのよい所に違いない。

食後，ハウスの管理人から動物の説明を受けた



一角さいの頭骸骨

が近年虎が増えつつあり，現在約50頭いる。一角犀も50頭程度，象が150～160頭，冬になるとブータン側から約1000頭河を泳いで渡ってくるそうだ。これらの動物はアッサムにおいて，もっと東のカジランガと共に保護地域に指定され，区域内は象に乗った巡視員が毎日見廻っているそうだ。私たちも明朝は象に乗って観光することになっており期待して就寝。

象に乗って

12月6日

4時30分起床。まだ真暗だ。ハウス前に象2頭が私たちを待っており，大きい方に菊地と乗ることになる。乗りいいように象は腹這いになるが，それでもまだ高いので梯子を掛けなければ乗れない。皆んなに応援して貰って乗る事ができたが，背中が広いので股を広く開けたまま。歩き出すとロープを摑まなければ落ちそうで危い。

暗い静かな道路を少し行くと象が急に止った。象使いは近くに虎がいると言ったが私たちと違って敏感だ。薄明るくなり，前方に河があるのが見える。河原への急坂を下りる時，象はよく馴らされたもので後足を折り，また上る時は反対に前足を折り，背をいつも水平に保つよう配慮してくれるのには感服した。

河でも雑木林でも命令通り平気で入り，左右上下の邪魔になる枝木はすべて鼻で折り，足で踏みつけるので，象の通った跡は恰も戦車でも通ったように道ができる。その象も歩き乍ら草葉を食べたり，水を飲んだり，排便したり，その点,割合自由だ。ただ象使いが後頭部を鈎で叩くので，血が滲み出ているのは少々残酷に思えた。

すっかり明るくなりブータン領へも少しだけ無断侵入したが動物は全く見当らない。尻も痛くなり，今日は日が悪かったのだと諦めていたところ前方の白い河原に黒い物が数多く見えた。案内人から声を制止され再び草むらに入り姿を隠す。迂回して近づく作戦のようだ。野獣が獲物を狙うが如く相手に気づかれないように進む。至近距離になった地点で河原に下りると野牛は驚いて一斉に林の中へ逃げた。2組のグループでその中で最も大きいのがボスであろうか最後までこちらをにらんでいたが，後を追うように逃げた。私たちがそこを去るとまた林の中から1頭2頭と戻ってきたが，自然界には自然の掟があるようだ。

今日の成果はこれだけだったが案内人もなんとか期待に応えることができたと嬉しそうであり，私たちも次のスケジュールがあるので9時頃ハウスへ戻った。

ガウハティへ

昨日のタクシーの運転手，助手もここに泊っており，昨日と同じ道でマナス自然保護区を出た。チェック・ポストも愛想よくバイバイと手を振れば笑顔で手を振ってくれた。

平坦な舗装道路が稲の稔った田圃の中をガウハティーへ通じている。沿道の水溜りで魚獲りをしていたので車を停めて見物としゃれこんだ。多数の婦人達が竹で編んだ籠で獲る訳だが，魚量が少いのか収獲は余りなさそうだ。こんな風景が随所で見られたが，これもこの辺の風物詩かも知れない。

ガウハティー入口にある，鉄道の上が車道になっている二重構造の立派な橋をカメラに収めた瞬間，歩哨の兵隊が叱ったがタクシーは走り続け，危く難を逃れた。軍事施設が多いのか軍隊が多い。私たち日本人は戦後30年間平和に馴らされているので何か奇異に感じるのだが，やはりアッサムは中国等の接点でもあり緊張状態が続いているのだろう。

ブラマプトラ河

河幅約2000m，フェリーも通うブラマプトラ河に沿ったアッサム第1の都会ガウハティーは産業，学問，文化の中心地として栄え町全体に活気がみなぎっておった。然しその反面ブラマプトラ河岸の炎天下の広場には多数の貧民，病人が横たわっており，異臭が漂い見るも悲惨な光景だった。

今日は同行の菊地，佐々木がネパールへ行くため，パトナ迄の切符を求めに先ず駅へ行った。ところが切符は入手できず4時頃再び交渉する約

束をして昼食にすることにした。4人揃っての最後の食事であり，私もたいへんお世話になり楽しい旅をする事ができた感謝の証しとして勘定は負担する予定で，最高級のレストランを運転手に案内させたが，御馳走もできず禁酒の店とかで酒類も全く無しで，結局支払いは合計42ルピー（約1600円）のお粗末で申し訳ない次第。

先日のシリグリと同じく菊地の活躍ののち，結局若干の心づけをして切符を手に入れ，17時，レストラン前でお互いの前途の安全を祈念して別れた。

タクシーがガウハティーを出ると暗くなり，シーロンまで100余kmの道をぶっ飛ばした。だんだん登るにつれて涼しくなり，20時20分，シーロン最高のパインウッド・ホテルに着いた時は寒く，ルームへ入ると炭の暖炉で暖房してあった。

シーロン見物

12月7日

シーロンは標高約1500m。アッサムの州都であり人口12〜13万人。約80年前の地震で町は壊滅したが再建され，松林が多く風光絶佳，さしずめ森の都と言ってよいだろう。市内の道も上ったり下ったり，平担な所は少く，また美しい池もあり夏の保養地とされているが，ダージリンやカリンポンとは趣を異にしている。午前中は観光案内所へ行きパンフレットを貰い近在に多くある滝の1つを見物。商店街を歩き11時過ぎ中華料理店で早昼にしたが出るまで客は私たち2人だけだった。

正午過ぎタクシーに乗り，南西約60kmの世界最降雨地で有名なチェラプンジへ車を向けた。森林の多い道を走り抜けると多少起伏のある草原の丘陵だ。カーシ高原という。チェラプンジがこの高原の南端にあるので約50km草原を走る訳で，涼しくて快適なドライブだった。その草原の中に忽然と州営の大きなセメント工場が現われ驚かされた。

小川では付近の婦人達が洗濯。学校の児童がピクニックしたり実に牧歌的な所でもある。チェラプンジに近づくと雨雲が急に広がり一雨降った。さすが最降雨地だけあってその名に恥じない。今回の旅行20日間の全行程で，雨にあったのは此処チェラプンジだけだった（ちなみに年間降雨量11,430mm，標高1,377m）。

なつかしいカルカッタ

12月8日

昨日頼んであったタクシーは時間になっても来ないので別の車を呼び，8時30分ホテル出発。松の森林を縫うように下り坂ばかりが続くが，今日の運転手はエンジンを切らない。そういえば比較的裕福そうな運転手で車も整備されていた。一昨日は夜だったのでハッキリ見えなかったが，バラパニ水力発電所がありその貯水湖も広く美しい。恐らく行楽地として今後賑わうことだろう。

シーロン，ガウハティーを結ぶこの路線は州営バス，トラック，乗用車と交通量も多く，途中トラックが横転して積荷が道に散乱していた所もあった。11時30分ガウハティー着。空港へは専用バスに乗ったが市内から相当離れた所にあった。

午後2時30分発，カルカッタに3時20分着陸。ジェット機なので速いものだ。

ホテルは先年ネパール旅行の途中泊った事がある懐しいグレート・イースタン・ホテルだ。バスの湯も充分あるので約半月の垢を落し今夜はゆっくり眠ることにしよう。

アッサムも3泊4日の駆足旅行でその一部を表面的に見ただけだったが，帰国する時の機内でアッサムへ技術指導で入っている松永さんという人も一般的に難しいのによく入ることができたと驚いておられたが，アッサムへ入ったというだけでも大きな収獲であり，意義があったと自己満足している。

なお，今後緊張状態が緩和すれば簡単に入れる事だろうインドの別天地アッサムを多くの人が訪ねられることを勧奨すると共に期待したい。

アッサムの奥地に入る

沖　　允人

〈行動の概要〉

アッサムに入りたいと思ったのは3年ほど前のことで，それ以来機会あるごとに予備知識を仕入れていた。アッサムに入るといっても登山の好きな者としては，できるだけ東の方に行ってみたい。登れないまでもNEFAの山々をこの目で見たいと思うのは当然である。機会をうかがっている間に1年，2年とすぎてしまい3年目の冬になった。結局，49年1月中旬にアッサムを訪れることができた。同行は日本ヒマラヤ山岳協会の永田と藤井である。

1月14日，ダージリンから旅は始まった。シリグリまで車で下り，そこから汽車でガウハティまで，さらにタクシーでシーロンへ着いた。シーロンからカジランガの野性動物を見た後，ジョルハットへ行く。ジョルハットからディブルガールという最東の飛行場のある街へ着いたのは1月19日であった。ここを起点とし，サディヤの村とレド方面への旅を試みた。ディブルガールはもちろん一般旅行者は入域不可能で，さらにその東方の禁止区域はまず許可にならない所である。私たちは地元有力者の紹介と幸運にめぐまれてアッサム奥地を訪れることができた。

〈許可のこと〉

インドで1番大きな茶園のあるアッサムは広大であるが故にまた，これまでバングラデシュ（以前の東パキスタン）とインドの間でたえることのない争いが続いたことと，ナガランドなどでの独立運動が激しく治安が悪いので，外国人の滞在を極度に制限していた。

インドの地図をひろげて見ると，東方に半島のようにアッサムが広がっている。その周辺は北はシッキム，ブータン，NEFA(North East Frontier Agency)－（2年ほど前から正式にはアルナチャルArunachalと変わったが，現在でもNEFAと呼ぶ人が多い）。そして，南はビルマとバングラデシュというように，いずれも国際政治上微妙な立場にある国々で囲まれている。したがってインド政府も無用の刺激をさけるため，この地区への外国人の入域や滞在を好んでいないのである。

アッサムへ一般旅行者として行く場合，玄関口ともいえるカルカッタでアッサム入域許可をとることになる。カルカッタの中心から少し外れた，ラッセル通りにある（8 Russel Street－16）アッサムハウスがその受付窓口である。かなり大きな8階建の建物でアッサム州の出張所になっており，政府役人の宿泊所もかねている。玄関を入るとすぐにアッサム州全域を示す地図が目に入る。そのすぐ向うが一般旅行者用の受付である。

なかなか愛想がよく，アッサムに関するパンフレットが5～6種あり，いずれも無料でもらえる。しかし，入域制限は厳しく，一般旅行者はカジランガ，シーロン，マナスのみが許される。ジョルハットはカジランガへ行くための通過地としてのみ許可される。

これ以外の所へはこの窓口では判定できないので，別のセクションに伺いをたてることになる。茶園を訪ねるとか，知人がいるとかアッサム州が認めるような理由があれば前記，3地区以外でも許可される。許可をもらうのには普通1週間かかる。早ければ1両日中にもらえる。定期便がとんでいても一般の人は行けない所は沢山ある。例えばLilabali，Mohanbariなどである。

申込み用紙は窓口にありワラ半紙1ページ分である。写真は不要。もちろんパスポートは必要。もし許可を得ないで入域した場合，例えばダージリンからの帰途に寄るというような場合は，シーロンの州政府へ大至急出頭して許可をもらう必要がある。その前にどこかアッサムへ入ったらすぐ近くの警察に

届出ておくとよい。

この届出，Registrationは重要である。許可があってもアッサム滞在を1日でもするときは，大きなホテルに泊る場合は別として，警察へ届出る義務があることを忘れてはならない。届出ると許可証，またはパスポートの中にゴム印をついてくれる。

〈交　通〉

アッサムへ入るにはカルカッタが起点となる。カルカッタから汽車でシリグリまで行き（約1日かかる），そこから，North East Frontier Rail Way の汽車に乗りつぐことになる。1日に2本程度カルカッタのハウラー駅（カルカッタには2つ駅がある）から直行便の急行が出ている。これら急行の1等席を確保するのはシーズンだとかなり面倒で，できるだけ早く駅の予約カウンターに行くとよい。ハウラー駅からの場合は割合と簡単だが，途中の駅から乗り込む場合は席をとるのはかなりむずかしい。1等の自由席は非常に少ないし，ひどく混んでいて，先客が中から鍵をかけて途中からの人を入れてくれないことが多い。また，2等や3等の自由席は超満員でとても外国人には乗り込むことはできない。窓から入り込むのが当たり前といったようで，荷物が少なければまだしもだが，大きい荷物の場合はあきらめたほうがよい。

しかし，慣れたインド人はこれらの自由席に汽車が動きだしてから，あいている窓からとび乗っている。荷物はクリー（赤帽）があとからほうり込むのである。あのゆうちょうなインド人のどこにこの活気とスリルがあるのかと思わせるほどである。

汽車がゆっくりと出発する。ホームにうろうろしていた自由席めあての旅行者と，彼らの荷をもったクリーが一緒になって走りだす。お客がとびのる。その荷をクリーが投げ込む。ルピーの紙幣がお客から投げられそれをひろうクリー。実に騒がしく，殺気立ってさえいる。われわれ外国人にはただ見ているしか方法がない。

幸いに，1等の席が得られれば中は広く，食事やお茶はボーイが注文をとりに来て運んでくれる。物売りは来るで実に快適である。エアコンの汽車もあり，無料スナックやお茶をサービスするものもある。

しかし，汽車は本数が少ないし，スピードがおそい。もう少し早くと望む人は，バスを利用するとよい。大きい町の間は州のバスが走っていて，早朝1～2便は Express というのがあり，ほとんどノンストップで走り，運賃も100㎞くらいで20～30ルピーと大変安い。ただ，これも途中から乗り込めないということと，乗場が分からなくて困る。ホテルか，タクシーや力車に聞くと分かる。町の中にもいくつかのバススタンドがあるので始発の場所を聞き，そこで座席を予約し，乗ることになる。バスの席は割合にとりやすいが，ときには1日くらい待たないと駄目の場合がある。

4～5人集まれば，タクシーの相乗りも悪くない。バスの3～8倍の料金でバスより20～30％早く目的地に着く。長距離を走るタクシーは専門の会社のものがよい。白タクも多いので要注意である。値段の交渉もまわり道をしなければ，大体決った料金なので問題ない。3時間走って150～200ルピーである。

最近はガソリンの値段が上がったので余計高くなった。1ℓ3ルピー75パイサ（約130円）もする。それに1日10ℓというようにこの値段で買える量には制限があり，タクシーはヤミ値で買っているようである。1日のレンタル代運転手つきで80ルピー，走った距離が150㎞をこすと20ルピー増し，ガソリン代はお客もちというタクシーの使い方もある。

しかし，これは話がややこしいので，よく英語の分かる会社の人ときちんと決めておかないとトラブルがある。近くの村などを1日ゆっくり訪ねて来るときなど，この方法は便利だ。

何といっても一番早いのは飛行機である。しかし，一般旅行者にはジョルハットまでしか売ってくれない。もっと東へ行く切符は許可証がないと駄目である。しかし，もしモハンバリまで買えれば，汽車で3日かかるところが約3時間半と一とびである。しかも，ブータンやアッサムの山々が見えるという

オマケつきである。しかし，残念ながら写真は撮れない。

〈シーロンへ〉

14日の夜おそく乗った Lucknow Express はゆっくりと東へ走る。昨夜来の雨も止み，遠くの村々がくっきりと見えている。1月15日の朝である。単調な風景が続く。北のほうに山が見えるが，ガスがかかっていてはっきりしない。ブータンの山々らしい。

14時50分ブラマプトラ河を渡る。シリグリから14時間ほどたっている。ブラマプトラ河にかかる橋は2階建になっており，汽車は下の階を走る。水量はかなり多く水は濁んでいる。河岸には旧式のフェリー・ボートが何隻もつないである。この大河にかかる橋はこれが最後で，これより東に橋はない。そういった意味でアッサムに来たという感激のわく所である。1時間弱走ると街並みになり，やがてガウハティの駅に着く。アッサムの玄関である。

タクシーがうるさくつきまとうが，ここからシーロンまでは公営バスが走っているので，それに乗る。タクシーは1台80ルピーだが，公営バス（といっても結局私たち3人しかお客はなかったので公営タクシーになったが）は54ルピーである。

"東方の明り"Pragjyotishpur という旧名をもつガウハティは，現在では「アッサムの玄関」の名にふさわしい近代的な街である。カルカッタから1128㎞もの距離にあり，標高は僅か60mほどにもかかわらず，夏でも最高33℃にしかならず，冬も最低が11℃という比較的しのぎよい気候である。市の中心から12㎞ほど南には Basistha Ashram というピクニックにいい所がある。

16時30分，日が沈みかかったガウハティの街をあとにシーロンへ向かう。街を外れるとすぐに山道になり，ジグザグを切ってどんどん登って行く。日も暮れてしまい，おまけにガスが発生して来て前方が非常に見にくく，ときどきハッとさせられる。しかし，運転手はよく道を知っているので，かなりのスピードでとばしている。水力発電所を2つほど通過し，やがてシーロンの街へ入る。さすがにアッサムの首都だけあって大きく明るい。

〈シーロン〉

アッサムというのは総称でいくつかの県に分れている。シーロンはそのうちの1つの県，メガラヤ Meghalaya の首都である。Khasihill があるところから，シーロン東方のスコットランドともいわれている避暑地。標高は1496m。したがって，夏も最高23℃という涼しさである。冬は4℃くらいまで下る。

私たちは，この街一番のホテル Pinewood ホテルに落着いた。名前の通り松の木に囲まれた静かな場所にあり，すぐ近くに The Ward Lake という鯉の沢山いる池があり，付近は公園になっている。ホテルは小高い丘にあるので市の眺めもよい。さすがに夜は寒く，部屋にある暖炉に石炭をくべてもらう。3食つきで1人60ルピーという安さである。

1月16日の朝はモーニング・ティで目が覚めた。ダージリン・ティの香りのよさに比べてコクのある味がする，アッサム・ティである。早速，タクシーを1時間20ルピーで借切って市内見物に出かける。まず，シーロン・ピークに登ってみる。8㎞ほど西にあるこのピークはすぐ下まで車で行けるが，途中には軍隊が駐屯していて，ちょっと緊張させられる。ピークのすぐ下から山道を登ると，20分ほどで頂上に着く。頂上にもインド軍のレーダー基地があった。

アッサムの山々が遠望できるが，残念ながら雲が厚く，その片りんしか見せてくれない。しかし，その反対側のアッサム平原の眺めもヒマラヤに劣らず雄大である。うねうねと続いた草原の所々にジャングルがあるという風景が続き，やがて一面のジャングルになる。360度の展望のうちアッサム・ヒマラヤを除くすべての方向は平原である。はてしなく広い。

1時間近く展望を楽しんで街へ帰った。Burra Bazar というショッピング・センターで車を降り，

街をぶらつく。さすが首都だけに品物も多く，人も多い。本屋も２～３軒あったのでのぞいて見たら，アッサムやナガランドに関するものが２～３点あったので購入。

店のオヤジに紹介してもらってこの街最大の　New Indianレストランで昼食をする。ナンバー・ワンといっても大衆食堂みたいなものである。中国料理が食える唯一の店という。３人で満腹するまで食べ，コーヒー，ケーキつきで合計40ルピーであった。

帰りに，メガラヤ州バス・サービスのバススタンドに寄ってカジランガ方面行のバスを予約しようとするが，明日は満員だとのこと。１日１本しかないので無理もない。タクシーで行くことにした。

ナガ Naga 族の人らしい赤と黒のサイケデリックな模様の人が歩いている。ナガに入るにはシーロンで申請すれば可能とのこと。街にはナガの竹製品，ショールなどの土産物を売っていた。

〈カジランガ〉

カジランガ・サンクチュアリーは野性動物園としてインド最大であり，また，一角サイの住んでいる所として著名である。カジランガは，ガウハティから97kmほど東のジョルハットへ行くハイウェーの途中にある。タクシーで行くことになった私たちは，ここに１泊することにした。

カジランガにはホテルはなく政府直営のバンガローがあるのみで，近くには店もない，全く孤立したような所にある。１泊１人10ルピーのバンガローに泊り，次の日，朝早く象に乗って野性動物の見物に出かけた。象は８頭しかいないので，１回24人（平均１頭４人乗れる）のお客しかひきうけられないようである。１人11ルピー，それにカメラをもっていると１台２ルピーとられる。

草のはえた湿地帯を通って行くと，一角サイがいた。よろいを着たような姿は動物園で見るのとは違って野性味たっぷりである。子供連れのもいる。象で囲むように近づいて行くと，さかんにフーフーという音を出して警戒している。一角サイが一番よく出るのは早朝か夕方，それも12月から１月にかけてである。ちょうどラッキーだった訳だ。

マナスにもサンクチュアリーがあって，ここは野性の象で有名である。この他にも４つほどのサンクチュアリーがあるが，それほどインドには野性動物を自然の形で保護している所が多いということである。Sanctuaryとは聖所，禁猟地を指すが，インドでサンクチュアリーといえば野性動物保護地区を意味する。

〈ジョルハット〉

カジランガを正午すぎにタクシーで出発し，15時すぎにジョルハットに到着した。早速，連絡しておいたアッサム農業大学茶学部の学部長 Dr. Bora を訪ねた。ちょうど大学院生のゼミナール中であったが中止して会ってもらい，大学のゲスト・ハウスを用意するからぜひ泊って行けという有難い話で，厚意に甘えることにした。アッサム農業大学は名門校であるが，中でもこの茶学部は世界的に有名で，イランやイギリスなどからも留学生が来ている。

アッサムには751の茶園（Tea Estateという）があり，インドの50％の紅茶はアッサムでとれる。ダージリンを含む西ベンガルが25％，南インドが25％の生産高である。したがって，この大学もこれら茶園と密接にむすびついており，研究と生産は実にうまくいっている，という学部長の話であった。

12月に茶の木を切りそろえ，３月に一番茶をつみ始めるのだそうである。ハイウェーの両側は見渡す限りの茶園で，きれいに手入れされている。大きな茶園になると小・中学校から病院まであり，3000人くらいも一つの茶園で働いているという。

アッサムはお茶の他に，ランの生産地としても有名で，かなり輸出もして外貨をかせいでいる。シーロンにはランの植物園がある。

〈ディブルガール〉

1月19日，いよいよディブルガールへ行く日である。私たちの入域許可にはディブルガールの地名が入っているので安心である。普通はジョルハットまでである。

ディブルガールまで100ルピーでチャーターした車をとばす。朝が早いとセーターを着ていても寒いくらいである。おまけに小雨が降ってきた。それに，運転手が線香をつけているので少々煙たい。インドでは食堂や車の中に線香をつけて悪い匂いを消していることが多い。しかし，私たちにはその線香の匂いがきつすぎて，ちょっと閉口するのだ。3時間ほど走ってディブルガールに着いた。田舎町である。

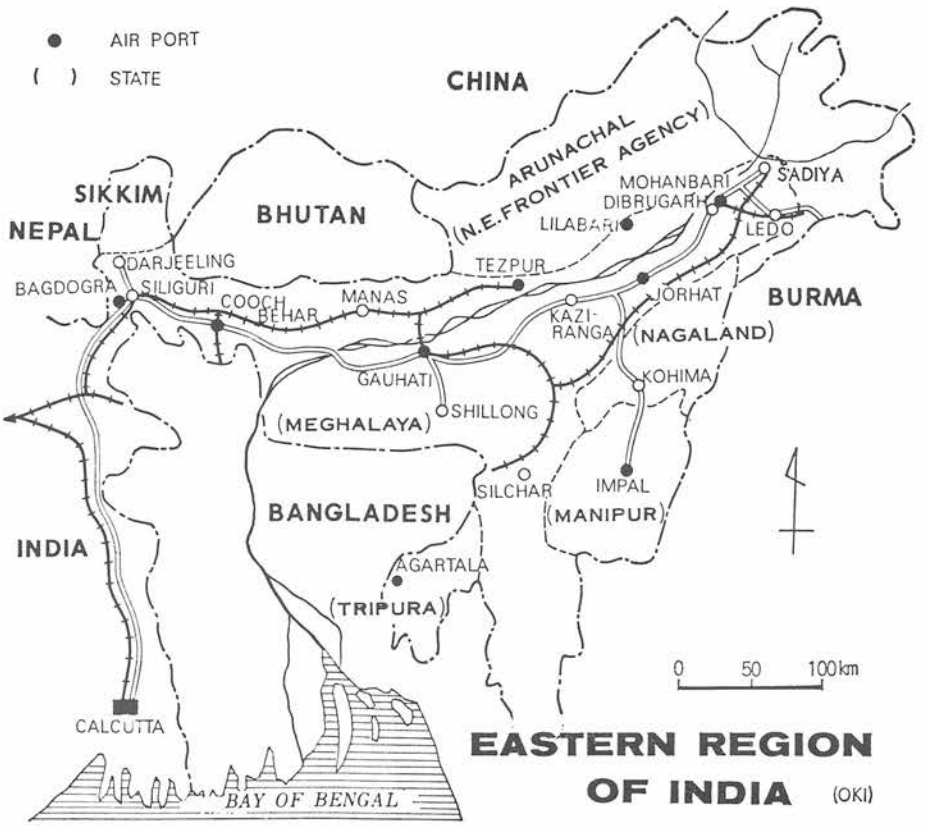
早速，帰りのフライトを確認しにインド国内航空の事務所を訪ねる。日本出発前の計画では，移動は航空機を利用する予定であったが，ちょうど昨年11月からインド国内航空がストに入り，12月末に一応解決はしたもののスケルトン・サービスという間引き運航をやっていて大変厄介なことになっていた。だから，ほとんどをバスやタクシーによって移動して来たのだ。しかし，ディブルガールからカルカッタへ帰るとなると，うまく汽車を乗りついでも3日間かかる。下手をすると4～5日かかってしまう。そうなると日数的にむずかしいので，何としてもディブルガールからは飛行機の便をつかまえたい……。

何とか席があるようにと祈る気持でカウンターに行く。驚いたことにはこのマネージャーが日本語を話せる人で，しかも大変親切に世話してもらった。まかせて下さいということで，22日のフライトをお願いすることにする。23日までにカルカッタに帰らねばならない事情があったからである。

マネージャー氏には宿泊所まで世話してもらった。というのは，ここにはヒンドスタン・ホテルというのがあるにはあるが，全くの木賃宿でしかも，めしが食えたものではないから茶園のクラブに泊りなさい，ということであった。ディブルガールから汽車でレドのほうへ1区行ったチャリコワという村にある，インド紅茶組合のクラブへゲストとして泊ることになった。

〈サディヤ〉

私たちの目標はディブルガールまでであったが，できればもう少しNEFAのほうへ行ってみたいという気持があった。地元の人に聞いてみると，サディヤなら問題なく行けるという。それではと早速行ってみるこ



とにした。

1月20日，5時に起床。6時すぎにチャーターしたタクシーで出発。1時間ほど走るとDmomoという駅のそばを通過。このころより行手に雪の山が見え始める。アッサム最奥の山々らしい。右の高いのがDaphbum（15020フィート），左方がKadisom（16760フィート）らしいがはっきり分からぬ。とにかく写真におさめる。Rupaiという駅を通過するともう人家はほとんどなく，荒涼とした風景になる。終着駅Dangariは原野の中にポツンとあった。ここまでディブルガールから約110kmほどある。

舗装した道路は終わりで，あとはブラマプトラ河の河原の中の道をうねうねと走る。ひどい砂ぼこりである。しかし，かえってこの荒っぽさがアッサムの奥へ来た，ブラマプトラ河を渡るんだという気分にしてくれる。漁師の掛小屋がポツンポツンとある。

20分あまりも河原の中を走り，フェリー・ボート乗場に着いた。9時30分の一番はお客の集まりが悪く運休していた。次の便は11時30分だというので，それまで付近をぶらつくことにする。ブラマプトラ河の向うにずらり雪の山が見える。サディヤでブラマプトラ河は大きく3つに分れ，すぐ北へ向っているのが本流で，ナムチャ・バルワ（7756m）の東で大きく曲り，ラサのほうへ行くものである。次に大きいのがギャラ・ペリ（7150m）の東をまわって流れて来るLuhit河である。もう1つが真中の水量の少ない川でDibang河と呼ばれ，これがこのあたりの前山の水を集めてサディヤでブラマプトラ河に合流している。サディヤ付近で手の指を広げたように河は広がる。

このあたりの河は日本の川のイメージとかなり違い，1本の太い流れではなく，幾本もの川が入り組んで蛇行しながら流れているので，1本が2本に2本が3本になり，また1本になりという具合で飛行機の上から見ると，もつれた糸のようになっている。

船着場はGhatというが，ここはSaikhoa Ghatと呼び，対岸のそれをSadiya Ghatという。

11時25分，出航した。フェリー・ボートといっても2つの大きなボートに板が渡してあり，焼玉エンジン2台で動くという代物である。15m四方くらいの所に200人は乗っていようか，ほとんどぎっしりである。車も1台，自転車が数台乗っている。数年に1度くらいの割合で転覆事故があるそうで，たいてい何十人かが死ぬという。泳ぎなどできない人が多いし，河は結構流れも早く，しかも冷たいから無理もない。

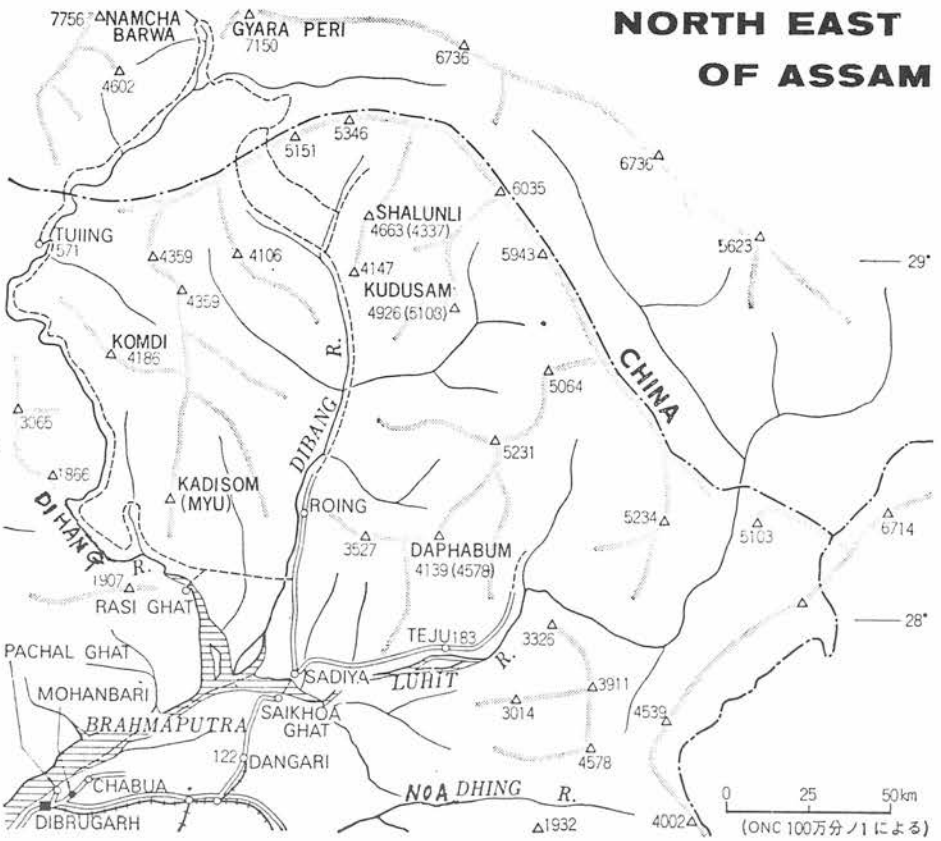
船中はまさに人種のルツボである。人目をひくのはアルナチャル地方のミシュミ族と呼ばれる人で，赤い服に竹のあみ傘をかぶり杖をもっている。仮装行列に参加する感じだが，この村の人は全員このスタイルだそうである。言葉はヒンディやアッサム語は全然理解せず，ミシュミ語というこの村だけの言葉を話している。西方のカッシーKhasis族や，ジャインティアスJaintias族はモンゴルからインドへ入って来た最初の人たちで日本人によく似ている。モンクメール語系の言葉を話す少数民族である。また，チベット系のガオGaos族もいる。永住の地をもとめてブラマプトラ河周辺をさまよったので各山地にこの系統の人種が住んでいる。

船は複雑な河の流れをあちこちと移動して行く。水はあまりきれいではなく，少しネズミ色をしている。キラキラと光っているのは雲母であろうか。

1924年にキングドンウォードがこの河の上流を探ったころはどんな様子だったのだろうか。このあたりは当時からアポール族というような狂暴な蛮族が住んでいたという。アニニ族もその1つかも知れない。見るからに蛮族風である。

このあたりを最初に探ったのはインド測量局のパンディット，キンタップであった。1881年のことである。材木を流してブラマプトラ河がラサからアッサムへ流れている大河であることを探ろうとしたのである。彼は，悪いラマ僧によって奴隷として売られてしまい1年以上も働かされたりしながらも，隠しておいた丸太を川に流したのであった。しかし，それを命じたインド測量局のハーマン大尉はそのときすでに死んでいたので，この丸太は調べる人もなくアッサムの河へ流れでてしまった。しかし，彼は

自分自身で川を下ろうと南へ南へと歩いたが，途中で村人にとめられ，結局またふり出しのラサへ帰ったのだった。無事ダージリンへ帰り着いたのは1884年11月。4年もすぎていた。驚くべき根気と責任感のある男だった。



それから30年あと，彼の報告が正しかったことがイギリス人モーズヘッドとベイリーによって確認された。今もキンタップが約100年前イカダを流したときとあまり変わっていない風景なのであろうか……。河はゆうゆうと流れている。このあたりでやっと標高400m弱である。ラサの標高は3600mくらいであるから，このブラマプトラ河の大曲りで一気に落ちてしまう。しかも狭い所は幅30mくらいしかないという。ヒマラヤの大河が狭いゴルジュを奔流する様子をこの目で見たいものである。

そうしているうちに，1時間ほどしてやっとSadiya Ghatに着いた。何もない土だけの河岸である。聞けばサディヤの町は3年ほど前のブラマプトラ河の氾濫のとき全部流されて，村人はほとんどが13kmほど上流に移住してしまったのだという。土手などあってなきが如きブラマプトラ河だから，1度洪水になったら自然のままにまかせるより仕方がないであろう。

サディヤの町まで行ってみることにする。ジープに乗って5分ほどでバザールに着く。ここから先は村があるだけで，そこにNEFAへのチェック・ポストがある。バザールには数軒の店があり，近くにはInspection Bangalowという政府役人用の宿泊所がある。旅行者も泊めてくれるという。別の道を通って船着場に帰る。直径1～2mある丸太が沢山河岸に並べてある。ヒマラヤ山地から切り出してきたものであろう。イカダに組んで川に浮かべてあるものも何百本とある。このあたりではTejuとRoingが大きい町で，ともにサディヤからバスの便がある。やっと動くという感じのバスで，1日2便ほどある。しかし，この両方ともNEFAに入っているので，特別許可がないと行けない。サディヤの北はロヒット国境地区（Lohit Frontier Division）と呼んでいるようである。

15時，1日2便の午後便のフェリーに乗る。これに乗りおくれると明日までない。よく見ると来るときのとは別の船であった。Rukmin1号，16トンとちゃんと名前がついている。また，救命ブイ15個など

と書いてあるが，どこにもしまってある気配はない。また15個くらいではとりあいになってしまうであろう。下りは早く30分ほどで着いた。待たしておいたタクシーに乗る。なお，タクシーをフェリーに乗せると16ルピーとられる。人間は1人45パイサである。砂煙をあげながらブラマプトラの河原を走る。ふりかえると，アッサムの山々が夕日に映えて美しい。いつまでも見とれていた。

サディヤに行くのには，もう一つ別のコースがある。ディブルガールの街の中をぬけて，パチャーム・ガート（Pachal Steam Ghat）からフェリーでブラマプトラ河を渡って行くものである。しかし，このコースは途中，軍事基地があって特別許可がいるようである。もし，許可がとれればこのコースのほうが近い。

〈クラブのこと〉

お茶の産地アッサムの茶園主は裕福な人が多く，子供は欧米に留学に出すのが当たり前になっている。また，少数のイギリス人によって経営されている茶園もある。したがって社交的な付合いもヨーロッパ的で，エリート意識が高い。アッサム各地に，クラブと称する共同の休息所や別荘地をもっている。

私たちの泊ったクラブもその一つで，宿泊設備は一流ホテル並みでしかも料金は10分の1くらいである。サーバントやボーイも実によくしつけられていて，食事のときの気のつかいようなど気の毒なくらいである。クラブの秘書の英語も抜群にうまく，まさにキングス・イングリッシュである。隣接してゴルフ場，プール，教会，バー，レストラン，映画館まである。あのディブルガールの田舎町のごみごみした通りや，うす汚れた人間と，とても同じ空気を吸って生きているとは思えないほどの上流階級の人たちであった。ウィスキーがくみかわされ，国際情勢から最近のヨーロッパのファッションまで，まことに優雅で高級な会話がはずむのである。

インドのHill Stationという高原別荘地といい，このようなクラブといい，イギリスはインドに乗り込んで来て，自分たちの勝手なようにインドを変えてしまったようである。そして今もなお厳然とイギリス流が残っているのである。茶園を育てたのもイギリス人，ベットまで紅茶を運んでくるモーニング・ティという，まことにぜいたくなサービスを教えたのもイギリス人である。

〈レ　ド〉

インド国内航空のカール氏のはからいで22日のフライトがとれ，21日が1日暇になったので，今度はビルマ国境方面へのツアーを試みる。

9時，タクシーでクラブを出発。ビルマ国境へ向かう鉄道にそって走っていく。ティンスキャ（Tinskya）の大きい町を通過する。ディブルガールから約50kmである。しばらく走ると，もう1つの茶園のクラブBlow Clubを通過する。道は少し登りになり，樹林の中を走るようになる。マルゲリータ（Margherita）という駅をすぎて，しばらくして大きい橋を渡る。この橋の手前にチェック・ポストがある。ポリスもいないようだったので，気にもとめずに通過する。これがあとで大変なことになったのだった。ディブルガールから100kmちょっとでレドの町に着く。レンガ工場があるくらいでたいした町ではない。ここが第2次大戦中，イギリスが作ったビルマからアッサムに抜ける軍用道路レド公路の終点である。ここから汽車はもう1区間だけ走っており，終着駅はレカパニ（Lekhapani）である。1日1往復の汽車が通っている。

Tirapという名の小さい橋を渡ってしばらくして道は2つに分れる。ビルマ国境に近い右方へ行く。この分れ道の所はバザールになっていて，毎日曜日に大きな市が立つそうである。ここまで，ディブルガールから途中1時間ほど休んだのも含めて5時間かかっていた。5分も走るとまた小さい橋があり，そこから山道になる。鳥が沢山さえずっている。樹木が多いので展望はきかないが，ジグザグの道をどんどん登って行く。

20分ほどで国境に着く。国境といっても，かなり手前のチェック・ポストで止められる。ここから先はビルマ・インドといわれる不干渉地帯で，さしたる用のない人は一切オフリミット。インド人，ビルマ人といえども特別許可が必要である。Extra Assistance Committeeで発行した，インナー・ライン許可証がないと駄目だ。このあたりはChanglan Tirap Districtと呼ばれている特別地区である。

鉄橋とゲートがあり，ポリスと国境警備隊が2人ずつおり，なかなか厳しい警戒である。近くの茶店で玉子焼などを注文しながら，ぬすみ撮りをする。もちろん撮影禁止という札が立っているので，公式的には駄目である。私たちも他意がある訳ではなく，記念にとりたいだけである。

30分ほどいて帰途についた。せめてレドまで行ければ満足だと思っていたのが，国境まで行けたのだから大満足であった。

ところが，レドの少し先の橋を渡って軍の駐屯地にさしかかったとき，1人のポリスがものすごい勢いで手を広げて道路に飛び出して来たのである。

〈国境の厳しさ〉

どこの国でも国境には神経を使うのであるが，特にこのアッサムの東端はビルマの中共系政治，中国というインドの仲の良くない外国に続いているため，この度合が強い。また同じインドであるが，アッサムに隣接するナガランドは1918年に「ナガ・クラブ」という文化団体ができ，それが1946年にナガ民族評議会（Naga Nationalist Committee）になり政治運動が始まった所である。政治運動の最大目的はナガの独立である。1956年ごろにはナガ連邦政府ができ，大統領まで選んだり，独自の憲法を作ったりと非常に活発な動きをみせていた。一応，1963年にインド政府との和平交渉に応じ平静になったものの，やはりダイナマイトをかかえているようなもので，インド政府としては頭の痛いところである。今年2月26日付「Times of India」誌の伝えるところによると，今，ナガランドで勢力のあるのは，前記NNCから発展したNaga Nationanalist Organization（NNO），United Democratic Front（UDF），Independentsの3つの政治団体が主力で，とくにMr. Vizolにひきいられるの力が大きい。60人の州議員席のうち32人をしめている。

第2次大戦の激戦地であったコヒマやインパールは今や政治的意味の爆薬庫であるという訳である。このようにアッサム州東部はすべて防護地区（Protected Places）に指定されている。そんな所へ3人の日本人がカメラを何台もさげて乗り込んだのであるから目につかぬ訳はなかった。その派出所風のポリスに何とか勘弁してもらおうと思って，奥の手を使ってみたが，すでに本庁に通知されているようで，ポリスを1人つけてデイン（Dehing）という町の警察へ行けという。これは大変なことになったと感じた。車中で急いで大型カメラを座席の下に隠そうとするが，生憎くとアンバセーダーというこの車は座席の下があいていない。コートで包むようにして下にころがし込む。

大きい警察というのは，来るときあった鉄橋の所，マルゲリータのチェック・ポストであった。ここでも30分ほど何故通知しなかったか，何しに行ったんだと聞かれる。「昨日，ディブルガールへ着いたばかりで，しかも日曜日だったので警察は休みだったし，ホテルで通知するつもりがクラブへ泊ったので……。」「たいした目的はなかったが一度国境を見たかったので……。」などと懸命に説明するが，もう，モミ消す訳にはいかなくなったらしい。7～8人のポリスに囲まれていると，ワキの下から冷汗が流れて来る。ブタ箱入りかなと心配になる。

私服の警官2人がさらに加わって，3人のポリスに護送される形で，この地区の総元締のCircular Inspecterに会わされることになった。Mr. D. Saikyaという50がらみの鋭い目つきの人であった。一見して並みの人間でないことが分かる。キラッと光る目がこわい。「署へ行こう。そこで調べる」ときっぱりいわれた。どうにでもなれという気持であった。もう19時をすぎ，真暗である。星をあおいで落着くために小便をする。ポリスの監視つきである。

署へ着いた。「カメラを持って来い」と最初にいわれる。さすがピントをしぼって聞いてくる。「写真を撮ったか」と聞く。「いや，あのあたりでは撮りませんでした」。うそをつくのは勇気がいる。ここで負けては駄目だと思うので，じっとこわい目を見つめて，はっきりいう。「全然撮りませんでした」永田のカメラ1台を車からもって来てもらう。フィルムはすでに車の中で抜きとってある。これ1台ということで勘弁してくれるかなと神に祈る。

しかし，そうはさせない。「1台だけか，全部もって来い」1人1台だけということにし，他はあわてて座席の下へころがし込む。望遠レンズや大型カメラが見つかったらエライ事になるのは，火を見るよりも明らかで，気が気ではない。私服ポリスが車の中を調べに行ったようである。「おお神様」私のカメラもすきを見てフィルムを巻きとってしまう。「これこの通り，チャージしていませんよ」という。「このカメラはいくらするんだ」という質問になって来た。「1000ルピーくらいです」「売る気はあるかね」「いやこれからまだ旅を続けますからね……」。このヤロー，カメラが欲しいのかなと思う。永田に小さい声で「カメラやってもいいか」と聞く。「ウン」という。最悪の場合1番悪いカメラをプレゼントしてみることにした。しかし，何とか無事すませたい。幸いに次はライターに興味を示しだした。ライターならスペアがある。「記念に差しあげましょう」，ちょっとにらんだが返事はしない。しかし気分が変わって来た。「お前たちが悪いことは分かっているだろうな。外国人は特別地区では登録をしなけりゃいかんのだ。君らはそれをしなかった。しかも許可はディブルガールのみだ。ここはティラップ国境区なんだぞ。サディヤのほうはロヒット国境地区だ。気をつけてくれよ。」「申し訳ありません。外国人の私たちにはなかなか分かりにくいので……。」「どうしてお前が注意しなかったのだ。」と今度はタクシーの運転手へオハチがまわって車検証を出せ，運転免許を見せろとドナられていた。何とか許してもらえることになったが，今日中に登録しろという。「登録するまでポリスを同行させるからな。」ということで一応ケリがついた。もう，21時近くであった。

ディブルガールのIntelligence Claim Officeまでポリスに送られ，そこで登録をさせられる。英語の分かる人がいなくて苦労する。この夜おそいのに4人も働いている。秘密警察のようなところらしい。21時半，くたくたに疲れてクラブに帰る。クラブの食堂で，パンとジャガイモの夕食をすませ倒れるようにベットに入った。

国境の厳しさをまざまざと味わされた1日であった。

〈カルカッタへ〉

1月22日，カルカッタへ帰る日である。3日間世話になったクラブへ支払うのに，少しルピーが足りない。タクシーも予定をオーバーしたので余計に払わねばならない。ところが電話をかけてみるが，この日はどうしたことか銀行は休みのようである。

昨日，ティンスキャの銀行で両替えしようとしたが，現金は受付けられない，トラベラーズ・チェックのみしか受けとれないというので両替ができずにいたのだ。インドの銀行は都市部を除いて現金は扱わない。トラベラーズ・チェックも持参はしていたが，生憎くその時はクラブの机の中において来た。クラブでもドルは受けとれないという。とにかくどこかの銀行に交渉することにし，クラブの事務員について来てもらう。11時には飛行場に行かないといけないので時間がない。しかも，3つしかない銀行は，学生がピケをはっていて中に入れない。インド政府のメガラヤの扱いや物価上昇に反対してのストライキだという。

時間はどんどんすぎ，11時になってしまった。下手をすると飛行機におくれる。とにかく航空会社へ行くことにする。幸いなことにカール氏のはからいで両替することができた。支払いを済ませホッとする。もう空港バスは出発してしまったので，カール氏の車に乗り込む。ディブルガールの空港はモハンバリという名前であるが，そこがいま改修中でさらに東にある軍用空港のチャブア（Chabua）からと

ぶという。町から40分ほどかかる。到着がもう２～３分おそかったら乗れなかったかも知れないきわどさであった。

チャブア空港は茶園の間をちょっと入った所にあった。軍用機が沢山あり，軍人が警備している。安全チェックも１人１人別室で厳重にやられ，カメラの中のフィルムもぬきとられた。11時45分，いろんな出来事があったが，思い出多いディブルガールをあとにフレンドシップ機はとびたつ。

ブラマプトラ河をとびこえて北側のリラバリ（Lilabari）に向かう。山が見え始める。大きいのはナムチャ・バルワらしい。その左に黒く見えるのはブータンの前山か……。カメラが使えないのが残念である。一面の雪山である。30分ほどでリラバリ着。給油の後ジョルハットへ向かう。先日，汽車で渡った鉄橋がすぐ下に見える。空から見るブラマプトラ河も雄大である。やがてブータンの山，クーラ・カンリらしいのが見える。そして，カンチェンジュンガが遠くにかすむ。ブラマプトラ河が大きく南へ曲るあたりで飛行機も南へ進路をかえた。あとは見渡す限りの平原である。思い出したように現われる小部落が小さい点のように見えた。

15時10分，カルカッタに着いた。

（「岩と雪」40号より「山と溪谷社」のご好意により転載させていただきました）

アッサムに関する文献（抄）

〈アッサムとその周辺に住む人々とその生活を知るために〉

1. 中根　千枝　1959　「アッサム」，「未開の顔・文明の顔」，中央公論社
2. 〃　1972　「　〃　」，「　〃　」，角川文庫，角川書店
3. 三森　定男　1943　「印度未開民族」，日光書院
   インド全体を扱っているが，その中でアッサム平野部の部族中心に書かれている。ナガランド，マニプールに重きがあり，アルナチャルにはミシュミ族に若干触れてあるだけ。全体でアッサム関係は80頁位。内容は外国文献の中から生み出されたという感じ。
4. 帝国学士院編　1944　「東亜民族名彙」
5. ベイリイ著，諏訪多栄蔵・松月久左訳　1968　「ヒマラヤの謎の河」，ヒマラヤ名著全集１，
   解説（諏訪多栄蔵氏）はいろいろな意味で役に立つ。あかね書房
6. 桐生　稔（不明）「アッサムの少数民族」，アジア経済研究所
7. 佐々木高明　1971　「ムンダ族とアパタニ族」，「稲作以前」ではアルナチャルに住むアパタニ族についてふれている。日本放送出版協会
8. 〃　〃　「東南アジアの焼畑農業」では，ナガ族について書かれている。
9. 〃　〃　「東南アジア主要農耕民の村落の規模と形態」でも，ナガ族について書かれている。
10. 米倉　二郎　1965　「インドの農民生活」，古今書院
    インド農民の生活についてくわしく書かれている。アッサム平野部中心だが，アッサムとその周辺部にふれている。
11. 飯島　茂　1972　「フューラー・ハイメンドルフ教授の横顔」，「季刊人類学」，３巻，１号，社会思想社。
    アッサムのNEFA（当時），ナガ族等についての著作の多い，ハイメンドル

フ教授について書かれている。教授の主要業績目録として85の書名等があげられ，その中でアッサム関係の書籍及び論文は25以上も数えられる。

12. F．ハイメンドルフ著・常盤新平訳　1970　「ヒマラヤの蛮族」，「未開の土地の部族」，現代の冒険，6巻，文芸春秋。
アルナチャルのスバンシリ地方の住民について。教授の体験に基づいているので，非常におもしろい。アルナチャルの実際の訪問者の著作で，現在邦文で読むことができるのは，この本ぐらいだと思う。

13. 朝日新聞社　1972　「朝日講座探検と冒険」，2巻（アジアⅠ），朝日新聞社
アッサムやアルナチャルについてまとまってふれたところはないが，アッサムやアルナチャルを含めた地域の他のアジア地域とのかかわりや，この地域を調べようとするときのきっかけとなるような記述や発言が随所に見られる。

14. 高山　広志　1975　「イラワジ源流からアッサムへ── キングドン・ウォードの道 ── 残されたヒマラヤをめぐって (1)」，「ビルマ・ヒマラヤ研究」2号，ビルマ・ヒマラヤ研究会。

15. 水野　勉　1969　「キングドン・ウォード」，「岳人」262号，東京新聞社

16. 薬師　義美　1971　「アッサムとブータン」，「岳人」295号，東京新聞社

〈中印国境問題をはじめ，政治的側面より見たアッサム〉

17. 北京外文出版社　1963　「中印境界問題」，外文出版社
折り込み地図十三葉もついた本。当時の中国政府発行の本として，中印問題を学ぶときには重要だ。ただ，残念なことに，文革前の本のためか，現在，絶版で入手は不可能。古本屋をまわるしかない。

18. インド情報放送省出版局編・小西訳　1963　「中国の脅威」，「インド・中国国境問題」
インド側から書かれた本。アポロン社

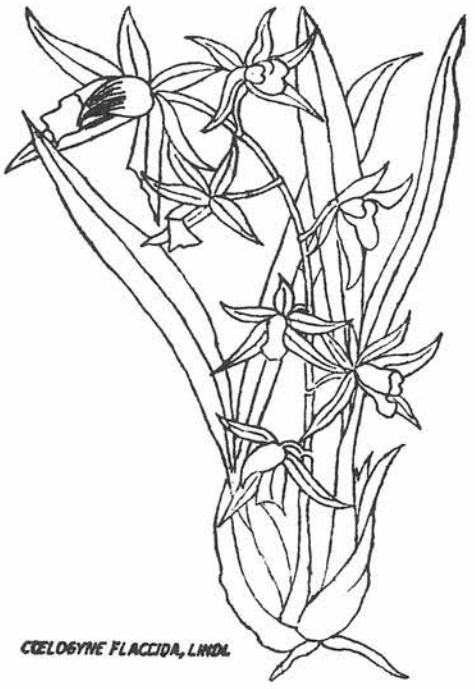
19. 入江啓四郎　1964　「中・印粉争と国際法」，成文堂
中印粉争を国際法的立場から解明しようとしているが，そこに至るまで周辺の情況や，歴史的事実にも幅広くふれられ，参考文献として有用と思う。

20. N．マックスウェル著・前田寿夫訳　1972　「中印国境粉争」，時事通信社
かなり詳しく書かれている。利用価値大。ただ，地図は少しおそまつ。

21. 落合　淳隆　1970　「現代インド問題要論」，敬文堂
中印問題，北東部諸州での反乱にふれてある項目があり，中印問題への理解を側面から助けてくれる。

22. 坂本　是忠　1970　「中国辺境と少数民族問題」，アジア経済研究所
書名の通りの内容だが，専門的。中印国境問題にももちろんふれてあり，チベットの少数民族の項目があり，有用。中国と周辺諸国の国境問題を知るのには最適。

23. ──　1967　「ミゾ族反乱の背景」，アジア経済研究所
ミゾ族問題についてふれた邦文資料は少ないので有用。



シッキムの花

カンチェンジュンガ山麓トレッキング

文・菊地　薫　写真・佐々木　正

〈ヒマラヤの展望台へ〉

ダージリンへの道は急だ。曲りくねった山道を登りずめに登って行く。1974年11月24日の夕暮近く，同行のSと私はこの急坂を登るミニ・バスの中にいた。この国にすれば極上の部類に入るであろう，この20人乗りのバスに，ついさっき，バグドグラの空港から乗り込んだのである。行先はもちろん，ヒマラヤの展望台・ダージリン。そこから少しでもカンチェンジュンガに近づいてやろうというのが今回の目的なのだ。

2週間前，ネパールでラムジュン峰登山の後始末を終えて，カトマンズからデリーへ出たわれわれは，そこで在印中の会員Oと会った。彼の案内で，ガルワールの東部を手はじめに，インド各地を転々と旅しながらカルカッタに出たのが11月21日。そこで新たに日本から飛んできたYを加え，合計4名が今日，インド国内航空機でカルカッタからバグドグラへ着いたという訳なのである。

この飛行場からOとYは“華麗なる”ブータンへの旅に出かけてゆくという。なけなしの金をはたいてヒマラヤの地へ来ているSと私の2人にとって，1日130～180ドルもかかるというブータンなど所詮，夢のまた夢。彼らがブータン入りしている1週間の間，ダージリンへ先に行ってトレッキングをし，再び，彼らと合流しようというのがわれわれの魂胆なのだ。

こうして，ひとまず，彼らと別れて，われわれはこの西ベンガル州政府観光局が走らせているミニ・バスに乗ったのである。それも1人に付き20Rs（800円）という私にとっては大枚を支払って黄色のチケットと引きかえた。よく見るとこの切符，15Rsと書いてあるのをペンで消して,脇に20Rsとスタンプしてある。畜生。インフレの波はここまでも押しよせてきたのか……。先が思いやられる。

このバスはどうやらバグドグラ空港とダージリンを結ぶ直通のバスらしい。どこへも止らずどんどん登って行く。

空港を出てバラソン川を渡り左へ折れ，スクナというところあたりまでは平坦で，まずまず快適にきたのだが，山道へかかったと思ったら，あとはずっと登る一方である。半日ほどで高度差2000m以上も登ろうというのだからしかたがない。いたる所，ヘヤーピン・カーブだらけだ。舗装されてるだけ助かる。さしずめインドの“何とかスカイライン”版である。

だが，これくらいで驚いてたんじゃインドの山奥への車での旅はとうてい無理。なんせ，このルートなんざ汽車ですら登って行く道なんだから。あの例の有名なシリグリ――ダージリンを結ぶ「ケイベンコ」鉄道，おとぎの国を思わせるSLちゃんが走っているのがここ。その名もトイ・トレイン。SLファンなら一生に一度は乗ってみたいと願う所だ。D51のDの字も知らないわれわれですら，おもしろくて必死でカメラをむけていたくらいだから。写っていないのも知らないで……。

とにかく，ここの線路はおもしろい。ほぼ道路と平行して走っているのだが，人間の背たけよりもちょっと高いと思うような小型SLだから，むろん線路の幅もせまい。何度も道路を線路が横切っているが，車の方は一向に一時停止しない。ここでは汽車の方が止まらねばならないらしい。車でも急だと思う坂を登って行くのだから，いたる所にスイッチバックや，らせん状線路が見られる。所々に用意してある砂の入った大きな木箱も車のためじゃなく汽車のために線路にまくのだという。線路もさぞキズだ

らけなのだろう。

こんなおもちゃのような汽車にもちゃんと1等がついているというのだから，やはりインドである。普通の汽車の1等には必ずついている鉄格子は，ここのＳＬにもあるんだろうか。こんなかわいい汽車には泥棒よけの鉄格子などあるわけないなどとかってに考えてみたりした。

われわれの乗ったバスがダージリンへ登って行く間は，どういう訳か，登って行く汽車を見ることはなかった。車の方が汽車の半分以下の時間で登ってしまうのだから1列車位には追いついてもよさそうだと思ったのだが，会うのは全部下りばかり。それも時には，3列車も4列車もたて続けにおりてくる。もしかしたら一方通行なのかと本気で思ったものである。

たいがいは，前と後に1台ずつＳＬがついている。二重連とかいう列車もあった。ポッポーと汽笛を鳴らしながらスイッチ・バックの所を列車がたて続けにおりてくるのを見ると，インドにきて，ＳＬにさわぐ日本の若者たちの心を知ったような気になる。あれはスイッチ・バックの部分に入りきれないので1つの列車を3つとか4つに分けて走らせてるんじゃないか，ウン，そうだ。などともっともらしいことを考えたりしているうちに，いつのまにか道路はほぼ水平になり，夕暮のダージリンへとバスは入った。

北の方に見えかくれしていたのがカンチェンジュンガ山群だったのだろう。ガスと暗さのため，さだかにはわからない。3時間半のバスの旅であった。州政府でやっているという宿泊所，ツーリスト・ロッジにおちつく。

〈いい町・いい人・ダージリン〉

ダージリンはいい町だ。われわれはすっかり気に入ってしまった。何しろ女の子がかわいい。チベット系のように見えて，ほりが深いという変な女の子が多い。それでいて理知的に見える。モンゴリアン（チベット系）とアーリアン系の混血，それに英国人の血なども混ってるのかも知れない。ともかく美人が多い。そんなことはわれわれにはどうでもいいのだが……？　それに，この町のたたずまいがとにかくいい。

ダージリンといえば，世界的に有名な避暑地，インドの数あるヒル・ステーションの中でも第1番目にあげられる町。そんなイメージから，どうせ日本の観光地化したリゾート・タウンと同じで俗っぽい所なのだろうと思っていたのだが，ところがどっこい，その落ちついた雰囲気はなかなかのもの。オフ・シーズンのこの時期に行ったということを割り引いて見てもいい町である。丘の斜面に広がった2100mあまりの標高をもつこの町。いうまでもなく坂が多い。坂と階段の町でもある。言葉がネパール語で，長い間ネパールにいて，その間に仕込んだわれわれのネパール語が，ほとんど通じるというのも，すっかり気に入ってしまった理由の1つだ。インドにでてからこの方，どこまでも英語，英語で少々くさっていたネパール語の大家Ｓも，ここへきてすっかり自分のペースでやれると威勢がいい。ネパール人をはじめ，チベッタン，ブータン人といろんな人種がいるが，みなネパール語はわかってくれる。ネパール人ではシェルパ族が目立って多いようだが，彼らも若い人たちはシェルパ語よりもネパール語の方が達者のようだ。

上流家庭の子女のための良い大学があるということも聞いた。このいい町にきてから，どこにいても油断もスキもならないインドの旅を続けてきたわれわれは，実の所ホッとした。住んでいる人が違うというだけで，こうまで町の感じが変わるものなのだろうか。バザールを歩いていると，ふと，カトマンズのバザールにでもいるような錯覚をうけた。このいい人たちが住んでいるダージリンでのんびりもしていたいが，われわれにはトレッキングに行くという目的があった。

カンチェンジュンガに少しでも近づこうというのがその目的。われわれが行こうとしているのは，インドとシッキムの国境，それにネパールとの国境もぶつかる所である。ダージリンから見ると，東の方

にシッキムの方へのびる大きな尾根が見える。その尾根をずっと北上してファルットという3つの国境がぶつかるところまで行ってこようというのである。期間も限られているので，そうのんびりしてもいられない。ツーリスト・ロッジの親切なマネージャーのお世話で，シェルパの手配，車のチャーターなどを完了。何とか1日間だけで出発する用意はできた。

このツーリスト・ロッジ，名前はロッジだし，Oもダージリンではここが安いから，待合はここでするようにとのことなのですんなり泊まることに決めた。そこまでは良かったのだが入ってびっくり。ダージリンの丘の上部の北の方に位置しているのだが，2人部屋で，もちろんバス・トイレ付，それに書斉まで付いている部屋である。値段を聞いてまた，びっくり。われわれの予算の倍はしている。丘の上の方は一流ホテルがあると聞いたが，おそらくここもそうじゃないか，などと2人で話しあい，もっと安い所に移ろうかなど，いろいろ相談したあげく，3食付だというので，ともかく1泊だけしようということになった。どう見てもわれわれには身分不相応の"大ホテル"なのだ。庭からは木々の間からカンチェンジュンガ山群が見える。芝生の上にひじかけイスをおいて，そこへ座ってパイプをふかしながら，カンチェンジュンガを見て過す。そういった高貴な雰囲気なのである。メシは外の安い所で食えるという妙案を思いつき，何とか部屋代だけと交渉したが11月いっぱいはシーズン中で3食つきの「コンパールソリィ」だという。

ところが，夕食をとってみておどろいた。フルコースなのだ。次の日の朝もセミ・フルコース。昼もそうである。2人共，この食事をとってみて，がぜん，これでは安いといいだしたのである。当初の予算の2倍ではあるが，1日3食付2人で約4800円位なのだ。げにおそろしきは食い物なり。たらふくうまいものがくえるのなら，少々高いのはいたしかたなしとの結論で，このロッジを移ろうなどというあさはかな考えはあっさり捨ててしまった。後で聞くと，ここは政府観光局のやっているロッジであり，

SANDAKPHUからのジャヌーとカンチェンジュンガ（サンダクプーのバンガロー）

ホテルという名のついた一流のやつは，もっともっと高いのはもちろん，サービスも一流で，一晩中暖炉に木をくべてくれるところもあるとか。よし，今度くるときは絶対，超一流の所へ泊ろう。それにしても，いつもながら，われわれの貧乏根性にはイヤになる。たまに行く外国の旅行は，もっと優雅にゆきたいものだ。

〈行くぞ！カンチェンジュンガめざして〉

26日朝6時半，予定通りタクシーがホテルへ迎えにきた。作ってくれた朝食をもって乗り込む。ファルットへのルートは，中間のサンダクプーまでジープをチャーターして入れるという。標高3600m以上ある，ここまでのチャーター料は400Rs（16,000円）とか。もちろんわれわれは歩く。歩きにきたんだからと苦しい理由をつけ，それでもわれわれにとっては大ふんぱつのタクシーをチャーターしての出発である。

ダージリンを出て，一度シリグリ方面へもどると5～6kmも行ったところにグームというちょっとした町がある。ここはこの地域の交通の要所となっているらしい。ティスタ川方面へ降りてカリンポンやシッキムの方へ行く道の分岐，また，有名なタイガーヒルへの登り口もここ。そしてわれわれの行く，ファルット方面への分岐点もここである。ここにはラマ教の大きなお寺もある。

ここから西へ向い，舗装された道をほぼ水平にたどる。明瞭な尾根をまいて道は続く。この尾根がそのままずっと，ファルットまで続き，その先はカブールを経てカンチェンジュンガの麓まで至るのだろう。途中，バザールのあるガヤガヤした町，スキアポカリを通ってタクシーはだらだらとした道を，マニバンジャンの村まで下ってゆく。ここまでのチャーターで80Rs，ジープも同じである。ただ相乗りジープだと1人5Rsも出すと，スシずめ状態ではあるが運んでくれる。

われわれは朝早く出ないと今日の目的地までつけないのでチャーターしたわけである。相乗りジープは朝8時以降ならつかめるとのことだった。インドの山奥ではどこでも，この相乗りタクシー（多くはジープ）がある。1人当りにすると安いが，われわれには考えられない位に人を乗せる。ランドローバーの小型の前の座席に4人か5人は普通だ。うしろの荷台となればおして知るべしである。だから，これらのジープ，またはタクシーをチャーターすると高いものにつく。が，荷物が多く，人間も2～3人いる場合はこの方が早いし，安上りになると考えた方がよい。彼らはこれをフル・タクシーと呼んでいた。「フル・タクシーであそこまでいくらだ。」といったような使い方をする訳である。

〈ネパールの国境〉

マニバンジャン。名の通り峠にある村である。マニ，いかにもラマ教的で，村の上の丘にはマニ石があり，タルチョーがはためき，ラマ教圏に入ったことを告げている。ここはインド，ネパールの国境にあたり，この峠の西側の谷の村はネパールだという。われわれのたどろうというルートは，このボーダーの通っている尾根である。この尾根にはジープでなら行けるという車道がずっと切ってある。ほぼ尾根の東側，つまり，インド側に道はついている。“ジーパァブル”（ジープなら可）というだけあってすごい道だ。

まだねているポリスをたたきおこして，型通りのチェックを済ませ，村のうらから急な登りを登って行く。もちろん，歩き。ひと汗かいた頃，尾根も平らになって，やたらとマニ石がならんでいるところにでる。大きなゴンパやタルチョー，チョルテンなどのあるラマの世界を歩いてゆく。われわれのポーター兼ガイドのシェルパ，ペンバはチェトリの村だという。　こんなところにチェトリの村など？あやしいものだ。この村の上で下から登ってくるジープ道と出合い，その上はジープ道をゆく。いいかげん車道にいやけがさしたころ，小さなコル状の村，メグマに着いた。さっきマニバンジャンの上の急登を登っていたとき，ブーブーいいながら登っていった何台かのジープは相乗りでここまで，マニ

バンジャンから3Rsとか。3人でたった9Rsではないか，畜生！　乗ればよかった。もちろん途中から乗るなどはできない相談であった。マニバンジャンで予約して，前の晩あたりから待っていてやっと乗れるのだろう。

〈ポリスの村〉

このメグマでは，かなり大きなチェック・ポストがあり，さながらポリスの村という感じ。平原状のこのコルから西へ向ってやはりジープ道がついている。ネパールへ入る道だという。だからポリスの数も多いのだろう。チェックをうけながらの雑談で彼らの言うには……

「昨夜，ニュースでお前の国の大将，田中がやめたぞ。」

という。

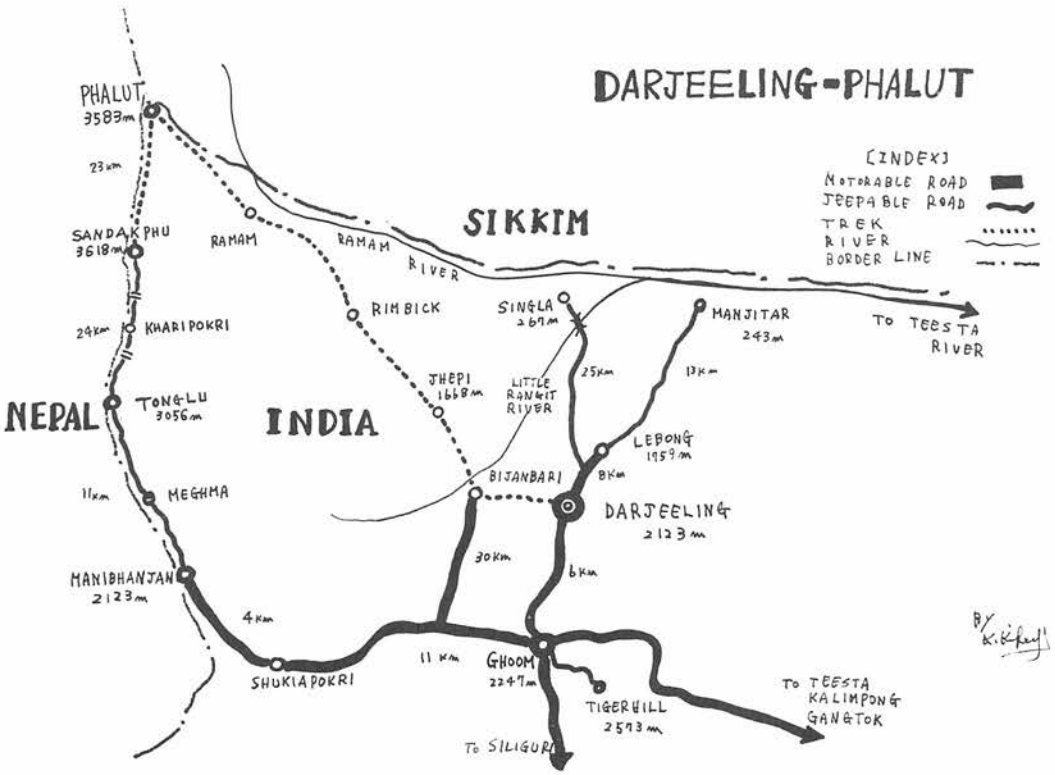
「お前，知ってるか。」

と聞かれ，そんなの知るわけないというと，

「次の首相は誰だ。福田か，大平か。」

ときたのにはまいった。こちとら，日本を出て早や4カ月，日本の事情などトンとわからないのに，この辺境のポリスである彼らの方が詳しいとは，いささかショックだった。日本製の大型トランジスター・ラジオで毎日，ニュースを聞いているのだという。

そのポリスにお茶をごちそうになり，また，登りにかかる。それにしてもこの尾根はいい。尾根上にいる限り，カンチェンジュンガ山群がいつも目の前にある。ファルットとはあの辺りかな，どの位カンチェンジュンガに近づけるのだろう。



〈カンチェンジュンガ山群が目の前に〉

くだらないことを考えながら，また，車道に出たり，山道を歩いてみたりしながらブラブラ登っていくと，やっと今日の泊り場トンルーというところについた。早速，予約してあるダック・バンガローに入る。いわゆる日本でいう山小屋だが，設備は大変いい。この国はどこへ行ってもこの手のバンガローがあるらしい。まず泊まるところには不自由ないわけだ。また，べらぼうに安い。このあたりは大体1泊1人3Rs。大きなゆったりした部屋にベットがあり，暖炉がついている。まきは買ってもたかが知れている。2Rsも買えば1日は充分だ。もし，シュラフがなければ毛布も貸してもらえる。食器などもたのめば借りられる。

ここ，トンルーは村はないが，2軒ばかりの家があってこのバンガローを管理しているらしい。バンガローの前に出るとカンチェンジュンガ山群が目前にあり，シッキムの山も見える。ふり返るとダージリンの町が丘の上から中腹にかけて広がっているのが見える。良いところだ。明日の目的地・サンダクプーらしいのも見える。かなり遠い。ここのジープ道はまずまずである。それにしても車道をテクテク歩くのはいやなものだ。

Sと2人，早速“日和る”ことに決定。ジープがきたらとめて，明日はここからいけるところまで入らせることにした。サンダクプーまでのちょうど中間あたり，クリポカリという村があり，そこまでなら入ってもよいというジープを折よく捕まえることができた。フル・タクシーで30Rsと言う。少し高いがやむをえない。

〈ロキシーでダンス〉

さあ，これで明日の行程は楽になった。そこへもってきて，暗くなってから登ってきたダージリンの連中が7人ばかり，となりの部屋におちついたと思ったら，しばらくして歌い出したからたまらない。元来，ロキシー・サーブと異名をとるほどのSのこと，写真をとらせてほしいという，うまい口実をつけて，彼らのもってきたシッキム・ラムとやらを一緒に飲むことになってしまった。終りの頃には彼らの歌に合わせてわれわれがおどり，われわれの日本民謡に合わせて彼らがダンスをするという，楽しい時間を過した。驚いたのは，酒宴を終えてから，彼らの何人かが入れかわり立ちかわりきて，お前たちはいいものをいっぱいもっているので，なくならないように，全部ザックにしまって寝ろ，と注意をしにきたことだ。ここにはわれわれと彼らの他は誰もいないというのに，ダージリンに住んでいるとはいえ，やはり彼らもインドの人たちだなあ，と感じたことであった。

〈ネパールへ越境〉

明けて27日はのんびりした旅。天気もよいし，予定では歩くところを半分はジープで行ける。ランドローバーで，まさに“ジープしか通れない”道を行く。途中コル状のところにしがみついているように建っているチベッタン部落を通り，トンルーから1時間半かかって，カリポカリという，やはりタルチョーがはためくチベッタン部落へ着いた。村人にいわせると，ここはネパールだという。村の入口には名前の通り，枯れた小さな湖がある。ここでロキシーにありついたSはニコニコ顔。それもネパール・ルピーで4Rs払ってのことだからしごく御満悦なのはあたり前。ネパール・ルピーが通用している，このインド領のチベッタン部落もやはりコル状のところにある。学校のようなものもある。20戸位ある村だ。

ここからはいよいよ本格的に(?)歩いてゆく。ロキシーが大分きいているSをせきたてて，尾根の西側（ネパール側）をまわってゆく。ここはどう見てもネパール領らしい。変な気持だ。ジープ道はまだ続いているが，やはり尾根の東側（インド側）をずっと走っている。

しばらくこの尾根をまわると次のコル状のところへでた。ここにも1軒の家がある。カルカではなく人が住んでいる家らしい。ここからはどうやら山道らしいところを登ってゆく。しかし，反対側をジープ道が走っていると思うと，どうもピンとこない。カリポカリから3時間，急な最後の登りを登りつめた丘の上がサンダクプーだった。ここは3618mの標高。遠かったカンチェンジュンガもかなり近づいた。ジャヌーの威容が圧倒的だ。ダージリン付近から見た時は，ほんのちょっとしたコブにしか見えなかったがここまでくるとサスガである。

シッキムの山々もなかなかすばらしい。遠くブータンの山も見える。あの三角形で大きいのがチョモラーリかもしれない。それにしてカンチェンジュンガはでかい。東の方はルンバサンバ山群をはさんでマカルーが大きく見える。東南稜がはっきりわかる。そのほかにローツェ，マカルーとローツェの間にはエベレストが顔を出している。サンダクプー，ここにはバンガローやチェック・ポスト，それらの関係者の家らしいのが5～6軒あるだけである。

しかし，ここからの景観はすばらしい。ダージリンから400Rs位のジープ・チャーターでこられるのなら安いもんだ。何か，ここへきたら急に気が大きくなったのかな。この晩はバンガローにはエライさんが入るらしく，われわれは予約をとれず，となりのユースホステルに泊った。インド測量局の人たちが2人，長期的にここに泊って仕事をしていた。

〈ファルット着〉

28日，今日はいよいよ最終目的地，ファルットまでだ。あまり登り下りのない尾根道をのんびりといく。このコースは一応サンダクプーまでがジープで入れるということになってはいるが，道はファルットまでも続いている。少々無理をすれば入れないことはなさそうだ。この朝，サンダクプーのポリスたちが全員，制服をきちんと着て，銃を持ってバンガローの前に整列していたところを見ると，昨夜遅くジープで登ってきた人は，よほどエライ人なのだろう。何せ，昨日はポリスたちは，制服を着ているのが1人もいなかったんだから。

村の子供たちと（左端　菊地）ファルット近くの村で

われわれ３人はのんびりとカンチェンジュンガ山群，エベレスト山群など見ながらファルットへ向う。今日も天気は良い。ダージリンを出てから毎日いい天気だ。日本のどっかの稜線歩きのような尾根のちょうどファルットへの中間あたりでフランス人のトレッカーに会った。日本語のものすごくうまい人で観光の仕事をしているらしい。年に２～３回，日本にいくとか。彼と１時間ばかりしゃべりこむ。実はわれわれ２人共，妹だという(？)彼のつれているかわいいパリジェンヌと話をしたかったのだが，あいにく，彼女は日本語はあまり知らないようで仲々話に入ってきてくれない。

インドの山の中でフランス人と日本語で話をするという変な経験をして，彼らと別れてもひとくさり，あのパリジェンヌのことを話しながら，この快適な尾根をゆく。ところどころにカルカがあるが今は人もいない。尾根上に点々と積んである丸い形の石のケルンはラマのチョルテンではなくて，どうやら国境のしるしのようだ。そういえば高台の上には，上の平らなこの石の積物が必ずあり，ふりかえるとずっと続いている。

突然目の前に現われたヤクにびっくりしたりしながら，見えてきたファルットの丘めざして登ってゆく。丘の近くなってやけにヤクの姿が多くなってきた。このヤクを飼っている人はどこに住んでいるのだろう。インドの人かな，ネパールの人かな，それともシッキムの人？

ファルットへ着いた。ここも丘になっていて，その丘の南側の斜面に赤い屋根のバンガローが建ててある。その裏にはチェック・ポスト。５人ばかりのポリスがいる。他に家らしい家はない。このバンガローの管理は10才位の子供がやっていた。両親はいないという。

チェック・ポストでチェックをうけながら，どこがシッキムとのボーダーだと聞くと，丘のてっぺんだという。ネパールは？　やはりそこだという。変なところだ。お前らはなぜこんなところにいる？　ここは大変大事な場所なんだ。だからわれわれが常時住んでいるのだ。と，このポリスたちは得意顔でいう。私には，大して戦略的要地だとは思えないのだが。ここのポストの銃だけはやけに光って見えた。小屋がススけていたからだろう。

冬には（２～３月）１m位の雪でおおわれるのが常だという。食い物はどうすると聞くと，東側の川ぞいまでおりた何とかいう村から上げてくるのだそうだ。丸ごと煮たじゃがいもを皮をむいて食っていた。大きなザルに一杯じゃがいもが入っているところを見ると，今はこれが主食かもしれない。渇水期のこの時期は水も30分もかかる，かなり下まで下って汲んでこなければならないとか。3500mを越すここでは，羽毛服を着ていても夜は寒い位だ。彼らの仕事も大変だ。

カメラをぶらさげて丘に登って見る。ここが今回のトレッキングの目的地だ。カンチェンジュンガは近くなったとはいえ，まだ遠い。これ以上は近づくことはできない。この尾根はずっとシッキムの方へ続いている。ゆっくりと下って行きそのあとまた，だらだらと登っているのがわかる。家らしいものは見あたらない。この丘に立つと右足はインド，左足はネパール，前の足(？)はシッキムということになるのか，おもしろい。ここのポリスをだまして１日往復ぐらいでならシッキム領へこの尾根をたどれるだろうが，今の状態ではこれよりは無理である。この尾根がずっとのびて行ってカンチェンジュンガへ続くのかどうかは，はっきりとは知らない。もし，そうだとしたら，あの有名なカン・ラという峠もこの尾根上にあるんだな。カンラカンラなどと笑ってもいられない。寒くなってきた，戻ろう。

このときは，３カ月後に再び今度はネパール側からカンチェンジュンガに近づくことになろうとは夢にも思って見なかったのだが……。

普通，このコースのトレッキングはここから東へ向い，ラマンリバーの方へ下って，リンビックなどを通って，ダージリンまでまだ登るのが良いようであるが，サンダクプーまでジープ代をケチッて歩いたので，日数が足りない。12月１日には，ブータン帰りのYやOたちに会わねばならないのだ。くそおもしろくもないが同じ道を戻ることにしよう。寒々としたファルットの夜は，外に小用に出るたびにチェック・ポストの犬に吠えつかれるという“恐怖”のうちに更けていった。

こうしてトレッキングは終った。帰りはカリポカリから思い切ってジープを摑まえ（60 Rs） マニバンジャンまでジープに必死の思いでしがみつきながら帰った。

29日の夜，サンダクプーのバンガローで，英国人の老夫妻を案内してきたダージリンの登山学校のインストラター，ドルジェ・ラトーとのヒマラヤ談義。マニバンジャンでのチベッタン・レストランの1泊。いろんな人たちとのふれあい，短かい期間ではあったが，心に残る山旅ではあった。

《日　程》

11月24日(曇)・Raghdogra　14:30＝(バス)＝Darjeeling 18:00（Tourist Lodge泊）
11月25日(晴)・Darjeeling市内にてトレッキングのアレンジ。買物など。
11月26日(晴)・Da.06:30＝(タクシー)＝Mani　Bhanjan 08:30……
Meghma 12:00……Tonglu 14:00（Dak Bungalow泊）
11月27日(晴)・To.09:00＝(ジープ)＝Kharipokri：11:00……
Sandakphu 14:00（Youth Hostel泊）
11月28日(晴)・Sa.08:00……Phalut 16:00（Dak Bungalow泊）
11月29日(晴)・Ph.08:30……Sandakphu 14:00（Dak Bunglow泊）
11月30日(曇)・Sa.08:30……10:00 Kharipokri 13:00＝(ジープ)＝Mani　Bhanjan 15:00
（チベッタンレストラン泊）
12月1日(曇)・Ma.09:00＝(ジープ)＝Darjeeing 10:00

ファルートの村とジャヌー

《許　可》

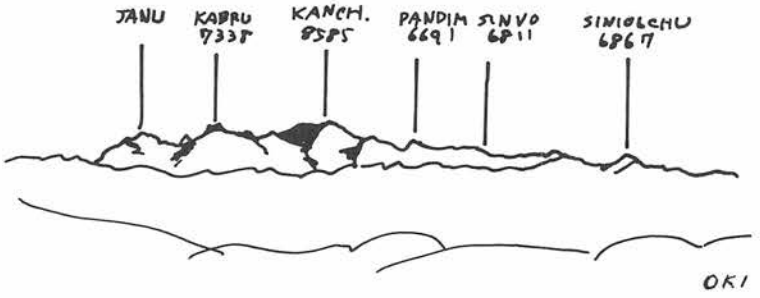
◎ダージリン ＝ 一応制限地域なので入域許可が必要。バグドグラの空港で押してくれるスタンプでも可。他ではインド在外公館か，カルカッタ，デリーの公安局で取れる。シリグリの駅でもスタンプを押してくれる。一番簡単なのはバグドグラ空港でとる方法だろう。許可は２週間まで。しかし，やりようで３～４週間までなら延長できるらしい。カリンポンで会った英国女性は１カ月ダージリン地区にいてもよいという許可をとったといった。延長するならダージリンのインド銀行の向いにある外国人登録事務所でおこなう。

◎ファルット地区 ＝ 外国人登録事務所では，バグドグラでスタンプしてあれば，許可はいらないと言ってたが，何かトラブルがあると面倒なのでわれわれの名前，パスポート番号入りのトレッキング・パーミッションを発行してもらった。この事務所はボーテ（チベッタン）が多く，気さくで，すぐ作ってくれた。各チェック・ポストでは許可書はと聞かれたから，有効にこれを使えた。この地区は国境地帯のため，チェック・ポストの数が多いのでパスポートの他に，紙きれ１枚でも許可書があると便利だと思う。

《　宿　》

インドはどこでもそのようであるが，ここもダーク・バンガローと，ユース・ホステルが完備している。ユース・ホステルよりもバンガローの方が数段良い。値段はいずれも 1.5Rs～3Rs と安い。冬の時期，11月から２月頃までならシュラフがあった方が良いが，他の時期は，貸してもらえる毛布で充分だろう。ただ，コッヘルなども借りられるが，自炊せねばならないのでコンロや食料はもってゆかねばならない。もちろん，マキも売ってもらえる。どちらにせよ，泊まるときは，ダージリンのD.I.Fund で予約しておく必要がある。Tourist Bureau とか，各ホテルでも予約をとってくれるが，予約がないと泊れないので注意が必要。金は予約のときに支払う。予約書をくれるのでそれを各バンガローに出して泊まる事になる。

（注）D.I.F.: Darjeeling Improvement Fund



タイガー・ヒルよりカンチェンジュンガ山群

《食　糧》

ダージリンの下町バザールで何でも手に入る。ビスケット類も豊富だし，ショートケーキやパンもある。肉を売っているところもある。概して安い。

《　足　》

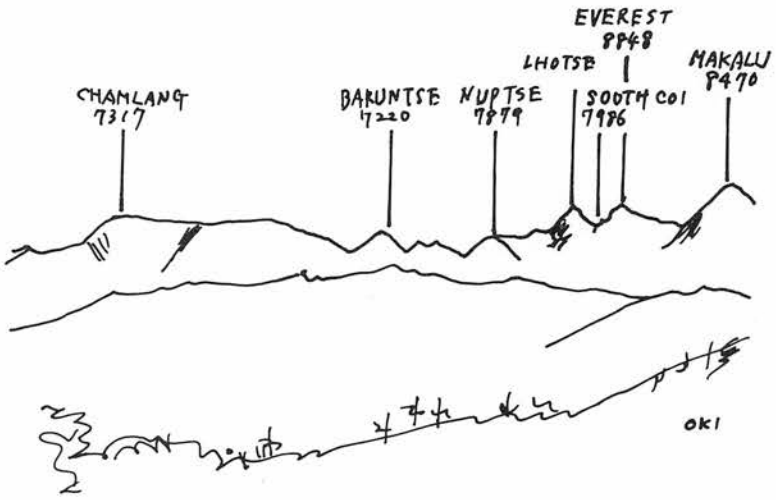
ファルットまで1日行程のサンダクプーまでランドローバーが入る。かなりきびしい道だが，350～400Rsで行ってくれる。人数が多ければジープで入った方が得策のようだ。車道をテクルのは，あまりさえたものではない。ダージリンから1日がかりである。

《シェルパ》

ホテルやツーリスト・ビューローで世話してくれる。もちろんH.M.I.（ヒマラヤ登山学校）でも世話してくれるが，このコースはのんびりと稜線漫歩というところなので，タクシー乗場あたりにたむろしているシェルパを選んでつれて行けばいいだろう。われわれの使ったポーターは食事付で1日10Rs食事抜きで1日12Rsということだった。食事抜きではかわいそうなので，食事付で使った。

《コース》

トレッキングとしては，ファルットまで尾根上を行って，そこから東の方の川ぞいに降りてラマム，リムビック，ジェピィ，ビジャンバリを経てダージリンへもどるのがおもしろいだろう。10日もあれば充分と思う。いずれにしろ，ネパールのトレッキングのような仰々しい装備は必要ない。ダージリンへいったついでに，ちょっとというようなコースである。シワリークの丘陵になるのであろうが，標高3500m位の尾根が南北に走っている。その尾根を行くのであるから，至極快適である。西にはネパール領のシワリーク地帯が広がっている。段々畑に切り開いたところは少なく，緑に囲まれている稜線が多い。ファルットからはダージリンまでとネパールのタプレジュンというカンチェンジュンガ山群へ入る要となる町へとほぼ同じ距離という楽しいコースである。もし，トンルーやサンダクプーから東へ降りたい場合でも道はいくらでもあるようだ。



サンダクプーよりエベレスト方面展望

あとがき

写真を多く使って楽しい本にしようという意図であったが，編者の未熟さのため，意を尽すことができなかった。

シッキムやアッサムの紀行や日記は，日本ヒマラヤ山岳協会の機関誌，「ヒマラヤ」に発表したものに若干の手を加えて再録した。その他，新聞や雑誌などに発表したものも転載させていただいた。重複した部分もあるが，各人の見方や考え方も表われていてかえって面白いと思われたので，あえて，そのままを載せた。転載などを心よくご了解いただいた関係各位に厚くお礼申し上げたい。

編集を終ってみると，いつものことであるが，気に入らないところが多く，全部を改めてみたい衝動にかられる。とにかく，私たちの見てきたものの若干は紹介できたと思い，一応の区切りにしたいと思う。

これを足場にして，多くの方々が，ヒマラヤの地に目をむけられ，より深い研究や調査をされることを望んでいる。すでに，これまでのブータン研究会に次いで東ヒマラヤ研究会も発足し活動を始めた。嬉しいことである。また，本書の発行は私たちの仲間のうちにも，私たちより，より以上にこの地域への情熱を持ちながら，いろいろな都合で今回不参加になった人も多く，この人たちへのささやかなお土産の意味も含んでいる。

ブータン，シッキム，アッサムへの旅は出発前，現地滞在中，本書発行までと実にいろいろな人や機関にお世話になった。末筆ながら深甚の謝意を表したい。

ヒマラヤの桃源境── ブータン・シッキム・アッサム

発　行　　1975年9月20日

発行所　　日本ヒマラヤ山岳協会　振替 名古屋21645
〒468 名古屋市天白区一つ山1丁目44－7

発行者　　柴　田　金之助

編著者　　沖　　允　人

印刷所　　神山プリント合資会社

日本ヒマラヤ山岳協会（HAAJ）出版物（特約書店）

茗渓堂（東京）海南堂（京都）
仙台丸善（仙台）ちくさ正文館（名古屋）まで

■チベットとラダック

西川一三・木村肥佐生・野本甚蔵「チベットの話」
HAAJラダック研究会「ラダックの歴史・風習などなど」

B5・64P
1973・9
1,000円
〒200円

■第2回ヒマラヤ研・報告

田村真知子「旅を豊かにするもの　フイルドワーク」
西川一三「回想のチベット」などネパール・パンジャブ情報

B5・170P
1972・10
1,100円
〒200円

■第3回ヒマラヤ研・報告

パネル討議「ヒマラヤ登山と事故」「高度順応」ほか
桐生稔（アジア経済研）「インド・ヒマラヤ諸国をめぐる国際情勢」

B5・168P
1973・12
1,400円
〒200円

■EXPEDITION I

第Ⅰ部「遠征とは何か……」「遠征をめぐる諸問題」
第Ⅱ部「実践への試み・ラムジュンヒマール」など

B5・348P
1974・10
2,000円
〒300円

■カシミールの街と山

カシミールの旅行・トレッキング案内・スリナガールの
観光を中心にしまとめたもの・ハンディなポケット判

B6・66P
1975・5
600円
〒100円

■秘境 小チベット・ラダック

インド北辺に横たわる秘境・ラマの王国・チベット
高原を訪ねた興味深い記録・地図三葉つき

B5・130P
1975・8
2,400円
〒200円

■月刊誌「ヒマラヤ」

ヒマラヤ情報がいっぱい。毎月一日発行

B5・24P
500円
〒70円

問合せ　日本ヒマラヤ山岳協会名古屋事務所　〒468　名古屋市天白区一つ山1丁目441-7　振替名古屋21645番

Himalayan Alpine Association of Japan (HAAJ)